

清末の小悪党とフェミニズム－吳趼人の小説の意義

松田郁子

[目次]

序論

第一節 吳趼人の経歴と執筆活動

第二節 先行研究－中国小説史上における吳趼人の位置付け

1. 中国文壇における吳趼人研究

1)五四以後－中国文壇における清末小説の位置付け

2)伝記、基礎研究

3)文学史

(1) 中華民国

(2) 中華人民共和国

4)評論

(1) 中華民国

(2) 中華人民共和国

①解放後、文化大革命時期前後の評価－落後、反動

② 文化大革命時期－絶対否定、研究停止

③文革終結後 1970～1980 年代－研究再開の動き

④1990 年代以降－個別作品の検討、新たな研究局面の展開

2. 台湾、香港における吳趼人研究

3. 日本における吳趼人研究

1)伝記、基礎研究

2)評論

第三節 清末のジャーナリズム

1. 清末出版会概況

1)出版業の成立

2)商務印書館の躍進

2. 出版界における吳趼人
3. 報道機関における吳趼人
 - 1) 吳趼人の執筆姿勢
 - 2) 『漢口日報』事件と吳趼人の梁鼎芬あて公開書信
 - (1) 小説家吳趼人の出発点
 - (2) 体制側の言論政策
 - (3) 『蘇報』の報道姿勢
 - 3) 「中国教育界」と「愛国学社」—『蘇報』内の党派対立
4. 政治運動との対峙

第四節 本論執筆の目的と概要

1. 《写情小説》について
 - 1) 「電術奇談」の人物像
 - 2) 「情変」原作の発見
 - 3) 薛錦琴との邂逅
 - 4) 『二十年目睹之怪現狀』‘姉姉のモデル’
 - 5) 『胡宝玉』
2. 《社会小説》について
 - 1) “悪党”実体験について
 - 2) 小説中の‘小悪党’—“成り上がり志向者”と“傀儡師型利欲迫及者”
 - 3) 『新石頭記』の原材料
 - 4) 胡適との関係

第一章 吳趼人作品の特性

- 第一節 素材、表現形式面の創意工夫
- 第二節 ジャンル開拓—《社会小説》《写情小説》の創始
- 第三節 執筆姿勢—弱者、下層民への視線

第二章 清末の社会悪

- 第一節 《社会小説》
 1. 下層民小悪党への視点

2.《社会小説》中の小悪党

- 1)『二十年目睹之怪現狀』(108回)(1903—1910)
 - (1) 成り上がり志向者
 - (2) 犯罪専従者
 - (3) 傀儡師型利欲追及者
- 2)「近十年之怪現狀」(20回未完)(1909—1910)
- 3)「瞎騙奇聞」(8回)(1904—1905)
- 4)「糊塗世界」(12回未完)(1906)
- 5)「發財秘訣」(10回)(1907—1908)

第二節 吳趼人の価値観

- 1.「發財秘訣」— ‘道德心’ と ‘獸心’
 - 1) ‘道德心’
 - 2) ‘獸心’
- 2.『二十年目睹之怪現狀』— 儒教型行動規範
 - 1) 見られる側
 - 2) 見る側— 怪現狀評者
 - (1) 周辺人物の見解
 - (2) ‘九死一生’— 共同体意識
 - (3) 吳継之— 儒教型 ‘善行’
 - 3) “見る者”を評する作者の目

第三章 ‘写情’と女性性

第一節 女性問題に関する社会的文化的風潮

- 1.女権運動
 - 1) 天足(纏足しない天然の足)運動
 - 2) 女子教育
- 2.社会実態
 - 1) 清末女性の境遇
 - (1) 胡仿蘭
 - (2) 陳範父娘

(3) 賽金花

(4) 羅伽陵

2) 清末男性作家の実生活

(1) 林紓

(2) 劉鏐

(3) 吳趼人

(4) 李伯元

(5) 連夢声

第二節 小説に描かれた中国女性の恋愛、結婚—同時代作品との比較

1. 清代小説中の男女関係

1) 夏敬渠『野叟曝言』

2) 曹雪芹『紅樓夢』：林黛玉と薛宝釵

3) 文康『児女英雄伝』：何玉鳳と張金鳳

4) 韓邦慶『海上花列伝』 沈小紅と張蕙貞

5) 劉鏐『老残遊記』：翠環（環翠）、逸雲

6) 李伯元『官場現形記』 蘭仙：

7) 曾樸『孽海花』：珠兒

8) 曾樸『孽海花』：傅彩雲（賽金花）

9) 吳趼人『二十年目睹之怪現狀』—上海総督令嬢

2. 清末小説中の‘新女性’像

3. 清末小説中の男性

1) 『老残遊記』—尼に夜伽を強要

2) 『官場現形記』—娘に妾奉公を強要

3) 『二十年目睹之怪現狀』—婚約者に不貞の濡れ衣

4) 『二十年目睹之怪現狀』（第 82、83、回）—娘を大官の男妾に縁組

5) 男性側の恋

(1) 『官場現形記』

(2) 『孽海花』

第三節 吳趼人の女性観

1. 吳趼人の女傑体験

1)一族の女傑

2) ‘二十年目睹’の女性

(1)『胡宝玉』(『上海三十年艶跡』)

(2) ‘清国の少女傑’ 薛錦琴

(3) 小説におけるの女性性の構築

①「電術奇談」『恨海』『劫余灰』『情変』一恋心と自立

②『石頭記』一性差を意識しない男女関係

2. 創作《写情小説》『恨海』と「劫余灰」一守節という処世

1)『恨海』

2)「劫余灰」

3)守節の意味

3. 翻案《写情小説》「電術奇談」と「情変」

1)清末における恋愛小説試作

2)「電術奇談」一原作との差異

(1)改変箇所：

[削除箇所]

[加筆箇所]

①人物の言行、心理描写

②風俗文化、婚姻観の相違点への言及

③作品の精度、意義付けに関わる工夫

(2) 容認箇所：

①女性主導の求愛

②家長の理解

③男性側の献身

3)「情変」

(1) 原作「秦二官」梗概

(2)「情変」概要

①梗概

②翻案の動機一男女性の逆転

(3) 「情変」加筆部分

- ①女性側の求愛行動
- ②儒教的価値観
- ③「情変」執筆の意義
- (4) 吳趼人の恋愛観—‘情の原理’と‘悟り’
- 4. 吳趼人の創作の原点—救国と‘写情’
 - 1) 『二十年目睹之怪現狀』— 清末女性の現実
 - (1)女性の社会地位
 - (2)女性の艱難辛苦
 - (3)女子教育
 - 2)自己実現と恋の相関
 - (1)外国女性主人公の翻案《写情小説》「電術奇談」—‘写情’指南
 - (2)中国女性主人公の創作《写情小説》—伝統倫理との軋轢
 - ①『恨海』
 - ②「劫余灰」
 - (3)中国女性主人公の翻案《写情小説》「情変」—求愛する女性
 - 3)清末女性の活路

第四章 再評価—‘救世’と‘厭世’

第一節 ‘理想科学’ 小説『新石頭記』における‘文明’探究

- 1. 『新石頭記』梗概
- 2. 未知の‘文明’世界
 - 1)[科学機器]
 - 2)[地理／動植物]
- 3.情報源
 - 1)古典籍・小説・新聞雑誌
 - 2)『点石齋画報』
 - 3)漢訳ヴェルヌ「海底旅行」、「地心旅行」
- 4.ヴェルヌ思想への共感—被抑圧国支援

第二節 『新石頭記』における“ユートピア” 追及

- 1. 理想の政治体制と社会生活

1)＜行政単位＞

2)＜政治体制＞

3)＜教育＞

4)＜宗教＞

5)＜産業＞

6)＜軍備治安＞

7)＜生活＞

2. ‘文明’ と ‘野蛮’

1)現実の ‘偽’ 文明世界

- (1) 外国製品、新思想との接触
- (2) 外国崇拜と中国人蔑視の風潮
- (3) 国内問題

①纏足

②治安悪化

③役人の横暴

④列強の植民地政策

2)理想の ‘真’ 文明世界

3. ‘救世’ への展望

第三節「上海遊騷録」— ‘厭世主義’ と ‘恨み’ について

1. “改革派投機分子” の描写—作品否定の最大要因

- 1) ‘革命派’ 俄か ‘名士’
- 2) 俄か 仕立ての ‘立憲’ 政体

2. 1910 年上海—胡適と呉趼人

- 1) 遊蕩 ‘革命’ 志士
- 2) 呉趼人と ‘革命党’ 胡適の接触

3. ‘厭世主義’ の原因

4. 旧道徳の恢復

結論

第一節 吳趼人作品の特性と意義

1. 原体験
2. 《写情小説》
 - 1) 文学史的意義
 - 2) 社会的意義
3. 《社会小説》
 - 1) 人物形象の造形
 - 2) 社会悪の追求
 - (1) 社会事象
 - (2) 政治改革運動
 - 3) ‘野蛮文明’ と ‘真文明’ の対比
 - 4) 旧道德—古代社会崇敬

第二節 従来の評価と再評価

1. 《写情小説》再評価
2. 「上海遊驂録」、『新石頭記』再評価
3. ‘旧道德’再考
4. 表現と形式面における再評価
5. 思想上、文学史上における意義

第三節 今後の研究課題

序論

第一節 吳趼人の経歴と執筆活動

清朝最後の十年間に新聞雑誌をはじめとする新たな出版業態を背景に盛行した小説を一般に清末小説或いは晚清小説と呼ぶ。吳趼人（1866－1910）は清末を代表する小説家の一人である。1998年に出版された『吳趼人全集』*1 に付された以下のような＜作者簡介＞は吳趼人についての現時点における公式評価と考えてよいだろう。

吳趼人は我が国清朝末年最も影響を及ぼし最も作品数の多い作家の一人である。原名は宝震、沃堯、字は小允、号は繭人、後に趼人と改め、趼人を最も通用させた。筆名は多い。主なものに我佛山人、趼塵、檢塵子、老少年などがある。広東南海佛山鎮出身である。同治五年（1866）北京に生れ、三歳の時に両親と共に郷里佛山に帰った。十八歳の時、生活に逼迫し上海に職を求め江南製造局に奉職した。月八金の収入だった。光緒二十三年(1897)から光緒二十八年(1902)まで上海の各小報の主筆となり『消閑報』、『采風報』、『奇新報』、『寓言報』などを前後して担当した。後に『漢口日報』、『蘇報』なども担当した。光緒二十九年(1903)から死去までがその小説創作の絶頂期であり、長篇十九作を創作、そのうち五作は未完である。代表作に『二十年目睹之怪現狀』、『通史』、『九命奇冤』、『恨海』などがある。ほかに短篇小説十二作、文言筆記小説五作、笑話三作および若干の戯曲、詩歌、雜著もある。この間《月月小説》の総編集者を務め広志小学堂を主催した。宣統二年(1910)上海で没した。享年44歳。（松田訳、以下注記のない限り訳文は松田）

吳趼人,我国清朝末年最有影响、最高产的作家之一。原名宝震,沃堯,字小允,号茧人,后易为趼人,以趼人最流行。笔名很多,主要有我佛山人、趼塵檢尘子、老少年等。广东南海佛山镇人。同治五年(1866)生于北京。三岁随父母回佛山故里。十八岁时为生活所迫,到上海某事,佣书江南制造局,月得值八金。光緒二十三年(1897)至光緒二十八年(1902)主持上海各小报笔政,先后办《消闲报》《采风报》《奇新报》《寓言报》等。后还曾办过《汉口日报》和《楚报》等。从光緒二十九年(1903)开始直到逝世,是他小说创作的黄金时代,共创作长篇十九种,其中未完的五种。较有代表性的作品是《二十年目睹之怪现状》《痛史》《九命奇冤》《恨海》等,还有短篇小说十二种,文言笔记小说五种,笑

話三種,以及一些戏曲,诗歌,杂著等。这期间他还担任过《月月小说》的总撰述,主持过广志小学的学务。宣统二年(1910)卒于上海,享年 44 岁。

このほか、王俊年「吳趼人年譜」*2、李育中「吳趼人生平及其著作」*3に記載された詳細な履歴によれば、以下の事項が吳趼人の作品成立に深く関わっていると考えられる。年次、事項は上掲二書に拠った。

吳趼人の曾祖父吳榮光*4は進士出身で湖広総督に昇り、文名書跡に名高い顯官であった。吳趼人は 1866（同治五）年北京に生れ、三歳まで北京にいた。曾祖父は高位にあったが蓄財を意に介さず、金石蒐集、對外防備、一族の扶養に資産を費やした。祖父は工部員外郎、父は浙江候補巡檢と官途に榮進ならず家運は衰勢に向かった。父吳昇福（1841-1882）は、祖父の死後、原籍の広東省南海県佛山鎮に帰郷したが、貧窮して寧波に生計を求め、浙江柴橋鎮茶厘に勤めた。吳趼人は名門子弟として儒教の古典教育を課され、8歳で家庭教師に就き、13歳で佛山書院に学んだが、1883（光緒九）年、16歳の時に父が客死し、一家は困窮に陥った。18歳の時、上海に職を求め、初め広東人の経営する江裕昌茶庄に身を寄せた。次いで江南製造局に奉職した。そこで、近代科学文明、時事について新知識を吸収した。1897年より 1902 年まで『字林滬報』、『采風報』、『寄新報』、『寓言報』など上海の各小報主筆を勤めた。この時代に、『趼嚙外編』（1897-1898）*5、『吳趼人哭』（1902 石印本）*6など政情、世情への批判的寸評、『海上名妓四大金剛奇書』（1898. 7）*7のような、市井の情報記事、遊里の女性や小悪党の人物批評を發表した。その後、吳趼人は編集者、批評家から小説家に転じた。王立興の発見した、梁鼎芬にあてた吳趼人の書信「已亡漢口日報之主筆吳沃堯致武昌府知府梁鼎芬書」*8（『蘇報』2497 号（1903 年 6 月 21 日）〈光緒 29 年 5 月 26 日〉）はその経緯を明らかにしている。吳趼人は、1901 年、ロシアと清朝の東三省割讓密約に反対する拒俄運動（排ロシア運動）に賛同し、張園拒俄演説会に参加した。1903 年、『漢口日報』編集に招聘されたが、武昌政府の拒俄禁圧に抵抗して一年余で辞職した。同年 10 月梁啓超が‘小説界革命’を標榜して横浜で発行した雑誌『新小説』*9、『二十年目睹之怪現狀』*10、「九命奇冤」*11、「痛史」*12、「電術奇談」*13の連載を開始した。また、1905 年には、反米華工禁約運動*14に賛同し、漢口の英文『楚報』中国語版編集職を数カ月で辞した。

このように吳趼人の執筆活動は、警世と救国の主張を基本姿勢としている。政治の腐敗、社会の不合理的に憤る価値規範は、衰勢にある大官僚家庭と伝統的士人教育という生育環境に培われたものであらうと思われる。裴效維「佛山吳氏及吳趼人家世考略」*15によれば、吳

家は周太王の長子泰伯の子孫と称し、宋代には族譜を整えていた名族であるという。呉趯人の曾祖父呉栄光は民衆の労働を詩に詠み、水害救恤や教育に尽した名官だった。祖父や父、呉趯人自身の世代にも現役高官や科举合格者がいたという。祖父は北京で利権に乏しい京官を勤め、父はさらに小官で帰郷後も貧窮に陥っている。彼らが高官子孫の常套策とされる、父祖の地位を恃んでの就職運動や利殖活動を行わなかったこと、一族が概ね清廉な官人としての志操を貫いたことが窺われる。そのような生育環境は、その後の呉趯人の著述に顕れる修身済生を自明とする士人意識、貪官汚吏を惡とみなす価値観を培ったであろう。

植民地化に瀕する国家の窮状への危機感もまた、その生育環境に因るところが大きい。呉栄光は著述や書籍金石の蒐集に熱意を傾けるだけでなく、愛国者でもあった。68歳で退官した後も、英軍の広州侵攻の際には自警団の結成に奔走した。地元官界や郷紳に呼び掛け寄付を募り、武器をそろえ砦を築いて抵抗運動を組織した。また1860年、英仏連合軍が北京に侵攻した時、市内に戦火が拡がり、呉家の祖廟も焼失し、呉栄光の所蔵していた書籍金石は散逸した。父呉昇福は祖母の靈柩を北京城外へ避難させようとした。その際、連合軍兵士に誰何された。兵士は棺を破壊して遺体を暴き抗議する父を銃撃した。呉趯人はその災禍を幼児より聞かされて育った*16。幼少時より脳裏に刻まれた文人意識、列強への反感は、呉趯人が救国を訴え、“弱者を圧迫する‘野蛮文明’”（『新石頭記』）を否定する布石となったと思われる。

さらに十代から上海に生計を求めて都市薄給生活を体験して弱者への視線が芽生えた事、江南製造局に勤めて、近代科学文明と租界の半植民地情況、官界の腐敗に具に触れた事、新聞編集者として通俗記事を書いて時事世情に通じ、政治記事を書いて官憲に敵対した事、それらの生活体験が、呉趯人の実学への探究心、朱子学と科举への忌避感、庶民感覚、正義感、反骨精神、救国警世の熱意を培ったと思われる。呉趯人は、曾祖父の政治文化両面の偉業及び列強の蛮行が語り継がれる生育環境と、生活に窮し弱者に接する実生活の中で自身の価値観、理念を形成したといえよう。それらの原体験により、国家社会を担おうとする士人意識、文人意識が培われ、社会惡を糾弾し救国を訴える作風が形成されたのであらうと思われる。

呉趯人の人品骨柄については、同時代人の追憶文が「同輩回憶録」としてまとめられている*17。呉趯人はもともと世家の出身であり、官界に多くの旧知がいたと思われる。上海に出て最初に頼った江裕昌茶莊の経営者は、呉家と世交(父祖の世代からの付き合い)で縁戚の広東郷紳一族で、広東清郷総弁であった進士出身の翰林江孔殷の生家だった。しかし、彼は官界や有力者の伝手を活用しようとしなかったのであらう。‘性格が剛毅で人に下ろうとしな

かったため志を得なかった’（周桂笙）という人物評は、魯迅が『中国小説史略』*18に引用して以来、広く知られる呉趼人像となった。友人、知人の呉趼人像は、“磊落不羈”、“大酒飲み”、“熱血漢”とする点で一致している。

また、豪気で鷹揚な人となり伝えられる一方で、厭世感に苛まれ（李葭榮）、「鬱々として志を得ず酒で発散する’（杜階平）日常だった。作中人物にもよく‘厭世’、‘逃生’させている。呉趼人の心境を厭世へと向かわせた最大の要因は、呉家の境涯であったと思われる。曾祖父の代に数百人を擁する大族であった呉家は、祖父の代から斜陽に向かった。呉趼人の父の代はみな下級役人で、かつ比較的早世だった。父は江蘇補用巡検で、夭折した伯父と四叔のほかに直隸巡検の三叔と江蘇候補通判の五叔がいた。1890年、25歳の時、三叔が天津で死去した。呉趼人は給料を前借りして天津に行き、二人の遺児を引き取り上海に連れ帰った。その折、亡父の遺言に従い、三歳で夭折した自身の兄の墓所を尋ねて北京に赴いたが遺骨は得られなかった。引き取った二人の従弟は、兄の君宜を瀘南製造局の学徒とし、弟の瑞棠に学問を教えた。呉趼人は‘それまで兄弟がなかったので実に楽しかった（‘余生無兄弟,对此殊自怡怡’「清明日偕瑞棠弟展君宜大弟墓，用辛卯『都中尋先兄墓』韵」八首）と述懐していたが、君宜は三年後に11歳で病死した。呉趼人自身の息子も夭折している。1896年、31歳の時に、五叔が湖北で病死する。呉趼人は若年にして、多くの血縁を弔わねばならなかった。瑞棠も失明し、呉趼人の死後、早逝した。故郷佛山鎮の一族も徐々に離散したという*19。一族の没落は、自ずと国家社会の衰勢に対する懸念を触発させたのではないだろうか。呉趼人は五叔の死んだ翌1897年、32歳の歳より小新聞編集に携わり、政情世情批判の小文を描き始める。彼の救国と警世の志は、身内の死や落魄の体験に伴いがちな焦躁感や空虚感に連動して、醸成されていたのではないかと思われる。

註

1『呉趼人全集』（北方文芸出版社1998年2月）

2王俊年「呉趼人年譜」（原載『中国近代文学研究』第2輯1985年9月『我仏山人文集』第8巻 花城出版社1989年5月、『呉趼人全集』第10巻所収）、（李育中「呉趼人生平及其著作」（原載『嶺南文史』1984年第1期 『呉趼人全集』第10巻所収）

3李育中「呉趼人生平及其著作」（原載『嶺南文史』1984年第1期、『中国近代文学評林』第2輯広東高等教育出版社1986年7月に載録、『呉趼人全集』第10巻所収）

- 4 吳栄光(1773-1843)。嘉慶期進士に合格し御史として出仕、道光期に湖広総督となった。詩文、書に優れ金石の造詣で知られた。次男尚志が吳趼人の祖父、尚志の次男升福が父である。二人とも科挙に受からず、祖父は五品の工部員外郎、父は従九品の江蘇補用巡檢に終わった。(李育中「吳趼人生平及其著作」(1984年執筆。『中国近代文学評林』第2輯 広東高等教育出版社 1986年7月)による。)
- 5『趼塵外編』(2巻60編)1902(光緒28)年上海書局刊行。石印本。序文に丁酉戊戌の間(1897-1898)に執筆したと述べ、辛丑(1899)識と署名している。
- 6 <吳趼人哭>魏紹昌編『吳趼人研究資料』1980年4月上海戸籍出版社所収。原本は光緒二十八(1902)年作者手跡石印本、未見。)「佛老二氏以邪説愚民,本不久即可灭绝;宋儒乃举孔子以故之,使其教愈炽,居然并孔子而称为「三教」。吳趼人哭。」1937年3月13日から27日まで上海『辛報』に転載された。
- 7<社会小説>『海上名妓四大金剛奇書』(100)回。1898(光緒24年)上海書局刊行。石印本。
- 8王立興の発見した吳趼人の手紙。『蘇報』2497号(1903年6月21日)〈光緒29年5月26日〉に登載された。
(王立興「吳趼人と『漢口日報』—对新發現的一組吳趼人材料的探討」(『中国近代文学考論』南京大学出版社(1992.11))
- 9雑誌『新小説』は1902(光緒28)年11月14日創刊。1906年1月まで全24号を発行した。
- 10 吳趼人『二十年目睹之怪現狀』108回。<社会小説>を標榜し「我佛山人」の署名で雑誌『新小説』第8—15、17—24号に1903(光緒29)年10月から1906(光緒32)年1月にかけて連載され第45回で中断した。その後は書き下ろしで、1911(宣統2)年1月までに上海広智書局より甲巻から辛巻まで全八巻に分けて出版された。
- 11<社会小説>『九命奇冤』(36回)。光緒30(1904)年12月光緒31(1905)年12月まで『新小説』第12-24号に連載。光緒32(1906)年上海広智書局より単行本出版。
- 12<歴史小説>「通史」(27回未完)光緒29(1903)年8月から31(1905)年12月にかけて『新小説』第8-13、17、18、20-24号に連載。宣統3(1910)年上海広智書局より単行本出版。
- 13<写情小説>「電術奇談」は日本菊池幽芳氏之著・東莞方慶周訳述・我仏山人衍義・知新主人評点という但し書きで雑誌『新小説』(第8号—第2年第6号〈原第18号〉)光緒29年(1903)8月15日—光緒31(1905)年6(?)月)に連載された。
- 14 アメリカ経済が1880年代後半より不況に陥るとともに、各州政府は中国人労働者の就業制限や禁止、中国人の公民権停止、居住、滞在、留学制限を条例化し、米中通商条約に付加した。1904年条約満期に当たりアメリカが継続を要求したので、条約調印拒否、米貨排斥運動が全国に広がった。
- 15『清末小説』第21号 清末小説研究会 1998.12.1
- 16『趼塵筆記』<紀痛>(宣統2(1910)年上海広智書局)『吳趼人全集』第7巻使用。
- 17 魏紹昌編『吳趼人研究資料』所収<同輩回憶録>(上海古籍出版社 1980年)

18 魯迅『中国小説史略』北京大学新潮社 1923 年 12 月(上冊)、1924 年 6 月(下冊)。北新書局 1925 年 9 月重印。

19 王俊年「吳趼人年譜」、李育中「吳趼人生平及其著作」

第二節 先行研究—中国小説史上における吳趼人の位置付け

1. 中国文壇における吳趼人研究

1) 五四以後—中国文壇における清末小説の位置付け

清末は新聞雑誌刊行の黎明期であった。作品発表の場を得て多くの小説が発表されたが、専業作家は未だ少なかった。吳趼人は作品数、影響力ともに清末を代表する専業作家であった。阿英『晚清小説史』（商務印書館 1937）*1 によれば、清末小説は中国小説史上空前の隆盛を極め、当時少なくとも千篇以上の小説が発行されたという。ほとんどの作者が筆名で発表し、社会の混乱に多くの作品が失われ、当時の作家と作品の全容を知ることは現在極めて困難とされている。

中華民国に至り、胡適が『五十年来中国之文学』（1922）*2、魯迅が『中国小説史略』（1923-24）を著し、中国文学史を講じる中で清末小説について論述した。次いで阿英は清末小説の專著『晚清小説史』を著した。いずれも吳趼人『二十年目睹之怪現狀』（1903-1909?）、李伯元(1867-1906)『官場現形記』（1903-1905）*3 或いは『文明小史』（1903-1905）*4、曾孟樸(1872-1935)『藥海花』（1905）*5、劉鶚(1857-1909)『老殘遊記』（1903-1906?）*6 を代表する作家とその代表作としてあげている。

民国文壇の三巨匠、魯迅、胡適、阿英は、いずれも中国旧小説史上の最後に清末小説を取上げて論じた。彼らは清末小説の文学性については、概ね否定的評価を下した。胡適は‘構成のない寄せ集め（没有结构的杂凑小说 p29）’、‘露骨で浅薄に過ぎ、こき下ろしの材料ばかり載せ、構造を考えず、読んでいるうちにうんざりしてくところが難点である(短处在放太露, 太浅薄, 专采骂人材料, 不加组织, 使人看多了觉得可厌 p81)’、魯迅は‘言葉付きが直截で表現に奥行きがなく、そのうえ烈しい言辞を弄して時人の嗜好に迎合し、心映え、技術とも（『儒林外史』等の風刺小説には）及ばない。ゆえに（風刺小説とは）べつに譴責小説と呼ぶ(而辞气浮露, 笔无藏锋, 甚且过甚其辞, 以合时人嗜好, 则其度量技术之相去亦远矣, 故别谓之谴责小说。P252)’、阿英は‘當時の政治社会状況を十分に反映し…意識的に小説を武器とした…ただ技術が貧弱なために成功したものはわずかしかない(充分反应了当是政治社会情况, …意识的以小说作为武器, …惟由于技术贫乏, 成

功的也寥寥无几 p4-5)’と概括している。民国文壇の重鎮である彼らの影響力は絶大で、それ以降半世紀以上にわたり、その評価は基本的に踏襲されてきた。

樽本照雄は「日本における清末小説研究(一)、(二)」*7において日本と第二次大戦後中国における清末小説研究の概要を簡潔にまとめている。樽本によると‘1901年から1990年まで、この90年間に日本で発表された清末小説関連の文献は、約770篇を数える’という。当初は紹介記事が主で、本格的な研究論文が著されたのは1940年代以降からである。樽本は代表的な研究成果として澤田瑞穂、中村忠行、中野美代子、山田敬三、武田雅哉等の論稿をあげている。

中国においても1950年代、60年代に清末小説の復刻が相次いだ。しかし、‘1966年から中国で発動された「プロレタリア文化大革命」により、清末小説研究どころではなくなった。(中略) つづく1970年代には、中国における研究が停滞したのとは無関係に、日本での清末小説研究が盛んになる’。樽本は、日本に創設された幾つもの研究雑誌、研究会の活動を理由としてあげている。

しかし、最大にして決定的な理由は、樽本による雑誌『清末小説研究』(1977.10.1)*8『清末小説から』*9の創刊発行及び『清末民初小説年表』*10、『清末民初小説目録』*11の編纂出版にあることは疑いを入れない。中国大陸で清末小説研究の停止していた時期、日本においては、『清末小説研究』誌上に三十年余にわたり日中両国研究者の投稿する論考が蓄積された。私見では、国文学者中村忠行は七十篇に及ぶ清末文学関係の論考を発表し、明治清末の小説や詩人、俳人の創作活動と影響関係という研究領域に空前絶後の成果をあげた。さらに、探偵小説、イソップ、商務印書館といった前人未到の分野研究の先駆けとなった*12。樽本は多くの新発見を成し、文学史上の謎を解明した。とりわけ劉鶚、李伯元研究に多大の成果を上げた。また、漢訳ドイル、漢訳ヴェルヌ、アラビアン・ナイト、翻訳小説、商務印書館、雑誌『繡像小説』発行状況など、中国において未だ研究の端緒にもついでいない分野にも先鞭をつけた。樽本は上述の年表、目録のほかに、文学史論、作家論、作品論広範にわたる四百篇もの論考を発表し、すでに31冊の著作を上梓している*13。

文革終結後、中華人民共和国において、中断されていた清末小説研究が再開された。樽本照雄は「中国近代文学研究は復活しつつあるか」*14、「将来が楽しみな中国の清末小説研究」*15においてその概況を取上げ、清末小説雑誌の影印出版、小説作品の再版、目録類や個別作家資料の編纂出版、研究誌の発刊等の研究動向を挙げ‘基礎資料の重視と自由な討論’という研究態勢を評価している。

以上の如く、樽本の文献整理編纂と基本的事実関係についての検証解析に、文革終了後における中国研究者の資料発掘、原典復興事業が加わり、清末小説に関する基礎研究は、現在可能な限りまで完成に近い状況にあるとあってよい。清末小説についての研究状況をそのように概括したうえで、呉趼人に限定した主たる研究成果を以下にあげておく。

2) 伝記、基礎研究

呉趼人が1910年に急死した後、友人の李葭棠が「小説家呉趼人伝」*16を書いた。そのほかにも友人知人が追憶文を残している。以後、文革終結まで中国大陆において呉趼人についての基礎研究は長らく公開されなかった。1980年に魏紹昌編『呉趼人研究資料』*17が刊行された。魏紹昌は清末に書かれた同時代人の追悼文、追憶文をまとめて載せている。

1980年代、王俊年、李育中は文革前に収集採録した呉趼人とその家系に関する調査記録を公表した。王俊年は詳細な呉趼人伝記を執筆した。改革開放の機運に伴い出版界も活性化し、他の旧小説とともに清末小説の掲載された雑誌、個別作品が続々と復刊された。呉趼人を含め主だった作家の全集が出版され、ようやく呉趼人の全作品を容易に読めるようになった。

1992年、王立興は『蘇報』に載せた呉趼人の書信を発見し、1903年小説家に転じた時点における呉趼人の事跡を明らかにした。2003年、夏晓虹は呉趼人と梁啓超に親交のあった事実*18及び『新小説』への《写情小説》と『儒林外史』型小説投稿を募集する広告記事「新小説社征文启」*19を発見した。これによって、呉趼人のみならず清末小説研究全体に関する問題が提議されたと言える。

3) 文学史

(1) 中華民国

文学史上に初めて呉趼人とその作品を取り上げたのは胡適『五十年来中国之文学』（1922）である。胡適は呉趼人の構成力を高く評価した。彼は、中国の小説について‘演義’から出たために、『三国志演義』から『官場現形記』に至るまで‘構造がない(没有布局的 p82)’ことを欠点として指摘している。胡適の論評の特徴は次のように西洋小説の影響を前提として、呉趼人の小説を特別視している点にある。

‘呉沃堯は西洋小説の影響を受けた事があったので、構成のない寄せ集めタイプの小説に飽き足りなかったのである。彼の小説にはすべて何らかの原理、構造がある。それが彼の

同時期の作家たちに勝るところである。怪現状の体裁はまともに欠け、やはり無数の短い話が一緒になっている。しかし、作品全体に‘私’という主人公がおり、その人生の事跡を基本構造として、あらゆる短い話は‘私’の二十年間に見聞した怪現状としてまとめられた。

吴沃尧曾经受过西洋小说的影响,故不甘心做那没有结构的杂凑小说。他的小说都有点布局,都有点组织。这是他胜过同时一班作家之处。怪现状的体例还是散漫的,还含有无数短篇故事;但全书有个「我」做主人,用这个「我」的事迹做布局纲领,一切短篇故事都变成了「我」二十年中看见或听见的怪现状。

(新民國書局 中華民國十八年一月 香港神州圖書公司影印版 P79—80)

「九命奇冤」が西洋小説の影響を受けていることは疑いもない。

(「九命奇冤」受了西洋小说的影响,这是无可疑的。P81)

(吳趸人は)‘中国の諷刺小説技術を用いて家庭と官界を、中国北方強盜小説の技術を用いて強盜と強盜軍師を描いたが、さらに彼は、西洋探偵小説の組み立てにより一つの全体構造を作り上げた。

用中国的讽刺小说技术来写家庭與官場,用中国北方强盗小说的技术来写强盜與强盜的军师,但他又西洋偵探小说的布局来做一个总结构。(P83)’

故に「九命奇冤」は、技術面で最も完全な小説とみることができる。

故九命奇冤在技術一方面要算最完備的一部小説了 (p83) ’

西洋探偵小説の影響を指摘する胡適の議論は、吳趸人の文学活動、政治活動両面における示唆に富んでいる。その事については後述する。胡適は吳趸人の作品の全体の傾向を論じたが、具体的用例を挙げていない。『五十年来中国文学』より10年近く刊行の遅い魯迅『中国小説史略』(1930)の記述は、『二十年目睹之怪現状』の最初の作品論となった。魯迅は第28篇〈清末の譴責小説〉の項に吳趸人の執筆姿勢、作品傾向を以下のように論じている。

伝わるところでは吳沃堯は性格が剛毅で人に屈せず、志を得ずに終わった。故にとりわけ言葉に慨嘆が表れている。惜しいかな、描写がおおげさで、時に驚愕や憎悪に溢れて損なわれ、話が真実と異なって人の心を動かさなくなる。結局‘話柄’を連ねたに過ぎず、暇人に談笑の種を提供することができただけであった。

相传吴沃尧性强毅,不欲下于人,遂坎呵没世,故其言殊慨然。惜描写失之张皇,时或伤于溢愕恶,言违真实,则感人之力,顿微,终不过连“话柄”,只足供闲散者谈笑之资而已。(『中国小説史略』人民文学出版社1973年8月 P257)

魯迅は、吳趼人の執筆態度、表現方式における難点をそのように指摘したうえで、『二十年目睹之怪現狀』第74回“京官の符彌軒の八十歳を超える祖父は、飢えては隣の店舗に残飯をもらいに来る。ある夜半、符彌軒と妻は、老人が漬物を欲しがったのを咎めて口汚く罵り、店舗の住人を目覚めさせる。夫婦は老人を罵倒しながら食事を始め、嫁が犬を肉でじゃらすと老人が不服を漏らす。怒った符彌軒は食卓をひっくり返し、老人が床に落ちた物を拾って食べると、その頭に椅子を投げつける。女中が椅子の直撃を遮ったので、老人は軽いけがで済んだ”という場면을引用している。符彌軒は日ごろ儒教道德をしきりに説く道学者であるが、祖父の扶養を厭い、同郷人士の叱責を受けている。祖父は孫夫婦の食卓に同席を許されず、物置で雑穀の饅頭を齧り、固くて噛めずいつも飢えている。吳趼人は、第73回末で‘家庭の怪現狀がどれほど多いことか。家庭の怪現狀を私はつくづく見てきたものだ。…最も奇妙なのは、道德心を喪い身内をないがしろにする者が、日ごろは孝悌忠信仁義道德を高談していることである(何家庭怪狀之多也。家庭怪狀,我蓋睹之熟矣。…所最怪者,滅倫背親之事,乃出于日講孝悌忠信仁義道德之人。『全集』版第2巻 p611-612)’と特記している。この場面には、老幼弱者を扶助する儒教的倫理観、人道の廢れた清末社会の現実が表れている。また魯迅が“描写が大げさで真実と異なる”と述べ欠点として指摘した、吳趼人の脚色の特性も表れている。清末社会と吳趼人の思想、執筆方法の特質が端的に描かれた箇所であるといえる。全108回の中から、この場面に紙数を割いて引用した選択には、この作品についての魯迅の精通ぶりが窺われる。『二十年目睹之怪現狀』が雑誌『新小説』に連載されたのは第45回までで、その後は書き下ろしで五年間で八巻に分けて出版された。第74回収録分は1909年に刊行されている。その引用は、魯迅が『新小説』停刊後も『二十年目睹之怪現狀』を単行本で購読していたことを示している。中村忠行は、‘<譴責小説>が高く評価される様になったのは、魯迅の《中国小説史略》が出てから以後のことでそれを忘れては論にならない’*20と述べている。中村の指摘する如く、魯迅が紙誌に大量に発表された通俗小説群を、完成度に不満を示しながらも文学史上に取り上げたのは、それらの作品群に関心を払い、当時の文学情景に通暁していた故の慧眼であったといえよう。

阿英は『晚清小説史』(1937)はテーマ別に章分けした各項目の中で吳趼人の主な作品を論評している。阿英は革命文学者錢杏邨としての立場において晚清文学全般を捉えた。吳趼人の作品についても、『二十年目睹之怪現狀』は全面的に晚清社会を反映している(還是全面

上反映了晚清的社會(人民文学出版社 1980 年 p8)等と、文化史面において評価する一方、義和団や革命派を誹謗する“思想面の落伍”を批判している。彼は、

憤りの気持ちが湧き起こり執筆時にその人物への憎しみにより、誇張の限りを尽くして描写し、面罵したい思いを晴らそうとしがちであったのだろう。そのため事実を離れ憎しみ溢れるのを免れないのである。ただ、同時代の作家の同種の作品に比べれば、構成力に優れている

蓋其感情激憤,於執筆時因憎惡其人,遂不免在描寫上盡量誇張,以洩其痛詆情懷,遂不免於失實溢惡。惟在結構上,較之同時代作家類似之作,則較為嚴謹。(同 p17)'

と述べ、魯迅同様、表現が主観的である点を難点とし、胡適同様に構成力の高さを評価している。しかし阿英は吳趼人を熟読していた推察される。その理解の深さは、戦時に出版した『晚清小説史』に『二十年目睹之怪現狀』、「九命奇冤」、「痛史」、「恨海」、「劫余灰」、「上海遊驂録」、「發財秘訣」、「瞎騙奇聞」等を粗筋や抄録を載せて解説し、文革直前(1960)に編纂した『晚清文学叢抄』に「發財秘訣」、「瞎騙奇聞」、「近十年之怪現狀」、「情變」を選択収録した識見に現れている。彼らの見解は概ね、その後半世紀を超え、現在に至るも吳趼人评价の定論となっている。

二十世紀末 1997 年に上梓された欧陽健『晚清小説史』*21、黄修己主编『二十世紀中国文学史』*22 は小説史の再構築を目指し、吳趼人、李伯元の作品をはじめ清末小説を五四文学革命に至る先駆けをなしたと位置付けた。

(2) 中華人民共和国

吳趼人については、例えば 北京大学中文系一九五五級著『中国小説史稿』*23は、‘一九〇七年以降、資産階級民主革命の声は高まり、吳趼人の思想も完全に反動に引き込まれた。彼は革命に反対し、反清に反対し、もとあった半封建傾向も色褪せた（一九〇七年以后,资产阶级民主革命声势壮大,吴趼人的思想也完全输入反动.他反对革命,反对反清. 原来的反封建色彩也就消褪了.)’、‘一九〇七年以降の作品は質が悪く作品数も少なく、影響力も乏しかった（一九〇七年以后的作品既坏又少,影响不大’ p524~p525)’と批評している。この見解は復旦大学『中国近代文学史稿』*24はじめ主だった文学史においても踏襲された。吳趼人は“愛国者であるが、『新石頭記』*25、「上海遊驂録」*26 を描いた1907年以後は反動に転じた”作家であるという評定が、文学史上の定論となった。

文化大革命中、“旧小説”について論じられることはなくなった。1977年の文革終結後、清末小説の研究は早々に再開の方向に向かった。北京大学は新たに『中国小説史』*27を編纂し、『二十年目睹之怪現狀』の一節を設け、他の作品における叙述を交えて吳趸人の思想傾向を論じた。概略すると、以下のような論旨となる。

『二十年目睹之怪現狀』は清末社会の弊害を表したことに一定の意義がある。しかし、吳趸人が‘改良主義’に固執し資産階級民主革命に反対したことは作中人物の形象に明らかである。『恨海』は義和団への評価が公正でないうえに、忠孝貞節の旧道徳を称揚した。また鴛鴦蝴蝶派小説に影響を及ぼした。吳趸人は民族の危機を深刻に受け止め、「通史」等歴史小説に愛国者の様相を覗かせている。しかし、『二十年目睹之怪現狀』や「糊塗世界」*28においては政府の国防策と自国民の道徳性を批判するばかりで、帝国主義列強への攻撃性に乏しかった。「上海遊驂録」では革命党人を誹謗中傷した。「立憲万歳」*29で君主立憲を鼓吹し、「情變」*30で大地主やその道徳性を美化した。それらの叙述には吳趸人の‘思想的落伍’が表れている(p338-345)。

実際の作品内容と合致しない記述が多く政治評価に偏ってはいるが、各作品に言及している点に、通り一遍に思想傾向を診断する従来の批評とは違った真剣な研究姿勢が窺える。游国恩 王起等主編『中国文学史』*31も同じく、初期にはある程度開明的であったが、

‘1907年に発表した「上海遊驂録」は思想面の退歩を表明した。前期における中途半端な反帝反封建意識は資本主義階級による民主革命への反対へと変転したうえ、封建統治擁護にまわった。

一九〇七年发表的《上海游驂录》标志了他思想的退步,由前期不彻底的反帝反封建的意识转变为反对资本阶级的民主主义革命,进而维护封建统治)’ (游国恩 王起 等主编《中国文学史》四p360)

と政治評価に重点を置いた見解を示している。张炯等主編『中華文学通史』1~10卷<第5卷近現代文学卷>*32、易新鼎主編『二十世紀中国小説史發展史』*33、于潤琦総主編『百年中国文学史』上卷(1872~1916)*34等、以後の主だった文学史もほぼ同様の立場を取っている。文革終結後、吳趸人についての公式の文学史上における評価は、文革中の全面否定から転じて、政治的誤りと歴史的意義両面を指摘するという方向に先ずは微妙に修正されたといえる。

一九九七年、欧陽健は阿英『晚清小説史』以来六十年ぶりとなる『晚清小説史』を上梓した。政治的羈絆に囚われない視点で小説史を構築し、吳趸人、李伯元の作品を‘五四新文化

運動の先ぶれ’ と位置づけた。翌年出版された黄修己主编『二十世纪中国文学史』は、清末の詩界、小説界革命等の主張を五四文学革命を醸成した文学運動と捉え、清末小説を‘前五四時期’文学と位置付けた。

4) 評論

(1) 中華民国

記述のごとく五四新文化運動を経た民国文壇においては、中国文学史上における清末小説の位置づけは、吳趼人を含めひとしなみに旧弊で論じるに価しないとされる時期が長かった。例えば、吳趼人の作品中でも『九命奇冤』は、完成度の高さにおいて定評があり、発表以降現在に至るまで極めて高い評価を得続けている。許君遠は、『九命奇冤』を紅樓夢以来の傑作と評価している*35。それでも、許君遠によれば民国以後20年代前半までに評した人間は、先に挙げた胡適を含めた二人であるという。

民国文壇における論評は総じて、五四新文学運動の立場から吳趼人の作品について、構成力の巧みさを除けば、世界観、人生観、表現等種々の側面において封建性の旧弊を留めた旧小説とみなしていたといえる。但し、楊世驥*36のように文学革命論を離れて、小説内容を紹介する論者もいた。

(2) 中華人民共和国期

①解放後、文化大革命時期前後の評価一落後、反動

第二次世界大戦、国共内戦終結後の中華人民共和国においては、作品の政治思想性が作品価値の判断材料として決定的意味をもった。人民中国成立以降、それ以前の小説は作家と作品の思想性、政治姿勢が検分された。多くの旧小説同様ほとんどの清末小説もその“封建的”側面が批判の対象となった。吳趼人については、“愛国者であるが、『新石頭記』及び「上海遊驂録」を描いた1907年以後は反動に転じた”とする論調が優勢を占めた。しかし、文化大革命までは『二十年目睹之怪現狀』をはじめ主な作品が復刊され、吳趼人の作品についての研究評論がなされていた。簡夷之は「《二十年目睹之怪現狀》前言」*37で、作中人物吳継之の官界から商界への転身を商業資本家の萌芽として注目した。

趙仲邑「“我佛山人”逸事」*38は

吳趼人は辛亥革命以前の資産階級改良主義の小説家で、その世界観には深刻な問題があり、彼の小説を読む際には注意しないわけにはいかない。さりながら彼の反帝反封建思想に称賛すべき点があるのは確かである。

吳趼人是辛亥革命前一位资产阶级改良主义的小说作家,他的世界观是有严重问题的.这在看他的小说时不可不注意.但即使如此, 他的反帝反封建的思想还有值得称述的地方。

と評している。鄭逸梅は「《二十年目睹之怪现状》的蓝本」*39において『二十年目睹之怪现状』執筆のために吳趼人の作成していたノオトについての証言をもとに作品を論じた。吳小如は一万字に及ぶ論文「説『二十年目睹之怪现状』」*40で、作中に表れた吳趼人の‘愛国思想’、‘反封建思想’を論じ、構成において‘芸術面でのレベルはかなり高いといえる’と評した。

② 文化大革命時期－全面否定、研究停止

文革期、吳趼人の作品は‘反動的帝政支持者’、‘封建的復古主義者’とみなされほぼ全面否定された。最も大きな要因は、『新石頭記』で儒教思想を賛美し、「上海遊藝錄」で革命運動、立憲運動を公然と批判した反動思想”にある。後年、吳趼人の詳細な伝記を執筆した王俊年も、文革中は

『二十年目睹之怪现状』は晚清社会の腐敗と暗黒を暴露し、周知させる役割を果たした。しかし、それは深刻な誤った傾向と欠点を持つ作品である。中国資産階級改良主義者の政治面における軟弱極まりなさを示す作品であり、作者の帝国主義に抱く幻想と封建的統治秩序を擁護する立場を示し、有閑文人階級の低級凡俗な趣味を示している。我々は厳しくその誤った傾向を指弾しなければならない。この作品を美化しその意義を誇張するいかなる論法も、作品を評価する实事求是の態度ではないばかりか、今日の読者に好ましからざる影響を及ぼすものである。

《二十年目睹之怪现状》暴露了晚清社会的腐败和黑暗,有一定的认识作用.但是, 它是一部具有严重的错误倾向和缺点的作品.它表现了中国资产阶级改良主义者在政治上的极端软弱性,表现了作者对帝国主义抱有幻想, 并竭力保护封建统治秩序的思想立场,表现了有闲阶级文人的低级庸俗的趣味.我们应该严肃地指出和批判它的错误倾向. 任何美化这部作品和夸大它的意义的做法, 既不是评价作品的实事求是的态度,又将会使它在今天的读者中起不良的影响.*41

と全面否定の意を表した。この時期、吳趼人のみならず、清末小説、作家全般について“封建思想”、“反動性”を否定する評価が固定し、研究論評自体が見られなくなった。

③文革終結後 1970～1980 年代—研究再開の動き

解放後文革勃発前に、生存している吳趼人係累を訪ね貴重な取材記録を残し得た李育中は、文革中の全面否定を公然と批判している。

この吳家の佛山鎮心里大樹堂は歴代多くの商人、役人を輩出したが、吳趼人の生れた頃には一族全体が斜陽に向かっていた。私は 1963 年にその地で一か月取材に当たったが、八家系の人々はほとんどが労働人民となっており、貧しく寄る辺なく養老院に入っている者、魚を売る者、灯籠を作る者、古紙店で働く者、私は一人一人訪ねて回った。十数畝の大樹堂はとっくに平地に均され往時の面影もなかった。吳趼人に息子はなく娘が一人いて江蘇に生計し、今も外孫が一人いるという。見るところ吳趼人の係累は数えるばかり、この一世を風靡した小説家の後生は寂寞たるものである。“四人組”は歴史の一端を担った譴責小説を均しなみに否定し、この方面の作者たる者すべてを反動派に追いやりたたきのめそうとした。歴史に情実あり、彼らはうち倒されるに至らなかった。

这个吴家佛山镇心里大树堂, 历代做商做官的人很多, 但到吴趼人出生时, 整个家族已很式微破落. 我一九六三年曾到那里采访一个月, 那八房人都几乎成了劳动人民了, 有贫无所依的入了养老院, 有卖鱼的, 有扎灯笼的, 有在旧纸店供职的, 我都一一访问过. 那十多亩地的大树堂早已荡为平地了, 故址还依稀可见. 吴趼人无子, 有一女据说流落江苏, 还存一外孙. 亲见过吴趼人的亲戚也寥寥可数. 这位名振一时的小说家身后是够寂寞的, “四人帮”还想把起过历史作用的谴责小说一笔勾销, 凡是这一类的作者都推向反动方面去, 大加挾伐. 历史有情, 他们总是推不倒的. (P285) *42

王俊年も、吳趼人の‘德育’提唱、義和団、太平天国、資産階級革命派への誹謗を批判しつつも、下層の‘労働人民’の道德性に言及するその姿勢は、‘中々できないことと言わざるを得ない（这应该说是难能可贵的地方）’、‘小説は大げさすぎて事実と思えないところもあるが、総じて見れば本当に晩清社会の現実を反映している（小说虽有夸大失实的地方, 但总的来看, 它们真是地反映了晚清社会的现实）’と、肯定の側面に焦点を当てて論じている*43

文革終結後早々に盧叔度は、「关于我佛山人二三事」*44 で吳趼人の事跡と作品を整理、検討し、魯迅『中国小説史略』や簡夷之『二十年目睹之怪現狀』前言、北京大学中文系 1955 级編『中国小説史』における見解に、真向から反論している。彼は以下の如く、1907 年以降の作品の重要性和検討の必要性を提議し、文学史上に定説化した民国と解放後の文学史における吳趼人論に異議を唱えた。

“吳趼人の思想面について考えれば、前記はまだしも暗黒の現實を譴責できていたが後期には完全に反動に向かった。彼の封建制反対の色合いを帯びた作品は何れも早期の作であり、一九〇七年以降の作品は質量ともに落ちる” —このような言い方は全く事実にそぐわない。我佛山人の比較的重要な作品、『二十年目睹之怪現狀』後半部、及び「發財秘訣」、『劫余灰』、「情變」、「最近社会齷齪史」（以上長篇小説）、「黑籍冤魂」、「立憲万歳」、「平步青雲」、「快升官」、「查功課」、「人鏡学社鬼哭伝」、「無理取鬧之西遊記」、「光緒万年」、（以上すべて短編小説）及び「鄒烈士殉路」（戯曲）等々、すべて一九〇七年以降に次々と執筆刊行された。これらの作品の思想内容には多くのかかなり深刻な問題点が存在し、芸術性、技巧面においても成熟が足りず、人の心を動かす魅力に欠けてはいる、そうであっても、個々の問題は個々に分析すべきであって、完全否定の態度を取るべきではない。これらの作品を当時特有の歴史環境の範囲内のこととして検討を進め、实事求是の姿勢で適正に評価を割り出すには、より多くの労力を要するであろう（1979 年 5 月）。

既沿此说，又略加发挥：“从吴趼人思想的发展看，它前期尚能谴责黑暗的现实，后期则完全走向反动。他的一些具有反封建色彩的作品，都是早期之作；一九〇七年以后的作品既少又坏。” 这种说法并不符合事实。我佛山人有不少比较重要的作品，例如：《二十年目睹之怪现状》后半部，以及《发财秘诀》、《劫余灰》、《情变》、《最近社会齷齪史》（以上均长篇小说）、《黑籍冤魂》、《立宪万岁》、《平步青云》、《快升官》、《查功课》、《人镜学社鬼哭传》、《无理取闹西游记》、《光绪万年》（以上均短篇小说）和《邹烈士殉路》（戏曲）等等，都是在 1907 年以后才陆续写成出版的。这些作品的思想内容，虽然存在着不少比较严重的问题，艺术技巧也不够成熟，缺乏感人的魅力，但具体问题总得具体分析，不能采取完全否定的态度。把这些作品放到当时特定的历史环境里进行探讨，事实求是地作出正确的评价，还要付出很大的劳动。（1979 年 5 月）

（中国社会科学院文学研究所近代文学研究组编《中国近代文学论文集（1919-1979）小说卷》1983.4 所收 p360）

実際に盧叔度は、「関与我仏山人後略—長篇小説部分」において、上記の観点から吳趼人の長篇小説を論じ、それまでの文学史にほとんど取り上げられなかった「瞎騙奇聞」、「電術奇談」、『新石頭記』、「情變」、「劫余灰」等について論じた*45。盧叔度は吳趼人の作品の表現手法を、描写の客観性、自由闊達な表現による諷刺性と譴責性、諧謔、皮肉、当てこすり、ほめ殺し等手のこんだ言い回し等をあげて芸術面において高く評価している*46。一方、思想面についての評価は概ね、公式文学史上の見解に則っている。当初の観点に沿った論評にはなっていないが、それまで放置されてきた作品を取り上げ検討する研究姿勢は画期的であったといえる。

その後の論者も概ね、盧叔度の見解を踏襲している。吳趼人の作品について、描写の客観性、諷刺と譴責、構成表現手法に優れ、『社会小説』、『歴史小説』にある程度の成果をあげたが、『写情小説』を標榜した恋愛小説は内容、社会的影響ともに問題点が多く、思想面では君主立憲派から反動に転じた点を難とする、という論評が主流となった*47。

④1990年代以降—個別作品の検討、新たな研究局面の展開

1990年代に入る頃には、吳趼人作品についての従来の見解を疑問視する論調が優勢となった。時萌「吳趼人思想、創作縦横談」*48はその先駆けである。彼は早い時期（‘1983年脱稿’と付記）から、吳趼人の作品分析をすすめ、後期の作品は反動に陥ったという従来の評価に異論を唱えていた。彼は吳趼人の後期作品に価値を認め、その‘国粹’、‘旧道德’推奨の思想を解釈しようと努めている。個別作品の論評としては、于東昇「論吳趼人的写情小説」*49と高国藩「吳趼人」*50が注目される。

于東昇「論吳趼人的写情小説」は、全面的に『写情小説』を取り上げた民国後、初めての論考である。残念ながら結論は、‘封建的色彩’の解釈に苦慮し、“時代の反映”を評価する段階に留まった。作品を丹念に分析しながら、“時代の反映”評価に落ち着く結末は、文革終結後に吳趼人作品の論評を試みた論者に共通する傾向である。

高国藩「吳趼人」は、‘その生涯の著作は清朝転覆前の概況を映す晚清時期の鏡である（他一生的著作，是晚清时代一面镜子，反映了清王朝覆灭前的概况，p379）’と吳趼人の作品全体に社会性をみとめた。彼は吳趼人の作品を具体的に、『二十年目睹之怪现状』における‘晚清社会全容の反映’、『恨海』*51、「劫余灰」*52、『新石頭記』における‘義和団の殺人放火を暴露する立場に立つて’の‘義和団運動の状況描写’、華工禁約反対運動の主張、「発財秘訣」における買弁売国奴批判の描写、「瞎騙奇聞」*53における迷信批判、「平步青雲」*54、「快升官」*55、「削

皮話」*56における醜悪な官僚の描写、「查功課」*57、「立憲万歳」における革命運動と立憲運動の描写という七点を挙げて評価している（p383）。さらに、‘その小説中の一篇のみを取上げて彼の思想的欠点をあげつらっては、正確な認識を得たことにならない（只抽出他小説中一篇作品、孤立地来论他思想的缺点，对其认识也不可能正确.p384）という公正な観点から、1907年以降に発表された作品をとりあげて分析をすすめた。その結果、吳趼人が‘1907年以降“封建統治擁護の立場に与した”と言うのは明らかな誤解であり根拠がない（说他1907年以后“进而维护封建统治”，是一个明显之误解，可不足为据’ p385）と、従来の文学史上の評価に異を唱えている。

張強は「談吳趼人的“恢復旧道德”」*58で、従来最も問題視されてきた“旧道德恢復の主張”の検討に取り組んだ。しかし結論は、思想面において‘保守、落伍、場合によっては反動’であるが‘微細に渡り半封建半植民地化し変貌していく社会の様相を提示’した点に価値があると、“時代の反映”を評価する所見に落ちついた。

吳趼人研究の局面においては、それまで全面否定されてきた「上海遊藝録」の分析、‘写情’や‘旧道德の恢復’という吳趼人独自の主張について考察する研究姿勢が認知されつつあると思われる。しかし各論者の結論はいずれも“社会の様相を投影”し“歴史を記録”した意義を指摘するに終わっている。中国研究者が、“社会の反映”を評価して終わる画一的な見解に終始する現象は不可解である。民族革命、立憲共和制、人民革命を経た現代人の歴史感覚、思想面の“良識”が障壁となっているのか、或いは政治的配慮によるものかわからない。文革以後、現在の中国研究者は総じて、清末時期における吳趼人思想の解釈に苦慮する段階に留まっているといえよう。

既述の如く夏曉虹は、吳趼人が戊戌政変後に亡命途次の梁啓超を上海で招宴したとの証言記事*59、及び《写情小説》を募集し、かつ『儒林外史』流の描写を奨励する『新民叢報』の広告記事を発見した*60。この吳趼人に関する二点の発見を端緒として、清末小説全体に関する新たな研究の方向性が提示された。

近年、出版された付建舟『近現代轉型期中国文学論稿』*61は、諸作家作品の綿密な分析を試みた清末文学研究専著である。付建舟は、変貌する危機的社会にあって創作活動に従事した作家たちが、自身の人生観、文化資質、社会的責任感を作品化したという点に、清末小説の意義を見出している。彼は魯迅が『中国小説史略』で、晚清小説の諷刺性は『儒林外史』に及ばないとして‘風刺小説’と呼ばず、‘譴責小説’と命名し格下に貶めたことを遺憾とした。晚清小説に対する否定的評価は、その‘鶴の一声（一鍾定音）’により定まったと考え、‘後世に潜在的思いこみという影響を及ぼし（对后世既有“先入为主”的潜在影响）’た‘言葉の

覇権(话语霸权)’であると非難している。さらに魯迅の評定を、各作品の綿密な分析及び個々の作家の創作意識への視点に欠けた不適切な論評であると批判している。付建舟は、吳趼人を‘文化情況の変革期に当る二十世紀初期(二十世纪之初文化转型期)’における《社会小説》、《写情小説》、《歴史小説》の草創者と位置づけている。

2.台湾、香港における吳趼人研究

高伯雨は『二十年目睹之怪現狀』の登場人物について詳細なモデル考証を行った*62。

台湾においては、1970年代から1980年代初頭にすでに『二十年目睹之怪現狀』について歴史意義や作品内容を論じた専著が出版されている*63。

近年は吳趼人の思惟についての究明を意図する研究が盛んである。蔣英豪は先述した夏曉虹の発見を受けて、《写情小説》の“悔淫性”を再考し、梁啓超の小説論との齟齬を調整するための措置であったと論じた*64。黄錦珠は『新石頭記』に表われた纏足反対の議論を取上げた*65。吳錦潤「命意在於匡世」*66は『二十年目睹之怪現狀』の吳繼之、‘九死一生’を‘民族資本家形象’として論じた。

3.日本における吳趼人研究

1)伝記、基礎研究

先述の如く、日本における清末小説研究は、樽本照雄により『清末民初小説年表』、『清末民初小説目録』の編纂出版が成され、未曾有の進展を見た。吳趼人研究についてみれば最初の作家論は、麦尾登美江「吳趼人一憂愁から厭世へ」*67で、詩、筆記から小説まで、作品入手の限られていた時期に、著述全般を可能な限り通読して得た吳趼人像を論じた力作である。中島利郎「吳趼人略考」*68は、基礎資料のない時期に清朝時代の資料を活用しての辛亥革命後はじめてのまとまった伝記となった。

基礎研究においては、樽本照雄が翻案小説「電術奇談」の原作を発見した*69。清末小説研究の方向性を決める画期的成果である。中国において文革終結後に発行された吳趼人全集、公式文学史、個別論文は、いずれも発見の事実に触れていない。原発見者の名や論文名を挙げずに既成事実化している研究姿勢は容認しがたいものである。樽本により吳趼人の反米華工禁約運動関係の未発見書信も発掘されている*70。樽本はほかに吳趼人の筆名*71、経済特価(官僚の特別推薦枠)推挙の記事も発見、検証している*72。論者は吳趼人の遺作「情変」の原作を発見した*73。創作か改作かという基本的問題であるにも関わらず、中国学術界におい

て未だ無視されているのは遺憾である。さらに、胡適が生前の吳趼人と歓談したという日記の記述を発見した*74。そのほか、『新石頭記』に登場して演説する僧侶と少女のモデルを特定した*75。

2) 評論

吳趼人とその作品を論じた最初の研究成果は、澤田瑞穂「清末の小説」*76である。澤田ははじめて小説史の中に一章を立て、吳趼人の小説を比較的包括的に論じた。未だ掲載雑誌や単行本が復刊されず全集、作品集も出版されていない時期に、日本で論じられたことのない作品も視野に入れて論評している。

『二十年目睹之怪現狀』、「通史」、『恨海』、『九命奇冤』等民国時期に単行本で刊行され流布している作品については、第二次大戦以前より多くの論者が言及しているが、概ね作家作品の紹介感想に終始している*77。中島利郎『晚清小説研叢』*78は日本で唯一の吳趼人研究論文集である。『九命奇冤』、『恨海』、歴史小説、短編小説の内容を紹介し、「上海遊藝録」の思想性を論じている。

個別作品研究の成果としては、香坂順一「九命奇冤」の成立*79、宮内保の《政治小説》、《写情小説》や『恨海』についての一連の論考*80、『恨海』版本についての中島利郎の論証（前掲書所収）、山田敬三の歴史小説、政治小説についての論稿*81、麦尾登美江「吳趼人の『俏皮話』について」*82、「吳趼人の「近十年之怪現狀」と情変について」*83、中野美代子「風俗小説の系譜Ⅲ—吳趼人論ノオト」*84が挙げられる。

中野美代子は‘戯作者’という前提のもとに吳趼人を論じた。吳趼人の諧謔の多いストーリー性の高い作風のもたらした印象であろう。宮内保は作中に描かれた社会事象の分析により‘急進的思想家’と吳趼人を評した。いずれも、吳趼人の執筆姿勢を論じ、それぞれその資質の一端を捉えた力作である。吳趼人の事跡、作品の全貌が未だ明らかにされない時期に、作品の風格から作者に対する印象が形成された結果、解釈が両極端に分かれたのであろうと思われる。

現在、清末小説研究は、基礎研究が積み重ねられ、さらに新たな事実の発掘が期待されている。吳趼人や、中国文学史上における清末小説の意義づけ、位置づけを再検討する試みが進められる段階に入っているといえる。しかし、作品解析においては、まだ十分な検討がなされているとはいえない。中国大陸においては吳趼人の作品について、構合力と社会性、愛国思想及び、中国小説史上初めての主題や方法による作品世界の構築に意義を認め、‘旧道

徳’提唱、革命派批判を“瑕瑾”とする政治的見解が概ね定論となっている。作品解析に取り組む論者はみな、吳趼人の筆記雑文に顕著に現れている社会的弱者や下層民に向ける視線、社会悪を糾弾し、時代の趨勢を描こうとする姿勢、高い構成力に着目している。吳趼人作品の意義や完成度が高い評価を与える論者が増えている一方、みなその‘落伍思想’の解釈に窮した結果、千篇一律に“歴史と社会を投影”した意義を評価する結論に終始しているといっている。未だ八十年前の阿英『晚清小説史』の見解を一步も出していないことになる。

そもそも吳趼人は、中国における新聞雑誌事業草創期に登場した最初の専業作家であった。彼は、出版報道を通じて官界の腐敗を弾劾し、水害義捐金募集、小学校開学といった社会活動や、拒俄運動、反米華工禁約運動等の反政府運動に熱意を注ぐ社会派作家としての生涯をおくった。小説執筆の契機や《写情小説》、《社会小説》の成り立ち、梁啓超や胡適といった時代の趨勢を表す人物との交流関係等、吳趼人について判明した事実は、政治やジャーナリズムとの強い関りを示している。そこで先ず、その作家活動の母体であった執筆、報道環境について考察しておきたい。

註

1上海商務印書館1937年5月初版。1955年作家出版社より改訂版出版。

2『最近之五十年』上海申報館1923年2月。『五十年来之中国文学』申報館1924年3月

3李伯元『官場現形記』60回。南亭亭長の署名で『世界繁華報』に1903年4月から1905年6月まで連載。1904年同館より初編刊行。以後版本多数。第60回は欧陽鉅源の続作とされている。

4李伯元『文明小史』60回。南亭亭長の署名で『繡像小説』第1号から第56号に1903年5月から1905年9月間連載した。死後に「商務印書館」より単行本が出版され数度影印された。

5曾樸『蕙海花』1905年小説林社から20回本を出版。民国に入り、著者により数度増補改訂された

6劉鏐『老殘遊記』。『繡像小説』第9期から第11期(1903-1904)に連載、1904年から『天津日日新聞』に連載され、それぞれ単行本が出版された。その詳細や経緯には謎が多い。以後、多数の版本が出版された。

7『中国文芸研究会会報』120号 1991.10. 30「同(二)」(同121号 1991.11.30)

8『清末小説研究』第1号—第35号(清末小説研究会 1977.10.1—2012.12.1)

9『清末小説から』1986年4月1日第1号創刊。2012年よりweb.版、最新号は第118号(2015.7.1)。

10 樽本照雄編著『清末民初小説年表』清末小説研究会 1999年10月10日

- 11 樽本照雄編著『清末民初小説目録』：清末小説研究会 中国文芸研究会1997年10月10日、以後増補改訂を重ねる。
現時点の最新版は第6版(CD-ROM) 清末小説研究会2014.3.16
- 12 中村忠行「日中比較文学研究論文目録」（『清末小説から』第32号1994.1.1）
- 13 「樽本照雄教授 略歴・業績目録」（『大阪経大論集』第61巻第6号 2011.3）
- 14 『野草』第27号10周年特集1981.4.20）
- 15 『中国文芸研究会会報』第63号1987.1.31
- 16 李葭荣「我仏山人伝」原載『天鐸報』宣統二（1910）年10月。『吳趼人研究資料』（上海古籍出版社1980年4月）所収。
- 17 魏紹昌編『吳趼人研究資料』（上海古籍出版社1980.4）
- 18 「吳趼人与梁启超关系钩沉」（《中国古代近代文学研究》2003年第4期 原2002年于安徽师范大学）
- 19 『新民丛报』第十九号1902年10月
- 20 「清末文学研究時評」（『中国文芸研究会会報』第54号1985.7.30）
- 21 浙江古籍出版社1997.6
- 22 中山大学出版社1998.8
- 23 北京大学中文系一九五五年級『中国小説史稿』編輯委员会著(人民文学出版社1960.4.18)
- 24 復旦大学中文系1956年中国近代文学史編写小組(原刊中華書局1960年5月版1978年香港影印版を使用)
- 25 『新石頭記』（40回）原載『南方報』（1905光緒31）。1905年（光緒31）8月21日第28号から11月29日に第11回まで連載。1908(光緒34)年10月上海改良小説社より出版。中州古籍出版社 1986年3月版を使用。
- 26 「上海遊藝錄」（10回）1907年3月から5月にかけて『月月小説』第6号から8号に連載。
- 27 北京大学中文系著（人民文学出版社1978.11）
- 28 「糊塗世界」（12回未完）、原載は『世界繁華報』であるが雑誌版の詳細は未詳。1906(光緒三十二)年9月同社より単行本で出版。『吳趼人全集』第三巻版を使用。
- 29 短編小説「立憲万歳」『月月小説』第5号1907.1
- 30 「情変」（8回未完）は1910（宣統二）年『輿論時事報』に連載。『吳趼人全集』第5巻版を使用。
- 31 游国恩 王起 等主編『中国文学史』（人民文学出版社1964.2）
- 32 张炯等主編『中华文学通史』1~10巻<第5巻近現代文学巻>(华艺出版社1997.9)
- 33 易新鼎主編『二十世紀中国小説史發展史』（首都師範大学出版社1997.12）
- 34 于潤琦総主編『百年中国文学史』上巻（1872~1916）（中山大学出版社1998.8）
- 35 許君遠「評『九命奇冤』」（原載『震報副刊』1924.12.8、9）

- 《我所见过批评《九命奇冤》的人只他们二位。(胡适/正厂君) (p469)我承认它是《红楼梦》以后一不但限于近几十年一的杰作(p470). 王俊年編『中国近代文学論文集(1919-1949)小説卷』(中国社会科学出版社 1988.5)所収
- 36 楊世驥「痛史」、「石頭記」、「劫餘灰」、「瞎騙奇聞」、「發財秘訣」、「電術奇談」、「吳沃堯」、「歷史小説總序」、「周桂笙」(『文苑談往』所収 原刊中華書局1946年 華世出版社1978年影印版を使用)
- 37原載『二十年目睹之怪現狀』(人民文学出版社1959.7)
- 38 原載《羊城晚报》1960.9.23(中国社会科学院文学研究所近代文学研究組編《中国近代文学论文集(1919-1979)小説卷所収 p355》1983.4)
- 39 鄭逸梅「《二十年目睹之怪現狀》の藍本」(原載『新民報晚刊』1956年9月16日)(中国社会科学院文学研究所近代文学研究組編『中国近代文学論文集(1919-1979)小説卷』1983.4)。
- 40『読人所常見書日札』(中華書局 1958.9 所収)
- 41 王俊年「怎样看待二十年目睹之怪現狀」原載《光明日报》1965.4.18(中国社会科学院文学研究所近代文学研究組編《中国近代文学论文集(1919-1979)小説卷 P345》1983.4)
- 42 李育中「广东小说家杂话」(华南师范大学近代文学研究室《中国近代文学评林》中州古籍出版社 1984.11)
- 43 王俊年「晚清社会的照妖镜 重读晚清二大谴责小说」 p44(『読書』4 三聯生活讀書新地書店 1979.7)。
- 44 原載『中山大学学报 哲学社会科学版』《1979.3 期 総 72 期》(中国社会科学院文学研究所近代文学研究組編《中国近代文学论文集(1919-1979)小説卷》1983.4 所収を使用)
- 45 盧叔度「关于我佛山人作品考略—长篇小说部分」(『中山大学学报哲学社会科学版』1980.3 期 总 76 期)
- (吳趸人は)『二十年目睹之怪現狀』以外に「瞎騙奇聞」「近十年之怪現狀」「上海遊驂錄」「發財秘訣」「胡宝玉」等、当時の社会における種々の暗闇や汚泥を描いた。吳沃堯が中国小説史上においてある意味で特異な要素を持つこの種の社会小説の優れた書き手であることは疑いもない。したがって先ず、彼のこの種の小説に対する理論と考え方について我々は注意を傾けるべきであろう。
- 《二十年目睹之怪現狀》外、又创作了《瞎骗奇闻》《近十年的怪現狀》《上海游驂录》《发财秘诀》《胡宝玉》等、描繪了當時社會的種種陰暗污濁的現象。顯然,吳沃堯是一個創作這類在小説史上具有某些新特點的社會小説的能手,因而關於他對這類小説的理論和看法就首先應該引起我們的重視。(p634)
- 46 表現上の芸術側面においても吳沃堯は社会小説としての特色を表している。第一に客觀的描写である。…『二十年目睹之怪現狀』などの優れた《社会小説》はあたかも清末社会の病巣を眺める顕微鏡のようである。それは客觀的にリアルに社会の暗闇を暴きだす光だった。第二に滑稽と憤慨を完備している。揶揄と非難を兼ね備えているのだ。第3にこみいった話の流れを心がけている。小説創作に活用する表現手法が豊富なのである…

在藝術表現方面,吳沃堯也點出了社會小說的若干特色。第一,客觀描摹。…《二十年目睹之怪現狀》等優秀的社會小說猶如一面觀看清末社會膿瘡的顯微鏡,它們在客觀地真實地揭露社會黑暗方面是獨具光彩的。第二,文具嬉笑怒罵。…就是諷刺與譴責兼而有之。第三,注意迂迴曲折。小說創作具體的表現手法很多, (p20)

47 王運熙 顧易生編《中國文學批評史》第二節「吳沃堯及其他」

楊易「吳趸人到上海年份考」(『復旦學報』(社會科學版)1983年2期)

王運熙 顧易生編《中國文學批評史》第二節「吳沃堯及其他」(上海古籍出版社 1985.7)

姜東賦「晚清四作家小說觀平議」(《天津師大學報》1988年第1期)

48『中國近代文學論稿』上海古籍出版社 1986.10 所收)

49『南京大學學報』(哲學人文社會科學)1989年3期)

…つまり吳趸人の《写情小説》は全体としては封建道徳を宣揚したものであり、…彼の無意識に我々に提示した封建制の解体しつつある中国近代という特定時期における女性と家庭と社会の關係図画は、現代中国女性の特異な前身となった

…总之吳趸人の写情小説从整体上看是宣扬了封建道德的…他不自觉地为我们展示了特定时期一封建解体的中国近代一女性与家庭与社会关系的图画,成为现代中国女性的特异的.p60)

50 周鈞韜主編『中國通俗小說家評傳』中州古籍出版社 1993.9 所收)

51《写情小説》『恨海』(10回)。光緒32(1906)年6月上海廣智書局より出版。

52《苦情小説》『劫余灰』(16回)/1907(光緒三十四)年11月から1909(同三十四)年1月まで雑誌『月月小説』に連載。『吳趸人全集』第五卷版を使用。

53《醒世小説》『瞎騙奇聞』(8回)は繡像小説』第41号1905(光緒三十一年)1月～46号同3月に連載。『吳趸人全集』第三卷版を使用。

54 短編小説「平步青雲」『月月小説』第5号1907.1)

55 短編小説「快升官」『月月小説』第5号1907.1)

56 笑話「削皮話」『月月小説』1906年から1908にかけて断続的に連載。他誌にも掲載。後、上海群学社より出版。
未見。1958年広東人民出版社より出版)

57 短編小説「查考課」(『月月小説』第8号1907.4)

58『文史哲』1991年第2期)

吳趸人は改良主義者の立場に立ち、…ある程度の進歩性を持っていたものの、晩清の資産階級革命派に比べれば、保守、落伍、場合によっては反動に見える。しかし彼は歴史における忠実な記録者となり、客観的に一つの側面から晩清社会の風貌を描きだし、微細に渡り半封建半植民地化し変貌していく社会の様相を提示した。そこでその小説はなおも見るべき多大な価値を有している。

吳趼人站在改良主義者立場,……,他具有一定的進步傾向,但較之晚清的資產階級革命派,他自然又顯得保守、落后,甚至反動.但吳趼人作為歷史的忠實紀錄者,他畢竟在客觀上從一個層面表現了晚清社會的風貌,一星半點地揭示了半封建半殖民地社會的演化進程,因而其小說依然具有重大的認識價值..(p27)

59 霍麗白《梁任公先生印象記》—為先生逝世二十周年紀念作—『時事新聞』1949年第11期

60 夏曉虹「吳趼人与梁启超关系钩沉」、「新小说社征文启」(《中国古代近代文学研究》2003年第4期 原2002年于安徽师范大学)

61 鳳凰出版社 2011.6

62 高伯雨『二十年目睹之怪現狀』索隱(『讀小說札記』香港上海書店 1957.8 所收)

63 林瑞明『晚清譴責小說的歷史意義』(國立台灣大學出版委員會 1976年6月)

陳幸蕙『二十年目睹之怪現狀』研究(國立台灣大學出版委員會 1982年6月)

64 蔣英豪「成也蕭何,敗也蕭何」—論吳趼人《恨海》与梁启超的小說觀(『二十世纪中国文学』台灣學生書局 1992)

65 黃錦珠『晚清時期小說觀念之轉變』二.《恨海》的情節結構與角色塑造 文史哲出版社 1995)

66 吳錦潤「命意在於匡世」(黃修己主編《百年中華文學史》新亞文化基金會有限公司 1997,8)

67『野草』第12号(中国文芸研究会 1972.10)

68『清末小說研究』第1号(中国文芸研究会 1977.10)

69 樽本照雄「吳趼人「電術奇談」の原作」(『中国文芸研究会会報』第54号 1985.7.30)

「吳趼人「電術奇談」の方法」(『清末小說』第8号 1985.12.1)

「吳趼人訳「電術奇談」余話」(上)」(『清末小說から』第40号 1996.1.1)、「同(下)」(「同」第42号 1996.7)

70 樽本照雄「吳趼人の手紙二通」『清末小說から』第65号 2000.4.1)

71「口叟という人物—吳趼人の筆名をめぐって」『清末小說』第12号 1989.12.1

72【特報】「李伯元、吳趼人と經濟特科」『清末小說から』34(清末小說研究会 1994.7.1)

「李伯元と吳趼人の經濟特科」『太田先生退休記念中国文学論集』所収(中国文芸研究会 1995.8.1)

「李伯元、吳趼人と經濟特科の意味」(『中国文芸研究会会報』第166号 1995.8.31)

73 松田郁子「吳趼人「情變」の原作について」(『清末小說から』第62号 2001.7.1)

74 松田郁子「1910年上海—胡適と吳趼人」(『火鍋子』第7号 1993.4)

75 松田郁子「清国の少女傑 薛錦琴」(『中国文芸研究会会報』第172号 1996.2)。

76『中国の文学』(学徒援護会 1948年)第四章「清末の小説」(『清末小說研究』第1号「清末小說研究会」1977年10月に再録)

77 吳趼人の作品に言及した主な論稿は以下の如くである

大高巖「清末の社会小説について」『同仁』第8巻第6号 1934.6

松井秀吉「小説に現れた清末官吏社会」『満蒙』第15年第7号

松井秀吉「読『九命奇冤』記」(一)『満蒙』第16年第4号(1935.4. 1)、(二)同第16年第5号(1935.5.8)

松井秀吉「『恨海』について」『満蒙』第16年第6号(1935.6.1)

武田泰淳「清末の風刺文学について」『同仁』第11巻第1号1937.1

大村益男「清末社会小説」(中)早稲田大学『東洋文学研究』第14号1966.3

78 汲古書院1997.7. 30

79『日本中国学会報』第15集(1963年)

80 宮内保「『写情小説恨海』における写実法について」(『漢文学会報』23 1964年6月)、

「晩清小説研究論稿—呉趼人の譴責性(其一) (北海道教育大学『語学文学』第10号1972年3月)

「晩清小説研究論稿 小説『通史』の思想—呉趼人の譴責性(其二)」(『語学文学』第11号1973年3月)

「晩清小説研究論稿—呉趼人の譴責性(其一の中) (北海道教育大学『語学文学』第13号、1975年3月)

「写実小説 『恨海』における写実と政治」(『文教大学文学部紀要』第11-2号 1998年1月)

81「新小説」としての「歴史小説」(下)(『神戸大学文学部紀要』12 1989.2.1)

82『野草』27号(1981年4月)

83『清末小説研究』第5号(1981年12月)

84『北海道大学外国語外国文学研究』8 (1960年12月)

第三節 清末のジャーナリズム

1. 清末出版会概況

1)出版業の成立

方漢奇『中国近代報刊史』*1、郭延礼『近代西学与中国文学』*2によると、中国における近代的新聞雑誌の出版は、阿片戦争(1840)前後から、外国人宣教師や中国通文化人による、海外の文物、歴史文化を紹介し、政治や経済情報等を掲載する刊行物に始まった*3。外国文学の翻訳紹介は外国人による民俗、教会関係著述の翻訳が主で、英国人 Robert Thom (中国老書生)のイソップ寓話の紹介—『意拾喻言』(『伊索寓言』1840年)(1837-1838)に始まったという。

清末に至ると、欧米文化の流入に伴う交通、都市の発展や、活版印刷術の普及等により、情報、文化の伝達システムが一変した。出版業が成立し、新聞雑誌が発刊され、職業作家が誕生した。情報娯楽提供を目的とする大量の出版物が刊行され、政財界や花柳界のゴシップ

記事とともに、時論や諷刺記事も掲載された。はじめは外国資本の商業出版物が多かったが、第二次阿片戦争（中法戦争）—いわゆるアロー号事件、甲午日清戦争（1895）後、中国知識人による新聞雑誌創刊が相継いだ。職業作家と読者層が誕生し、文芸専門紙誌の発行も相次いだ。初期の紙誌に、李伯元の創刊した『指南報』（1896.6.6）、『遊戯報』（1897）、『世界繁華報』（1909）、吳趼人の編集した『采風報』（1898）、『笑林報』（1901.3）、『寓言報』（1901）等がある。政界、商会、花柳界等に関連した記事のほかに、諷刺性の濃い筆記、詩詞、笑話、小説が載った。

梁啓超の小説界革命提唱以後、小説専門雑誌も相次ぎ創刊された。梁啓超の発刊した『新小説』（1902）、李伯元の発行した『綉像小説』（1903）、吳趼人の編集した『月月小説』（1906）、曾樸の発行した『小説林』（1907）が最も知られている。それらの雑誌に掲載された小説の代表作とされるのは吳趼人『二十年目睹之怪現狀』、李伯元『官場現形記』、劉鶚『老殘遊記』、曾樸『孽海花』である。1899年に林紓・王寿昌の訳した仏小仲馬『巴黎茶花女遺事』

（Dumas,Alexandre;Dumas fils（デュマ フィス）の邦題『椿姫』）が出版されて以後、外国文学の翻訳出版が盛行し、1919年、五四文学革命に至るまでに小説 2545 作、詩 100 首、劇 20 曲が出版された。翻訳家は 250 名に上るという（『近代西学与中国文学』 p 196）。

この時期の新聞雑誌出版状況について樽本照雄は「清末民初における定期刊行物の時空」*4 で、‘1857 年から 1920 年の 64 年間に出版された定期刊行物(新聞雑誌)は、621 種となった(p10)’と検証している。樽本の解析によると定期刊行物には 1890 年から 1920 年にかけて三度の創刊ブームがあり、以下のような‘時間的空間的変遷’が見られた。第一次は 1897 年を頂点とする日清戦争後の維新運動時期で場所は上海、第二次は 1907 年を頂点とする日露戦争後である。『清議報』、『新民叢報』、『新小説』等政治面、文学面で重要な役割を果たした雑誌が日本で発刊された。第三次は 1913 年を頂点とする辛亥革命後で、北京での創刊が増加した。樽本はそのような‘清末民初における定期刊行物の動向’を、‘清末民初：雑誌トライアングル(p15)’と命名している。

樽本はさらに、清末 1894 年から 1928 年までの小説の発行状況を整理して二段構えの折れ線グラフを検出し「清末民初小説のふたこぶラクダ」と命名、以下のように解析している。

雑誌『新小説』が創刊された‘1902 年を境として発行点数が急増’し、‘1907 年を頂点とする’。‘最初は翻訳のほうが創作よりも多く、逆転するのは 1908 年になってから’で‘翻訳が、量から見て創作に追い抜かされる’。‘総量からすれば、翻訳 1135 に対して創作 1237 と、ほぼ互角となっている’。‘民初は 1911 年辛亥革命により発行点数が落ちこ

み‘1912年に底を見せて、1915年が頂上、という二段構えの折れ線グラフを描く’(p28-29)。清末は、上海広智書局、商務印書館、小説林社等出版社が林立し、小説の連載出版を助けた。民国以後は商務印書館の独擅場で、該社発行の単行本は九割強が翻訳小説であった。そこで発行点数を単行本に限れば‘1901年から1920年までを見ると、全体の70%を翻訳が占める’*5。

2)「商務印書館」の躍進

樽本の解析は、日本を主要な舞台とする新聞雑誌の出版活動と翻訳出版物が、清末の文化情報形態や小説発行状況に大きく関与した事実を象徴的に映し出した。その様相は、中村忠行、樽本照雄により検証考察が尽されている*6 商務印書館と金港堂の合併事業、それに関連する長尾雨山の関与と『繡像小説』刊行事情に集約されているといつてよい。樽本は膨大な研究成果を以下の如く要約している。

1897年、印刷所として出発した商務印書館が、おりからの新式学堂開設の趨勢を敏感に感じ取り、教科書出版に乗り出したのだが、その時の範は日本に求められた。この商務印書館の求めに応じたのが、当時日本で最大の教科書出版会社であった金港堂の中心人物原亮三郎である。原亮三郎は、もちまへの教育に関する関心から個人的に商務印書館に投資することとし、社員加藤駒二、小谷重を経営方面に、また教科書疑獄事件で有罪(1903年)となった元高等師範学校教授長尾雨山を編訳所に派遣した。1903年より10年間の商務印書館・金港堂の日中合併時期である。

創設より8年間に出版した新書は全134種、350冊で、そのうちの翻訳物は厳復訳のものを除いて大多数は日本語からの翻訳あるいは日本語からの重訳であったという。この一事を持ってしても、日本からの影響がいかに大きかったかが理解できよう’*7。

民国誕生後、外資混入を批判された商務印書館は、合併解消を決断し日本側資本を買い戻す。しかし、それまでに金港堂から吸収した印刷出版事業に関するノウハウは、商務印書館側に金額に換算できないほどの利益をもたらしたという。商務印書館、金港堂の合併した1903年は、奇しくも梁啓超が小説界革命を提唱した年である。戊戌の政変(1898)による変法維新の失敗後、日本に逃れた梁啓超は日本の政治小説に着目し小説界革命を提唱した。梁による「訳印政治小説序」(1898)、「論小説与群治之關係」(1902)に始まり、厳復、夏曾佑「本館附

印説部縁起」(1902)、狄楚卿「論文学上小説之位置」(1902)、夏曾佑「小説原理」(1902)等、民智啓蒙、社会改革に果たし得る小説の効力を強調する議論が相次いで発表された。以後、清末民初の新聞雑誌に大量の小説が連載されるという社会現象が現出し、清末において政治と文学は不可分の関係となった。吳趼人もこの年、『漢口日報』を辞し小説家に転じている。

清末小説界革命は日本の政治小説に端を発した。期せずして同年に、商務印書館は金港堂と合併した。日本側の経験と幫助を得た新制商務印書館は清末出版界を活性化させた。文芸作品の紙誌掲載や原稿料制度の導入は専業作家の誕生を促し、多くの知識人に執筆、就業の場を提供した。商務印書館は張元濟*8を高給で招請し、ほかに蔡元培*9、嚴復*10、鄭孝胥*11、蔣維喬*12等、学殖名高い改革派官僚経験者が前後して経営、編集に参画した。一方で出版社主や高名な文人編集者の社会地位と、原稿を売る作家の立場、待遇には格差が生じたと思われる。作家は原稿料や締め切りをはじめ種々の側面に出版社側の制約を課され、人気や評判、売れ行き等商業主義や人間関係、政治配慮といった経営方針に悩まされたと推察される。中国において、文芸の創出、普及形態が一変した時期であったといえよう。まさしく樽本の述べる如く、清末小説の成立に‘日本からの影響がいかに大きかったか’が窺われる。

民国以後において小説発行の‘独擅場’を成した商務印書館の、清末に教科書印刷を目論んでの創業と日本金港堂との合併による出版事業への躍進は、清末の出版界、言論界の動向を象徴する出来事であったことがわかる。清末の代表的専業作家であった吳趼人、李伯元の被った災難は、その一端を映し出している。吳趼人の嘗めた苦汁は、文学と政治両面に及んでいる。文学面の苦汁については、中村忠行、樽本照雄が言及している。両氏の論稿に拠りながら、吳趼人を中心とした事態について確認しておきたい。

2. 出版界における吳趼人

李伯元は1903年、商務印書館の要請により『繡像小説』を発行した。親しい友人であった吳趼人は梁啓超の創刊した『新小説』に「電術奇談」、『二十年目睹之怪現狀』、「痛史」等を連載しながら、『繡像小説』に「瞎弁奇聞」(1905)を連載した。中村忠行の考察によれば、『繡像小説』が金港堂側の意向により創刊されたため、李伯元は外資に随うとの責めを負い、商務印書館側に集まった蔡元培、嚴復ら‘教育畑の君子人’スタッフに疎外され、‘終生その鬱屈した気持ちを拭えなかった’*13。李伯元は1906年に40歳で死去した。吳趼人は絶筆となった「活地獄」(1903-1906)最後部分二回分を続作*14した。樽本照雄は、吳趼人が李伯元の死後7ヶ月を経た後に、追悼文を書いてその死を報じた事実について考察している。樽

本は、追悼文を発表した月が、呉趼人の続作した李伯元「活地獄」登載月であった点に着目した。呉趼人の追悼文により、その間も欧陽鉅源*15、の代作を李伯元の筆名で載せ続けていた『繡像小説』の欺瞞が暴かれた。樽本は、それを‘李伯元を阻害し続け’た‘商務印書館と外国企業である金港堂の『繡像小説』にむけた、呉趼人の抗議ではなかろうか’と解釈している*16。郭長海は、呉趼人の小説「近十年之怪現狀」(1909)第5回酒席場面で談笑する三人の酔客は、呉趼人と李伯元、「隣女語」(1903)*17の作者連夢青*18であることを発見した。この発見は、呉趼人と李伯元はじめ『繡像小説』執筆陣との交誼を証明している*19。確かに、編集者兼執筆者李伯元の死に追悼文も追悼号も出さず、死を隠匿して代作を載せ続ける措置には、商務印書館の商業主義と李伯元への非情、軽視が現れている。熱血漢と伝えられる呉趼人であれば当然、義憤に駆られたであろう。

また樽本によれば、商務印書館創設者夏瑞芳は、‘反美華工禁約運動’の中心人物である曾少卿が投資し設立に参画(1906年)した中国図書公司を株価操作により強引に買収合併したという*20。呉趼人も同じく‘反美華工禁約運動’に携っており、運動の方針について曾少卿に宛てた書簡が残っている*21。呉趼人は愛国運動の同志である曾に同情し、商務印書館に反感を抱いていたに違いない。呉趼人の小説「上海遊藝錄」(1907)の登場人物は‘私も以前は公益事業に極めて熱心で終日奔走して已まなかった。後になって具に見れば社会の奇奇怪怪の様相は言い出すときりが無い。誰であろうと結局うまくやれはしないのだ。(我从前也极热心公益之事,终日奔走不遑,后来仔细一看,社会中千奇百怪的形状,说之不尽;凭你甚么人,终是弄不好的。P467)’と述懐している。公益より社運を優先する夏瑞芳の対応は、呉趼人の価値観に照らせば‘奇奇怪怪の様相’に類する所業であったと思われる。

さなきだに呉趼人は、外国資本の進出に国内産業が駆逐される現況を憂慮していた。「劫余灰」にはヒロインの婚約者の叔父の経営する宝飾店が舶来宝石の流行に押されて閉店を余儀なくされる話題が挿入されている。呉趼人は‘宝石に限られようか(岂但玩好已哉)’と註を付している(第9回p141)。また『二十年目睹之怪現狀』に実名で登場する民族機械工業「発昌機器廠」は、ドックや販路を外資系造船会社に占有され経営を維持できず、1900年外資に売却、廃業に至った。呉趼人は第28回で、発昌機器廠の所在地や工場の様子を詳しく紹介している。工廠主方佚蘆は‘九死一生’の心やすい知人としてしばしば作中に登場する。方佚蘆のモデルである発昌工廠主方逸侶(1856—1930)は広東人で後年、江南製造局委員を勤めた*22。おそらく呉趼人の該局奉職中から旧知の間柄であったろう。呉趼人は当然、親しい同郷人の創業した産業を失墜させた外資を快く思わなかったに違いない。外資に恃んで成

長し、友人の李伯元や欧陽鉅源を利用しながら疎外し、愛国運動に挺身する曾少卿に敵対する商務印書館に、吳趼人は反発していたに違いない。

一方、新聞雑誌の盛況は、吳趼人や李伯元ら野にあって警醒を志し政治の腐敗を糾弾する‘譴責’小説家と、清朝の官位を戴き政治改革を図る洋務派や維新派、清朝転覆を図る革命派等の軋轢を、紙誌上に露わに現出させることになった。既述の如く、夏曉虹により、吳趼人と梁啓超の戊戌以前からの交流が確認されている。夏の発見した広告資料は、兩人間において、小説執筆方針に関する提議や話し合いが成された可能性を暗示している。吳趼人は清政府に指名手配されるお尋ね者の梁啓超に加担して‘譴責小説’を描き、民智の啓蒙に努め、社会悪を糾弾した。小説界革命と政治革命はその成り立ちから不可分の関係にありながら、それぞれの担い手である作家と政治活動家の立場、認識の相違は、清末言論界を混乱に陥れたように見える。

吳趼人の小説は構成力の巧みさを評価されている。しかし彼は、『二十年目睹之怪現狀』や「発財秘訣」に註や眉語を付し、すべて実事、実在人物であると繰返し強調している。『二十年目睹之怪現狀』第 45 回、第 53 回に登場する塩商の先代の妾羅魏氏一族は、斜陽の家運再興を謀ろうとする現当主羅榮統を、不孝の名目で訴え幽閉する。羅魏氏と羅榮統は西太后と光緒帝を暗喩するという。第 81 回に登場する偽占い師は、四川の大富豪張百万の娘に皇后の気が顕れていると託宣し、婿に選んだ樵の枕頭で松明を焚いて皇帝の気を演出する。漢高祖ばりの演出で皇帝皇后を仕立てる詐欺師の話題は、“革命”の気運を醸成しかねない危険性を孕むものであったといえよう。第 81 回、第 82 回では、四川某觀察の詐欺事件が暴かれる。某觀察は、‘時勢に留意し中国の学にも西洋の学にも通じている（留心时务,学贯中西）’ことで拔擢された‘特別推薦組道台（特旨班道台）’で、石炭から石油を搾れると聞き齧るとさっそく石油搾造会社を設立する。彼は石炭を買い占めて石炭価格の暴騰を引き起こしながら、上司の撫台にまで自社株の先物買いを勧める。吳趼人は‘昨今の經濟学問の中西に通じると称する者はたいてい、怪しげな聞き齧りの受け売りだ。某觀察に限られようか（今之所谓經濟学問贯彻中西者,无非道听途说耳,何独于某观察哉 p682）’と眉註を施している。‘某觀察’は実在人物として『趼塵筆記』にも記載されている（『趼塵筆記』「制煤油」）が、石油製造会社の設立と株先物買いの件はない。『趼塵筆記』の記述が小説よりも事実に近いとすれば、その件は吳趼人の、洋務官僚の‘道聽塗説’と財テク実態を具現化させようとして施した脚色であろう。

『二十年目睹之怪現狀』の登場人物については高伯雨『『二十年目睹之怪現狀』索隱』により、西太后から妓女まで多くの名の分かる人物について詳細なモデル考証がなされている。

呉趼人の言う通り、各話題の骨格は実際の見聞に拠っており、読者には思い当たるふしがあるという仕組みであったと思われる。当事者となった名声、地位ある人物にとっては憤懣やるかたないところであったろう。

中村忠行は前掲「清末文学研究時評」において、張元済をはじめ商務印書館スタッフが李伯元を阻害したのは、李伯元が花柳新聞編集者であるためというよりも、官界に公然と敵対する李伯元の作風を危険視したためであろうと指摘している。官界や文芸界における貴顕の士は呉趼人に対しても同様の視線を向けていたと思われる。樽本によれば、呉趼人、李伯元はともに経済特科による清政府の招請を拒絶している。公権力との接点を忌避拒絶する彼らの姿勢は、正統な世界での成功を目指す維新、革命双方の活動家の目に、無法者、危険人物と映っていたのではないだろうか。

3. 報道機関における呉趼人

1) 呉趼人の執筆姿勢

ジャーナリズムの世界で呉趼人を見舞った政治面の災厄も、そのような特定の党派、権威に拠らない執筆姿勢に端を発していたのではないかと思われる。呉趼人は、「近十年之怪現狀」（1910）〈自序〉*23で自身の執筆活動を懐古している。

世の不正理不尽を憎む思いは日々に積り、暗愚頑迷を攻め正さんとの思いは長きにわたって強まるばかり、思いの丈を申し述べる文章を書き始め、自ら密かに国の為に意見する‘謫諫’の士と任じていた。なお幸い文章の知己は天下に居り一誌が出れば筆写口承して、年月を重ねても古いからといって見捨てはしない。そこで文字に活力あるのを信じるようになった。私に好意的な者は、半端な黄金珠玉をばらまくのは惜しいことだ。散逸した文章を拾い集めるのは容易ではない、なぜ一冊にまとめないのか、読む者に値打ちを知らしめ、入手しても保存しやすく、書いても長く残せるではないかと言った。そこで章回小説のまねごとを始め、かぞえてみれば癸卯の年より作家業に携わり、今で七年になる。

然而憤世嫉俗之念，积而愈深，即砭愚订顽之心，久而弥切，始学为嬉笑怒骂之文，窃自侪于谏诤之列。犹幸文章知己，海内有人，一纸既出，则传钞染诵者，虽经年累月，犹不以陈腐割爱，于是乎始信文字之有神也，爱我者谓零金碎玉，散置可惜，断简残编，畜掇拾匪易，盍为连缀之文，使见者知所宝贵，得者便于收藏，亦可藉是而多作一日之遗留乎？于是始学为章回小说，计自癸卯始业，以迄于今，垂七年矣（p 299）。

吳趼人の執筆活動、社会活動、政治運動の核は、暗愚頑迷を攻め正さん’とする思い、‘世の不正理不尽を憎む’思い、国の為に意見する‘諷諫’の士の志にあったことがわかる。彼は時事や政治に関心を抱き、自身の見解を社会に訴えようとするジャーナリストとしての視線を小説執筆の出発点としていたといえる。

‘章回小説のまねごとを始め’た‘癸卯の年’とは1903年にあたる。吳趼人はこの年の初春まで『漢口日報』主筆の職にあり、辞職して、初秋より『新小説』に《社会小説》『二十年目睹之怪現状』の連載を開始した。政治運動各派の主張交錯する渦中で文筆活動に携わっていた吳趼人は、清末言論界の陥った事態を象徴する体験を経て、ジャーナリストから小説家に転じた。以下にその経緯をたどっておきたい

2) 『漢口日報』事件と吳趼人の梁鼎芬あて公開書信

(1) 小説家吳趼人の出発点*24

先述の如く吳趼人の著述は、多くの貴賓、高名の士の行状を俎上にあげている。中でも、最も登場回数の多いのは梁鼎芬であろう。既述の如く、吳趼人は小説家に転じる直前まで、『漢口日報』主筆の職にあった。梁鼎芬は吳趼人の主筆在任時の武昌府知府で、『漢口日報』を買収し官営に吸収した人物である。吳趼人が該報を辞し小説家に転じた直接の原因は、この『漢口日報』買収事件にあった。

1903年6月21日『蘇報』2497号〈光緒29年5月26日〉に、吳趼人の書信「已亡漢口日報之主筆吳沃堯致武昌府知府梁鼎芬書」の原文とそれについての記者のコメント「告已亡漢口日報記者」が登載されている。『蘇報』は、その搭載に先立ち、6月12日〈光緒29年5月17日〉2488号の記事「詳記漢報改歸官弁事」（以下「詳記」と省略する）ですでに『漢口日報』買収と吳趼人辞職の経過を報道している。その概要は次のようなものである。

『漢口日報』は、黄邦俊、張賡颺、楊公輔、程鵠雲、招商局總弁、電報局總弁の共同経営であった。主筆は吳沃堯、沈学敬で、‘清議を主張し’たため、日ごろ警察局總弁金鼎、武昌府知府梁鼎芬は‘切骨の恨み’に徹していた。四月十八日、梁鼎芬が各学堂の拒俄集会を妨害して該報に罵倒された。怒った梁は、張之洞、端方に手を回して張賡颺に圧力をかけた。もともと張は民智を開くためではなく金を儲けるために新聞業に携わっていたので、喜々として黄ら他の共同経営者の資本を払い戻し、該報を官弁に売却した。その結果、‘吳趼人は憤然として去り沈はぐずぐず居続けて（‘蟬聯’）いる’

九日後、吳趼人の書信「已亡漢口日報之主筆吳沃堯致武昌府知府梁鼎芬書」（以下「書」と省略する）と、それについての記者のコメント「告已亡漢口日報記者」が登載される。「告已亡漢口日報記者」の内容には『蘇報』関係者内の亀裂が窺われる。しかし『漢口日報』買収事件そのものには関係しないので、それについては後ほど論じたい。「書」は、事件を以下のように概略する。

吳趼人は「『漢口日報』に就いて以来いつも論説を書いては公の徳政を頌揚し、国事に意見し（『諫諍』）婉曲に核心を衝いている（『談言微中』）とひそかに自負」していた。ところが梁鼎芬は漢口日報館を「強引に買収する」暴挙にでた。吳趼人は「役人官兵の、民の物を無理強いして買い取るのと異なるところがありましようか」と批判、辞職を通告する。

この文章により、従来知られていなかった吳趼人と梁鼎芬との関係、漢口における吳趼人の事跡、及び憶測の域を出なかった吳趼人の小説中のモデル、吳趼人の小説執筆の開始点と執筆意識の四点が明らかとなった。

(2)体制側の言論政策

「書」の中で吳趼人は、梁は「某氏におもねる」ために『漢口日報』を買収したのだと、繰返し言明している。吳趼人が後に書いた<梁鼎芬蒙蔽張之洞>の一文は、「某氏」を当時两江総督の張之洞*25と特定している。このことは『漢口日報』買収が、政治上、文化思想上の抗争を背景として行われたことを示している。張之洞は、文人官僚のみならず汪康年*26、梁啓超*27、章炳麟*28等改革派知識人をも慰撫しつつ幕下に置こうとした。したがって、言論機関や知識人を官弁の系列に取りこむのは彼の常套手段であった。1896年、張之洞は、黄遵憲*29、汪康年、梁鼎芬等に上海『強学報』*30出版を許している。その年に彼らは『時務報』*31を発刊する。張は梁啓超の変法論を危険視し、梁啓超を湖南時務学堂総教習に招いて該報から遠ざける*32。まもなく『時務報』は梁鼎芬を代表理事とする官報となる。汪康年は同報を『昌言報』*33と改名、章炳麟を筆政に迎えしばらく継続したが、やがて停刊となる。1899年にも張之洞は、上海日本総領事に梁啓超の刊行する『清議報』*34を禁止するよう要請している。汪康年はほかに『中外日報』*35を刊行するが、これも1908年に、当時两江総督だった端方*36の圧力で委譲させられる。吳趼人の『漢口日報』就任も、章炳麟や梁啓超の招聘と同様に、体制に楯つく文人を傘下に入れ慰撫しようとの張之洞の意向を背景としていたとも考えられる。新聞雑誌に改革の議論を喚起して、洋務に敵対する頑固派官僚

を牽制すると同時に、配下の文人に言論機関を監督させて改革の論調を調整する、という方針が張之洞の既定路線であったといえよう。

張之洞の洋務改革派としての立場は、拒俄運動への対応に鮮明に表われた。汪康年は、1901年、清露密約に反対して張園拒俄集会を数度招集し、二度目の集会で吳趼人も演説した。張之洞は、駐露公使楊儒に署名拒否を指令し、関係各国に調停を求めるなど、李鴻章*37に反対して密約締結阻止に務めていた。その一方で彼は、張園の拒俄集会を阻止するよう指令を発している*38。汪はロシアが東北撤退の約定を破った1903年にも拒俄集会を主催し、この時には章炳麟、蔡元培等が演説している*39。折しもその年、吳趼人は『漢口日報』主筆として漢口にいた。全国的な拒俄の趨勢は湖北においても例外ではなく、梁鼎芬が学生の行動を禁圧したという記事が、『蘇報』をはじめ当時の新聞雑誌記事の随所に見られる*40。拒俄大会に当初から参加していた吳趼人は、当然「詳記」の記載の如く湖北における拒俄の言論を支持して梁鼎芬と対立した。

既述の如く当時、張之洞を筆頭とする洋務派官僚は改革派の刊行する出版物を買収や発禁の圧力によって停刊に追いこみ、変法維新や種族革命の主張を根絶しようとする言論政策を取っていた。新聞雑誌弾圧事件が続き、「嬉笑怒罵の文」を掲載した多くの新聞雑誌が、執筆者の逮捕や廃刊の憂き目に遭っていた。『漢口日報』買収は、立憲維新や廢滿革命等、政治制度改革派に対する、王朝官僚体制護持の立場を取る洋務派のとった言論弾圧政策の一環であったといえる。それ故、「書」は清末言論界を襲った政治的災禍についての証言であるといえよう。

『蘇報』は、「書」を掲載した（1903年6月21日）9日後の6月30日、いわゆる『蘇報』事件*41で章炳麟が逮捕され、翌日趨容が自首、『蘇報』は停刊となる。折しもその秋、梁啓超は「小説界革命」の主張を掲げ雑誌『新小説』を創刊した。吳趼人のみならず、政治情勢は「頑愚を戒め糺さんとの思い」を小説に託すほかない状況に陥っていたといえる。「書」に証言された吳趼人の体験は政治上、文学史上に重要な意義を持つと思われる。

(3) 『蘇報』の報道姿勢

『蘇報』がもともと当局の『漢口日報』経営への介入に関心を抱き、該報に同情的であったことは「詳記」の報道により明らかである。吳趼人と『蘇報』関係者双方に接点をもつ人物として蔣維喬が挙げられる。章炳麟は友人蔣維喬の紹介で蔡元培を知り、彼らは1902年3月に「中国教育界」を、9月に「愛国学社」*42を組織する。『蘇報』は実質的に「愛国学

社」の機関報だった。蔣維喬は「南社」*43 社友で中国革命同盟会会員である。「張園拒俄演説会」で呉趼人と相前後して演説しており、面識があったはずである。同じく同盟会会員の周桂笙*44 と親しく、呉趼人が友人周桂笙と共に主筆を務めた雑誌『月月小説』4 号（1906 年 12 月）に「題詞」を寄稿している。

さらに呉趼人、章炳麟および梁鼎芬と親交のあった人物として汪康年があげられる。汪康年は 1896 年 7 月、黄遵憲、梁啓超とともに『事務報』を発刊した。1898 年 7 月に概報が官弁に買収されて後は、1898 年 5 月から別に創刊していた『事務日報』を『中外日報』と改め、刊行した。呉趼人は、1901 年に汪康年の主催した「張園拒俄演説会」に参加した*45。その時、汪康年も呉趼人と共に演説した。呉趼人は随筆に汪康年の名を挙げ、『趼塵筆記』〈謠言二則〉上海広智書局 1910 年）、小説『新石頭記』や笑話「新笑史」等で『事務報』の名を挙げている。また『中外日報』は「張園拒俄演説会」での呉趼人の演説を掲載し(1901.3.26)、『月月小説』第 2 号(1906.10)〈評林〉に、『中外日報』名で祝詞を寄稿している。「近十年之怪現状」は 1909 年『中外日報』に不定期で連載された。汪康年と呉趼人は戊戌政変以前より長年にわたる交流を保っていたと思われる。呉趼人は「書」で、梁鼎芬と‘上海也是園で姓氏を名のりあった’と証言しているが、紹介者が汪康年であった可能性は高い。

『蘇報』は、「詳記」の報道、「書」の登載に加え、1903 年 6 月 24 日「〈時事要聞〉武昌近聞」の記事では、呉趼人辞職後の概報の状況を報じ、『漢口日報』買収事件の報道にとりわけ熱意を抱いているかのようである。『蘇報』にはほかにも湖北関係の記事が処々にみえる。なかでも紙幅を取っているのは「〈時事要聞〉湖北学生議阻俄謀」(1903.5.15)、「〈時事要聞〉議阻俄謀続誌」、「梁鼎芬演説之荒謬」(1903.5.19)、「鄂省文高等学堂上両湖兼督師請電送俄約稟」(1903.5.21)など湖北省における拒俄運動、それに付随した張之洞や端方(1861-1911)、梁鼎芬の記事である。『蘇報』の執筆陣と呉趼人の立場は、基本的に、拒俄運動に対する支持参加という点で一致する。

先に問題点として挙げたように、『蘇報』は「書」掲載にあたり、わざわざその上段に‘輿論商榷’欄を置き、‘本館記者名義’の署名で「告已亡『漢口日報』記者」(以下「告」と省略)という論評を付した。この一文は「書」についての内容解説という体裁を取っているが、実質は、下段に掲載した「書」が政治的に妥協し権力者に追従した文章であると、筆者呉趼人を批判した記事である。上段の「告」を読んだ後に下段の「書」を読むと、「告」の紹介と「書」の内容の隔たりに違和感をぬぐえない。しかも、『蘇報』はこの記事に先んじて九日前の 6 月 12 日〈光緒 29.5.17〉2488 号の記事「詳記漢報改歸官弁事」(以下「詳記」と省

略)で、すでに、武昌府知府梁鼎芬が『漢口日報』経営に介入し同報を買収、官報としての抗議して、主筆吳趼人が辞職した経緯を報じている。‘本館記者名義’の署名人に事実関係についての基礎知識がなかったとは思えない。すでに「詳記」を読んでいた読者は「告」と「書」を並べて読み、「書」の内容と相反した奇異な解説と感じたであろう。

『蘇報』は当初「詳記」で、吳趼人の辞職を、言論機関への政治的介入に対する抵抗、という視点から報道していた。既述の如く「書」は、辞職に際し梁鼎芬にあてた絶縁状である。吳趼人は、梁鼎芬が言論権を制圧し‘某氏（張之洞）にへつらおうとして’民間紙を収奪したと非難している。さらに梁鼎芬の慰留に対し‘数千年の詞藻、考証の学を凡守する’‘公’は‘門下に人材溢れ’ている。‘何故この自由、平等と虚言を吐く人物（吳趼人）を引きとめるのか?’、‘守旧でも維新でもなく極中極正の道理を守ると公言する公が、どうしてこのような尊貴をわきまえぬ無頼文人、破廉恥漢の自分と組もうとするのか’、‘旧主の資産（である報刊）を収奪したものに従うとなれば、自分は失節の婦、敗降の将の誹りを免れないが、気節凜然の人である公が、どうして失節敗降の人物を用いようとするのか’と嫌みとあてこすりを並べ連ねている。そうすることで逆に、‘気節凜然’、‘極中極正’の対極にある梁鼎芬像を素描しつつ、‘敢て清貧を慮らず失館を憂えず’辞職する自身の正当性を印象づけようとする文章である。このように相手を持ち上げる体裁をとり言外に非難揶揄する表現は吳趼人独特の手法である。

ところが、「告」は「書」に述べた吳趼人の表現について、‘梁鼎芬に憐れみを乞い’‘言論の自由を放棄し’、‘甘んじて腐敗に従い’、‘資本家に降り’、‘権力者に諂って’、主筆辞職を表明した、と解説している。さらに吳趼人が‘梁鼎芬のご愛顧を賜り狂喜している’という不可解な批評まで付している。執筆者の‘本館記者’に吳趼人の意図を汲み取る読解力がなかったとは考えられない。意図的に曲解したとすれば、「告」の狙いは、吳趼人を‘甘んじて梁鼎芬の下風を排する’いわゆる洋務派、改良派として扱い批判することにあつたとしか考えられない。

発見者の王立興は「告」の文章の批判点が「書」の内容に符合していない点、『蘇報』記者の吳趼人に対する批評が一方的で偏っている点を指摘している。そうなった理由について‘この時期の『蘇報』は日増しに革命的色彩を鮮明にしており自身の新聞発行の主旨を守るために、守旧派の『申報』、‘新政’擁護派の『新聞報』、保皇派の『中外日報』を紙上攻撃していた。’しかし‘吳趼人を巻き添えにし故意に激烈な言辞を弄したのは成すべからざる失策であつた’と評している。この分析は、思想的立場の表明が報刊発行の本質的意義とな

りつつあった当時の言論機関と、それを余儀なくさせる政治情勢という社会背景を勘案した妥当な解釈である。

しかし王立興の解説をもってしてもなお次の二点については釈然としない。

【その１】なぜ呉趯人は“新政”擁護派、保皇派として批判の対象となったのか？呉趯人は職業作家となって後、立憲制、革命派に反対する小説を書いた。しかし、『漢口日報』を辞職したこの時点ではまだ小説を書いていない。新中国成立後、保皇派、反動派として扱われたが生前にそのような評価が下された形跡は見当たらない。概報辞職時期の呉趯人は、拒俄運動を支援する愛国者、大官に抵抗する反骨のジャーナリストの盛名を負っていたと思われる。その上で‘梁鼎芬のご愛顧を賜り’云々と敢て強引な解釈を「書」に下した「告」の筆者‘本館記者’には、何らかの意図があったとしか考えられない。

【その２】なぜ『蘇報』紙上で「詳記」と「告」の見解が異なるのか？先に述べたように、もともと『蘇報』は、呉趯人が当局の言論統制に従うのを潔しとせず辞職したという視点から『漢口日報』事件を報道していた。確認しておく、「詳記」で当局の弾圧と呉趯人の辞職を報道、その九日後、呉趯人の辞職通告書「書」を登載する。但しその冒頭に記者の呉趯人への批判的コメント「告」が付される。その後も『蘇報』には、官報と化した『漢口日報』の無味乾燥な記事や残った編集者の無気力等を伝える記事が、断続的に載せられる。しかし、辞職した呉趯人への非難の論評は見られない。むしろ硬骨の編集者を失った新聞が、予期通りに精彩を失った事実を確認する報道の流れとなっている。「告」の呉趯人を非難する記事だけが立場を異にしているのである。

このような、呉趯人側に立った「詳記」の報道、「告」の一転した呉趯人批判、元の報道姿勢に沿ったその後の追跡記事という、『漢口日報』事件に対して『蘇報』の取った統一を欠いた対応は何を意味するのだろうか。王立興の挙げた要因に加え、さらに、見解の統一を欠くような事態が『蘇報』内部に生じていたのではないか、という疑念を抱かざるを得ない。『蘇報』の中心的存在であった人々の関係や立場といった人的背景の側面、及びそこに起こり得た事態について検討してみなければならない。

3)「中国教育界」と「愛国学社」―『蘇報』内の党派対立

方漢奇『中国近代報刊史』によると、『蘇報』はもともと日本人を発行名義人としていた。1900年、陳範（1860―1913）が買収し、政治的影響力を持つ言論機関となった。陳範は字を夢頤、湖南衡山の人、兄の陳鼎が戊戌の政変に連座し、彼自身も教会関連事件で免官とな

り、政治不信に至った元官僚である。『蘇報』ははじめ康有為、梁啓超に共感する立場で改良派の傾向が強かった。しかし、列強の脅威が強まり、東京で「支那亡国二百四十二年紀年会」が開かれ革命団体が相次いで結成され、革命の気運が高まるにつれて、陳範も『蘇報』も革命派に同調する方向へと転換し始めた。1902年冬頃から学生の愛国運動や学園闘争を報道しはじめ、清朝政府の革命鎮圧に抵抗する革命派の論壇となった。1903年5月27日、陳範は章士釗^{*46}を正式の主筆に迎えた。以後7月7日に停刊させられるまでの約一ヶ月半、『蘇報』は革命的色彩をいよいよ強め、趣容「革命軍」を宣伝し、激烈な筆調で民族、民主革命を主張した。

章士釗は「愛国学社」の教官で、『蘇報』を実質的に発行していたのは、「愛国学社」の教員と学生であった。『蘇報』は「愛国学社」成立以来、大量に同学社の教員、学生の論稿や演説記録を掲載した。「愛国学社」の成立を支援したのは「中国教育界」である。章士釗を「愛国学社」教官として招聘したのは「中国教育会」会員呉稚暉^{*47}である。月額百金で学社社員が交替で社説を執筆する契約を結ぶなど、「愛国学社」運営のために『蘇報』との連携を強めたのも呉稚暉であったという^{*48}。編集体制の不統一という問題の核心は、「中国教育会」、「愛国学社」の組織関係にあったことを窺わせる。

馮自由『革命逸史』^{*49}や『中国近代報刊史』の記述、章炳麟や蔡元培年譜の解説など、この時期の『蘇報』、「中国教育界」の資料に関する限り、おそらくそのほとんどすべてが蔣維喬の「中国教育界の回憶」^{*50}に拠っていると思われる。蔣維喬の回憶文は、30余年を経て関係者の多くが他界し、生存者の記憶も混乱した時期に発表され、事実関係を具に審議する余地のないまま、第一次資料として公認されたようである。それは、蔡元培が訂正箇所を指摘した蔣維喬宛書簡^{*51}に「書かれた昔日の事は、半ばは記憶に残っていない事です。先生のこの文章がなければ「中国教育界」のかつての事跡は消えていかざるを得なかったでしょう」と感想を述べているのでもわかる。そのように、あくまで一個人の主観に基づいた回想で、その認識や記憶の細部までを事実と確信することはできないという点を踏まえても、やはり貴重な証言であることに変わりない。蔣維喬の回憶を回憶し、蔣維喬らと対立していた自身の履歴、思想的展開を述べたのが呉稚暉の「回憶蔣竹莊先生之回憶」^{*52}である。この両者の証言によって、当時の『蘇報』の出版環境、人的背景についての概容を窺い知ることができる。

蔣維喬によれば、「中国教育界」、「愛国学社」の成立と分立の経緯は次のようなものである。1902年4月に「上海新党」蔡元培、蔣智由、林少泉、葉瀚、王季同、汪德淵、黃宗仰

らは、表面は教育事業を行い密かに革命を鼓吹する団体「中国教育界」を結成し、各地の同志に上海に来るよう連絡した。そこに 1901 年 3 月、二十数名の学生を率いて日本に留学中、駐日公使蔡鈞と揉めて強制送還された呉稚暉、張継が加わった。1902 年 9 月 16 日、「上海国立南洋公学」に同盟休校が起こり二百余名の学生が退学するに至った。彼らは自力では建学できなかったのも、成立間もない「中国教育界」に賛助を求めた。そこで蔡元培、黄宗仰が資金を調達し「愛国学社」が成立した。有給で雇ったのは上級英語の西洋人女性のみで、三、四年の国文を章炳麟、一、二年の国文を蔣維喬、歴史地理を呉丹初が担当するなど「中国教育界」会員が義務的に教務を担った。教職員は蔡元培が商務印書館、呉稚暉が文明書局に勤め、章炳麟、蔣維喬は翻訳で生活し、教務は純粹の奉仕だった。しかし学社社員の中には「愛国学社」を主体、「中国教育界」を付属と見なし、教員を社員の学費に依存する公僕と見て、指示に従わず陰口をさく者もいた。「中国教育界」指導陣のうち、「愛国学社」社員側に立った呉稚暉と、章炳麟が対立した。1903 年 6 月 16 日、「愛国学社」は「愛国学社社員」の名義で、『蘇報』に「敬謝中国教育会」を発表して「中国教育界」からの離脱を宣言した。それに対し、「中国教育界」も会長黄宗仰名義で「賀愛国学社之独立」を発表して、両者は表面的には円満に分立する形となった。

「敬謝中国教育会」の内容は以下のようなものである。「中国教育界」と「愛国学社」は「精神、宗旨ともに同じく祖国を思い努力するのも同じで、本来、両者を隔てる境界はない」はずで「同人と教育会に何故主客の別があるのか」。それなのに部外者は「同人が教育会に依存している」と見ている。「社員でない教育界諸君」が同人の進歩の為に尽してくれると「依頼の悪名」がますます重荷となつてのしかかる。「同人の志は教育会に依頼するにはない」から「形式」を分けることにしよう。最後は「我が同志」は「閑居せず、疑い躊躇することなく「涙を振って同人を待とう」と呼びかける文で終わっている。この離脱を宣言した筆者「愛国学社社員」が個人であるか複数であるか判らないが、文中で「我が同志」に「同人」の参加を待つよう呼びかけている。「中国教育界」からの離脱は、「愛国学社」社員の総意ではなく、「中国教育界」に不満を抱く有志の「同志」が主導したものであったことが判る。

即ちこの時期の『蘇報』は、「中国教育界」と「愛国学社」という、世代も教養も社会地位も政治姿勢も異なる改革論者が共同で運営する組織の構成員によって編集されていたのである。思想や見解の相違による対立が容易に生じ得る状況にあったといえる。その一端が、「本館記者」と署名する人物が吳趼人の「書」を論評した「告」に表われていると思われる。

蔣維喬によれば、もともと「中国教育界」は各自が各々の基準で改革の構想を掲げ比較的緩やかに結集した、受け皿の広い団体であったという。『蘇報』紙上において、「中国教育界」と「愛国学社」の考え方の違いと、それによる見解の不統一を端的に表すのは、満州族と漢民族の問題や、『中外日報』主筆で拒俄運動や不纏足会を主導した汪康年絡みの記事である。例えば、章炳麟は、改良派と目される汪康年の『時務報』や洋務官僚張之洞の『正学报』編集に携わり、鄒容の『革命軍』に序文を書くといった具合に、救国を第一義とし路線の相違を問題にしない傾向が強かった。また蔡元培も、広義の民族革命を念頭においていたようである。1903年3月14日、『蘇報』に掲載した「积仇満」の一文では、‘満人の血統は久しく漢族と混合し、その言語と文字もすでに漢族の文字、文章に淘汰されている。満人の標識は世襲爵位と働かずして座食する特権のみである。満人が自覚してその特権を放棄するならば、漢人は満人を殺し尽す必要など断じてない」と述べ、鄒容が『革命軍』で主張した‘殺尽胡人’の見解に反対している。

また1903年5月6日の『蘇報』論説「海上執刀史」は、4月1日に張園で汪康年の発起した拒俄集会を紹介し、‘この日の会費、電報費はすべて汪君が負担した’と汪康年の労を労っている。救国の大義に沿った活動であれば党派を問わず評価しようとする会の性格の表れと見てよいだろう。ところが5月18日には‘かの主筆’汪康年が拒俄演説会での‘ある団体’の挙動を‘激発語言、跳擲叫囂、譁諍扮演’と形容し‘兒戯に等しい’と酷評したことに抗議する論絶「読中外日報」が載る。1901年の第一回集会で演説した吳趸人も、1906年に描いた小説『新石頭記』に僧侶（おそらく黄宗仰）が演壇に立つと喧噪、怒号、笑声で演説する声さえ聞き取れなくなる拒俄演説会の状況を描写している。汪の批評はあながち事実背着しているわけではなかっただろう。「読中外日報」筆者は、汪が‘康有為、梁啓超の關係者’でありながら戊戌、庚子で辛くも連累を免れてきた経験から、官憲を恐れるあまり‘消極姿勢’を取るのだと言いがかりをつけている。洋務官僚の干渉に反発する学園闘争に端を発して成立した「愛国学社」社員は、張之洞や梁啓超と均衡を保ちながら報刊発行を続ける汪康年を、活動の内容如何に関らず敵陣關係者と捉えていたようである。そのような彼らの警戒心は、汪の招請で『時務報』編集に携っていた章炳麟や汪と共に演説会開催を呼びかけた蔣智由等、ほかの「中国教育界」会員に対しても向けられていたと思われる。張園拒俄演説会で演者となり、その演説が『中外日報』に掲載された吳趸人も、汪康年に近い人物と見なされていたであろう。また『二十年目睹之怪現狀』や「上海遊驂録」等、後の作品で吳趸人が開陳している満州族についての議論は、先に挙げた蔡元培の「积仇満」の内容と

ほぼ一致する。救国の策として‘旧道德の復活’を持論とした呉趯人の意識は、国学者として生涯、国粋の旗を掲げた章炳麟に近い。呉趯人は、「愛国学社」社員の目には「中国教育会」側の“消極”分子と映っていたかもしれない。呉趯人の『漢口日報』主筆辞職を言論弾圧に対する抵抗と評価したり、権力への屈服と批判したり、意志統一に欠ける『蘇報』の対応の背景に、上記のような内部対立が介在していたことは確かであろう。

「中国教育界」は、「愛国学社」の独立宣言に容認と祝辞を述べた「賀愛国学社」の末尾で、学社に、トルコ、インドの如く滅亡に至らぬよう、‘(空言でない) 独立の精神と学識’をもって国権の恢復を図るよう、奮起を促している。その言葉は、学社社員を真の‘独立精神、学識’に欠けていると見なす真情を吐露しているといえる。当時、この分裂を論じた『浙江潮』は、‘今日の中国の志士はどうして“意気名誉”の四字を逃れられないのか。日々、この四字に煩わされ同族が敵対するに至るとは何事か’と危惧している*53。それらの危惧は適中し、独立後、二週間弱で『蘇報』館は官憲の急襲に遭い、章炳麟、鄒容はじめ関係者の逮捕と停刊を招き「愛国学社」は解散、「中国教育界」も活動停止を余儀なくされる。章士釗は、来し方を回顧すれば‘才識、能力が貧弱’で‘実行が不得手であった’と悔いていたという*54。また、周知の如く章炳麟と呉稚暉は『蘇報』事件を契機に関係をいっそう悪化させ、民国成立後も反目し続けた。

4.政治運動との対峙

「中国教育界」、「愛国学社」の衝突は、清末の報道機関の特質を端的に表しているといえる。書院や家塾で伝統教育を受け、列強の脅威に瀕して政治改革を訴えるに至ったもともと資質の高い文人や官僚経験者が当初の執筆陣となった事、人的繋がりで結集し、愛国、救国の意志を核に執筆したので政治性、文芸性の境界がなかった事、新式学校の生徒や留学体験者等、学業途次にある青少年が、漸次その陣営に加わった事、両者の意識や志向に種々の側面で隔たりの表れた事が一般的特質として挙げられよう。そしてどの陣営も常に政府側の弾圧に曝され、綱渡り式に発行を維持していた。

呉趯人は、1903年6月自身の書信と批判記事が登載された一月後に起こった『蘇報』事件を具に見聞したはずである。1907年から連載開始した『新石頭記』には張園拒俄集会和「中国教育会」会長黄宗仰*55が登場する。「上海遊驂録」では、『蘇報』と趨容『革命軍』を取り上げている。呉趯人と面識のあった「中国教育界」関係者に、張園拒俄集会で同席した汪康年、蔣維喬、黄宗仰がいるが、ほかにも既知の会員はいたであろう。さらに、蔡元培、

蔣維喬をはじめ「中国教育界」関係者の多くは、商務印書館関係者でもあった。樽本の著述に名の挙がっている商務印書館関係者で、吳趼人と既知であったと確認できる人物には、蔣維喬、鄭孝胥、包天笑、王雲五が挙げられる。張元濟、蔡元培は「南洋公学」を辞して商務印書館編訳所長に就任した。もと同職である吳稚暉との親交は厚かった。「愛国学社」の母体は「南洋公学」退学生であり、その多くは吳稚暉を支持していた。商務印書館の中心スタッフと「愛国学社」の関係は深かったであろう。吳趼人の作家活動は 1903 年から 1910 年に死去するまでの 8 年間で、作品発表の場は主として『新小説』、『月月小説』誌上であった。商務印書館との雇用関係はなかったが、李伯元ら友人知人との親交繋がりから、該社や『蘇報』とも関わりつつ、草創期の盛況を見せる中国出版界、報道界で警世活動を行った。その間に中村忠行の指摘する如き人的、組織的に不本意な事態は種々出来していたと思われる。

『漢口日報』辞職事件をはじめ、錯綜した政治思想、報道環境における抗争の累が及んだに等しい体験は、小説家に転じて後の吳趼人の執筆活動にも影響を及ぼしていると思われる。後に吳趼人が、“教養と節度に欠ける革命派青年”を描写した「上海遊驂録」は、民国以後の文学史上で黙殺と非難を被ることになる。彼のそのような“革命党”観は、不本意であったに違いない非難を『蘇報』紙上で浴びたうえ、その『蘇報』自体が発禁に遭い、改革に挺身した知人たちの労苦が水泡に帰する光景を目の当たりにした、この時の体験に端を発しているといえよう。吳趼人の“革命党”観については「上海遊驂録」の項で後述する。

第四節 本論執筆の目的と概要

清末小説は中華人民共和国においては、政治的姿勢が検討され、吳趼人が作品中に表明した義和団批判、民族革命批判、旧道徳称揚等の主張が政治的に否定された。さらに文化大革命勃発により研究は停止した。しかし基礎研究については、日本において樽本照雄により年表、目録制作事業が進められ、樽本照雄、中村忠行の膨大な論考により事実関係探索作業の成果が集積されてきた。加えて文革終結後の中華人民共和国においても基礎事実の発表、資料文献の整理、収集、発掘が進められた。文革終結後、吳趼人研究はすべての清末小説同様に作品の再版から始まった。以来、吳趼人については数種の全集、作品集⁵⁶、主な単行本が出版され、事績がまとめられた。本名も判明しない多くの清末作家と作品に比して、吳趼人に関する書誌面における事実関係は比較的明確になっているといつてよい。

しかし、書誌面での研究がほぼ完成している反面、作品分析面での研究は、長らく空白の状況に置かれてきた。現在に至るも基本的に民国 20、30 年代に出た三つの文学史に依拠す

る傾向が強い。吳趼人作品については、民国、文革終結までの新中国を通じて、紹介記事や印象論以上の考察を加えた作品論は出なかった。1980年代から個別作品を検討する必要性を説いた盧叔度に続き、近年、多くの研究者がその作品の意義を論じようとする段階に入っている。大半の作品は1960年に阿英の編集した『晚清文学叢抄』収録版を除いては（中華書局1960年5月。1980年6月再版）民国成立以来初めての公刊であり、ほとんどの中国人読者に初見であったと思われる。論評した中国人研究者はその構成力や完成度を驚きとともに指摘している。しかし文革終結後、四十年近くを経て未だ政治的見解が払拭されたとはいえない。多くの論稿は、個別作品を論じるにあたり、現在の中国の政治的歴史的常識、価値観に則って解釈し、吳趼人の政治主張、倫理観、女性観の‘落伍’に戸惑うという様相を呈している。現在、吳趼人作品に“世相、時流を反映している”という意義を認めるという点で、研究者間に見解の一致をみておりその評価は落ち着いたようにみえる。しかし、1980年の『晚清文学叢抄』再版から三十年余にわたり学会を挙げて個別作品の検討に取り組んだ成果が、1930年代に阿英が一人で執筆した『晚清小説史』の見解と変わらないことには驚かざるを得ない。民国以来の政治思想面における否定評価は作品評価にはあたらないので、吳趼人作品については、没後百年を超えた現在に至るも研究の進展を見ていないということになる。

吳趼人とその作品が清末民初の文学事象に果たした役割や中国小説史における位置づけを先ず検討しなければならない。本論において論者は、出版界、言論界の渦中であって‘世の不正理不尽を憎む思い’を表そうとした吳趼人の小説の作品論を積み重ねることにより、その思惟を読解検討する作業を進めた。

吳趼人作品の特徴の多くは、作者自身が《社会小説》、《写情小説》と名付けた作品群に反映されている。論者は《社会小説》、《写情小説》から検出し得た特徴的な事象に、便宜上それぞれ“小悪党”或いは“傀儡師”、“フェミニズム”或いは“女性性”の用語を使用した。“小悪党”、“傀儡師”は《社会小説》に登場する、多くは下層階級出身の成り上がり志向や人心操縦を特徴とする悪役人物形象の総称である。また“フェミニズム”、“女性性”は、《写情小説》から読み取れる吳趼人作中の女性性に関わる叙述の総称である。清末知識人は、中国女性の精神肉体両面における解放を緊急の課題とした。清末報道界においては、封建体制下に蔑ろにされていた女性の地位権利の向上を訴え、女権獲得や女子教育振興を主張する時論が興起した。本論では、吳趼人の女性性のとらえ方を、当時の女性解放議論の一環として考察した。

文革終結後も、《社会小説》は政治思想面で後れ、《写情小説》は社会意義に乏しいと評されている。それらの作品を考察する作業を進める過程で幾つかの新発見が現れた。それらの新事実に基づいて呉趼人作品の解析を試みた結果、呉趼人について、従来知られなかった作家意識や作品意義を見いだせた。論拠とした新事実は、次項に述べた如くである。

本論中に挙げた作品名は、紙誌連載終了とともに執筆作業を終えた作品を完結、未完に関わらず「」内に記した（例：「近十年之怪現狀」）。連載終了後も執筆を継続し完結後に、或いは初めから書き下ろしで、単行本で刊行された作品を『』内に記した（例：『二十年目睹之怪現狀』）。引用した文章や語彙は、作品や論評中で原著者の用いた文章や語彙を‘ ’内に、論者の要約や解釈による文や用語を“ ”内に記入した。《》内は各作品の発表時に掲げられた角書きである。呉趼人の作品の引用文は、注記しない場合は『呉趼人全集』に拠っている。出版年月日や歴史事件はアラビア数字で表記し、新暦に拠った。年号等の旧暦は漢数字で表記した。地の文で出版関係、歴史事項に関わらないものは原則として漢数字を用いた。

1 《写情小説》について

1) 「電術奇談」の人物像

呉趼人を《写情小説》に開眼させ小説執筆を指南したのは、翻案小説「電術奇談」であった。これまで、「電術奇談」の文学史的価値が論じられることはなかった。「電術奇談」には“求愛し自立する女性”、“妻や恋人に献身する男性”、“理解ある家長”という人物形象が登場する。そのような旧小説にあまり見られない人物の造形は、呉趼人の《写情小説》執筆に大きな影響を与えたと思われる。さらに、論者が「電術奇談」発表以後に書かれた清末民初の短編小説を分析した結果、「電術奇談」に登場する“求愛する女性”、“献身する男性”、“理解ある家長”という人物形象が、以後の恋愛小説に普遍性に富む人物像として登場し始めるという現象が確認された^{*57}。「電術奇談」は以降の中国恋愛小説の方向性を決める文学史的意義を持つ作品であったといえる。

また、呉趼人は「電術奇談」に登場する悪役に着目し、“傀儡の糸を操る”人物と特記した。その後の呉趼人作品には同類型の人物像が登場する。『電術奇談』は、旧小説にない女性像、男性像、家長像、悪党像を呉趼人に啓示し、その小説創作の原点となった重要な作品であったといえる。論者は、呉趼人が「電術奇談」に登場する求愛自立型ヒロイン、彼女に

尽くす献身型男性、人心を操る‘傀儡師’型悪党という人物形象を強く意識して社会事象を描いた、という推察の下に、《写情小説》を解析した。

2) 「情変」原作の発見

呉趼人の絶筆となった《写情小説》「情変」*58は現在まで創作小説とされている。民国以降放却され、文化大革命終結後はじめて研究対象となったものの、社会意義のない愛情故事と否定されている。2002年に論者は、井波律子訳宣鼎「少女輕業師の恋」（原作「秦二官」）を読み、その粗筋が「情変」とほぼ同じであることを知った。「情変」は呉趼人の創作ではなく、前時代の文言短編恋愛小説「秦二官」の改作であったことがわかった*59。論者は、呉趼人がどのような意図で他作家の文言短編を白話長編小説に改作したかを熟考し、呉趼人の着眼点が男女性の逆転にあると確信した。この発見により、呉趼人の女性性への姿勢という新たな視点からの「情変」分析が可能となった。

3) 薛錦琴との邂逅

「新石頭記」は文革終結後はじめて単行本が出版され、日の目を見た作品である。作中、「張園拒俄演説会」（1902）の場面が再現されている。その演説情景は、歴史研究書『拒俄運動』に収録されている進行状況と一致した。該書に記録されている演者の姓名と照合した結果、僧侶のモデルを革命僧として知られた黄宗仰、少女のモデルを清末に脚光を浴びた実在女性薛錦琴と特定し得た。また、呉趼人自身も同日、彼らと前後して演説していたことがわかった*60。この発見は、呉趼人と革命派との接点を表している。また、薛錦琴と同座した事実の判明により、呉趼人が救国の一環としての女性性を意識する契機や、その《写情小説》創始との関連についての考察が導かれた。

4) 『二十年目睹之怪現狀』‘姉姊’のモデル

小説『二十年目睹之怪現狀』の登場人物である語り手の従姉‘姉姊’のモデルとして、呉趼人自身の大叔母を比定した。

論者は、従来否定的に評価されてきた呉趼人の《写情小説》について、1)と2)の事実を念頭において検討し再評価を試みた。3)と4)の新事実から、作者自身の女性観の原点と小説中に描かれた女性像の関連について検討した。その結果、有為の女性を畏敬する環境に育った呉趼人は、もともと女性の能力に偏見を持たなかったこと、実社会での見聞を通して、

強い女権意識が育まれたであろうこと、彼の《写情小説》には、女性解放を推進する意図と姿勢が表れていることを知った。

5)『胡宝玉』*61

該書は別名『上海三十三年艶跡』といい、清末数十年間に上海花柳界で伝説と化した実在の妓女数十名の逸話である。吳趼人が小新聞編集者として活動する中での、実際の見聞であろう。吳趼人自身は、《社会小説》と称していた*62。そこに描かれた上海の妓女の言動は、彼女たちが清末期に最も先進的な感性を備えた女性であったろうことを窺わせる。吳趼人は、胡宝玉が妓女の身の上ながら自立して生計を立て勇名を馳せた事績を埋没させてはならないと言明している。この作品は、彼が実社会に活躍する妓女を社会の中の存在と見ていたことを表している。

2《社会小説》について

1) “悪党” 実体験

英仏戦争で曾祖父の敵対した列強軍隊、父を攻撃した英仏連合軍兵士と、吳趼人が幼児から聞かされて育った呉家の体験は、侵略への抵抗と愛国を家訓とするに足るものであったといえよう。そのような環境に生い立った吳趼人は、長じて拒俄救国運動に熱意を注いだ。しかし、吳趼人の救国言論活動は梁鼎芬の言論弾圧に遭い頓挫、“小説による警世を志す”に至った。吳趼人の実体験を記している『二十年目睹之怪現狀』には、特筆して取り上げられている人物が二人ある。

一人は梁鼎芬で、『二十年目睹之怪現狀』は数回にわたり梁鼎芬を取り上げている*63。『二十年目睹之怪現狀』連載を開始した雑誌『新小説』の同じ第8号(1903年10月5日)に発表した諷刺笑話「新笑史」(全11則中の<梁鼎芬蒙蔽張之洞>、<梁鼎芬被窘>二則)と同10号(1904年9月4日)「新笑林広記」(全7則中の<排満党の実行政策>)でも梁鼎芬を取り上げ、実名で槍玉に挙げている*63。『新石頭記』(第18回―第20回)にも梁鼎芬を登場させ、‘暗黒’、‘野蛮’社会の象徴としている。作中に描かれた梁鼎芬は、すべて権官に媚び名誉欲、金銭欲の強い滑稽で破廉恥な人物である。

もう一人は、第83回に登場する、日清戦争時に平壤で日本軍と対峙した司令官に交戦前の退却を進言、日清戦争の敗戦を招き、五十万銀を詐取した陸觀察である。陸觀察は大金で難題を請け負う策士と設定されている。モデルは当時の直隸総督幕僚、民国に入ってから袁世凱

に敵対した革命家宋教仁の暗殺を請け負った洪述祖であるという。吳趼人は例外的に回末の地の文に長い注記を付し、‘その国を誤った罪となると、できれば天下の人とともにその肉を食らいたいものだ！（至其誤国之罪，則吾愿率天下人共食其肉矣！ p697）’と怒りを露にした評を付している。

両者の共通点は、人の心の罦絡に長け姦計を弄する点、私利を図り国益を損なった点、権勢財貨に貪欲な点である。彼が、とりわけ“悪”とみなしていたのは、人心を操って権力を握り、私利を優先し、国益を損なう行為であったといえる。吳趼人は、梁鼎芬や洪述祖等についての見聞を原体験に、“国益を顧みず自身の栄達と拝金に腐心する”という悪党像を小説中に具現させたのであろう。

2) 小説中の小悪党－成り上がり志向者と人心操縦者

吳趼人の小説に登場する悪党像は、概ね下級役人や下層民或いは下層出身の小悪党である。その所業は国策施政に関わる巨悪ではなく日常の些細な悪事の積み重ねである。木っ端役人や人夫、雑役が裏口工作の紐帯を務めて政界の人事に関与し、外資と国内産業の間に暗躍して稼ぐといった情景は、従来の中国小説に描かれてこなかった。吳趼人は、そのような国家の衰勢と清廷の官位売り出し政策を背景に清末に現出した新現象を具に捉え、小説中に描き出した最初の作家であると思われる。吳趼人の描いた小悪党は成り上がり志向者、人心操縦者の二種に大別される。いずれの悪事も拝金行為と不可分の関係にあり、些細な行為が国事を疲弊させ、国民の生活や人情良識を破綻させる。その担い手が下々の輕輩、貧民である点に、清末の社会状況、吳趼人の小説の特質が表れているといえる。

論者は1) 2) の観点の下に、悪党ばかり登場する五篇の《社会小説》について、分析を試みた。吳趼人の《社会小説》は従来から『二十年目睹之怪現狀』を除いてほとんど論じられたことがない。論者は《社会小説》に描かれている悪党像について、下層民出身の小悪党という視点からの考察を行なった。

3) 『新石頭記』の原材料

《理想小説》『新石頭記』に描かれた動植物、機器を分析した結果、主要な原材料がジュール・ヴェルヌ『海底二万里』であることが判明した。亡国の民に同情し、未知の世界を空想するヴェルヌの作品は、吳趼人の救国及び理想世界探求の意欲を触発したであろう。その事実、『新石頭記』の基幹思想が列強の侵略、民族迫害、植民地主義への反対であったこ

とを示している。その点に基づき、従来、非現実的かつ守旧思想を表すという批難を受けていた『新石頭記』の再検討を試みた。

4) 胡適との関係

論者は偶々『胡適之日記』を眺めていて、彼が 1910 年に生前の吳趼人を訪問し面談した記述を見つけた*64。この発見により当時、吳趼人が胡適らと交流をもち、その周辺にいる上海の革命派青年と接触していたことが明らかになった。その事実は、「上海遊驂録」への否定評価に対する反証となると思われる。

3) と 4) の新事実に拠って検討することで、思想面において解放後に徹底して批判された二篇の小説「上海遊驂録」及び『新石頭記』についての再考が可能となった。論者は、従来、吳趼人の失意に伴う‘厭世’から陥った思想的‘落伍’の表れと評されてきた二作品の“政治的、思想的”再検討を試みた。

註

1 山西人民出版社（1981.6）

2 百花洲文芸出版社（200.4）

3 最も著名な刊行物は 1857 年発刊の『六合叢談』である。1868 年 9 月 5 日、週刊『中国教会新報』となり、さらに『教会新報』と改名、第 301 巻まで発行された。1874 年月刊『万国公報』と改名、広学界機関報として 1907 年 12 月まで続き、第 750 巻第 237 冊を出して停刊した。

4 『清末小説』第 13 号（清末小説研究会 1990.12. 1）

5 「清末民初小説のふたこぶラクダ」『野草』42 号 中国文芸研究会 1988.8.1 p32－33）。

6 中村忠行には 8 編の論稿が認められる。樽本照雄には『初期商務印書館員研究』（清末小説研究会 2004.5.1）『商務印書館員研究論集』（清末小説研究会 2006.12.15）の専著がある。

7 「商務印書館と夏瑞芳」『清末小説研究』第 4 号 1980.12.1 p474）

8 張元済(1867-1959)、字菊生。浙江省海鹽の人。1892 年進士に合格。1892 年通芸学堂を設立。1898 年光緒帝に謁見、上書建議したが戊戌政変により罷免、学堂は閉鎖される。上海で「南洋公学」訳書院院長を務め『外交報』を創刊。1901 年より商務印書館の経営に参画する。（『張元済年譜長編』2011.1 上海交通大学出版社）

9 蔡元培（1868-1940）、字鶴卿。浙江省紹興の人。1890 年進士に合格。1892 年翰林院庶吉士。1894 年編集に任じられた。1898 年変法維新運動に共感し、1901 年辛丑条約締結後は革命思想に傾注し、章炳麟らと共に「中国教

- 育会」、「愛国学社」を設立運営した。1904 年「光復会」を組織、中国革命同盟会に入会した。1907 年ドイツに留学し哲学、心理学を学んだ。辛亥革命後は教育総長に任じられ、教育関係、国民党関係の要職を歴任した。(孫常煒編著『蔡元培先生年譜伝記』国史館 中華民國 74 年 6 月)
- 10 嚴復(1854-1921)福建省侯官の人。福州船政学堂に学ぶ。1877 年英国に留学。1897 年天津『国聞報』創刊、変法を唱える。1902 年、京師大学堂編訳局総弁。1905 年馬相伯とともに復旦公学を開学。『天演論』、『原富』等を翻訳、商務印書館より『嚴訳名著叢刊』を刊行した。
- 11 鄭孝胥(1860-1938)福建省閩侯県人。字、蘇戡。号太夷、海藏。1882 年挙人に合格。1891 年日本東京副領事、1893 年神戸、大阪領事。日清戦争で帰国、張之洞の幕下に入る。京漢鉄道總弁を勤める。
- 12 蔣維喬(1843-1958)、字竹庄。江蘇省武進の貧窮文人家庭出身。父親は弱年で学業を中断し肉体労働で一家を養った。独学で秀才に合格、郷試に受からなかったが、成績優秀で南菁書院に入り古典を習得した。1901 年、高等学堂に改組した同書院で新学を学び、革命思想に心酔した。1903 年、蔡元培の要請で章炳麟とともに「中国教育会」、「愛国学社」に参加した。辛亥以後は教育部や大学で教育事業に携わりながら、仏教研究に傾倒した。(『民国人物誌』第 5 卷)
- 13 中村忠行「清末文学研究時評」『中国文芸研究会会報』第 54 号 1985.7.30 p4-6)
- 14 『繡像小説』第 1 期(1903)から 72 期(1906)に連載。第 39 回まで李伯元、40-42 回を吳趸人、43 回を欧陽鉅元が続作し中断)
- 15 生卒年未詳。“上海で酒色に溺れ落魄し性病で客死”という通説がある。樽本照雄「欧陽鉅元の落魄伝説」(『清末小説』第 16 号清末小説研究会 1993.12.1)によると(1882?-1907?)。本名欧陽淦、鉅源は字、鉅元、巨元とも記す。筆名茂苑惜秋生。落魄の通説は誤りであるという。
- 16 『繡像小説』の刊行時期『中国文芸研究会会報』第 55 号 1985.9.30 p6)
- 17 『繡像小説』第 6 期—20 期に連載、未完。
- 18 生卒年未詳、筆名は憂患余生。
- 19 郭長海「吳趸人雑俎」『清末小説』第 16 号清末小説研究会 1993.12.1)
- 20 「商務印書館と夏瑞芳」『清末小説研究』第 4 号 1980.12.1 p118)
- 21 曾少卿あて書信は 1905 年 7 月 15 日を最初に全三通残っている。『吳趸人全集』第 8 卷所収。
- 22 中国社会科学院經濟研究所主編 上海市工商行政管理局 上海市工商行政管理局 上海市第一機電工業局 機器工業史料組編『上海民族機器工業』(中華書局 1966 年 2 月)
- 23 「近十年之怪現狀」(20回未完)は別名を<最近社会醜聞史>という。1909(宣統元)年から『中外日報』に不定期で連載。1910(宣統二)年単行本で出版。『吳趸人全集』第三巻版を使用。

- 24 拙稿「小説家吳趼人の出発点」（関西大学『中国文学紀要』第15号 1994年3月）に同記事を発見として引用、紹介した。しかし発表後に王立興が、「吳趼人与『漢口日報』—对新發現的一組吳趼人材料的探討」（『中国近代文学考論』1992.11 南京大学出版社）にすでに紹介していたことを知った。内容は異なるので、発見の謂いと記事引用部分のみ削除して収録した。『蘇報』記事は、中国国民党中央委员会党史史料編纂委員会藏本『蘇報』中華民國57年9月1日影印初版中央文物供應社版による。2015年3月改稿
- 25 張之洞(1837-1909)字孝達。直隸南皮（現河北省）の人。15歳で挙人に合格。1853年より十年間、貴州知府の父や河南巡撫の従兄に随い太平軍、捻軍鎮圧に加わる。1863年進士に合格、翰林院編修。1881年山西巡撫、英国伝教師李提摩太 Richard, Timothy）を顧問に科学技術の知識を得、洋務局を設立して人材を求め、外国兵器を買い軍備を整えた。1884年兩広総督。中法戦争を機に洋務色を強めた。湖広総督、兩江総督を歴任し、1907年軍機大臣。湖北に二十数年余、新政を敷き、鉄鋼業殖産、新式軍隊養成、新式学堂創設に勤めた。
- 26 汪康年(1860-1911)。字穰卿。浙江省錢塘の人。光緒18年の進士。張之洞と懇意で洋務官僚の庇護下に新聞事業に携わった。『強学報』から始まり『事務報』、『昌言報』、『中外日報』、『趨言報』等を創刊経営した。1897年譚嗣同、梁啓超らと「戒纏足会」を発起する。1901年、1903年に「張園拒俄演説会」を招集する。（汪詒年編『汪穰卿（康年）先生伝記・遺文』（文海出版社 民国27年7月）/沈雲龍『現代政治人物述評』「梁啓超与汪康年」（文海出版社 民国27年7月）
- 27 梁啓超(1873-1929)、字卓如、号任公。広東省新会出身。1895年より康有為とともに政治改良運動に携わった。戊戌政変以後、『新小説』を創刊し小説界革命を主唱した。
- 28 章炳麟(1869-1936)、号太炎。浙江省余杭県出身。俞越の門下に学び經学、史学、文学、音韻学の造詣深い国学者として知られた。反清民族主義思想を醸成し、1896年『事務報』創刊。戊戌政変以後台湾、日本に逃れ孫文と知り合う。1903年「愛国学社」教員、『蘇報』論客となる。（王雲五主編 章炳麟撰『民国章太炎先生炳麟自訂年譜』（台湾商務印書館中華民國69年7月）
- 29 黄遵憲(1848-1905)、字公度。広東省嘉應州の人。光緒2(1876)年の挙人。1877年10月駐日本外交師団で来日。『日本国志』完成。1882年米国カリフォルニア総領事。華工の待遇改善に尽力。1895年『事務報』創刊。
- 30 「上海強学会章程」（『強学報』創刊号 1896年1月12日）
『強学報』影印説明（『強学会・事務報』中華書局影印版 1991年9月）
- 31 『事務報』1896年8月創刊。発起人は黄遵憲、汪康年、梁啓超らで、変法維新を鼓吹した。
- 32 その具体的情況は、北岡正子「留学期鲁迅関連史料探索」十四～二十回（『中国文芸研究会 会報』82～84、92、95～97号）に詳しい。その中で張之洞は「清末政治史上における「中体西用論の立場に立つ開明派」（18回）」と位置付けられている。（中国文芸研究会 1988.8-10、1989.6、1989.9-10）
- 33 『昌言報』影印説明（中華書局影印版『昌言報』）

34『清議報』1898年12月日本横浜で創刊出版。梁啓超主編。戊戌政変後、保皇会を設立した康有為とともに君主立憲を宣伝した。1901年12月停刊。

35『中外日報』1898年5月創刊。汪康年が洋務派官僚の支持下に刊行。

36 端方(1861-1911)1901年湖北巡撫、1903年湖広総督代行、張之洞と共に梁鼎芬の後ろ盾となる。張之洞の意を受けて、小学校や師範学校を設立、湖北に中国最初の幼稚園や図書館を作った(『清史稿』列伝259<端方>)。

37 李鴻章(1823-1901)安徽省合肥の人。1839年の進士。曾國藩の幕下に入り軍務に携わる。1870年直隸総督、北洋大臣。(『清史稿』列伝198<李鴻章>)。

38 郭廷以編著『近代中国史事日誌』(中華書局1987.5)

39『蘇報』1903年5月6日

40「<各省記事・湖北>彙記梁鼎芬近状」(『蘇報』1903年5月21日)

「革除排俄学生」「一門奴隸」(『国民日日報』1903年7月)

「梁鼎芬未載之梁鼎芬」(『蘇報』1903年7月6日)

「湖北学生之危機」(『国民日日報』1903年9月29日)

41『蘇報』の論客鄒容(1885-1905)が1903年5月革命宣伝冊子「革命軍」を出版、『蘇報』は誌面に紹介し該書を宣伝した。6月官憲は、章炳麟と趙容を逮捕拘留し『蘇報』館を封鎖した。『蘇報』事件

42 光緒28(1902)年、蔡元培、葉瀚、蔣維喬、鍾觀光、黃宗迎らは教科書、叢報を刊行し文字による革命を鼓吹しようと、「中国教育会」を結成した。章炳麟、黃宗迎、蔡元培、吳敬恒らはさらに学校を自主運営する目的で「愛国学社」を創立した。(孫常煒編著『蔡元培先生年譜伝記』国史館1985年)/方漢奇『中国近代報刊史』(人民出版社1981年6月)p233/湯志鈞編『章太炎年譜長編』(中華書局1979年10月)/馮自由「中国教育会及愛国学社」(『革命逸史』二集所収 台湾商務印書館1943年所収)

43 柳詒子らを中心に民族精神発揚を意図して結成された文芸組織。1910年詩文雑誌『南社』出版。辛亥革命前に4期出版。辛亥後22期出版。社友の多くは「中国革命同盟会」会員であった。

44 周桂笙(1873-1926)、上海の人。名は樹奎、字桂笙、号新庵、莘庵。筆名知新室主人。幼時、上海広方言館で学んだ後、上海中法学堂に学び、フランス語を専攻し、英語も学んだ。卒業後、天津電報局、上海英商怡和輪船会社に勤めながら、西欧小説を翻訳し、『采風報』、『寓言報』、『新小説』、『月月小説』等に発表した。外国小説翻訳草創期からの翻訳者で、社会貢献、原作からの翻訳、原典の明記、白話での翻訳等を主唱した(鄭逸梅『南社叢談』上海人民出版社1981年2月p78)。

楊世驥は「周桂笙」で以下のように証言している

わが国に初めて西洋文学を紹介した人を話題にすると人はみな林紓だと言い、周桂笙が林紓より早かったとは夢にも思わない。それが今となってはもはや記憶する者もない。周桂笙の翻訳は質量では林紓に及ばないが、

三つの点で彼を忘れることはできない。第一に、彼が、わが国で最初に西洋文学の素晴らしさを虚心に受け入れたのだ。彼は林紓のようにディッケンズの小説が好いと言い立てはしなかったが、確かに我が国の太史公に似たところがあると言った。彼は欧米文学自体の長所を率直に認めることができたのだ。第二に、その翻訳した小説は多くはないがすべて身近な文言と白話を用いた。中国に初めて白話で西洋文学を紹介したのは、おそらく彼であつたと言ってよい。第三に、彼の翻訳には、本当にその時代に新文化を輸入しようとする抱負があつた。何らかの成果が目に見えるわけではないが、その志は称賛に値する。(中略)いわゆる“偵探小説”の中国への導入に最も功あつたのは彼である。“偵探小説”の名称を成立させたのも彼である。(p12-13)

大家但谈到我国最早介绍西洋文学的人，都认定是林紓，殊不知周桂笙比林紓更早，可是现在已不复为人所不记忆了。周桂笙的翻译工作在质量方面赶不上林紓，但有三事使我们不能忘怀於他：第一他是我国最早能虚心接受西洋文学的特长的，他不像林紓一样，要说迭更司的小说好，必说其有似我国的太史公，他是能爽快地承认欧美文学本身的优点的。第二，他翻译的小说虽不多，但大抵都是以浅近的文言和白话为工具，中国最早用白话介绍西洋文字的人，恐怕要算他。第三，他的翻译工作，在当日實抱有一种输入新文化的企图，虽然没有什么成绩表现，他的一番志愿值得表彰的。(中略) 输入所谓「偵探小说」到中国来的，他却是最力的一人。「偵探小说」的名词由他而成立，

(楊世驥「周桂笙」原載『文苑談往』第一集 中華書局 1946 年原刊。華世出版社 1978 年影印版を使用)

45 楊天石 王学庄編『拒俄運動 1901-1905』(中国社会科学出版社 1979.6)

46 章士釗(1881-1973)字行嚴。湖南省長沙人。法学者、詩、書法、桐城派古文家として知られる。1903 年上海『蘇報』を編集、反満民族革命を鼓舞した。1905 年日本に、1908 年英国に留学。民国成立後『民立報』主筆。袁世凱討伐軍に参加。1924 年段祺瑞政権下で司法総長兼教育長。『庚寅週刊』を発行し白話文に反対、魯迅と筆戦を繰り広げた。抗日戦時、上海租界に留まり 1949 年政府代表として中共と和議を進め、決裂後、北京に留まり全国委員会委員を歴任。1964 年より中共全国人民代表大会湖南代表。(劉紹唐主編『民国人物小伝』第二冊伝記文学雅誌社 1977)

47 吳敬恒(1865-1953)字稚暉。江蘇省武進県人。1891 年人合格。1895 年会試に落ち北京に滞在、康有為公車上書に連名する。1897 年天津北洋大学教員、1898 年南洋公学教員、翌年学長。1902 年自費留学希望生を引率して来日するが、駐日公使蔡鈞の不許可、送還措置に遭い、抗議して海上に投身、救出される。蔡元培が上海に連れ帰り、中国教育会に参加、愛国学社を設立、南洋公学退学生を收容する。1905 年中国革命同盟会入会。1913 年国語読音統一会議長。第二次革命失敗後ロンドンに入学。1915 年‘勤工儉学’を提唱。1916 年帰国、国語統一運動、大学の国外設立計画に携わる。1925 年中国国民党政治会議委員。国共決裂後、台湾にわたり、蒋介石に重用された。(『民国人物小伝』第一冊)

48 蔣慎吾「蘇報案始末」(注 50『上海研究資料続集』所収)

- 49 馮自由『革命逸史』第三週「吳稚暉述上海蘇報案記事」(台湾商務印書館民国 54 年 10 月)
- 50 蔣維喬「中国教育界の回憶」(＜蘇報案始末＞附録一)(初出『東方雜誌』33 卷 1 号 1936.1.1 孫常緯編著『上海研究資料統集』民国 62 年 6 月 25 日所収 国史館民国 74 年 6 月)
- 51 「蔣維喬宛書簡」(『上海研究資料統集』所収)
- 52 吳稚暉「回憶蔣竹莊先生之回憶」(『上海研究資料統集』所収)
- 53 「上海教育会与愛国学社之衝突」『浙江潮』第 6 期 1903.6.20<時評>内国部)
- 54 同 46
- 55 「黄宗迎」(1865-1921)江蘇省常熟人。別名中央、烏目山僧。幼時より詩、古文、仏典まで涉猟し出家の思いに駆られる。1884 年清涼寺で受戒、仏教を信奉するユダヤ富商ハルドーン(哈同)夫人羅伽陵の要請で仏教講座を開講。1902 年章炳麟、蔡元培らと「中国教育会」設立、次いで「愛国学社」を開学。『蘇報』事件の後、上海に一人留まり逮捕者救出に努めたが果たせず、日本に避難した。孫文のホノルル行き旅費や雑誌『江蘇』の出版資金を援助した。1904 年帰国しハルドーン夫妻の庇護下に 日本宏教書院仏典の重刻に専念した。民国成立後は俗事を謝絶し、1914 年江天寺主座、1920 年栖霞寺住持に就任した。(黄季陸主編『革命人物誌』第五集 中央文物供应社 1970/『中華民国史辞典』上海人民出版社 1991.8/馮自由『革命逸史』第三週「烏目山人黄宗迎」(台湾商務印書館民国 54 年 10 月)
- 56 文革終結後に次の二種類の吳趼人全集が出版された。①『我佛山人文集』第 1-8 卷(花城出版社 1988-1989 年)、②『吳趼人全集』第 1-10 卷(北方文芸出版社 1998 年)。本論は主として②に拠った。
- 57 拙稿「恋愛描写と男女のあり方—清末民初の短編小説から」(『一海・太田退休記念中国学論集(2001.4.30) 翠書房』所収)
- 58 「情変」(8 回未完)は 1910(宣統二)年『輿論時事報』に連載。『吳趼人全集』第 5 巻版を使用。
- 59 拙稿「吳趼人「情変」の原作」『清末小説から』第 62 号(清末小説研究会 2001.7.1)。偶然井波律子の「秦二官」翻訳を読み、その内容が「情変」と全く同じであることに驚き、「情変」が創作ではなく、翻案であったことを知った。(宣鼎「秦二官」井波律子訳「少女軽業師の恋」『ミステリマガジン』1993 年 8 月号掲載)
- 60 拙稿「清国の少女傑薛錦琴」(『中国文芸研究会会報』172 号 1996.2.29)
- 61 『胡宝玉』別名『上海三十年艶跡』(上海楽群書局 1906 年)
- 62 「近十年之怪現状」<自序>(1909)
- 63 『二十年目睹之怪現状』[第 24 回]

広東の梁という翰林は閩浙総督何小宋の親戚として威勢を張り、福州の役人がみな挨拶金を贈った。ある日、贈った金額が少ないと梁から突き返された役人が、何に訴えたので、今まで贈られた金を全部返させられるはめになる。また彼は、李鴻章を弾劾し、逆に翰林を剥奪され五級降格される。

[第 61 回]

上海に来た‘我’と文述農は、矢是園を散策していて 30 余歳の濃い髭を蓄えた男に出あった。それが兩広総督となった李鴻章を避けて上海珠蕊書院に来ている梁でいかにも見かけ倒しの流浪人という感じだった。

[第 101 回]

温月江が最も好むのは人の師となることで入門を願い出る者は拒まず、進物の多寡を情誼の厚薄とする。最も憎むのは舶来品で自分ばかりか人の使うのも許さない。ある日、門弟が入門に際して贈った進物が洋銀百元であったことを指摘されてうろたえる。以来、人は彼を胡散臭い人物と見ているが、本人は自分の学問に及ぶ者はないと鼻にかけている。鼻にかければかけるほど臭いので、人は彼に贈り名を奉り、梁頂糞と呼んだ。どれほど高くとも梁程度、どれほど臭くても糞程度という意味である。

[第 101 回－第 102 回]

温月江が会試で北京に滞在中、彼の妻と翰林の武香楼が私通する。現場を押えた温月江は、間男にその日受けた試験の答案の草稿を読ませて合格の確約を取り付け、進士に合格する。人は‘温月江甘んじて緑帽子をかぶる’と囁すが、良い対の句が出ない。温には涼、月には星、江には海の字が良いのだが。

「新笑林広記」＜梁鼎芬蒙蔽張之洞＞

梁鼎芬が兩湖書院で講義を担当していた時、張之洞のもとに拝謁に赴くと、張は日を定め学生を試験しに赴くと約束した。梁は帰ると急ぎ出題し学生たちに作文させ、自ら添削して完成させたが清書させなかった。約束の日に張が来ると、梁は酒を用意してもてなし、張に出題をもとめると、張は梁に出題させた。そこで梁は前に出題したのを題とし、学生たちは初めて梁の真意を悟った。そこで、以前に添削された文章を清書した。答案が提出された時、酒はようやく数回廻ったばかりであった。張は非常に喜んで言った。‘節庵翁の教育の力に及ぶものはない。’

梁鼎芬主讲两湖书院时,一日往谒张之洞,张约以某日当到院考试诸生。梁归,急出题目,命诸生为文,亲为改削之,至臻完善,而誉正。至日,张至,梁置酒待之,请张命题。张转以命梁。梁即以前日所命之题为题。诸生始会梁意,即以其改就者誉正,缴卷时酒才数巡也。张大喜曰:“非节翁教育之力不及也。” p323

＜梁鼎芬被窘＞

癸卯（1903）三、四月の間、清露密約の事件が暴かれ、日本留学生が義勇隊を組みロシアを排斥した。事件が国内に知られると、湖北の各学生も授業を辞めて集会をし 3 月 20 日（原文：旧暦四月十七日）兩湖書院および自強学堂、武備学堂の各学生は武三仏閣前の空き地に集まり、激昂して演説した。梁鼎芬はちょうど武昌塩法道代行で、たまたま輿に乗り先払いして通りかかり、輿の中で冠を脱ぎ掌に置き銅縁の大眼鏡を架けると、眼鏡の中にこの情景が現れて、号令をかけ輿を止め何事かと聞いた。従者は、学生が東三省の事件で集会をしていると報告した。梁は怒って言った。‘みなに騒ぎを起こさせるな。速やかに学堂に帰らせよ。’ 一群の学生

はこれを聞くと声をそろえてどなった。駕籠かきは仰天し、学生が殴りかかってくるかと輿を担ぎすつ飛んで逃げた。冠は輿の外に転がり、従僕は入り乱れて列は混乱し、梁もひどくうろたえていた。(後略)

癸卯三、四月間、中俄密約事发、日本留学生会议編义勇队拒俄。事闻于内地、湖北各学生亦停课会议、于四月十七日、两湖书院及自强、武备各生集于武昌三佛阁前空场内演说利害。梁鼎芬时署武昌盐法道、适乘輿呵殿而过、在輿中自脱其冠、置扶手板上。架铜边大眼镜、就眼镜中见此情形、喝令停輿、问何事。从者告以学生会议东三省事。梁怒曰：“叫他们不要胡闹、快回学堂去！”众学生闻之、齐声一哄。輿夫大骇、疑学生之将来殴也、舁之狂奔、冠坠輿外、仆从错乱、不复成列、梁亦大错愕。P323-324

<排滿党の実行政策>

請安の礼は経伝には見えず、滿人だけにあるもので漢民族にはないものである。本朝が天下をとってより滿漢は雑居し、かくて漢人はその習慣に染まった。官界ではとりわけ盛んでしかも属吏が高官に拝謁する時の礼となっている。実は滿人は同輩同士が会った時も互いに膝を曲げて請安をする。上官に仕える礼でないのだから、おべっかの仕種でもない。久しい間にどうしたことが阿諛追従の技となってしまった。梁鼎芬はもとさらにこれを遺憾とし、武昌府長官を拝命した時、これを廃止するよう提議した。総督巡撫は心服し布政司按察司は畏服した。属吏については推して知るべしであろう。論者が言うに‘請安は滿州の礼である。二、三百年このかた梁鼎芬の排除により、はじめて一朝にして我が漢民族の官たる威儀を回復した。これはまさしく排滿政策を実行できたということか。’

請安之礼、不見经传、惟滿人有之、汉族所无也。本朝定鼎后、滿汉杂处、汉人遂染其习、官场尤盛、且以为僚属见长官之礼。其实滿人平辈相见、亦各屈一膝、互相請安、既非事上之礼、亦非谄媚行径也。久之、不知如何、遂以此为卑劣。梁鼎芬尤不以为然、被命放武昌府、倡议革去之。督抚降心、两司屏息、僚属概可想矣。论者曰：“請安、滿礼也、二三百年來、方得梁鼎芬革去之、一旦还我汉官威仪、是真能实行排滿政策者。” p337

64 拙稿「1910年上海一胡適と吳趼人」(『火鍋子』第7号 1993.4.10)

第一章 吳趼人作品の創作手法上における特性

第一節 素材と表現面の創意工夫

吳趼人は小説の主題、構成に創意工夫を凝らした。その作品の多くは中国小説初の領域に属している。その作家活動に関わる背景、事件と主な著作を拒俄運動に関った1901年の時点から纏めてみると以下のようなになる。

1901(光緒二十七年)年

【3月 【「張園拒俄演説会」第二次集会で演説、薛錦琴に遇う。】

1902（光緒二十八）年

【4月『漢口日報』編集人に招聘される。】

【11月梁啓超が‘小説界革命’を標榜し雑誌『新小説』を発刊。】

時事政論集『吳趼人哭』を手跡出版する。

1903（光緒二十九）年

【5月『漢口日報』が官弁に買収され辞職、上海に戻り、小説家に転身する。】

【6月『蘇報』事件】

【10月より『新小説』に作品を発表、専業作家となる。】

10月『二十年目睹之怪現狀』（－1906.1第45回まで連載、以後全108回を執筆、1911.1まで八巻に分けて出版）、「痛史」（－1906.1未完）、「電術奇談」（－1905.7）、「新笑史」（－1905.12）同時連載開始。

1904（光緒三十）年

【2月日露戦争勃発する。】

12月「九命奇冤」（－1906.1）、「新笑林広記」連載開始（－1905.11）。

1905（光緒三十一年）年【8月「中国同盟会」成立。9月科挙が廃止となる。】

【娘吳錚錚（1905.3.28-1971.1.4）誕生。】

【春漢口で米人経営の『蘇報』中文版主筆に就く。】

【7月辞職して上海に帰り反美華工禁約運動に参加する。】

1月「瞎騙奇聞」連載開始（－1905.3）

9月『新石頭記』連載開始（－12月第13回まで連載、1908.10全40回単行出版）。

1906（光緒三十二）年

【9月清朝中央官制改革、立憲政治を予告する。】

【11月『月月小説』発刊。周桂笙とともに編集執筆に携る。】

4月『中国偵探案』出版。

9月「糊塗世界」、『胡宝玉』出版。

10月『恨海』出版。

11月「俏皮話」（－1908.9）、「兩晋演義」連載開始（－1907.11未完）。

11月「預備立憲」、「慶祝立憲」12月「大改革」、「義盜記」（いずれも短編小説）

1907（光緒三十三）年

【＜中国革命同盟会＞各地で起義】

【冬同郷有志で広東旅学（広志小学校）を組織】

1 月 短編小説「黒籍冤魂」

2 月 短編小説「快昇官」、「立憲万歳」「平歩青雲」

3 月「上海遊藝録」連載開始（－5 月）。

4 月「賈島西鼓詞・序」発表。『研塵剩墨』（－1908.12）

5 月「曾芳四伝奇」連載開始（－10 月未完）。短編小説「査功課」

11 月「劫余灰」連載開始（－1909.12）。

11 月「発財秘訣」連載開始（－1908.3）。「剖心記」、「雲南野乘」（-1908）、

短編小説「人鏡学社鬼哭伝」

12 月戯曲「鄒烈士殉路」連載開始（1908. 1）

1908（光緒三十四）年

【10 月清朝＜憲法大綱＞発表、9 年後の国会開設を予告。11 月西太后、光緒帝没。】

【12 月『月月小説』24 期を出して停刊。】

【2 月広志小学校を開学、運営する。】

1 月 短編小説「無理取鬧之西遊記」

2 月 短編小説「光緒万年」

10 月『新石頭記』全 40 回単行出版

1909（光緒三十五）年

【娘に纏足を禁じ天足会（纏足しない天然の足を奨励する会）に入会させる。】

春「近十年之怪現状」発表（未完）。

10 月 短編小説「中霤奇鬼記」

12 月「劫余灰」連載終了

1910（宣統二）年

春「我仏山人滑稽談」執筆（－9 月）

「近十年之怪現状」（『絵図最近社会醜聞史』）出版

3 月「我仏山人札記小説」連載（－6 月）

6 月「情変」連載開始（未完）

10 月 21 日喘息の発作で急死する。

絶筆「情変」、年内に出版。

1911（宣統三）年1月『二十年目睹之怪現狀』（108回）全巻の出版が完了する。同月に『跼塵筆記』も出版される。いずれも死後の出版である。急死した作家の未完作品刊行が読者に俟たれ、出版社が遺文の収集刊行に努める現代の情景に近い。吳趼人が辛亥革命前夜の清末において最後まで“売れる”作家であったことを窺わせる。

吳趼人はこのように常に複数の長篇小説を並行して連載し、随筆、笑話、戯曲と多彩、多量の執筆活動を行った。とりわけ小説において、創意工夫を凝らし独自の作品作りに努めたようである。吳趼人の小説に見られる様式上の創始や資料価値については、以前から指摘されてきた。近年、欧陽健や付建舟をはじめとする中国の研究者は作品内容を検討し、さらに幾つもの中国小説史上初めての試みを挙げて検証している。それらの成果をまとめると、以下の如くとなる。

【《社会小説》】

吳趼人は『新小説』誌上に《社会小説》の角書を冠して『二十年目睹之怪現狀』を発表した。『二十年目睹之怪現狀』は中国小説史上初めて《社会小説》の名を冠した小説である*1。

【‘○現狀’ というタイトル】

『二十年目睹之怪現狀』は清末に大量に書かれた‘○○現狀’という題名を冠する小説の嚆矢でもある*2。

【一人称】

『二十年目睹之怪現狀』は、中国小説史上はじめて一人称の進行方式を採用した*3。

【‘資本主義商界’の記事】

『二十年目睹之怪現狀』には、中国小説史上初めて‘資本主義商界’の記事*4が描きこまれた。

【《写情小説》】

1906年に《写情小説》の角書を冠して発表した『恨海』は、中国小説史上最初の創作《写情小説》である*5。吳趼人は作品冒頭に‘写情’の定義と意義を挙げて執筆の決意を表明している。

【《歴史小説》】

《歴史小説》に新たな意義付けをした*6。

【《翻新小説》】

『新石頭記』は昔の書名と人物名を踏襲して新しい話を描く所謂《翻新小説》（阿英は《擬旧小説》と呼ぶ）の先駆けである*7。

【《笑話小説》】

《笑話小説》に新境地を拓いた*8。

【民族資本家形象】『二十年目睹之怪現狀』 吳繼之は、いわゆる紳商出身の民族資本家形象（官僚地主から資産階級に転身した人物）の小説における最も早い出現である*9

【官人の商人への転身】

『二十年目睹之怪現狀』は、地主階層官僚経験者いわゆる郷紳階層の起業、実業界への意図的転身を描いている。管見によれば、官界と絶縁したうえで商人に転身する士大夫という新たな階層が小説中に登場したのは、おそらく中国小説史上『二十年目睹之怪現狀』が最初であろうと思われる。

【業界内部告発記事】

管見によれば、『二十年目睹之怪現狀』に記された江南製造局の裏話（第28、第50回）、「発財秘訣」*10に記された茶間屋が生産業者から収奪する実態（第8回）などは吳趼人の実体験に裏付けされている。おそらく中国小説史上初めての就労経験者からの業界告発記事であろう。

【‘民族資本機器工業主’】

『二十年目睹之怪現狀』に、中国における‘民族資本機器工業主’に関するおそらく最も早い記録証言が成された*11。『二十年目睹之怪現狀』に登場する発昌機器工廠は実在した民族資本工場で、作中の工場主方佚蘆のモデルは実際の工場主方逸侶である。民族資本工業の小説中における初めての記載であり、歴史上にも貴重な記録を残した。

【商標訴訟の記事】

『二十年目睹之怪現狀』に中国小説史上初めて商標訴訟の記事が描きこまれた*12。

【悪人ばかりの小説】

「瞎騙奇聞」（1905）、「糊塗世界」（1906）、「発財秘訣」三篇の中心人物はみな社会倫理に悖る悪行を処世の業としている。管見によれば“登場人物のほとんどが（非政治性）悪人”、“悪事の描写が主眼”という設定の小説は中国小説史上初めての試みと思われる*13。

このように吳趼人は素材面、方法面において中国小説史に多くの新たな領域を開拓した。

特に政治社会の腐敗愚劣を糾す《社会小説》と未婚の女性の恋情ひいては女性としての幸福、生き方を問う《写情小説》は、彼の創始以後、清末小説諸作品の主流ジャンルとなった。その点においても彼は清末小説を牽引する作家であったといえる。

第二節 ジャンル開拓―《社会小説》、《写情小説》の創始

上述の如く、中国小説史上初めての主題や方法を取り上げ、新たな視点で作品世界を構築したことが、吳趸人の作品に顕れた特性として指摘される。彼が最も多くの作品を描き、影響を及ぼした領域は、政治社会の汚濁を糾明した《社会小説》、女性の生き方を探求した《写情小説》である。

既述の如く吳趸人は、1903（光緒二十九年）年4月に『漢口日報』を辞職、10月から、雑誌『新小説』に連載開始、専業作家に転じた。以来、女性が主題となる《写情小説》と悪党が主題となる《社会小説》、両系列の作品を、毎年同時ないし交互に発表連載した。《社会小説》、《写情小説》の期日と内容、その登場人物、主題を取りあげて、年代順に並べてみると以下ようになる（《》内の表記は連載当時の但し書き、）。

1903（光緒二十九年）年10月《社会小説》『二十年目睹之怪現状』、同じく10月に《写情小説》「電術奇談」の連載を開始した。

① 《社会小説》『二十年目睹之怪現状』（1903~1911.1）

《社会小説》と銘打った小説の嚆矢。第一回で‘九死一生’と名のる語り手の‘私’は‘九死に一生を得て’きた半生を振り返り清末社会を‘魑魅魍魎’、‘豺狼虎豹’跳梁する世界であったと回顧している。十七歳で上海へ世過ぎに出て早々に‘九死一生’は官界を跋扈する男女は‘男盗女娼’ばかりだと一驚する（第3、4回）。一方で女性の教育と家庭生活の改善や儒教經典の再解釈を訴える才女（第22回）、官界を忌避する役人、啓蒙を志して翻訳書を売る憂国の士（第21回）が薰陶役として登場する。吳趸人は連載当初から社会の汚濁と救国、悪党、女性に視点を置いていたと思われる。

② 《写情小説》「電術奇談」（1903~1905.7）

『二十年目睹之怪現状』と並行して日本語訳から翻案連載。インド人と英国人混血女性の恋と自立を描いている。

1905（光緒三十一年）年1月から《醒世小説》「瞎弁奇聞」、8月から《社会小説》『新石頭記』（―1908.10）を連載している。

③《社会小説》「瞎騙奇聞」(1905.1~3)

資産家継嗣問題。子のない妻と占い師の出産詐欺、占いに依存した迷信家の破滅を描いている。

④《理想科学小説》『新石頭記』(1905~)

清末の暗黒政治を描き理想の未来中国世界を提案している。理想的男女関係、女性像を言明。

1906(光緒三十二)年は9月に《社会小説》「糊塗世界」を、10月に《写情小説》『恨海』を出版している。『恨海』は書き下ろしの単行出版で、吳趼人の文名が定着し、売れる作家となっていたことが窺える。

⑤《写情小説》『恨海』(1906)

義和団事件に遭い、生別死別を経た後に出家脱俗する二組の男女の悲劇を描く。

⑥《社会小説》「糊塗世界」(1906)

官界に名利を貪る種々の小悪党を描いている。

1907(光緒三十三年)年には、《社会小説》「発財秘訣」、《苦情小説》「劫余灰」をいずれも11月から連載を始めている。どちらも売猪仔(中国人を誘拐して労働力として海外に売る組織犯罪)が事件の発端となる。

⑦《社会小説》「発財秘訣」(1907.11~1908.3)

買弁と売猪仔で蓄財する悪党を描く。

⑧《写情小説》「劫余灰」(1907.11~1909.12)

売猪仔組織に攫われ生死不明の許婚者の実家に嫁ぐ女性を描く。

1909(光緒三十五年)年?《社会小説》「近十年之怪現狀」(一1910)を連載し始めた。

⑨《社会小説》「近十年之怪現狀」(1909年~1910)[⑩悪玉：官界関係者]

『二十年目睹之怪現狀』の続作。

1910(宣統二)年6月から《奇情小説》「情変」の連載を始めたが、10月に急死する。

⑩《写情小説》「情変」(1910)

女武芸者の自由恋愛を描く。急死する四か月前から連載を開始。絶筆となる。

このように吳趼人は新作の《社会小説》、《写情小説》両系列の作品を毎年発表し、常に並行して連載していた。《社会小説》では社会的悪弊、汚濁を暴き、《写情小説》は恋愛や結婚対象となる男性に対する未婚女性の愛情表現を描写した。この二分野は、吳趼人の創始以後、

清末小説諸作品の主流ジャンルとなった。作家数、作品量ともに爆発的發展を遂げた清末小説において、吳趼人の創作活動の果たした第一の意義は、中国小説史上に新たな領域を創始した点にあるといえる。吳趼人は社会の混乱に乗じて営利を謀る悪党の行状及び、体制内において自己実現する権限を与えられていない女性の悲運に関心を向けていたといえる。彼は、双方の構想を練りながら社会構造と男女の関係、女性の生き方と国家の命運との相関を探究しようとしていたように見える。

第三節 弱者、下層民への視線

吳趼人の創作に挙げられるべきもう一つの意義は弱者、下層民を取上げた点にある。吳趼人は社会的弱者に着目し、兵士に略奪殺戮される庶民や、略取売買贈与される女性の悲劇を描いた。‘九死一生’が百鬼夜行の世を見聞する『二十年目睹之怪現狀』では、しばしば権門富貴層の破廉恥行為と対比して下層民の義侠心を称揚している。恩人である馴染客の窮状を衣装宝飾類まで売って助けた‘侠妓’沈月卿に、‘九死一生’は‘風塵の世にこんな人がいようとは(不图风尘中有此人,我们不可不赏一大杯! p398)’(第49回)と献杯する。また、鹹水妹(外国人相手の妓女)の金を盗んだ息子を自首させ謝罪する父親を‘役人、読書人、商人みな陰險邪悪な亡者ばかりなのに、田舎の農夫にこんな誠実で正直な君子がいるとは(我打听得这件事,觉得官场、士类、商家等,都是鬼蜮世界,倒是乡下人当中,有这种忠厚君子,实在可叹 p473)’(第58回)と讃える。それに対し、京官(北京で任官する首都官僚)符弥軒が『朱子小学』を講じ‘道学先生’を標榜しながら、祖父符最靈を蚤だらけにして餓えさせ(第73-第74回)、苟龍光の金を詐取し、妓女と駆け落ちする行状に言及し、‘これこそ理学を高談する符弥軒の所業なのだ(只这个便是高谈理学的符弥轩所作所为的事了 p918)’(第107回)と批評する。既述の如く王俊年は、吳趼人の政治的‘落伍’性を問題視する一方で、その‘下層の’‘労働人民’の道德性に言及する姿勢を評価している。

しかし、吳趼人の作品の特質は、下層民の悪事を素材としている点にある。作中の下層民悪党は従来の弱者貧民像とは異なり、変動期の社会情勢に乗じて拝金に専念し、底辺から上層を目指して這い上がろうとする。従来の中国小説に登場する悪党は通常、役人、商人、豪族、聖職者等それなりの出自や肩書、何らかの権力権威を盾としていた。悪事も殺人、略取、略奪、反乱等官憲の手配対象となったり、地方史に名を留めたりするに足る案件であった。それに対し『二十年目睹之怪現狀』や「瞎騙奇聞」、「発財秘訣」には、召使いや門番、人夫、

雑役、職にあぶれた小役人、算命師、女中、娼婦、霊媒等の下層民が、些細な悪事の積み重ねで蓄財し、職業や地位や財力面における窮状を挽回し、成り上がろうと奮闘する様相が描かれている。その悪事の多くは、裏工作の取次やお膳立て、おべっか、腰ぎんちゃく、色仕掛け、饗応、強請り、騙り、コソ泥等些細で卑小な行為である。そのような成り上がり志向者の目的は、地位権力金銭の獲得と維持である。その手口は概ね官界を舞台として伝統的に黙認継承されてきた官界遊泳術といえる。本来、科挙の受験勉強が可能な富裕層の特権であったが、清末に官職の売買が公認されたことで、下層民に門戸が開かれた。ほかに誘拐、人身売買、情報漏洩等重大案件も見られるが、やはり清末の政治情勢に乗じた下層民の主導する悪事として描かれる。そのような小悪党は、従来の中国小説にあまり描かれてこなかった。

清朝末期、列強の侵攻に国家の疲弊露わとなり、軍事、外交、政治、経済、社会のあらゆる局面において朝廷大官の巨悪が指弾され、変革が叫ばれていた。そのような社会情勢下で、“清末随一の作品量、影響力を持った作家”と目されている吳趼人のとりわけ拘った主題が、小悪党と女性であった事は検討に値するといえよう。吳趼人は、《社会小説》、《写情小説》という新たな領域を創始して、時代の状況と思念を作品上に反映させた。《社会小説》では、民族国家を危機に陥れる小悪党の所業を取り立てて追及し、《写情小説》では、女性の心と行動—礼教規制と纏足からの解放を模索した。

彼が小悪党と女性を主要な執筆対象として選択したのは、両者を解決すべき清末社会の病弊の根源と捉えていたことを示している。また他の作家も《社会小説》、《写情小説》執筆の方向性に追随した。その理由や意味は、吳趼人研究の側面からも清末小説研究の側面からも、検討説明を要する課題であるといえる。そこで、《社会小説》中の小悪党の所業に類する事象、及び《写情小説》中の女性の自己発現に類する事象に焦点をあてて、小悪党とフェミニズムという観点から検討をすすめていきたい。先に述べたように本論においては、礼教の女性拘束、纏足への批判、女子教育の振興等清末紙誌上を沸かせた女性解放の議論、吳趼人の女性性に対する態度をフェミニズムと総称した。

註

- 1 付建舟『近現代転型期中国文学論稿』（鳳凰出版社 2011.6）p247、「晚清社会小说の力作、李伯元《官场现形记》，据魏绍昌的考证，至于 1903 年 9 月开始发表于《世界繁华报》，但不当时是否标明为“社会小说”。同年 10 月（夏

历),我佛山人的《二十年目睹之怪现状》首次在《新小说》第八号于载时,在“社会小说”栏目中推出,这可能是晚清最早出现的“社会小说”专用名称。其后这一名称就逐渐流行开来」。

吳趸人自身は「最近社会醜聞史」(1909)〈自序〉に《社会小説》の語を用いている。「于是使学为章回小说,计自癸卯始业,以迄于今,七年矣。已脱稿者,译稿以衍义之《电术奇谈》(见横滨)《新小说》,已有单行本)。如《恨海》(单行本)。如《劫余灰》(见《月月小说》),皆写情小说也。如《发财秘诀》,《上海游踪录》(均见《月月小说》),如《胡宝玉》(单行本),皆社会小说也。兼理想科学社会政治而有之者,则为《新石头记》(前见《南方报》近刻单行本)」

2 欧陽健『晚清小説史』p132。「彻底甩脱“史通”的羁绊,直面作者所处时代的社会人生,并且径直以“现状”题名的长篇巨著,在中国小说史上,当推《二十年目睹之怪现状》为第一部。」

3 黄修己主编『二十世纪中国文学史』(中山大学出版社 1998.8) ‘《二十年目睹之怪现状》还对小说的叙事模式做了可贵的探索与尝试。作品采用第一人称的叙事角度,这在我国长篇小说中尚无先例(p46)。」

4 欧陽健『晚清小説史』p140-141。「《二十年目睹之怪现状》第一回开宗明义的第一句话就是:“上海地方,为商贾…”…从文学史的角度讲,《二十年目睹之怪现状》是最先把资本主义商界引入小说创作的作品。…第七回…却更具有近代金融业的时代特点。商业上的往来,头一条讲的就是信誉。钟雷溪就是竭力制造自己资本雄厚、恪守信誉的假象,使十几家精明的钱庄一起上当的。」

5 阿英『晚清小説史』第13章〈中国小説之末流〉「晚清小説中,又有名為寫情者,亦始自吳趸人。」、付建舟『近現代転型期中国文学論稿』p279。

最初に《写情小説》の名を冠された小説は吳趸人自身の翻案した翻訳小説「電術奇談」である。その語の由来については不詳。吳趸人自身は『恨海』第一回で‘与生俱来的情’、『劫余灰』第一回で‘大而至古聖人民胞物与,己饥己溺之心,小至于一事一物之嗜好,无非在一个情字範圍内’と‘写情’についての持論を展開している。

6 付建舟『近現代転型期中国文学論稿』p 271、p 275。「《月月小说》杂志主编吴趸人在创刊之时,就把历史小说作为最重点,在杂志栏目的设置上,将它排在首位:正如梁启超把政治小说放在第一位一样,吴趸人把历史小说放在首位。…为了救国救民,扭转社会风气,吴趸人等人认为必须加强社会教育,必须从历史小说入手」。

吳趸人は「歴史小説總序」(1906年9月『月月小説』第1号)に「正史、古典籍は入手困難で難解、長さも重量も子供の教育に向いていない。近年列強に倣って作られた歴史教科書類は粗略にすぎる。歴史小説を描いて社会教育に供したい」という主旨を述べている。

7 欧陽健『晚清小説史』P143「这既是晚清时期大量出现的以古典名著为由头的“翻新小说”(阿英称之为“拟旧小说”)中最早的一部,更是学贯中西的吴趸人对于传统文化和现代文明关系的深沉思考的集中体现」。

『新石頭記』は主人公と二人の端役を借りただけで内容は完全な創作であり‘擬’の語は適切でない。‘翻新’の語のほうが適切と思われる。

8 于润琦「我国清末民初的短篇小说(代序)」『清末民初小说書系』言情卷(上)(中華文聯出版社 1997 年 11 月)。「“笑话小说”这一概念的使用,大概首次是由吴趼人在其《新笑林广记》(《新小说》1902 年创刊号)序言中提出的:‘…吾国笑话小说,亦颇不鲜,然类皆陈陈相因,无甚新意识,新趣味.内中尤以《笑林广记》为妇孺皆知之本,惜其内容鄙俚不文,皆下流社会之恶谑,非独无益于阅者,且适足为导淫之渐.思有以改良之,作《新笑林广记》.’自此“笑话小说”以一枝独秀,立于清末民初之林。」

9 吳錦濤「命意在於匡世」(黃修己主編《百年中華文學史》新亞洲文化基金會有限公司 1997.8)

从官僚地主向资产阶级转化的富有时代特色的人物,也是中国小说史上最先出现的民族资本家形象.(黄修己主編《二十世纪中国文学史》(中山大学出版社 1998.8)p46

10 『発財秘訣』(10 回)は<黄奴外史>と題して雑誌『月月小説』11—14 号 1907(光緒三十三年)11 月~1908(同三十四)年 3 月に連載された。1908(光緒三十四)年上海群学出版社より単行本で出版。『吳趼人全集』第三 卷版を使用。

11 上海市工商行政管理局 上海市工商行政管理局 上海市第一機電工業局機器工業史料組編『上海民族機器工業』(中華書局1966年2月) p82

12 欧陽健『晚清小説史』p140-141「第二十八回写沈经武在上海卖假丸药,还挂上一个“京都同仁堂”的招牌, …小说所写真假同仁堂这场未成的官司,大约是小说史上头一次关于商标诉讼的记述。」

13 周知のように西欧文学においては 16 世紀以来、時代情況と生育環境に迫られて犯行に至る人物をピカロ(悪党)、その悪事を描く小説をピカレスク(=‘悪漢小説’、‘悪党小説’)と呼ぶ。近代西欧小説においては、拝金主義の世相を批判し、読者の反響を意識するという新たな局面が現れ、登場する悪党の階層、行動も多様化した。フィールディング(1707-1754)やバルザック(1799-1850)、ディッケンズ(1812-1870)の描いた悪党の登場する作品はピカレスクとも社会小説とも呼ばれる。清末中国には、列強諸国の植民地拡大攻勢下に、産業革命以後のヨーロッパと同様の社会情勢、出版情況が出現した。経済と交通が発達し、新聞雑誌出版業と職業小説家、読者階層が誕生し、ピカレスク作品も翻訳された。創作小説では、時代と社会の悪弊を映した大量の作品が描かれた。なかでも《社会小説》を創始した吳趼人作品に登場する悪党の数は格段に多い。吳趼人の《社会小説》には、卑小な悪事と犯行の過程で社会の汚濁や世俗の悪弊が暴露されていく点に、ピカレスクとの類似性が認められる。登場人物の人生遍歴の中に世の理不尽や悪事が現れるという設定はチャールズ・ディッケンズ『ピクウィック・クラブ』(1836-7)、『デヴィッド・コパフィールド』(1849-50)、『大いなる遺産』(1860-61)やヘンリー・フィールディング『トム・ジョウンズ』(1749)等の作風に近似している。吳趼人の親友で共同編集者であった周桂笙は清末随一の翻訳家だった。吳趼人は彼に進んで翻訳を求め、西洋小説に親しんでいたという(『新庵訳屑』巻下「自由結婚」(四則)(『吳趼人全集』第九卷所収)。樽本照雄『清末民初小説目録 第 5 版』

には、呉趼人存命中に翻訳紹介されたチャールズ・ディケンズ（CHARLES DICKENS）の作品として以下の書名が挙げられている。

『滑稽外史(滑稽小説)』6卷(英)却而司迭更司 林紓 魏易譯 商務印書館 光緒 33.7.7(1907.8.15)

“NICHOLAS NICKLEBY”/『孝女耐兒傳(倫理小説)』上中下巻 (英)却而司迭更司 林紓 魏易同譯 商務印書館 光緒 33.12.3(1908.1.6)“THE OLD CURIOSITY SHOP”1841/『塊肉餘生述(社會小説)』前編 2 卷 後編 2 卷 前編光緒 34.2.2(1908.3.4) 後編光緒 34.3(1908)“DAVID COPPERFIELD”/『賊史(社會小説)』上下巻 林紓 魏易同譯 商務印書館 光緒 34.5.19(1908.6.17)“OLIVER TWIST”1838 いずれも未見)。

また、呉趼人と周桂笙の編集した雑誌『月月小説』にはガイ・ブースビーの翻訳短編小説が掲載された。ブースビーはダーク・ヒーロー<ニコラ博士シリーズ>の作者である。彼の作品は小説での悪党描写技術を呉趼人に提供したと思われる。呉趼人は西洋小説から相当多くの影響を受けていたといえよう。

(ガイ・ニューウェル・ブースビー/ (GUI NEWELL BOOTHBY) の小説は<巴黎五大奇案之一>シリーズとして『月月小説』に以下の短編が掲載された。「雙屍祭」白髭拜著 仙友訳『月月小説』1 年 1 號 1906 年 1 月 11 日 (光緒三十四年九月十五日) / 「断袖」白髭拜著 仙友訳『月月小説』1 年 3 号 1906 (光緒三十二) 年 / 「珠宮会」白髭拜著 仙友訳『月月小説』1 年 4 号 1907 (光緒三十二) 年 / 「情姬」白髭拜著 仙友訳『月月小説』1 年 5 号 1907 年 (光緒三十四) 年 / 「盗馬」白髭拜著 仙友訳『月月小説』1 年 6 号 1907 年 (光緒三十三年) 年。また、樽本照雄『清末民初小説目録 第 5 版』によると、「ニコラ博士」作品は 1908 (光緒三十四) 年に (言情小説) 『青梨影』 (英) 布斯俾著 陳家麟譯 が商務印書館から出版されている。未見)。

しかし、呉趼人の作品の背景をなす社会倫理は儒教である。西洋ビカレスクの根底にあるキリスト教倫理、神への贖罪意識とは無縁であり、登場人物の行動様式、人生観を同一の枠組みで考察するのは難しい。

第二章 清末の社会悪

第一節 《社会小説》

1. 下層民小悪党への視点

呉趼人は小説執筆について「かぞえてみれば癸卯の年より携わり、今で七年になる。(計自癸卯始業, 以迄于今, 垂七年矣。『近十年之怪現狀』(1910) <自序> p 299) と述べている。癸卯は 1903 年、『漢口日報』を辞して小説家に転じた年である。《社会小説》『新石頭記』で主人公賈宝玉は、義和団崩れの裏切りや学堂監督の逆恨みに遭い度々謀殺されかける。彼は「(中国が) 野蛮国、暗黒世界と言われるのも無理はない (怪不得说是野蛮之国, 又怪不得说是黑暗世界。第 20 回 P152)」と現実世界に絶望し、理想世界を尋ねる旅に出る。作中で賈宝玉の体験する学堂監督との軋

轢は、『漢口日報』事件における吳趼人の実体験である。吳趼人はその次第を世間に周知させる意図を持って、『新石頭記』に再現したのであろう。吳趼人が《社会小説》を執筆した意図は、清末社会を‘暗黒世界’たらしめる悪党を描くことにあったといっていよう。

吳趼人の《社会小説》について民国以来の定論は、清末社会の腐敗墮落全般を反映したと述べている。しかし《社会小説》には、些細な個人的欲望に発する拝金主義、非人道的利殖の横行が公的に重大な局面を招くという構図が頻繁に現れる。そのような構図は、吳趼人の“悪人像”に基準のあったことを類推させる。

記述の如く《社会小説》の大きな特徴は、小悪党の横行とその行状を活写している点にある。官職売買に乗じて成り上がる下層民の外に、世間の良識や共通理解に反した奇計を弄して利益追求を図る悪党も登場する。清朝政府の弱体化に混迷する社会情勢下に彼らの暗躍の機会は増したと思われる。その担い手には、ならず者や異能者等本来的に高い犯行能力を有する犯罪専従者並びに、奸智に長け人の弱みや心の隙に付け入って利益を得る人心操縦者*1がいる。吳趼人の小説には、人心操縦者がより多く登場する。その特異性は、世人の意表を突き、不安や期待に付け入る独創的奸計にある。従来の小説に描かれた悪事との違いは、同時期の清末小説と比較してさへも明白である。例えば、船上でのこそ泥という同種の犯行を比べてみる。

【李伯元『官場現形記』第 13 回、16 回】

泥棒ヤミ屋上がりの魯隊長が 江山船（妓女を置く長江客船）上の宴席を抜け出し、総督随員文西山の船室から金品を盗む。数か月後、金に換えようとして探索方に捕まる。

【吳趼人『二十年目睹之怪現狀』第 5 回】

南京行き汽船内で空き巣を働き捕まった泥棒は現役官僚だった。何度も捕まっている常習犯だが、司法委員は同僚なのでいつもすぐ釈放される。彼は会盗の一味でもある。また、奥向きの話題にも類似のものが見られる。

【李伯元『官場現形記』第 38 回】

湖広総督は第九夫人の小間使いに気があり、互いに色目を使っていた。その矢先に、第十一夫人、第十二夫人として二人の美人を献上される。そこで小間使いの恨みを買わぬよう、第九夫人の養女として武官に嫁がせる。

【吳趼人『二十年目睹之怪現狀』第 82、83 回】

湖広総督候中丞は、男色相手の朱狗を候虎と命名して武官に取り立て女中を娶せる。夫妻そろって中丞に仕えていたが、妻が急死する。言巡撫は、候虎に娘を娶せると総督に請

けあいご機嫌を取り結ぶ。しかし、言夫人は激怒して縁組を認めない。言撫台は総督も妻も怖く窮地に陥る。やむなく密かに第四夫人に輿入れの準備をさせ、日清戦争時の姦計で策士と名を馳せた陸觀察に大金で収拾を依頼する。陸觀察は、お手付きの小間使い碧蓮を自分の娘と偽って巡撫第四夫人の養女に差し出し、令嬢の身代わりとして侯虎に嫁がせる。湖広総督侯中丞は大官張之洞、言巡撫は戊戌政変で処刑された譚嗣同の父譚繼詢、陸觀察は総督葉志超幕客の洪述祖、侯虎は湖北新軍司令官張彪とモデルが特定されている。張之洞は“猿面”であったので、同音の‘侯’を変名とし、譚繼詢は側室に夢中で嫡出の譚嗣同を疎んだという。いずれも小説としての脚色を施しながらも、当時巷間を賑わした幾分の事実を含む話題であったと思われる。

吳趸人『二十年目睹之怪現狀』、李伯元『官場現形記』は同時期の上海で別の雑誌紙上に連載されていた。両作者は專業作家として当時の小説界の二枚看板であった。どちらも社会の悪弊を糾すという執筆姿勢のもとに小説を描き、話題の多くは実在人物の醜聞巷説を素材としていた。役人の船室空き巢、小間使いと武官の縁組という舞台と役柄を同じくする話でも、『二十年目睹之怪現狀』は脚色の奇天烈さにおいて優っている。このように構想に趣向を凝らし、悪党の人物像の個性を際立たせる脚色を施した作品作りは、吳趸人の独擅場であったといえる。

吳趸人は悪党像の描写に意欲的であったといってよいだろう。悪党ばかり登場する小説は、管見の限りでは旧小説に例を見ないが、彼はそのような小説を五篇も書いている。『二十年目睹之怪現狀』（1903～1910）楔子で語り手の‘九死一生’は、‘思い起こせば出逢った者は三つだけ、一つ目は‘蛇虫鼠蟻’（人に巢くい害なす生き物）、二つ目は‘豺狼虎豹’（人を食らう猛獣）、三つ目は‘魑魅魍魎’（妖怪変化）だった（‘回头想来，所遇见的只有三种东西：第一种是蛇虫鼠蚁；第二种是豺狼虎豹；第三种是魑魅魍魎’『全集』第1卷p17）（『二十年目睹之怪現狀』第二回）と慨嘆している。登場人物のほとんどが悪党である「近十年之怪現狀」（1909）でも‘魑魅魍魎’の眼前に満ち溢れ牛鬼蛇神は脳裏に入り乱れる（‘魑魅魍魎，布满目前，牛鬼蛇神，纷扰脑际’『全集』第3卷p300）（「近十年之怪現狀」〈自序〉）と形容した。吳趸人が清末の悪党を人外の存在と見なしていたことがわかる。そのほか、「瞎騙奇聞」（1905）、「糊塗世界」（1906）、「發財秘訣」（1907-1908）は、悪党を主要人物とし、悪党側から社会を描く作品である。彼は、“悪”の形象について定見を持っていたと思われる。

吳趸人は、「電術奇談」（1903-1905）に登場する、親友の資産を強奪しその恋人を拉致する催眠術師蘇士馬の“悪党像”に興味を示した。作中で吳趸人は彼を‘傀儡の糸を操る者’（牽

動傀儡之線索 p 463)、ヒロインと周辺人物を‘操られる者’と注記している。‘傀儡の糸’については、「劫余灰」(1907)[前言]に“‘情’の糸で操られる傀儡の舞台”という世界認識を表明している。催眠術で患者(被害者)を操ろうとする蘇士馬の行為の、人を操り私利を図るという側面は、実在する憎む悪党(梁鼎芬、洪述祖)の“人心を操り、姦計を弄して私利を図り、結果的に国家社会を損壊する”行為に重なったことから、吳趼人は度々傀儡について特記したのであろう。「電術奇談」を翻案する過程で、“傀儡師”という概念が生じたといえる。

その後の吳趼人の《社会小説》には、非情、非倫理的で奸智に長け、他者を顧みない人心操縦者の登場が特徴となる。『電術奇談』の影響によりそのような人物形象が造形されたという想定が可能かと思われるので、奸智に拠って利益誘導を図る非倫理的の人心操縦者を、吳趼人の使用した用語を借りて“傀儡師”型利欲迫及者と呼んでおく。本論では吳趼人の《社会小説》に登場する小悪党について、成り上がり志向者、“傀儡師”型利欲迫及者という側面に焦点をおいて、考察を試みたい。

2. 《社会小説》中の小悪党

解説役、舞台回し役、被害者を除いてほとんど悪人しか出てこない「瞎騙奇聞」、「糊塗世界」、「發財秘訣」、半生に遭遇した非道について記すと前置きする『二十年目睹之怪現狀』、「近十年之怪現狀」、この五篇の《社会小説》に登場する悪党の行状について検討してみたい。悪事の定義は“人の心身地位財産を損傷する行為”としておく。

1) 『二十年目睹之怪現狀』(108回)(1903-1910)

『二十年目睹之怪現狀』は全 108 回の長篇で吳趼人の代表作とされる。第 45 回で連載を終了した後も第 108 回までは生涯にわたって描き続け、社会の実態を描写する作業に取り組んだ。‘九死一生’が各地を遊歴し目撃した様々の事象を語るという形式を取る。‘九死一生’の見聞した百数十話の短い話が連なり、広範囲にわたる悪の事象を描いている。大量に登場する官界の贈収賄や公務の壟断不正などは日常儀礼と化し、すでに‘怪現狀’に数えられてすらいない。作中には老若男女あらゆる階層立場の人々の所業が描かれている。最初に出版された広智書局版には評語と眉注が施されている。吳趼人は、第三回の作者自評に‘人から聞いた話でかつてに創ったのではない’と記し、作中の記述が実話であることを自負している。‘九死一生’の閱歴には、作者吳趼人自身の実人生が、見聞に当時の実在人物の言

行が投影され*2、多くの作中人物にモデル考証が成されている*3。また吳趼人は人に取材して見聞した話題をノートに描き留め小説の素材としていたとも証言されている*4。描かれた内容は創作や脚色を加えながらもある程度の事実を下敷きにしていたのであろう。吳趼人は、小説家に転じて後も、ジャーナリストとして報道の姿勢を堅持しようとする意志が固かったと思われる。

作品は、上海に十余年生活し世の恐ろしさを知り‘死裏逃生’と号して隠棲する人物が、‘九死一生’著『二十年目睹之怪現狀』という筆記を売っている男（文述農）に出逢うという出だしで始まる。彼がその内容に感動するのを見た男は、筆記を世に広めるよう委ねたので日本横浜『新小説』社に送付した（第1回）。第2回以降が印行された‘九死一生’筆記『二十年目睹之怪現狀』であるという設定である。語り手の‘私’は百鬼夜行の世を二十年間無事に切り抜けてきたのを記念して‘九死一生’と号した。杭州で商売をしていた父が客死すると遺産の大半を伯父と父の友人に着服された。母は‘九死一生’を伯父の赴任先南京に金を取り返しに出向かせた。以来、‘九死一生’は南京で再会した同郷の進士吳繼之の興した事業の代理人として各地を往来し種々の怪現狀を見聞する。最後の第108回で‘九死一生’は倒産して債鬼に追われ、強盗に所持品を奪われ、頼った友人文述農の家は火事で焼け、帰郷を余儀なくされる。帰郷に当たり二十年間の見聞を記した筆記に『二十年目睹之怪現狀』‘九死一生’筆記と題し文述農に託すという形で終り、第一回の出だしにつながる仕組みとなっている。

登場する悪党を犯行性格により類型別すると以下のようになる。

(1)成り上がり志向者

① ‘九死一生’の伯父

- 杭州で客死した私の父の遺産の大半を持ち去る。（第2回）
- 返済を求めて伯父の公館を尋ねた私を門前払いにする（第3回）。
- 父の葬礼の際の会計も出鱈目であった（第18回）。
- 父の番頭だった張鼎臣からも金を借りて返さない（第46回）。
- 父の遺産で私のために買ったと称して官位鑑札を送ってくる。鑑札は無効のもので問い合わせたがごまかされる（第50、64回）。

○亡妻の姪である上海の劉三小姐を妊娠させ愛人として任地に同伴する。生まれた子供を孤児院に入れ嫌がる三小姐を数年留め置く。実家が娘の嫁ぎ先を決めるとようやく上海に送り返し、その足で数年来婚約中の南京陳氏を後添えに娶る（第82回）。

○地方官の弟夫妻が疫病で客死する。遺された二人の幼児の救済を拒否する（第107回）。

②役人を自称する盗賊

南京への船中で盗みを働いて捕まった盗賊は役人の身分を言い立て釈放を求める（第2回）。彼は役人を名乗る盗賊ではなく盗みを副業とする役人であり、捕まっても司直は同僚なのですぐ釈放される（第4回）。

③鐘雷溪

上海で十数件の錢莊から金を詐取して官位を買い、名を変え南京で候補官となっていたところを見つかり告訴される（第7回）。

④畢鏡江

役人の妾になった妹の口利きで継之の食客となった。妹の夫の任地に随行したくて継之の公館から宝石を盗み、妹への付け届けとする（第11～14回）。撫湖で電報局委員に納まる（第44回）。

⑤会党

○街に貼り出される張大仙到来の広告は会党の暗号であるという（第15回）。

○広告を辿って会党のアジトを探り当てると船中の泥棒兼業役人が出てきた（第16回）。

⑥盗賊出身の地方官

盗賊が盗んだ金で官職を買い地方官になる。息子の官職を買うためにまた盗みを働くが、失敗する（第26回）。追われて逃げる途中に付けられた額の傷が証拠となり免職となる（第27回）。

⑦食い詰めた王族

乞食の身形をして通行人と諍いを起こし、服の下に締めた皇族の帯を見せて金を強請る。死んだと偽り宗人府から香奠をせしめる（第27回）。

⑧カンニング受験生

‘九死一生’が科挙試験の試験官として宿泊中、軒に止まっていた鳩を撃ち落とす（第42回）と脚に試験問題がくくりつけてあった（第43回）。

⑨「五穀虫」大令

揚州江都県前任知県の伍大令は「公私にわたり胥吏下僕を煩わせず自ら処理する」と

標榜して冷酷吝嗇に搾取し、厠の肥代や料理人の労賃まで懐に収めるので「五穀虫」（＝糞蛆）大令と呼ばれていた（第46回）。

⑩趙姓、朱姓の役人

糧台の管理に携っていた趙姓の役人が文書を偽造し藩庫の金を詐取するが、義兄弟を誓う仲の朱姓に密告され処刑された。朱姓はその功績で田舎の知県に登用されるが、甥が恐喝詐欺を起こし調査の役人を殺害し逃亡する。朱姓も連座して趙姓と同じ場所で処刑された（第54回）。

⑪四川学台

四川の茶館で七、八十人もの女を買い船に乗せて離任した。偶々税関委員は以前に彼の讒言により失職し私怨を抱いていた同僚であった。委員は船を通関させず上申して女たちを押収し、四川に返す（第80回）。

⑫四川某觀察

知識もないのに中体西用を上奏し、拔擢される。石炭が石油になると聞き、石油搾造会社を設立しようと株式を募り、石炭を買い占めたので、四川周辺の石炭価格が暴騰する。重慶道は儲けに加わろうと株を先物買いし価格暴騰を放置する。堪りかねた外国領事が石炭は石油にならないと進言する（第81回）。某觀察の友人の寧波人買弁時春甫と広東人搾油会社経営者は言葉が通じず、石炭から石油を搾る外国製機械があるという誤解が生じた、という真相が明らかになる。觀察は四川に居られず江南に行き、推薦組の経歴を活用して職を得る（第82回）。

⑬卜子修

雑貨店の見習いであったが些細な落ち度を咎められ県の高官に打たれる。それを機に、役人になろうと発奮し大官の従者となる。困窮した卜姓の官位を買取り諂いの腕で職に就くと、路上で言いがかりをつけて車夫を打ち据え宿願を果たす（第99回）。

⑭符弥軒

進士出身の京官。儒教道德を説くが祖父符最靈に食事も与えず虐待する（第73回）。苟才に就職の伝手を求めて上海に出てくると、苟才の息子龍光をおだてて翻訳書を出すと称して金を吸い上げ、挙句に妓女と出奔する（第106回）。

(2)犯罪専従者

①黎景翼

弟希銓の財産を狙い醜聞に託け父親を焚き付けて自殺を迫らせ、密かに謀殺する。そのうえ希銓の妻秋菊を妓楼に売るが‘九死一生’に阻止される（第32回）。賭場で有り金を摩り杭州へ逃げる（第39回）。不良僧侶となり盗みを働き枷に架けられる（第45回）。

②慈善詐欺師

史紹経という“大善士”が山西救済の寄付を募る二百冊の募金帳を省の各州県知事用に送りつけてくる。これら新手の“大善士”には売名や詐欺目的の者が多く、中には‘無名氏’の寄付金を一部のみ公益報告書に載せ残りを生活費に流用し、寄付された衣類を被災地に送らず自宅で雇用人のお仕着せとする者もいる（第15回）

③自称贗金づくり

銭莊の主古雨山が六錢七八分のコストで七錢三分の銀貨を作れるという触れこみの男を信用し、製造を委託する。男は七千銀の元手を受け取り逐電する（第63回）。

④山東の「好漢」

私は叔父の二人の遺児を連れ帰る途次に、地元で「好漢」と通称される盗賊団に襲われる。彼らは抵抗しなければ財物のみ奪い、人に危害を加えないという。悪党なりに人情があり、私が幼児の衣類だけは残してくれと懇願すると、聞き入れてくれる（第108回）。

(3)傀儡師型利欲迫及者

①苟才

召使を従え立派な身形で身分の低い兵卒にへりくだり‘礼賢下士’の人物を演出している（第4回）。「礼賢下士」の真相は、貸衣装を着こみ親族を下僕や下婢に仕立てて体裁を繕い、大官の兵卒を接待して口利きを求める就職運動だった。しかも貸衣装を汚して貸衣装屋と揉める（第7回）。役職に就いた苟才は十六歳の長男に美しい嫁を娶らせる。しかし嫁は苟才夫人にいびられ、嫁を庇った長男まで虐められ持病を悪化させて死ぬ。おりしも苟才は御史太夫に弾劾され免職となっていた（第87回）。苟才は気に入りの妾を亡くした総督に、長男の嫁を新しい妾として贈ろうと企む（第88回）。嫁が総督に舅の非道を訴えようとしたので、薬を盛り朦朧状態に陥らせて興入れさせる（第89回）。その効果でたちまち三つの職を得る（第90回）。

②父の友人尤雲岫

○杭州で客死した‘九死一生’の父の葬儀に駆けつけ、遺産を着服する（第2回）。

○長老と謀って‘九死一生’の家産を李家に斡旋して儲けようとする（第19回）。

○訴訟を請負って稼ぎ世間に憎まれていたが、息子が強盗を働き処刑され、破産零落する
(第 65 回)。

③一族の長老

○母危篤と偽った電報で‘九死一生’を呼び戻し祖廟修復費の名目で遺産を巻き上げようと企む (第 18 回)。

○尤雲岫と結託して‘九死一生’の家産を李家に斡旋して儲けようと謀る (第 19 回)。

④宝石店店主

宝石店に現れた自称役人が宝石の販売を店に委託し、客を装う共犯が手付金を払う。役人が品物の返還を求めたので、店が宝石代を立て替えて支払う。役人と客は金と宝石を持ったまま逐電し、番頭たちは大金を詐取され、店の損害を賠償する羽目に陥る (第 5 回)。実はこの詐欺の黒幕は宝石店主で、宝くじにあたった店員たちの金を狙った犯行であった。
(第 6 回)。

⑤密輸業者

○税関役人が阿片を押収し私物化するので、大量のイナゴと糞尿を詰めた壺を阿片に見せかけ押収させる。開けるとイナゴの群れが飛び出し糞尿が飛び散り大騒動となる。
○棺桶に遺体の代わりに禁制品を隠していると見せかけ税関を通る。委員が開けさせると本当に遺体であったので葬礼をやり直し五千銀を償い謝罪する羽目となる。その後何日間も続けざまに棺桶が通り査問なしで通関する。実は後の棺桶の中身はすべて禁制品であった (第 12 回)。

⑥船賃詐欺の母子

上海の旅館近辺で、蘇州から息子を探しに来た母親と船賃を払えと責める船員の芝居を演じて同情を引き、通行人から船賃を詐取する (第 17 回)。

⑦沈経武

もと四川の質屋の徒弟で、店の女中と出奔する。後に共同経営者の出資金を横領し、女中に金を預けて収監される。女中は上海に薬茶屋を開いて待つ (第 28—29 回)。出獄すると妻子を捨て、女中と共に薬屋を営み、北京の老舗同仁堂の看板を掲げる。同仁堂は告訴するために店員を派遣する。彼は店員を饗応して酔い潰し、夜中に看板の文字を書き換えるという奇策を弄して切り抜ける (第 32 回—第 35 回)。既述の如くこの話は、中国小説史上最初の商業訴訟記事となった。

⑧塩商の妾羅魏氏一族

家の再興を謀ろうとする現当主を先代当主の妾羅魏氏とその一族が不孝の名目で訴え（第45回）幽閉する（第53回）。既述の如く、西太后と光緒帝を暗喩していると思われる。

⑨齋明如

洋服の仕立屋だが本業はいかさま賭博を生業とするやくざである。江蘇知府候補柳采卿に外国人を紹介し、息子を洋行買弁として採用するという条件で五千銀を出資させる。外国人は名前も国籍も定かでない破落戸で金を奪って姿を消す（第49～50回）。

⑩塩商の息子

財産分与に不満を抱き、父親を義和団の残党と訴える（第53回）。

⑪祖武（勞佛／COVE）医師

外国帰りの中国人西洋医で、成金荀鶯樓に薬局を開店し新薬を作ると持ちかけ十万銀を投資させる。その後、大量の薬瓶を残して行方をくらます。瓶の中身はただの水だった。荀鶯樓は官界に伝手を得て税の取り立てを請負い搾取していた。彼の悪行を憎む人々は喝采を叫ぶ（第55回）。

⑫李莊

夏作人は李莊の妻と私通していた。李莊は夏作人を脅し彼の弁髪を奪った後、妻を惨殺し、手に夏作人の弁髪を握らせる。夏作人は李莊の妻殺害の罪で処刑される（第56回）。

⑬下宿人の老婦人

置き屋のやり手婆が資産家を装って間借りし、大家の息子を義子にする。帰郷と称して息子一家を連れ去り、息子を猪仔にその妻と妾と女中二人を妓女に売り飛ばす（第59回）。

⑭車文琴

妓楼遊びに耽る京官で、結婚したくないので、婚約を破談にしようと不貞の噂を立てて許婚者を自殺に追いこむ（第77回）。

⑮四川の詐欺師

四川の大富豪張百万が娘に皇后の気が顕れているという詐欺師の託宣を信じる。詐欺師は夜中に樵の枕頭で松明を焚き、光と煙を演出して皇帝の気が顕れたと言いたてる。張百万は娘と樵に龍衣鳳冠を着けさせて婚礼を挙げさせるが、謀反の罪で捕えられる（第81回）。

⑯陸觀察

陸觀察は、日清戦争時に平壤で日本軍と対陣した清軍司令官に、日本軍の強暴さを言い募り怯えさせる。秘かに日本軍に退却を申し出て退路を空けさせるほうが、全滅するよ

りましである。士卒軍糧を保持できれば、敗戦と報告しても処罰が軽いと、司令官を焚きつける。彼は日本軍營あてに撤退協力を依頼する手紙を書き、文字を知らない司令官に筆写させる。書き損じと偽り‘帰順’の意志を示した文言を書き加えてもう一通筆写させ、一通目を日本軍營に送る。退却後、二通目を持参し朝廷に訴えたと司令官を脅し、五十万銀を脅し取る(83回)。

⑰ 苟龍光

苟才の次男で父の第六夫人と密通していた。義弟承輝と謀り医者朱博如を一万銀の報酬で抱きこみ苟才を薬殺させる(第103-106回)。

⑱ 承輝

苟龍光の妻の弟で苟才の第五夫人と密通していた。医師朱博如に相反する作用を引き起こす二種の薬を同時に処方させ、苟才を殺害する。診察料名目の報酬一万銀の文字を百銀に書き換えたうえ、二通の処方箋を楯に朱博如を脅し泣き寝入りさせる(第103-106回)。

『二十年目睹之怪現狀』に描かれた主な悪党を取り上げて整理してみると、成り上がり志向者 14 人、犯罪専従者 4 人、傀儡師型利欲追求者 18 人となる。貪欲な悪党の職種で一番多いのは役人である。役人悪党は悪党全体の過半数に上る。奸智と非道で社会を混乱に陥れる 傀儡師型利欲追求者は、奸智姦計と手間を要するにもかかわらず最も多い。その属性は、密輸入からやり手婆、商人、役人と多岐に渡る。吳趸人の目が捉えた清末社会は、生活地位の向上を目指し悪行に及ぶ成り上がり志向者、姦計で人を陥れ社会混乱を招く人心操縦者が、王族から下層民まで階層を問わず現出する、という様相を呈していたということになる。

中でも、人の願望や不安や信頼に付け入って人心を操縦し、自身の欲望達成を画策する‘傀儡’師型利欲追求者の悪事は、既存の秩序倫理を損壊する点で、社会に及ぼす危険性は最たるものであるといえよう。先に述べたように‘傀儡’師型利欲追求者は日本語訳の重訳翻案小説「電術奇談」の悪役蘇士馬を原型とすると思われる。催眠術を研究する貧しい医師蘇士馬は、後援を申し出た親友を過失死させる。彼は予期せぬ事故にすかさず便乗して、銀行で親友に成りすましその資産を手に入れ、研究を続ける。さらに親友の恋人であるヒロインに横恋慕し、催眠術をかけ誘拐する。吳趸人は、蘇士馬を‘傀儡の糸を操る者’と評して特筆している。さらに「劫余灰」第一回で、“世界は絡繰り人形の舞台であり、それを操る糸は人の本性たる‘情’である”と述べている。彼は‘傀儡の糸(人の心)を操る者’を、脇役

ではなく作品世界を成立させるキーパーソンと捉えていたといえる。蘇士馬に体现された“人形を動かし自身の欲求に適った世界を作る傀儡師”、“人を操り自在に操縦する催眠術師”*5は、実社会で呉趼人の目に映った、人の期待や失意や不安に付け入って自身の望む方向に操り、利益獲得を図る利欲追及者の行動形態に合致したのであろう。

2) 「近十年之怪現状」(20回未完)(1909-1910)

「近十年之怪現状」は『二十年目睹之怪現状』の続作で、別名を「最近社会齷齪史」といい、急死する前年に発表し、未完のまま翌年刊行された。登場人物のほとんどが官界関係者である。主役は特定できないが、ほぼ全編に登場する魯微園、伊紫旒の行動が軸となっている。粗筋は以下の如くである。

職を求めて上海を訪れた‘九死一生’は、以前に金を貸していた伊紫旒に返済を求める。伊紫旒は金を返さず、山東高官の子息喬子遷の設立した金鉱局局員の職を斡旋する。喬子遷が元手と称する金塊は盗品で、‘九死一生’は詐欺と知って連累を避け急遽身を隠す(第1回)。山東撫台は調査委員魯微園を派遣し、喬子遷は伊紫旒に金を渡して後事を託し逐電する(第4回)。伊紫旒は被害者を装いつつ新聞社に情報を流し、魯微園の正体を暴く(第9回)。任務をしくじった魯微園は調査費を着服し逃走する(第15回)。天津で張佐君と改名した魯微園は、商人となり、軍服発注を委託されて十万両の公金を預かる。拿離士洋行と折衝するが、洋行関係者は金を受け取ると行方をくらます(第16回)。伊紫旒は許老十の書局を巧妙に買い叩く(第12回)。陳雨堂は伝手を得て山東に赴任するが、実職につくまで、岳母の死を妻の死と届けて香奠を集め、糊口をしのぐ(第14回)。北京に逃げ変装して潜伏していた魯微園は、彼を上海に派遣した撫台が転出、新撫台が同郷人であったので、済南官界に復帰して魯微園にもどり銅元局総辦を拝命する。部下の局員柏養芝は贈賄用の骨董を捜す魯微園に、秦始皇時代の古鏡と偽って贋作を三千両で売りつける(第18回)。魯微園は骨董の贈賄と漢方の知識で新撫台の信任を得る。新撫台は恋患いに墜ちた令嬢の治療を魯微園に依頼する(第17-20回)。

伊紫旒は官界や遊里の面倒事、汚れ仕事の斡旋や後始末を請け負いながら、金と官位を獲得していく。魯微園は、利益に応じて官人から詐欺師、商人、お尋ね者、また官人と地位職責姓名まで自由自在にすり替え自在に立ち回る。申告した姓名職位が本物であることを前提に機能する社会合意を一蹴する行為である。彼らを始め登場人物の多くは、詭弁詭計で利益を図る傀儡師型利欲追及者である。

3) 「瞎騙奇聞」(8回) (1904-1905)

「瞎騙奇聞」の内容は政治問題に係わないので、解放後に非難を被ることはなかったが、政治面に問題とならない他の清末作品と同様、研究も論評もされることがなかった。文革終結後、盧叔度はこの作品を以下のように論評している。

芸術面においては凡庸だが、迷信に反対した意義において価値を認めるに足る。盲目占い師のペテン師ぶりには精彩があり、占星学や人相学についての知識も豊かである。故に作中の占い師の言葉もすべて‘玄人’はだしである。…芸術面において特筆すべき成就不再が意義面、影響面において見逃せない作品である。

《瞎騙奇聞》…艺术上虽然平淡无奇,但从饭迷信的意义上说,还是值得肯定的.但在写瞎子的欺骗上,还是相当生动的.关于星相,他知道得很不少,所以书里瞎子的语言都是‘行话’之类…在艺术上没有特卓的成就,从意义与影响上说,却是一部不能忽视的书.(p88)

(盧叔度「関与我仏山人後略—長篇小説部分」《中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3 期 总 76 期》)

「瞎騙奇聞」が‘意義面、影響面において見逃せない作品’という見解は適切な評価であるといえる。その梗概を以下に挙げ、‘芸術面においては凡庸’であるかどうか検討してみたい。

【第1回】

舞台は山東省済南府歴城県、趙澤長と洪士仁が算命師周鉄口の占いを信じた為に破滅するという一貫したストーリーを描く。周鉄口は、五十歳を過ぎ子供のいない富豪趙澤長と錢氏夫妻に、来年は出世する子が生まれると鑑定する。趙澤長が妾を容れようとしたので、錢氏は周鉄口と謀って妊娠を装う。周鉄口は豆腐屋閔老二から生後間もない嬰兒をもらって産室に届け、錢氏が自分の子を出産したと偽る。

【第2回～第5回】

周鉄口はもう一人の顧客洪士仁には、零落してはじめて金持ちになれる命運だと鑑定した。洪士仁はそれを信じて働かず乞食に零落する。

【第6回～第8回】

桂森と名付けた趙澤長の息子は、成人すると賭博や妓楼遊びに耽り資産を蕩尽する。錢氏は桂森の不出来を輦蹙する親族と絶縁する。趙澤長は桂森の出自に気付いて憤死し、周

鉄口は洪士仁に殺される。銭氏は病床で後悔し、周鉄口の発案で桂森をもらい実子と偽ったことを告白して死ぬ。

そもそも周鉄口は衣食にも事欠く下層占い師だった。しかし、栄達する継嗣を望む趙澤長夫妻、居食いを好む洪士仁を顧客に得ると、彼ら自身をその望む方向に誘導し信任を得る。彼の発案した偽装出産は、顧客を欺き死に至らしめ、親族間を離反させ、宗祀を絶やすという破壊作用を引き起こした。周鉄口は、自身の利欲のみ迫及して顧客への恩義も人情も顧みず、相続制度の秩序を破壊する結果をもたらした傀儡師型利欲迫及者に相当する。騙された張夫妻、洪士仁は“絡繰り人形”である。子のできない妻が妊娠を装い余所の嬰兒を実子と偽るというトリックは、“家”の存続が必須の課題であった伝統社会において、誰もが想起し得る行為であったかもしれない。実際にそのような方策が実行された記録もあるという*6。

この作品の雑誌連載時の角書きは《警世小説》である。吳趼人は作中で随時、周鉄口の占いの信憑性や、訓育を怠り結果的に二つの家を絶やした張夫妻、濡れ手に粟を目論んで身を亡ぼした洪士仁の愚かしさに言及している。吳趼人は当時の社会に普遍的に起こり得た事態と危険性を挙げ、警鐘を鳴らそうとしたものと思われる。周鉄口と銭氏の姦計は、それぞれの個人的打算から出た思案であり、社会の動向を描いているわけではない。この小説は一家の継嗣問題に纏わる些細な醜聞を描いて、その社会全体に潜む本質的病巣を摘出するという、かつてない斬新な構想に成った作品であるといえる。小さな事態を取り上げながら、社会的普遍性をもつ大問題を読者に想起させる手法は、‘芸術的に凡庸である’とは思えない。

4) 「糊塗世界」 (12 回未完) (1906)

「糊塗世界」は2、3 回毎に場所、人物、ストーリーの変わっていく短編の集まりである。第1 回から第4 回前半は湖南省官界の獵官運動と官人家庭のスキャンダル、第4 回から第6 回前半は貴州から湖北間での公費窃盗事件、第6 回後半から第8 回前半は福建、広東での官界人事をめぐるスキャンダル、第8 回後半から第9 回後半は主に鎮江を舞台にした対外問題、第9 回後半から第11 回前半は四川総督の失政と罷免後の獵官合戦、第11 回後半から第12 回は四川での科挙試験場のエピソード、受験生の家庭問題を描いている。粗筋は以下の通りである。[]内は当該回目の数字と登場人物

[第1 回-第4 回 / 伍琮芳とその二度目の妻黎小姐]

湖南省官界では喪中の官人たちが役職を得ようと獵官運動に余念がない。その一人で家内工業主出身の伍琮芳は黃撫台のお気に入りの首府伊昌の門番王福に取り入って職にありつく（第1回）。妻の柏氏から喪に服さず獵官したことを責められた伍琮芳は、親孝行のために自分の肉を割股したと偽って豚肉を老母に食べさせる。ところが豚肉が病身に障り老母は頓死する（第2回）。

老母に続いて柏氏も病で急死し八歳、七歳、五歳、三歳の三男一女が遺される。三日もせずに黎総督家から縁談が持ち掛けられ令嬢が嫁いでくる。婚礼の夜、黎小姐は顔に爛れた傷跡があり総督が強引に伍琮芳に娶らせたのだとわかる（第2回）。黎小姐は悟気が強く、柏氏の四人の遺児のうち幼い二人を早々に殺害する。伍琮芳は残った息子と娘を亡母、亡妻の埋葬に託けて郷里に連れ帰り、親戚に預ける（第3回）。

撫台の人事が弾劾され伊昌知府は伍琮芳に北京での贈賄工作を委託する。撫台と同僚たちから活動資金を預かった伍琮芳は天津に赴き、伊昌の手紙と賄賂を各要人に発送する（第3回）。しかし失脚が確実とわかると、‘心は痛んだが’裏切ることにし、預かった賄賂を自身の保身に流用する。宦官李蓮英に伝手のきく旧知の曹来蘇に金を渡し、身分の保全と職の斡旋を依頼する（第4回）。

[第4回-第6回前半/曹来蘇と盜賊一味]

曹来蘇は伍琮芳からせしめた斡旋料で知県候補の役職を買い貴州に赴任する。貴州で曹来蘇は湖北看紡紗織布業局視察の職を得て、蚕卵と桑苗の仕入れ費 1200 銀を預かり湖北へ出張する。

湖北への途次、同宿の歌妓一家と親しくなる。曹は女の部屋で饗応され眠りこむが、目覚めると一家も官費も消えていた。彼らは宿屋を抱きこんで旅回りの弾子語り一家を装い、同宿の役人に菓を盛って眠らせ公金を奪う盜賊一味だった（第5回）。曹来蘇は従者周升の助言を得て、漢口へ赴く船中で官費を盗まれたと騒ぎたてて既成事実をでっち上げ、上陸後盜難届を出し貴州に打電上申するという手口で、官費を失った窮地を切り抜ける（第6回）。

曹来蘇の従者周升は、福建候補知県余念祖に仕えている旧知の徐老二と再会し、互いの主人を交換する。

[第6回後半-第8回前半/仕立屋梁裁縫、理髮師施子順と靈媒師宋媒婆]

舞台は福建、広東に移る。福建藩台御用達の仕立屋梁裁縫、撫台が北京から連れてきたお気に入りの理髮師施子順、撫台夫人お気に入りの靈媒師宋媒婆は主人の威光を笠に陰の権力を握っている。余念祖と共に福州に赴いた周升は実職に就けない余のために梁裁縫に

口利きを頼む。梁は藩台母堂にとりなしを頼み、門番の仇大爺にも余の窮状を訴える。梁は余念祖から 2000 銀の謝礼を受け取り兵站糧台収支の職を幹旋する（第 7 回）。

梁裁縫の息子梁有信は府知事を買って広東へ赴き、舞台は広東に移る。梁有信は賭場で施子順と揉める。施子順は宋媒婆の義理の息子の候補知県馬廉とも諍いを起こす。宋媒婆は施の悪事を撫台夫人に訴え他の理髪師を推薦する。馬廉は宋媒婆の世話で役職を得て赴任するが、文字を知らないので裁判の被告と原告を取り違えて免官になる。

北京に帰った施子順は、宋媒婆の所業を吹聴して歩いた。首都官がその情報を基に上申書を提出し御史が広東に派遣される。撫台は御史の到着前に宋媒婆の息子の有福に辺防大臣舒春元等あての推薦状を与え母子を広西に追い払う。舒春元の文案虞承沢が知県を買い辞職したので字を知らない有福が後釜に座る（第 8 回）。

[第 8 回後半-第 9 回前半/虞承沢、占い師呂胡子]

虞承沢が任官手続きのため広西、北京、鎮江、四川を往復する途次に見聞する国威と軍隊の弱体化、買官の実態が描かれる。北京で引見を済ませた虞承沢が、四川に到着し、第九回後半から舞台は四川となる。四川総督は呂胡子の扶乩に心酔し、蝗害に祈祷で対処したので一揆がおこる。総督は土匪追討軍にも殺生を禁じて弾薬を持たせない。怖がった兵士たちが逃亡し、置き去りになった指揮官たちの醜態が巷説に上る。総督が罷免されると、呂胡子は蓄えた資産とともに蓄電する（第 9 回）。

[第 9 回後半-第 11 回前半/楊諤、駱青耜と黃伯旦]

四川では新総督の着任に伴い獵官運動が繰り広げられる。出世術の達人と名高い楊諤の門生駱青耜と黃伯旦との間に交わされた獵官合戦が描かれる。新四川総督は着任早々に楊諤を榮転させる。日頃彼の出世術に心服して師事している門生たちが、秘訣を聞き出そうと芝居を呼んで宴席を設け饗応する。席上、門生たちに請われた楊は上官への取り入り方を講義する（第 10 回）。

駱青耜は総督のお気に入りの道台候補濟仁の門番馮二大爺に取り入り、馮を主賓とした宴席を設け偶々訪れた同郷人の首都官李子亭を陪席させる。李子亭は権官の門番を饗応していると知ると‘廉恥道喪’と面罵して中座する。駱青耜は馮への三千銀の賄賂が功を奏し巴県知県を拝命する。清廉を装った黃伯旦の告げ口で駱の買官を知った李子亭は、総督に駱青耜を弾劾し黃伯旦を推薦して去る。総督はやむなく駱青耜に任命する予定の巴県知県職を黃伯旦にまわす。

黄伯旦の仕業と知った駱青舩は、楊諤に訴え復讐策を練ってもらう。黄伯旦が赴任すると父の病没を知らせる電報が届く。電報局に六百銀の賄賂を使い死んだが蘇生したという偽電報を打たせようとするが不首尾に終わり、やむなく服喪を報告し帰郷する。父は健在で偽電報だったとわかるが、もはや撤回できない（第11回）。

[第11回後半・第12回/秀才岑其身、その兄嫁と妹]

舞台は引き続き四川である。楊諤の策に嵌り職を棒に振った黄伯旦の後任凌乃本が県試の試験官となり首席に岑其身を選んだことから、岑の身边に話題が移る。翌年、岑其身は郷試を受けに省へ赴く。科挙試験場では科挙試験の空しさを嘆く怨霊や、錯乱した合格者の醜態に遭遇する。妻万氏は兄嫁と妹に夫の留守宅を占拠されて屋外に迫いやられ、コレラに罹り死ぬ。兄嫁と妹は遺品を奪い二人の遺児の衣食も顧みず、供養と称して御馳走三昧の贅沢に明け暮れ岑の資産を使いつくす。落第して帰郷し妻の死を知った岑其身は葬儀に費やしたと称する費用の返済を迫られ、やむなく兄嫁に家を抵当として引き渡す（第12回）。

このように、「糊塗世界」は、登場人物のほとんどが加害者となる悪人ばかりの小説である。純然たる被害者は継母に殺害される二人の幼児（第2～3回）、伝染病死する岑其身の妻万氏と冷遇される二人の遺児、留守宅を騙し取られる岑其身（第12回）など数名のみである。作中に登場する悪党は、[犯罪専従者]である弾子語り一家を装った盗賊団（第5回）や恠気から先妻の子供たちを謀殺する（第3回）黎小姐を除けば、ほとんどすべて官界に巣くう拝金主義である。登場する小悪党たちは、官位を得て実入りの良い実職と資産を求める地方官候補と、彼らの裏口工作の紐帯として取次や斡旋を引き受け、高額の謝礼で官位を買おうとする大官雇用人の二系統に分かれる。地方官候補は官職を求めて各地官界を渡り歩く中で、共謀し、暗闘する。四川官人に阿諛追従と出世術の師と仰がれる楊諤は、その奇想の才により官界遊泳術の一門を成している。彼の奇策を授かった‘弟子’たちは獵官に狂奔する。楊諤は独創的姦計により翻弄した‘弟子’たちの暗闘に幕を引く（第11回）。獵官を巡る四川官界の狂態は、まさしく人心を操る‘傀儡師’と‘絡繰り人形’の舞台であるといえる。

舞台を動かす大官雇用人は、門番、仕立屋、床屋、霊媒、占い師等である。彼らは大官に親しく仕え常に接見できる利点を生かして、役職待ちの地方官たちに大金で官職を斡旋している。広東撫台夫人お気に入りの霊媒宋媒婆と撫台の理髪師施子順の如く（第6～8回）、彼らも官界裏側の一勢力を成し暗闘する。彼らのほとんどは階層、地位の上昇を図る下層民である。

この小説は、文字も知らない買官買職者が政治を壟断する官界の実態、社会構造の変質を描いている。登場する役人は科挙を経ずに金で官位を買った者ばかりである。彼らは任官を果たすと役職を得るための口利きを求めて高官の使用人に取り入る。高官の使用人は獵官者からの口利き料で資産を蓄え、官職を買う。吳趸人は、成り上がり志向の買職者が横行する地方政治の実態を読者に訴えようとしたのであろう。

5) 「発財秘訣」(10回)(1907-1908)

『発財秘訣』は、「社会小説 発財秘訣 (一名 黄奴外史)」と題して雑誌『月月小説』第11号から14号(1907.11-1908.2)に連載された。章回体形式を採り全十回で完結している。作中時間は第二次アヘン戦争(1856)*7敗戦までの数年間、その十数年後から曾国藩、李鴻章の留学章程上奏(1872.2)まで、場所は香港、広東、上海である。構成を整理すると、先ず第一、二回で『明史』の記事を引き広東におけるヨーロッパ人との通商の歴史、アヘン戦争の敗戦(1840)で割譲された香港が発展するにつれ香港への出稼ぎが盛行し、出稼ぎ成金が出現するという社会背景が述べられる。続けて香港への出稼ぎを思い立った区丙という人物が資産を築くまでの経緯が描かれる。

第三回からは数年後の香港と広州が舞台となる。両広総督葉名琛*8が第二次アヘン戦争(1856)の最中に扶乩*9に耽る様と、区丙が戦局を金儲けに利用する様を対比して描き、広州陥落に至るまでの戦況を詳述する。

第四回以後舞台はさらに十数年後の香港、広東、上海に移る。第四回前半から五回前半まで、区丙の息子阿牛が、外国語を習おうとして洋行の下男陶慶雲はじめ‘外国絡みの儲け(洋財)’を狙う魏又園、花雪畝等の若者と知り合う過程を述べる。

第五回後半からは花雪畦が富豪になるまでの顛末がストーリーの中心となり、第九回まで花雪畦を軸に周辺にいる拝金主義者たちの様態を描く。

最後の第十回前半で欧米列強を崇拜し中国文化を否定して曾国藩、李鴻章の洋務政策を支持する拝金主義者たちに、冷雁士が異論を唱え、知微士が拝金社会についての解釈を述べる。

このように虚構の人物である拝金主義者たちによる虚構のストーリー(第一回後半~第二回、第四回前半~十回)の中に、史実を数箇所—アヘン戦争と広東、香港の通商史(第一回前半)、第二次アヘン戦争と葉名琛(第三回、第十回前半)、曾国藩、李鴻章の洋務政策(第十回前半)—を挿入するストーリー仕立てとなっている。第八回末の評語では‘作中人物を自分はすべて知っている(所叙諸人, 吾皆知之 p 54)’と述べ事実性を取り立てて強調しようとしている。

第十回前半になって李鴻章、曾国藩が百数十名の若者をアメリカに留学させるというニュース(1872.2)*10が話題に上り、買弁の陶慶雲が‘これで中国も良くなる(从此中国只怕也要大起来了 p62)’と喜んで‘件の年広東省都を失った例の総督は翰林出身宰相だったが何故外国人に敵わなかったのか。私が総督で敵軍将校と話し合えればこんなことにはならなかった。だから中国の文字などどうでもよいし、いっそ中国語など話せなくてもよいのだ(那年广东省失守, 那总督便是翰林宰相, 何以打不过外国人? 倘使我做了总督, 只要和那外国兵官说得明白, 何至如此? 所以我说不独中国文字没有一毫用处, 便连中国话也可以无须说得 p62)’と、第三回に描かれた第二次アヘン戦争における葉名琛の敗戦(1856)に話を振る。それを聞きとがめた落魄知識人冷雁士が、‘葉名琛一人ですむものではなく、琦善*11、牛鑑*12、伊里布*13、耆英*14 などなど数えきれない’ (又何止一葉名琛? 琦善、牛鑑、伊里布、耆英等輩, 也指不胜屈) ‘穀潰しの学者(读书飯筒 p63)’たちが、時事を知らず敗戦を重ねたあげく南京条約が締結されて通商成り、そのお蔭で皆さんが金儲けに勤しめたのでしようとあてこする(第十回前半)。

ここではじめて第一、三回に述べられているアヘン戦争と第二次アヘン戦争に関する故事が、第四回以後に展開する虚構のストーリーと因果関係にあったことが明らかにされる。作品に描かれてきた人物事件が連載の最後に一点に収束し、アヘン戦争並びに第二次アヘン戦争での敗戦に由来する拝金主義の蔓延、という作者の歴史観が提示されるのである。作者が最終回ではじめて提示した拝金社会の構図は、そこまで読み続けてきた読者に強い印象を与えたと思われる。

第9回までの登場人物はすべて、既成社会の恒例や人情、価値観を顧みず欲望達成を図る傀儡師型利欲迫及者である。ストーリーの中心となる人物は第1回から第4回前半までは区丙、第4回後半から第9回までは花雪畦である。区丙、花雪畝は“語学力なしで蓄財した突出した存在”と特記されている(第5、第9回)*15。最後の第10回で儒教倫理に忠実な冷雁士と、彼に金儲けの本質について分析して聞かせる占術士知微士が、拝金主義批判者として登場する。

場面ごとに粗筋を纏めておく。先ず第1回から第6回前半まで場所は香港と広東、第三回までの中心人物は区丙である。

[第1回-第2回]

舞台は香港で、アヘン戦争以後の通商が開けた社会状況を背景に商機を掴んだ区丙が財を成す。

[第3回-第5回前半]

第二次アヘン戦争が背景となる。区丙は香港に雑貨店を広州に舶来雑貨店を構え、親族食客を養う富豪となっている。ある日、以前に食客として匿った凶状持ちの関阿巨が英軍大元帥額爾金伯爵の間諜となって現れ、軍備や防戦の情報収集と提供を区丙に依頼する。区丙は両広総督葉名琛が扶乩を妄信し役所でも日がな一日神仙を拝んでいるという情報を流す。関阿巨の進言を容れて英軍は広州湾に張子の大砲を投じ沿岸を騒がせ敵陣を攪乱する。葉名琛は、清軍侵攻の際に江南の住民が、神前の青龍刀を水中に投じ、浮けば抗戦と決めて神託を仰ぐと刀が浮いたので抗戦し、清軍に殲滅されたという故事に鑑み、清軍に吉兆と喜んだ。自身も扶乩に訊ねると‘十五日無事（十五日就没事了 p24）’の託宣を得たので、‘十五日間は何事もない’と部下や郷紳の進言を悉く斥け防戦を怠る。区丙がまたその情報を流すと、英軍は十三日目に攻撃を開始し十四日目に省都を陥落させ葉名琛を捉える。区丙は突然の英軍侵攻に混乱する広州で、関阿巨の手配により早々に店舗営業証明を得て一人利益を得る（第3回）。

第二次アヘン戦争時の両広総督葉名琛と、英軍を指揮した額爾金伯爵は歴史上の人物であるが、関阿巨、区丙は虚構の人物で、その売国行為及び張子の大砲作戦部分は作者の脚色と思われる。葉名琛と扶乩にまつわる逸話は、広州陥落後に葉名琛を非難して書かれた実在する樂府三篇の内容に拠っている。色々な野史類に収録されている葉名琛の逸話*16も概ね同じ樂府が典拠となっているようである。作者はその三篇の樂府と葉名琛の詩作二首を‘『中国秘史』*17収録の詞句’と断って延々と引用し、回末の評語に代えている。

十数年後に、区丙の店に陶慶雲という十八歳の若者が洋行支配人のお供として現れる（第3回末）。区丙の意向で外国語を習おうと志した区丙の息子阿牛を繋ぎに、時代と人物は次の世代に移行する。洋行の書記を自称する陶慶雲は実は大部屋住まいでベルに呼ばれて伺候する下男にすぎないが、咸水妹（外国人相手の娼婦）の娼婦宿に居ついて語学力を磨き‘洋財’を掴む野心を燃やしている（第4回）。陶慶雲を訪ねた阿牛は娼婦宿で陶の兄の秀干、友人の魏又園、花雪畦と知り合う。間もなく陶慶雲兄弟と魏又園は、‘洋財’を得る機会により恵まれている上海に出立する（第5回前半）。

[第5回後半-第6回前半]

以後外国語ができず香港に残った花雪畦が中心人物となる。花雪畦は雑役や博打、子豚泥棒で糊口をしのいでいたが、子豚を盗んで市中引き回し、鞭打ちの刑を科せられる。阿牛の助けで香港に行き賣猪仔業（中国人を誘拐拉致して米国や東南アジアの鉱山、農場等の労働者として売る人身売買組織）への参入に成功すると、広東で賭場を開く。拘った客を香港の猪仔館に

連れこむという手口で数年間に三千元余りも稼ぐ（第6回前半）。ところが県知事の息子を売って手配され、上海に逃れる。

[第6回後半-第10回前半]

舞台は上海に移る。花雪畦は上海で旧知や新たに知り合った拝金主義者たちの行状をつぶさに見聞する。陶慶雲は外国人には正直誠実を心掛けて信用を得、洋行の副買弁に出世している（第6回後半）。折しも彼が花雪畦たちを招待した宴席に正買弁死去の知らせが届き、皆で祝杯を揚げる（第8回前半）。

舒雲旆は陶慶雲の入れ知恵で他人の墓地を勝手に外国人の永代借地に転用し強引な地上げを図る（第6回後半）。彼は酒樓の女将森娘の情夫で彼女の息子杭阿宝を買弁にするために外国語を習わせている（第8回前半）。

陶慶雲の兄たちは茶業者には品不足と偽って売り惜しみさせ、洋行には品余りと偽って買い控えさせ、相場を操作しながら買い叩き茶業者たちを破産や自殺に追いこむ（第8回前半）。有能な買弁は親戚友人知人の職を奪ってでも複数洋行の買弁を兼任して儲け口を増やそうとする。

豚の去勢屋蔡以善は上海に来て洋行の召使になる。店主は彼の儉約ぶりを気に入り、外国語を習わせ買弁に取り立てる（第9回前半）。

腕が悪く仕事のない大工の言能君は、博打で立て続けに当てて外国人御用達の建築屋を開業する。彼は金持ちになると、金を貸すまいと賭場仲間の魏又園を避ける（第9回前半）。魏又園は隣家の咸水妹に通う外国兵船航海士に無給で仕えて取り入り（第7回前半）、兵船の召使に雇われ（第9回前半）、数年後伝手を得て買弁となる（第9回後半）。

端木子鏡は巡防局百長の職の傍ら店を経営し、成金たちに公務上の便宜を図っている（第9回後半）。

彼らの所業に金儲けの奥義を学んだ花雪畦は袁という同郷人と共同経営で米屋を開く。袁が郷里を離れて独居し人付き合いのないのに目をつけ、隙を窺っていると、四、五年後袁が急死する。花雪畝は官界に渡りを付けた成金仲間たちと共謀して袁の息子を脅し、遺産を奪う。（第9回後半）。

買弁になった森娘の息子阿宝は賭場仲間の劇場客席係を金持ちに顔が利くという理由で相棒に抜擢し成功する。阿宝の同級生孫三宝も何故か彼を気に入った洋行店主の養子となって、外国語を習い公職を得るなど、若い買弁世代も育っている（第10回前半）。

[第10回後半]

このように、第十回前半まで金儲けしか眼中にない拝金主義者の处世術が描かれ、最後に花雪畦の店の書記冷雁士と「人品卑しからぬ」八卦見の知微士が登場する。第十回後半は伝統倫理に忠実な落魄知識人冷雁士の人生と、それに対する知微士の所見、冷雁士の脱俗で締め括られる。

異例の成功者として成金たちの間でも特別視されている区丙は‘料泡で富豪になった区旦那（第4回）’と十数年後にも名を知られ、花雪畦の成功は‘十人中一人もいない（第9回）’と成金たちの中でも一目置かれている。区丙の保護した凶状持ちの閩阿巨が英軍間諜となり区丙を引きこんで中仏戦争の敗戦を招く。ちゃちな子豚泥棒の花雪畦は、区丙の息子阿牛に助けられ香港の売猪仔業者に渡りをつけたのを機に、闇組織に参画し巨財を成す。拝金主義者たちは公権力を巻きこみ、花雪畦の横領行為に加担して徒党を組み組織犯罪の様相を呈するに至る。本来、単純に自己利益を図るだけの目的に発した二人の行為は、成金仲間を動かし歴史の方向性に影響を及ぼしていく*15

区丙、花雪畝は、民族国家の滅亡に結びつくほどの破壊行為を成した。区丙のために広州は陥落し中国の植民地化が加速された。花雪畦の参入した賣猪仔業や買弁業は多くの国民の人生を葬り、巨大な闇社会を形成し近代中国を蝕んだ。二人は、中国の植民地化、闇社会の形成に関与し、歴史規模の損傷をもたらしたのである。既述の如く、幼少時から小説家となるに至るまでの体験により、呉趸人の悪党像は“中国の危急存亡”との関連に収斂されていった。彼は原体験に則って、貪官汚吏と列強追従者を亡国の徒とみなして指弾し、警世を図ったのであろう。

区丙、花雪畝の行為は、意図せずして拝金主義者を操り上海闇社会の舞台を形成したといえる。ほかの作品でも、『二十年目睹之怪現状』の陸觀察は私欲に発する姦計で敗戦と国威の失墜を決定づける。苟才親子は利欲を満たすために躊躇なく嫁を売り父を殺害する。苟家の崩壊は、伝統的家族制度を母体とする国体の崩壊を象徴しているといえる。沈経武は私通、駆け落ち、背任、横領、詐欺等、店主や妻、友人、番頭等善意の人々への背信、背任により、質屋の徒弟から老舗薬店を名乗るまでにのし上がる。「近十年之怪現状」の魯徽園は氏名職業を自在に変えて各界を渡り歩き、各地で利禄を貪る。人間関係の基本的約定を無視する彼の处世方式は、社会の成立自体を危うくする。「瞎騙奇聞」における産室に他人の子を連れこみ出産したと偽る行為は、伝統的宗族社会の根幹を覆す行為である。政界、財界の制度や規範、良識、人情に捉われず、既成社会の慣行を覆していく傀儡師型利欲迫及者の奸智は、関係者を踊らせながら国体の根幹を揺るがす舞台を演出しているといえよう。その力の源は

“倫理的禁忌に捉われない”点であろうと考えられる。そこで、吳趼人の価値観に焦点を当て、作中で倫理道德について取り立てて語っている「発財秘訣」と『二十年目睹之怪現狀』を見ていきたい。

第二節 吳趼人の価値観

1. 「発財秘訣」 — ‘道德心’ と ‘獸心’

1) ‘道德心’

先述したようにこの小説は、アヘン戦争、第二次アヘン戦争の敗北、曾国藩、李鴻章の洋務政策を背景として、区丙と花雪畦二人の中心人物を軸とした拝金主義者たちの暗躍を描く。

先ず第一回始めに、作者は以下のような口上を述べている。

過ぎにし日を思い起こしますと涙がしとどあふれてきます。十人に九人は虚け者ゆえ、同じような大丈夫がどうしてもこの中から主人と下僕を判定しようということになるのです。ああ、皆々様、風氣！風氣！風氣って何だろうということになりますと、皆々様によればもちろん文明だとか学問だとかいうことになるでしょうが、それが違うのだとご存じない。小生の思うにただ‘利’という語こそ風氣なのです。しかも‘利’という語以外にいわゆる風氣というのはないのです。皆皆様、嘘だと思うなら私の話をお聞きください。

往事追回忆似珠，十人中有九糊涂；致令一样须眉汉，硬要从中判主奴。呵、呵、诸公！风气，风气，甚么叫做风气？据诸公说，自然是文明学问了。不知非也，据小子看来，只一个“利”字便是风气。而且除“利”字以外，更无所谓风气者。诸公若不相信，听我道来。

作者はこの口上で作品が拝金主義の時流を主題としていることを明らかにしている。「発財秘訣」の人物設定上の特徴は、‘洋財（外国人絡みの儲け）’を狙う拝金主義者たちの価値観と生き方を描いてストーリーが展開し、最後に彼らへの批判者である‘時流に見放された’落魄知識人冷雁士の価値観と生き方が述べられている点にある。

中心人物である区丙と花雪畦は売国と人身売買で成功し一目置かれている。共同経営者の店と資産を奪い大富豪となった花雪畦の開店祝いの宴席で、店の書記冷雁士は、蓄財能力のみで人と社会を値踏みする拝金主義に慨嘆する（第10回前半）。宴席を抜け出し知微士に財運の有無を尋ねると、知微士は冷雁士の生辰八字（生年月日時の干支）を鑑定し、これまで財運は巡っていたはずと答える。冷雁士は潤筆料、月謝などで十六歳から三十六才までに一万金を

得たが親の葬儀を行い、兄弟四人の学資と独立を援け、救貧施設に寄付し、貧乏知県のまま死んだ叔父の公私の負債を処理して遺族を救うなどに費やして使い果たし、食い詰めたという人生行路を語る。聞いた知微士は次のように答える。

閣下は読書人なのに天に従う者は生き、逆らう者は滅ぶとご存じないのですか。座して二十年間に一万金も得た閣下への天の待遇が厚くないとはいえません。閣下が天の賜を受けなかったのです。その一万金で貴人に諂い仕官の道に財を得ようとせず、商いに勤しみ権謀術策で財を得ようともせず、ましてや高利で人から搾り取ることもなくこのように浪費したのです。兄弟は五人いるのに、どうして一人で葬儀を取り計らったのですか。四人の兄弟は各自に責任があり、それが独立し学問するのに、あなたは何の関係がありましょう。それなのにすべて自分で背負いこむとは。叔父御の事に至っては、まったく無茶苦茶です。山東と広東は行けば千里で済みますまい。勿怪の幸い知らぬふりを決めこめばよろしい。家族が拘禁され、兄嫁どのやお従弟が死んだとしてあなたに何の害が及びましょう。それをそのように世話を焼くとは。善堂の件に至ってはなおさらわけがわかりません。世の中に貧民は数知れず、遍く衆生を救い、堯舜なお病むがごとし。あなたは堯舜を越えようというのですか。あなたのようにしていると餓死の日はもう間近ですよ。

閣下是个读书人,岂不闻顺天者存,逆天者亡?二十年中坐致者已达万金,天之待阁下者,不为不厚,阁下乃天与勿取,既不肯持此万金去巴结贵人,从仕路上发财;又不肯经营商业,从权术上发财,更不肯重利盘剥,向刮削上发财,却如此浪用。兄弟既有五人,丧葬之事,何必一人担任?四个兄弟,各有各事,成家读书,与你何干?却一一都揽在身上,至于令叔一事,更为荒唐。山东与广东,相去何止千里?乐得佯为不知。押迫家属。试问押死了令婢、令弟,可能伤及你一毛?却要你如此巴结。说道善堂一层,更是不知所谓了。天下穷人,不知其数,博施济众,舜尧犹病,你岂欲功迈尧舜么?若照你之所为,饿死就在目前也。P66

知微士は冷雁士を窘め、‘財を成したければ速やかに閻羅大王と相談して人心を抉り取り獸心に取替えなさい（你若要发财,速与阎罗王商量,把你本有的人心挖去,换上一个兽心 p67）’と諭す。それを聞いた冷雁士は‘たちまち心の中がすっきり冴え渡り（登时满心透彻通明）’一礼して鑑定料を置くと山中に隠れ行方も知れず、ここで作品は終わる（第10回後半）。冷雁士は貧窮に陥りながらも世過ぎに勤め、財運の有無を気に懸けていたのに、突如として隠遁を選択する。その急激なストーリーの反転は、処世と道徳は両立し難いと考える呉趼人の感慨を表しているといえる。

2) ‘獣心’

区丙と花雪畦の行為及び冷雁士の選択を、吳趼人は如何なる視点から描いているのだろうか。各回の末尾には平均二、三百字の評語が記されている。作者吳趼人は自身を‘余’、‘吾’、‘吾輩’、‘著者’、‘作者’等と記し、読者を‘閱者’、‘読者’と記して、回により異なる用語を用い、同じ回の評でも段落が変わると用語が変わることもある。雑誌連載時には評者が作者と別である場合には作品作者名の次に某某評と記されることが多いが、そのような記載もない。吳趼人周辺の友人、編集者等が原稿に書きこみを加えるケースなどもあり得たと思われるが、基本的に吳趼人自身が評者であったとしてよいだろう。さらに、作中随処（連載時は紙面の天部即ち地の文より上、単行本では地の文の後ろ）に平均十文字前後で作中人物の発言や行為を揶揄する科白形式の眉語が冠せられている。やはり発言者名の記載はない。それらのほぼすべてが拝金主義者の言動（第3回末兩広総督葉名琛に関連する樂府と詩を除く）を対象としている。例えば、洋行店員から買弁に出世した陶慶雲は外国人の要求にはすべて従い若い頃はこんなことまでやったのだと、魏又園が花雪畦にその内容を耳打ちする（第7回前半）。その箇所には‘結局どんなことだったのか、気がもめることだが想像はできる（到底甚么事，悶熱人也，然而可想矣。P43）’と眉語が冠せられ、さらに回末評語でも‘魏又園が陶慶雲について語ったことは金儲けの秘訣の重要機密に違いない、耳元で囁いたのでついにこの秘訣のみ伝わらなかったのは惜しいことだ（魏又園談陶慶雲事，至緊要关头，忽然附耳低声，此必是发财秘訣之最密者。惜乎其附耳而談，遂致此訣獨不得傳也 p48）’と繰り返して取り上げている。眉語評語は各回とも、拝金主義者を傍から眺める観客の立場、揶揄嘲笑の語調を採っている。

最後の第10回後半で知微士の‘人心を抉り取り獣心に取替えなさい（把你本有的人心挖去，換上一个兽心 p67）’という言葉に、冷雁士は遁世を決意する。作中で‘獣心’の語が使われているのはこの一箇所だけであるが、それまでの数箇所に‘狼心’という語が使われている。

○ある富豪の言うには“金を儲けたいなら残忍で悪辣でなくてはならない” そうな。

聞諸某富翁言，若要发财，非狼心辣手不可。P41（第6回評語）

○陶慶雲は言った：…世の中で残忍でない人間は一生かかっても金を儲けることはできない。

…须知世界上不狠心的人一辈子也不能发财。P50（第8回前半）

○ある成金の言うには“金を儲けるのは実に簡単なことだが愚か者には分からないのだ” そうな。“何で簡単なのです”と聞くと“心が残忍で、目が利き、手が速ければ

よい”のだと。目が利き、手が速いは才智の問題であり、やればできるかもしれない。

心が残忍となると道德の問題であって、それが我輩のずっと貧乏である所以か？

聞諸某暴发家之言曰：‘发财是极容易之事，世人自愚而不觉耳。’问：‘何谓容易？’则曰：‘只须心狠、眼明、手快耳。’眼明、手快关夫才智，或尚可学而致之，至于心狠，则关夫道德，此吾辈之所以终穷也乎？p54（第8回評語）

呉趼人はそれまで道德心の対立概念として用いていた‘狠心’を、作中人物最後の台詞となった知微士の言葉で‘獸心’に言い換えたと思われる。冷雁士が命運鑑定を依頼する場面にも登場する八卦見知微士の言葉は作品世界に於いて正邪を裁断する役割を担っているといえよう。冷雁士を‘獸心’の語により悟らせ隠遁を決意させる結末は、獸心により成り立つ拝金行為を非道德と否定する呉趼人の価値観を表しているといえる。

さらに第8回評語は次のように続く。

天道の説とは志を得ない者のためのつまらぬ言い逃れにすぎない、世の中には人事あるのみ天道などないと常に言ってきたのだが、そうとばかりもいえないのだ。「発財秘訣」で述べた人々を私は皆知っている。その子孫を見てみれば、いわゆる天道とはたしかに存在するかのようである。これもまた不思議なことである。

尝谓天道之说，不过为失意者无聊之谈助；世上惟有人事，无所谓天道也。然亦有不尽然者，一部《发财秘訣》，所叙诸人，吾皆知之。默察其后嗣，则所谓天道者，若隐然而见之，是亦一奇也。P54

‘天道’とは、この作品中では人心を獸心に換えるよう頼む相手として知微士の挙げた‘閻羅大王’（インドのヤマ神、仏教の閻魔大王、中国では人の生前の善悪を判定し地獄を管理する裁判官）の如き、人事を超越した絶対的存在の裁断を指していると思われる。呉趼人は‘狠心’から‘天道’へと話題を進めることで、残虐な富豪の子孫は天道の差配により志を得ないと読者に訴えているかのようである。小説『瞎騙奇聞』でも、彼は、悪事のもたらした重大な結末として関係者の子孫の杜絶を挙げ連ねている。清末の多くの読者にとり家門の隆盛は最重要課題であったはずである。拝金主義蔓延する社会に異議を申し立てようとする場合、家系の凋落、断絶はそれなりに有効な警句となり得たであろう。

第9回評語では、客死した同郷人袁の資産を横領し貧しい友人魏又園を避ける花雪畦の所業を挙げて‘富豪となる資格を備えている’と評し、‘士君子が友人をわが命と考えるよう

なことは、実に、貧相な乞食のなすことにすぎぬのだ、悲しいかな！（若士君子之以朋友为性命者，实穷相乞儿所为耳。悲夫！p60）’と述懐している。

第8回、第9回の評語は、呉趼人が当時の社会状況を、不道德であれば富豪となれるが次代に続かない、道德を遵守し士君子であろうとすれば乞食となる、いずれも救われない、と分析していたことを表している。冷雁士は、儒教道德を行動規範とし、一族を救済し、慈善事業に携って窮迫する。同族の孤児を救済し救国運動や社会事業*18に挺身した呉趼人も、同様の人生行路を歩んだ。冷雁士像は自身の投影であったといつてよいだろう。‘悲しいかな’という感想には、道德心が廃れ狠心、獸心の所業の横行する拝金主義社会を否定する呉趼人の心情が吐露されているといえよう。

記述の如く「発財秘訣」は中国で初めて資本主義社会の到来に言及した小説である。呉趼人は、倫理的価値観が崩壊し、欲望が制御を失い暴走する、近代社会における非倫理性、人間性の喪失について問題提起した最初の作家であったといえる。

2. 『二十年目睹之怪現状』—儒教型行動規範

『二十年目睹之怪現状』（108回）（1903－1909?）は章回体形式で、212に上る単独の話題により組み立てられている。作中に登場する人物は、通行人や召使い等主体的役割を担わない人物や軍隊、盗賊等集団を除き、四百三十一名に上る。解放後の文学史では、その人物群をただ思想面における肯定的人物（正面人物、被抑圧者）と否定的人物（反面人物、抑圧者）という視点でのみ論じてきた。論者は、見る（目睹）側と見られる（被目睹）側という、作品世界内の立ち位置により、作中人物群を大きく分けることができると考える。

魯迅は『中国小説史略』でこの作品を、深い追及も含みもなしに、あれこれ話題を並べ悲憤慷慨して社会事象を‘譴責’しただけの小説と評した。その記述が『二十年目睹之怪現状』評価についての民国文壇における定説となった。以来、『二十年目睹之怪現状』研究は、主な話題の概説、正面人物、反面人物の色分けに終始し、作品全体の構造については議論されることがなかった。しかし、各‘話柄’はただ並べられているだけではない。論者は、見られる側の言動と、作中でそれを見る側の人物の目、さらに、それらを見る作者の目という三層の視点により描かれていると考えている。その中に自ずと、作者の社会観、人生観が現れることになる。そこで、作中人物の立ち位置による整理を試みてみたい。本論は『呉趼人全集』版第1、2巻を使用した。

1) 見られる側

見られる側は、二種類に分かれる。一種は社会の‘怪現状’を演じる当事者たち、九死一生の言う‘蛇虫鼠蟻’、‘豺狼虎豹’、‘魑魅魍魎’の如き人物群である。四百数十名を数えるこの人物群の言動は、清末の情勢を背景に社会のアウトラインを描き、社会史の如き様相を示している。既述の如く、彼らは実在性が高く高官や豪商や文人等に多くのモデルが指摘されている。

もう一種は、四人の典型人物—清官の蔡侶生、貪官の苟才、賢婦の従姉、憂国の士王伯述である。彼らは当時の知識人の处世や思想を象徴する人物像といえる。清官蔡侶生は弟や同僚に陥れられ、貪官苟才は息子に殺害される。二人の運命は正義の有無、人格の優劣に関わりなく、いずれも救いのない官界の象徴として描かれているように見える。従姉は経書を再解釈し社会の通念や束縛を‘宋儒の毒’と批判する。王伯述は役人を辞め、救国に役立つ実学書を売る。彼らは改革を訴える当時の時論を代弁する存在であるといえよう。

2) 見る側—怪現状評者

(1) 周辺人物の見解

見る側は‘九死一生’と号する語り手の‘我’とその兄貴分の呉継之に代表される常連人物である。作品全体が‘我’の一人称で語られる。最後に‘九死一生’は、‘私は十数歳から徒手空拳で世間に出、呉継之との二人三脚で百万銀以上も稼いだ。…が今また倒産した（我从十几岁上,拿了一双白手空拳出来,和吴继之两个混,我们两个向没分家,挣到了一百多万,…此刻并且倒了 p932）’と回顧している。この言葉は、‘二十年’が‘九死一生’と呉継之の半生であったことを表している。二人の周辺には、呉継之の幕僚の文述農、共同経営者の管徳泉、金子安、医者の方瑞甫、発昌機器廠主の方佚盧など、怪現状を話題にし論評し合う‘見る側’の人物が配置されている。彼らの論評には当時の世評や作者の見解が反映されている。方佚盧が作者と同時代の上海に創業した実在人物方逸侶（1856-1930）であること、作中に設定された信頼関係などから、これらの人物像には、作者と近い友人知人との日常的、心情的交流、その観点、見識などが投影されていると推測される。‘九死一生’と呉継之は、特定の人物ではなく作者自身の過去から執筆当時に至る環境、体験などを織りこんで造形した人物像であろう。そのように推測させる理由は、二人の以下のような境涯や人間性にある。

(2) ‘九死一生’—共同体意識

『二十年目睹之怪現狀』は第 1 回で一人の男の宣伝する‘九死一生’の筆記が出版に至る経過を述べている。第 2 回から第 108 回が筆記の内容である。父親の死で学業を中断、十六歳の時、伯父の任地南京に来た‘九死一生’が、同郷の役人呉継之の書記となる。やがて呉継之の始めた事業の共同経営者として各地を往來、見聞した怪現狀を記録する。最後に‘九死一生’は見聞を記録した筆記を文述農に託す。読者はここではじめて第 1 回の男が文述農であると知るという設定である。作品全体の語り手である‘九死一生’は自身の見聞を記すとともに文述農はじめ周囲の人間はすすんで見聞を提供する。‘九死一生’は自身の見聞と他の語り手から聞いた伝聞を記述し、すべての話題がそのフィルターを通して‘怪現狀’として読者に提供される仕組みとなっている。

‘九死一生’は、社会の汚濁を否定し、貴賤に捉われない果敢で率直な人物として描かれている。彼は七歳から伝統教育を受けた（第10回）が、官界では‘おべっか(卑汚苟钱)’と‘血を見ず人を殺す(放出那杀人不见血的手段)’腕がいたから、‘役人は人のする仕事ではない(这个官竟然不是人做的!p408)’（第50回）と、科举を受けようとししない。彼は信義の有無に価値基準をおき、‘不公正には私は水火も辞しはしません(这种不平之事,我是赴汤蹈火,都要做的 p267)’（第34回）と自負している。その視線は権勢を忌避し、庶民の災難を気遣う。例えば、深夜治安巡視兵にタダ食いされる屋台の団子屋や、官兵に作物家畜を強奪される村人に同情し（第53回）、大商人苟鸞楼（第55回）や古雨山（第63回）の損害を‘剥ぎとった財貨は失うべくして失った(剥削来的钱,叫他这样失去 p452)’、‘垄断发财所致么?p523)’と喝采する。また叔父が二人の幼児を遺し客死すると、顧みない伯父に慨嘆し、‘生前の恩義を思わずにいられましょうか(难道就不念一点恩义么?p921)’と遺児を気にかける弓兵に感動する（第107回）。“九死一生”は伝統教育を受けた士人階層に属しながら官界や権門を志向しない庶民意識の強い知識人として描かれている。

だが‘九死一生’の行動規範は、単に無差別広範な正義感や義侠心ではなく、‘世交（父の代からの交際）の人（の嫁があわや妓楼に売られるという危機を）救わずにおれようか（岂有世交的妻子被辱也不救之理！ p267 第 34 回）’、‘祖父の血脈（を引く従弟）を守らずにおれようか（同是祖父一脉,我断不能不招呼的 p918 第 107 回）’といった身内意識である。‘九死一生’は一族を中心に身内と認める周囲の人間に施される相互扶助の理想を価値基準として、自分を再三欺いた尤雲岫を亡父の友人であったという理由で援助する（第 65 回）。父の遺産を着服した伯父にも‘弟の蓄えた金を兄が使うのは、一家も同様で外の人間に使われるのではありません’（这钱不错是我父亲一生勤俭积下来的,然而兄弟积了钱给哥哥用了,还是在家里一般,并不是叫外人用了,这又怕甚么呢？ p182 第 24 回’）と鷹揚に構えている。それに対し、単なる隣人にすぎない符最靈が孫の符弥軒に虐待さ

れていても、同情を越える義挙に出ることはない。それどころか虐待が暴力沙汰に及ぶと、巻き添えや商売への支障を慮り急遽転居してしまう（第74回）。「九死一生」が「水火も辞さない」かどうか決定する規範は身内か否かにあるのである。このような規範は、解放以前の社会における史実の分析により、中国社会に浸透する伝統理念として、歴史学では「共同体意識」とか「仲間主義」と呼ばれている。はじめ「九死一生」は、この伝統理念に適った良識に照らして行動していたといえる。彼はそのような理念を強圧的権力や偽善的礼教と対置すべき「俠」、「忠厚」を体現する理想的行動規範と捉えていたようである。

しかし「九死一生」は一族の圧力により共同体の実態が利害関係にあり、同族間の連帯扶助を大義名分とした収奪であると知らされていく。族長は租廟修復費の名目で父の遺産の強奪を謀り、大叔父や尤雲岫は仲介料を目当てに「九死一生」の田地を郷紳の李家に斡旋し売却を迫る。「九死一生」母子は土地管理を大郷紳呉継之一族に託し、高官の身内となって伯父を頼ろうという一族の魂胆を利用し、遺産を伯父の運動資金に使うと騙して離郷する（第18―第20回）。その後、郷里の一族は租廟を破壊し廟内の器物まで売却したことを知り嘆息する（第29回）。後に「九死一生」はさらなる援助を強要する尤雲岫に「（父の葬儀に駆けつけた）恩をきせるならむしろ（遺産をくすね田地まで食べ物にしようとした）お前の肉を喰らってやりたい（我巴不得吃你的肉呢 540）」と絶交する（第65回）。郷里の身内との決別と共に「九死一生」の伯父への身内意識も変化していく。はじめ彼は亡父の番頭の忠告を他人の言として斥け伯父を身内の者（「自己人」）と信じ、遺産を奪われても容認する。しかし、伯母と伯父の妾たちが相次ぎ変死し「うちの家からこんな醜聞を出し人の噂に上った（自己家中出了这种丑事，叫人家拿着当新闻去传说 p184）」り（第24回）、伯父が借金を返さず「うちの人間がこんな面目ないまねをした（自己家人做下这等对不住人的事，也觉得难为情，…p372）」（第46回）のを恥じる。伯父が亡妻の姪を妊娠させるに及び、ついに自分は「ただの同姓にすぎません（同姓罢了 p686）」と同族関係を否認するに至る（第82回）。

その間、両者の見解の相異は次第に不信感を醸成し決裂へと向かう。伯父は科挙を受けようとしないう「九死一生」を無法者（「野子」）と罵る。また「家を離れた人間を構うな（不必去找他。家里出来的人，是惹不得的 p223）」と同族の小七叔を無視する伯父に、「九死一生」は「どういう量見で一族の人間を世話しないのか（我伯父是甚么意思，家里的人，一概不招接，真是莫名其妙用心之所在，还要叫我不理他，这才奇怪呢！ p225）」と不信感を募らせる（第29回）。叔父が北方の任地で死ぬと「兄弟三人、遺産を均分した後は互いに交渉を持つ必要はない」という伯父の指示に従わず、遺された二人の幼児を引き取りに行く。伯父は臨終に当たり遺言で叔父の子を嗣子に指名する。

‘九死一生’は遺言を容認すれば‘冥界で…叔父に合わす顔がない(倘使承继了伯父,叫我将来死了之后见了叔叔,…叫我拿甚么话回答叔叔!p932)’と伯父の後祀を叔父の子に継がせない(第108回)。

かくて『二十年目睹之怪現狀』は、身内間の相互扶助を行動規範としていた‘九死一生’が同族間での祭祀継承の大前提を自ら破るという結末を迎えるのである。共同体についての理解において、‘九死一生’は相互扶助の実践を徳行と見て重んじ、伯父は財産を始めとする実利的側面を見る。そのような身内意識のずれに両者の関係の破綻は起因していたといえる。この小説の作中人物には多くのモデルとされる人物の名が挙げられ、伯父や叔父一家についても実在の親族関係との一致が検証されている。伯父の遺産着服、叔父の遺児救済をはじめ、危うく妓楼に売られるところだった亡父の友人の嫁等について、吳趼人は自身の実体験として詩文に記している*18。‘九死一生’の共同体理想が崩れて行く過程を通じ、吳趼人は連帯扶助の名の下に支配収奪を正当化する社会構造への批判を表明したといえよう。

(3) 吳繼之—儒教型‘善行’

吳繼之は名を景曾といい‘九死一生’より十歳年長、同郷同門の先輩で、幼少時の‘九死一生’に学問を教えた。吳家は‘省有数の富豪’(第21回)で大地主としての財力を基盤に、代々商業を営む一方、官人を輩出した。吳繼之も進士に合格、江寧知県候補として南京に配属される。やがて江都県知県の実職を得(第44回)‘総督巡撫の地位もかたい(将来督抚也是意中事。P525 第63回)’と、将来を嘱望される。しかし彼は、派閥政治(第14回)、慣行化した収賄(第10回、第24回、第46—第47回)、売職(第5回)、科挙の不正(第42—第43回)など官界の弊習、政府高官の多くがアヘン中毒に陥る体たらく(第3回)、列強諸国との折衝における責任回避(第14回、第16回、第47回)といった政治の汚らしさ(‘齷齪氣’(第60回)を疎んでいた。そこで賄賂の要求を退け解任された(第59回)のを機に、‘(官途について)亡父の期待に応えたから、今後の人生は自分の意志を通したい(寒家世代是出来做官的,所以先人的期望我是如此,我也不得不如此还了先人的期望;已经还过了,我就可告无罪了。以后的日子,我就要自己做主了。P492)’、と退官し、意思に適った人生を模索する(第60—第61回)。
‘上海は開けた地’だから時事に通曉しやすかろう(上海是个开通的地方,在那里多住几天,也好多知点时事 p492)’と上海に移転するが、‘上海に居て数年、官界のあり様をよくよく見れば、外国人の覚えが良ければ出世できるのだ。庶民が苦しもうが冤罪を被ろうがわれ聞せずだ(我在上海住了几年,留心看看官场中的举动,大约只要巴结上外国人,就可以升官的。至于民间疾苦,冤枉不冤枉,那个与他有甚么相干。P558)’(第67回)といよいよ政治への失望を深め、

官界復帰の誘いを拒絶する。彼は‘九死一生’とともに全国規模の商業活動を展開するが、最後に倒産する（第108回）。

このような呉継之の人物像は分岐点にある当時の社会を映している。まず、大地主で科挙に合格、高官となり、商業に進出する経歴は、地方政治を掌握する政治勢力であるいわゆる郷紳の一般像を示している。洋務運動や変法維新運動を担った‘改良主義者’の母体の多くは、郷紳階層出身者である。呉継之の政治批判は清朝政権への郷紳階層の不支持という、当時の社会情勢を表しているといえよう。次に、彼は官界から商人に転身する。通常官人と商人は‘紳商’という如く出身母体を同じくし、相互扶助の関係にある。ところが呉継之は家系の要請から入った官界と‘自分の意志’で選択した商業を対立的に捉えている。その姿勢は、官界での利権に依存しない独立した企業家としての自覚を現しているといえよう。簡夷之は『二十年目睹之怪現狀』前言で

『二十年目睹之怪現狀』の呉継之は商業資本を活用しているうちに資産階級に転化した地主である。このような社会階層はまさしく改良主義の基礎であり、わが国封建社会における文学作品の中に、はじめて現れたといえる。

『二十年目睹之怪現狀』 正在通过商业资本的途径向资产阶级转化的地主,这种社会力量,正是改良主义的基
础……在我国封建社会的文学作品当中,还是第一次出现: (人民文学出版社 1959.7 p320)

と指摘している。伝統的に官僚経験者は出身地域において、利権特権を活用し商売をして資産運用を謀り地方勢力を形成してきた。旧小説に登場する有力者の多くは、そのような中国官人の母体となる郷紳、紳商階層であろうと思われる。このいわゆる‘紳商’が小説に登場するのはおそらく初めてではない。しかし、それに対し呉継之は、官僚の立場を忌避絶縁し、理想の実現手段として商業を選択した商人である。そのような人物形象が小説に登場するのは、『二十年目睹之怪現狀』がはじめてであろう。呉継之は自身の理想について以下のように述べている。

私はある人間が善行をなすには先ず身近から始めるべきだと思う。第一に父母に子道を尽くし兄弟に弟道を尽くし同族親戚に血縁縁者としての道を尽くしそれから友人に友道を尽くす。孝養が不足していないか、すべての兄弟、親族、友人が充分に自立できている

かどうか問い、余裕ある者はよし、貧しく自立できない者には、適切に世話して餓え凍える心配をなくす。なお余力があつてこそ外部に慈善を施せるのだ。

我以为一个人要做善事,先要从切近地方做起,第一件对着父母先要尽了子道,对着弟兄尽了弟道,对了亲戚本族要尽了亲谊之道,夫然后对了朋友要尽了友道,果然自问孝养无亏了,所有兄弟、本族、亲戚、朋友,那能够自立、绰然有余的 自不必说;那贫乏不能自立的,我都能够照应得他妥妥贴贴,无忧冻饿的了。还有余力,才可以讲究去做外面的好事。P112 (第 15 回)

亡父は生前五万銀の田地を買い一族を扶養する義田とした。それから商店を何軒か開き、貧しい同族を呼んで才能に応じ仕事を与えた。だからうちの一族に、餓え凍えるものはなくなっていると思いたい。

先君在生时,曾经捐了五万银子的田产做贍族义田,又开了几家店铺,把那穷本家都延请了去,量材派事。所以敝族的人,希冀可以免了饥寒。(第 15 回 P113)

呉継之の信条の基調となっているのは、“修身齐家治国平天下” 或いは“主たるの道は近きを治め、遠きを治めず” といった儒教型理想主義である。彼の行動規範は儒教精神に則った伝統的士大夫としての価値意識であった。当然、その商業経営の眼目は‘親族友人が自立するのを援ける’ ことにあった。その概要は以下の如くである。

【総資本】二万銀（呉継之一万五千銀、’九死一生’二千銀、他不詳）

【資本主（‘東家’）】呉継之と’九死一生’

【共同出資者（‘夥友’）】管德泉（本店経営者 ‘当事的’）金子安（本店の会計係 ‘管帳的’）

【業種】茶、薬等長江流域の特産物を北京、天津、牛庄、広東等へ出荷する仲買店

【経営形態】上海に本店（‘總号’）南京、蘇州、蕪湖、九江、漢口、鎮江、杭州に駐在地（‘坐庄’）として支店（‘分号’）を置く。各支店に支配人（‘經理’）として呉亮臣、呉益臣、呉味辛、呉作猷等、呉継之の一族の人間を派遣、‘九死一生’が帳簿の検査に各支店と上海を往来する。

このような同郷の弟分‘九死一生’との共同経営、従業員との共同出資制、同族による経営といった特徴を持つ商業形態は、中国商業の伝統的体制とされる。今堀誠二はこの経営形態を‘商業資本共同体’と呼び、それが地縁血縁の人事を土台としていた為に‘近代的法人’に改変できず‘資本主義への過程を進み得なかった’*19と指摘する。呉継之が各支店に派遣した同族の内、呉作猷は‘呉継之の同族の叔父で、…自分の開いた店はすべて身内で経営

したいという継之の意志により、漢口支店に派遣され二年余になった’（第82回）が、最後に店の金五万銀を持ち逃げ、その結果、全支店が倒産に至る（第108回）。このように『二十年目睹之怪現狀』は、儒教理想に基づく身内主義を商業経営の基軸とした呉継之の挫折を結末としている。

呉錦潤「命意在於匡世」は‘九死一生’と呉継之について、‘力量不足’ではなく‘時代の悲劇’により破産に至った‘民族資本家’形象という見解を示し、‘小説中にかつて現れたことのない’斬新な人物類型の造形と評している*20。確かに、倒産という結末は、新たな社会層の定着の困難さを物語っている。しかし論者は、その原因は‘時代の悲劇’ではなく、資本家意識という基本的問題に根ざしていたと考えている。呉継之は、儒教的価値観から‘人脈を支柱とする商業形態’を踏襲して背信に遭い、そのために倒産した。呉継之の人物像は今堀の規定するところの‘資本主義型法人経営者としての社会的立場を築くに至らなかった伝統的商人’のあり方を体現している。

3) “見る側の者”を評する作者の目

作者呉趼人は、登場人物の立ち位置を分けて『二十年目睹之怪現狀』の作品世界を創出した。彼は、社会状況の実態及び社会構造の本質、両方面の糾明を意図して、そのような創作方法を採用したのであろう。『二十年目睹之怪現狀』の粗筋は“見られる側”の人物の言動になる多くの話題を積み重ねて組み立てられている。それらの話題には、政治経済の腐敗矛盾、道徳人情の衰微が反映されている。呉趼人はそれらの事象を通して、体制や意識の変革を必須の課題とする中国社会の現実を訴えた。

呉趼人はさらに、その事象を“見る側”の人物を設定した。それらの人物像には、自身と周辺人物の認識見解を反映させたと思われる。‘九死一生’や呉継之たち“見る側”の人物は、儒教理念を理論的支柱とする人的地的結合と相互扶助に価値を見出している。彼らは作中で政治の疲弊、社会の荒廃について論議し、官僚機構の腐敗、村落や宗族、家庭内の抑圧支配といった要因を指摘する。しかし彼らの目は、眼前の悪弊に向けられ、その根幹となる宗族を中心とする伝統社会にまで及ばない。‘九死一生’は商売そっちのけで従弟の救出や伯父の葬儀に奔走し、呉継之は、経世済民の理想を实践しようと同族を重用し、裏切られる。‘九死一生’と呉継之は、地脈血脈の相互扶助理念を絶対価値として善行を積んだ末に、裏切りに遭い挫折を喫する結末となる。

作中にはさらに、そのような社会の構造、実態の全容を見る“作者の目”が設定されてい

る。“見られる側”の人物の言動及び“見る側”の人物の信念は、清末社会の人々の普遍的行動様式であったと思われる。多くの実在人物がモデルとして検証されているようにそれらの事象は呉趼人自身の実体験である。‘九死一生’の同族についての記載の多くが、呉趼人自身の実体験であることもすでに検証されている。‘九死一生’の閱歴には呉趼人自身の閱歴が投影されている。従って身内意識や儒教理想は本来、彼自身の遵守してきた価値観であったと思われる。

『二十年目睹之怪現状』は‘九死一生’が第107回で唐突に以下のような感慨を述べ、第108回という中途半端な数で最終回となる。

‘ああ、他人の事をこのうえ語る必要もないだろう。私自身の事を記しておこう。私はこれから述べる事を記そうとする時、心中ほんとうにつらい。この事は私の生涯第一の失意であったからだ。それで、筆を持てば先ずつらいばかりなのだ

唉!他人的事,且不必说他,且记我自己的事罢。我记以后这段事时,心中十分难过,因为这一件事,是我生平第一件失意的事,所以提起笔来,心中先就难过)(第107回 p918)’

‘九死一生’のこの述懐のもとに、山東の叔父の死と遺児たちの救出、宜昌の伯父の死と葬儀の紛糾、事業の倒産、帰郷という‘私自身の事’が一気呵成に語られて物語は終わっている。

‘九死一生’自身の物語と、実際の呉趼人の同族体験について、関連事項も含めて以下に纏めてみる。

【第2回】

‘九死一生’：商売を営んでいた‘九死一生’の父が杭州で客死する。伯父に相当額の遺産を奪われる。

呉趼人：実際には、父親は下位役人（江蘇補用巡検）で、客死の地は寧波である。わずかな金を遺したが、五叔に奪われた。細部の相違を除いて、作中の記述は概ね事実に即している。

【第17—第20回、第29回】

‘九死一生’：郷里の一族は‘九死一生’の家産を狙う。阻止されると、租廟を破壊し器物を売り払う。

吳趼人：この記述も概ね事実であろう。後年、李育中により、吳一族が養い手を失い、都市貧民となって離散したことが確認されている（李育中「吳趼人生平及其著作」）。

【第 107-108 回】

‘九死一生’：山東に任官していた叔父が客死し、二人の幼児が残される。伯父に三度指示を仰ぐが無視され、ようやく届いた返信には、関わり合う必要はないと記されていた。

‘九死一生’は一人で山東に赴き、従弟たちを引き取って帰る。作中では生前の叔父の厚意を恩に着る弓兵が、‘九死一生’を従弟たちの養われている外祖母の家に案内してくれる。

吳趼人：実際には、1890 年、吳趼人 25 歳の時、やはり下位役人（直隸巡檢）の三叔が天津で死去した。五叔が関わりを拒否する経緯は小説中の記述と同じである。吳趼人は数カ月分の給料を前借りして遺児たちを引き取りに出向いた。二人の幼児は貧民窟に捨てられ乞食になっていた。吳趼人は従弟たちを上海に連れ帰る。（「清明日偕瑞棠弟展君宜大弟墓，用辛卯『都中尋先兄墓』韵」（八首）

【第 108 回】

‘九死一生’：叔父に続いて伯父が病死する。伯父は二人の遺児の一人を継嗣に指名していたが‘九死一生’は拒否する。葬儀の後、伯母の一族は伯父の借金を‘九死一生’に肩代わりさせようとする。‘九死一生’は遺児救出に奔走する間に倒産したことを告げて断る。作中で、‘九死一生’が同族への不信、失意を抱くのは、世過ぎに出て二十年を経過し、商売に成功し、順調だった半生が倒産により暗転する直前である。

吳趼人：実際には、五叔が死んだのは 1896 年、三叔の死の 6 年後で、吳趼人 31 歳の時である。兄のほうの従弟は、その三年前にすでに病死している。いずれも彼が文筆活動に入る前で、未だ江南製造局に勤め、旅費にも事欠くほど貧しい時期だった。即ち、‘九死一生’一族の顛末は執筆開始以前からの決定事項であった。

興味深いのは、作中の記述のほうが事実よりも美化されている点である。作中では貧しい外祖母一家が従弟たちを養い、義に厚い弓兵が行く末を気遣っている。事実は小説よりも苛酷で、叔父の妻の係累が遺品を持ち去って逃げ、二人の幼児は貧民窟に数カ月放置され衰弱していた。吳趼人は作中に、情義に厚い田舎の人々を造形し、幼児を養う架空の親類との感動的な別れの場面を念入りに描いている。その上、帰途に‘好漢’と呼ばれる荷物のみ奪い人に危害を加えない盗賊団に遭遇して荷物と金を奪われるが、幼児の衣類を置いて行くように懇願し、盗賊団が聞き入れるという場面まで付加している。吳趼人は、学問をし為政者側と

なり富を得る士大夫階層や、富によって為政者側となる富裕層の無情と破廉恥と、貧しく文字を知らず統治される側にある下層民の厚情、倫理観を対比させようとする意図から、これらの脚色を施したのであらうと思われる。

このように『二十年目睹之怪現狀』は、淡々と社会の事象を記してきた後、第 107、108 回で不意に‘生涯第一の失意’である家庭争議を述べるホームドラマに変じ、作品の統一感が失われ唐突に終わる。『二十年目睹之怪現狀』は第 45 回以降を分冊で刊行していた。呉趼人は 1910 年に急死し最終刊は死後に刊行されたので、最終回をいつ書いたか定かでない。しかし、死の前年の 1909 年に続編として「近十年之怪現狀」を連載し始めていることから、おそらくその前後に『二十年目睹之怪現狀』を稿了したものと考えられる。

終幕の唐突感は否めないが、第 108 回末尾で『二十年目睹之怪現狀』九死一生筆記’を文述農が預かり、第 1 回で筆記を託された‘死里逃生’が出版するという出だしにもどる仕組みは、構成力の巧みさを見せて面目躍如の感がある。その点から見て、最後に構成が破綻したのではなく、連載当初から予定していた結末の付け方であったと推定される。この結末は、百鬼夜行の世を演じる“見られる人々”の非人間性、それを“見る人々”の儒教道徳に則った生き方の挫折を見届けた“作者の目”を表しているといえる。“見る人々”の挫折する終幕は、呉趼人自身の人生を体現しているといえる。“見る側”の人物と同様の信念を抱いて失意を味わった自身の人生への屈託の表れでもあったのであらう。作者呉趼人は‘九死一生’に自身の人生を仮託したといえる。

自身を仮託した‘九死一生’の閱歴の最期に、一族にまつわる回想を叙述して作品を終わっている点で、主人公は作者自身、或いは作者を投影した‘九死一生’であるともいえよう。後述するように呉趼人は、郷紳を核とする地方勢力は立憲制度を樹立するにあたっての障碍となるとの見解を表している。失意の末に彼は、地縁血縁を拠り所に連携運営される経済活動、地方政治、官僚体制という、中国社会の基本構造そのものに対する懐疑に行き着いたと思われる。

註

- 1 P. ラディン・K. ケレーニイ・C.G. ユング著『トリックスター』（皆川宗一・高橋英男・河合隼雄訳 1974. 9. 25 晶文社）（晶文社 1974. 9. 25）は文化人類学の側面から、‘秩序や権威に従わず欲望のままに既成の価値を破壊しながら新たな価値を生み出していく行動様式、狡猾で残酷かつ無邪気で滑稽な性格、相手を出し抜く独創的

発想、禁忌を畏れない欲望追及の姿勢、滑稽尾端な振る舞いで笑いを誘う道化的個性’といったトリックスターの性格的特質を抽出している。呉趼人の小説に登場する小悪党の姦計に特徴的な、欲望の追求、非倫理性、自己中心性、非情、関係者や状況への無関心、新局面の展開といった性格は、そのような‘トリックスター’の特質に合致している。呉趼人の小説中に描かれた下層民小悪党の言動は程度の差はあれみなトリックスターの特性に合致した要素を備えていると思われる。ただ、P.ラディン他『トリックスター』は神話的視点に基づく研究の成果である。該書によれば、トリックスターは本来、原初の英雄や創造者、神話的存在であった。呉趼人の描く下層民小悪党の悪事には強い社会的影響力が見いだせるが、トリックスターのもたらす絶対的創造性とは異なっている。本論においては、“狡猾かつ滑稽な性格”、“既存の倫理や良識に捉われず自己の欲望を追求”する小悪党の悪事を、人の心を操って利益獲得を画策する悪党について、呉趼人自身の用いた‘傀儡の糸を操る者’の用語を借用し、“傀儡師”と呼んだ。

トリックスターについては以下の著書を参考にした。

P. ラディン・K. ケレーニイ・C.G. ユング著『トリックスター』皆川宗一・高橋英男・河合隼雄訳（晶文社 1974 年 9 月）、山口昌男『道化の民俗学』（岩波書店 2007 年 4 月）、J・P・B・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング「トリックスターの起源」宮崎恒二他訳『オランダ構造人類学』（せりか書房 1987 年 12 月所収）、井波律子『トリックスター群像』（筑摩書房 2007 年 1 月）

2『趼塵筆記』<神姦><紀痛><制煤油><果報>（宣統二(1910)年上海広智書局）（『呉趼人全集』第 7 卷所収版を使用）、『上海三十年艶跡』<金巧林><後二怪物>（原名『胡宝玉』光緒三十二(1906)年上海楽群書局）『呉趼人全集』第 7 卷所収版を使用、『趼塵詩刪剩』<課弟><清明日借瑞棠弟展君宜大弟墓, 用辛卯「都中寻先兄墓」韵(八首)><七月十九日夜接季父电, 诏赴*陵省疾, 即夜成行, 戚友知己都来不及走告, 赋此留别(二首)><宜昌奔季父丧归, 道出荆门, 纪以一律>（『呉趼人全集』第 7 卷所収版を使用）、『二十年目睹之怪現状』第三回：（先に船中で遭った役人を詐称する盗賊が実は盗みを副業とする役人であったことや‘野鷄道台’、命婦の売春の話題から官界は‘娼婦と盗人の溜り場’（男盗女娼）であると感じ入る件に）‘两个道台，两个道台夫人，恰是正反对，写来好看杀人，我闻诸人言，是接实事，非凭空构造者’という評が付されている。

3 高伯雨「『二十年目睹之怪現状』索隱」（『呉趼人全集』第 10 卷所収）、陳幸蕙『『二十年目睹之怪現状』研究』（国立台湾大学出版委員会 中華民國七十一年六月）、王俊年「呉趼人年譜」（『我仏山人文集』第 8 卷所収（花城出版社 1989 年 5 月））、

4 包天笑曾经向呉趼人请教小说作法, 包氏说: “他(呉趼人)给我看一本簿子, 其中贴满了报纸上所载的新闻故事, 也有笔录友朋所说的, 他说这都是材料, 把它贯穿起来就成了。(〈编辑杂志之始〉” …《钏影楼回忆录》p358 香港大华出版社 1971)

- 5 傀儡師について呉趼人は、「劫余灰」第一回で‘上自碧落之下，下自黄泉之上，无非一个大傀儡场，这牵动傀儡的总线索，便是一个‘情’字（『全集』第5卷 p81）’と述べ、‘情’を“傀儡を操る糸”としている。「電術奇談」では‘此书以写情论，则风美、仲达、敏达是傀儡，士马是牵动傀儡之线索，自余诸人，是看傀儡戏者。以催眠术论，士马是药，仲达、风美是试药表，自余诸人，是观演技者。（『文集』第6卷 P183）’と述べ、悪役の蘇士馬を‘情’を操り利欲を満たすプロデューサーの位置に置いている。
- 6 夫馬進「中国明清時代における寡婦の地位と強制再婚の風習」前川和也編『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から』所収（ミネルヴァ書房 1993.4.10）
- 7 第二次アヘン戦争/アロー戦争、アロー号事件ともいう。咸豊六年(1856)、広東港で清国官憲が香港籍船アロー号の中国人乗員を海賊容疑で拘束しイギリス国旗を引き降ろしたことが発端となった。中国全域への貿易開放を求めていたイギリスが出兵を強行、広東省城を攻撃すると、翌年、フランスも宣教師殺害事件を口実に参戦した。英仏聯合軍は広州を陥れ、同八年(1858)天津、同十年(1860)北京を占領したので清廷は和議に応じ天津条約、北京条約を締結した。
- 8 葉名琛/嘉慶十二年(1807)–咸豊九年(1859)、湖北漢陽出身。道光十五年(1835)の進士、翰林院編修。道光二十四年武鄉試校閱大臣。咸豊二(1852)年太平天国軍鎮圧の功により兩広総督。咸豊六年(1856) ‘アロー号事件’に端を発した英軍の侵攻に攻守を怠り咸豊七年(1857) 十二月二十九日(11. 14) 広州陥落。捕虜となりカルカッタに連行されその地で病死した。
- 9 扶乩は扶鸞、扶箕ともいう。五世紀ごろ始まり清代に全国的に普及した交霊術。吊るした筆や手で支えただけの木の棒が自動的に動き砂や線香の灰を敷いた盤上に文字や詩句や記号が描き出される。それを解釈し神霊からのメッセージとする。文字、詩文を媒介とすることで知識人にも歓迎され、民衆教化の役割も果たした。
- 10 同治十一年十一月一日(1872. 2) 曾国藩と李鴻章は毎年三十名、四年間に百二十名の英才を留学させる旨の章程を上奏し容闳らを留学生監督にアメリカを留学先に決定する。
- 曾国藩/嘉慶十六年(1811)～同治十一年二月(1872. 3)、湖南省湘郷出身。字滌生。道光十八年(1838)の進士。
- 咸豊十年(1860) 兩江総督、同治九年(1870) 直隸総督。太平天国軍鎮圧の功臣、洋務運動指導者、桐城派学者文人として軍事、政治、文芸界に君臨した。
- 李鴻章/道光三年(1823)–光緒二十七年(1901)、安徽省合肥出身。字少荃。道光 27 年(1847)の進士。咸豊九年(1859)、曾国藩の幕僚となり同治元年(1862) 曾の推挙で江蘇巡撫、同治九年(1870) 直隸総督兼北洋大臣。洋務運動の総帥、北洋陸海軍建設者として清末政治外交に権勢を揮った。
- 11 琦善/乾隆五十五(1790)～咸豊四(1854)、満洲正黄旗人。侯爵、大学士。字静庵。道光二十年(1840)、英艦の天津攻撃の際の直隸総督。林則徐に代わり欽差大臣として広州で英軍との和議に応じ罷免された。

12 牛鑒/?-咸豐八(1858)、甘肅武威出身。字鏡堂。号雪樵。嘉慶進士。道光二十一年(1841)両広総督を拝命。英軍
侵攻の際英艦の砲撃に遁走した。後に中英南京条約締結に関わった。

13 伊里布/乾隆三十七 (1772)～道光二十三(1843)、満洲鑲黄旗人。字莘農。嘉慶6 年(1801)の進士。道光20 年(1840)
両江総督。アヘン戦争勃発後浙江に赴き、妥協を画策し解任されるが翌年復職、耆英と共に南京条約を締結する。

14 耆英/乾隆五十五(1790)-咸豐八(1858)、満洲正藍旗人。字介春。道光二十二年(1842)、欽差大臣となりアヘン戦
争における全権として南京条約を締結する。同二十四年(1844)両広総督となりアメリカと望厦条約、フランスと
黄埔条約を締結した。

15 「発財秘訣」に登場する拝金主義者の中心人物区丙、花雪畦について、作者は第9 回評語で花雪畦を発財の奥義
を身に付けた人物と注記し、末尾の第10 回評語では区丙と花雪畦の行為をその他の拝金主義者たちに優先して描
いたと特記している。

区丙は外国人の珍重しそうな廉価の特産物を新興都市香港で売るという斬新な着想により成功する。最初区丙
は香港で‘料泡’（半円球状の薄い碗とストロー状の細い円管を組み合わせたガラス製のラッパ）を売ろうと思
い立つ。料泡を行商しようとする区丙を香港に住む広東人たちが‘こんなものを売っても足代にもなるまい’と
嘲る場面から、それが人の意表をつく着眼であったことがわかる。ところが相場を知らない外国人が高値で買い、
吹き方が分からないので吹くとすぐ壊れ、また買い替えるのでぼろ儲けとなる（第1 回後半～第2 回前半）。

区丙は次の売れ筋商品として橐の種大で将棋、操船、農作業等の所作を活写し風景、建物、道具も揃った精
巧な石湾地方特産のミニチュア陶人形に目をつける。自国での売り物や贈答品にしようとする外国人が争って買
い日に数千個も売れたので、区丙は数ヶ月で巨万の富を築き行商をやめ香港と広州に店舗を構える(第2 回後半)。
第2 回評語は区丙の独創性を高く評価している。

なべて実業をなすものは創作に携わるにせよ販売に携わるにせよ時運を眺め随時改めていけば永く栄える
ものだ。いつも思うにわが国の人間は何業に携わろうと旧法を墨守し頑固に改めず衰退に甘んじているのは嘆
かわしい限りだ。区丙という一行商人は時運を眺め世の嗜好に応じる力があつたのだ。嗚呼！その富を僥倖と
言うなかれ。

凡事企业家, 无论为操艺术者, 操转运者, 皆当默察社会风气, 随之转移, 然后其业可久可大, 每怪吾国人无论所操何业, 皆一成不变, 甘心坐致败坏,

是则大可哀者也。区丙一小负贩, 乃能潜窥默察, 投其所嗜好者, 呜呼! 毋谓其富为侥幸也。 p 14

区丙とその妻は小心で滑稽な道化役として描かれている。香港での行商を思い立った区丙に妻は特技も腕
力も語学力もなしに香港で稼ぐのは無理だと反対する。腹を立て妻に黙って香港に出た区丙ははじめて外国人
に話しかけられ‘恐怖の余り真っ青になりぶるぶる震えが止まらない（吓得区丙放下竹筐, 唇青面白, 不住的瑟瑟发抖。P6
第1 回）.’ すったもんだの末に行商が軌道に乗ると毎日の売り上げを寝台下に隠し、三ヶ月後蓄財できたお礼
の品を神前に供えるのだと妻を買い物に行かせる。妻は鶏でよいとけちるが区丙はボンと五十元を渡し上等の

豚頭、牛、羊を供えさせる。妻は羽振りの良くなった夫の呼び方を‘あんた（你）’から‘旦那様（当家的）’と改め甲斐甲斐しく酒肴の世話をする。衣装代をねだると気前良く十元くれた夫に妻は一元失くしたと偽りもう一元せしめてほくそえむ。みみっちいやり取りをしながらいよいよ寝台下の蓄財を取り出し数えてみると銀五万両にも達していた（第2回後半～第3回前半）。

次に区丙は英軍の情報屋となり、店に来る役所の幕友たちをもてなして広東官界の動向や防戦配備の情報を聞き出し英軍に売る。はじめ英軍間諜の関阿巨から情報提供を依頼された区丙は月に五十元の基本給と一件につき五十元の情報料という副収入を店番ついでに得られるという経済効率の良さに魅かれ快諾する。区丙の、売国という禁忌的側面への懸念は欠片もなく欲望のみを追及する態度はトリックスターの典型的性格を表しているといえる。

また花雪畦は、はじめ米屋の雑役をして得た稼ぎを賭場で増やそうとして失敗し、次に豚の去勢屋蔡以善の子豚を盗んで捕まる。広州で‘遊刑’（広東流市中引き回し刑）に処されたところを阿牛に救われ、香港に逃れる（第5回後半）。そこで賣猪仔業に目をつけると賭け仲間の阿三に頼んで賣猪仔館の店員高阿元に渡りをつける。花雪畦は広東新安で賭場を開き摩った客に返済するための働き口を世話すると偽って高阿元の店へ行かせ売り飛ばすという手口で三千銀余り蓄財する。しかし、公金を摩って途方に暮れる新安知県の坊ちゃんをそれとは知らずに売って手配され上海に逃れる（5回後半～第6回前半）。

上海で拝金主義者たちの悪辣な手口を見聞して金儲けの奥義を会得した（第6回後半～第9回前半）花雪畦は自分が三割、袁という同郷人が七割の出資で米屋を開き繁盛する。袁は吝嗇で郷里の家族を呼ばずに一人住まいし友人知人もいない。花雪畦が付け入ろうと隙を窺っていたところに袁が流行り病で急死したので、合資契約書を焼却し店を乗っ取る。さらに袁の私財を入れたトランクを開けて金品を奪った後で郷里にいる袁の息子呼び、米屋は赤字で資産のない袁の残した借金を代わって返済せよと強要する。花雪畦は言能君、端木子鏡ら官界に伝手を持つ拝金主義者たちと徒党を組んで息子を脅し泣き寝入りさせる（第9回後半）。また、落ち目の友人は金を無心しがちなので付き合うまいと決意し、魏又園が金を借りに来る約束の時間にわざと外出する（第9回前半）。

花雪畝の言動は終始滑稽尾篋、道化的である。子豚を盗んで市中引き回し刑に処された花雪畦は、裸で縛られ子豚を抱えた姿で街を引き回され銅鑼の音に合わせて鞭打たれる。解放されると便所に行き尿で傷を洗い痛み止めをする（第5回後半）。後に上海で買弁になった蔡以善と再会してたじろぐが知らぬ振りを決めこむという落ちもつく（第7回後半）。また外国語を覚えようとして外国文字どころか漢字も知らないのに魏又園にアルファベットと読みを紙に書いてもらい数日間睨んで頑張ったもののABCの区別もできずに諦める。宴会の招待状が来ると招待者と自分の名前のほかに知る文字がなく宴席の場所を探し歩く（第7回前半）。

利益の外は眼中になく、摩った賭場客を猪仔に売るという手口の独創性や自国民、同郷人、友人を裏切る花雪蛙の非倫理性は、社会的禁忌に囚われないトリックスター性を端的に表しているといえよう。区丙と花雪蛙の言動は、トリックスターの性格に相応する特質を備えている。本論では、吳趸人自身の特記した“傀儡”師、“催眠術”師という用語に焦点を置き、自身の欲求実現に向けて他人を操作する悪役という側面に着目して“傀儡師型利欲迫及者”の範疇に入れた。

16 葉名琛に纏わる逸話/『清朝野史大観』巻7<葉名琛><葉名琛迷信乱語> (1981.6 上海書店版を使用)、『近代中国秘史』<葉名琛廣州之變> (1987.11 巴蜀書舎『清代野史』第5輯収録)、沈雲龍著『近代史事與人物』<葉名琛誤國貽羞> (民国60年3月文海出版社『近代中国史料叢刊』63輯)などに葉の扶乩に纏わる話題が収録されている。

17 『中国秘史』/吳趸人が作中評語に引用。未見。

18 吳趸人は、『二十年目睹之怪現狀』の以下の話題を実体験として詩文に記している。①第2回：客死した父の赴任先に駆けつけ棺を奉じて帰る話（『趸塵筆記』<神籤>）②第32-35回：夫の死後その兄に売られた知人の寡婦を救う話（『趸塵筆記』<果報>）③第108回：山東に客死した叔父の幼い二人の遺児を、遠路訪ねて捜し当て上海に連れ帰る話（『趸塵詩刪剩』<課弟><清明日借瑞棠弟展君宜大弟墓，用辛卯「都中寻先兄墓」韵（八首）>）④第108回：伯父の任地宜昌に赴きその葬儀を執り行う話（『趸塵詩刪剩』<七月十九日夜接季父電，詔赴彝陵省疾，即夜成行，戚友知己都不及走告，賦此留別（二首）><宜昌奔季父喪歸，道出荊門，紀以一律>）（『吳趸人全集』第7卷所収）。また、吳趸人の社会運動への参加としては、拒俄運動、反米華工禁約運動等政治運動への参加のほか、廣東人有志と語らい広志小学堂を設立運営したり（「広志小学招生廣告」「広志学校附属国文補習夜塾」）、廣東省が“水害で河川氾濫し田地家屋は沈み各県に難民流出”（「廣東同鄉暨各帮均鑒」）（『吳趸人全集』第8卷所収）した事態を訴え、救済の募金活動を呼びかける活動が、記録に残されている。

19 今堀誠二『中国の社会構造』（有斐閣 昭和28年）第7章「商工業の機構」第3節

中国の伝統的社会構造について、今堀は‘共同体意識’、仁井田陞は‘仲間主義’（『中国法制史研究』[奴隸農奴法・家族村落法（東京大学出版会 1962.9）]）の用語を用いた。

20 吳錦潤「命意在於匡世」（黃修己主編《百年中華文學史》新亞洲文化基金會有限公司 1997.8 p15）

第三章 ‘写情’と女性性

第一節 女性問題に関する社会的文化的風潮

1. 女権運動

1) 天足（纏足しない天然の足）運動

旧中国における女性の危難の根源は纏足である。纏足のため、女性は思うように動けず、危難に際しても自力で逃げられなかった。社会的動乱はもちろん、家庭内にあっても夫や舅姑の暴力に抵抗できなかった。また儒教道徳により男女の同席は固く戒められ、女中や妓女等売買された女性を除き‘閨房を出ない’のが建前となっていた。書院等公共教育機関は女兒のために門戸を開かず、通常の教育を受けられなかった。女性にも習得できた刺繍、裁縫、書画等の技芸も、何故か女性の職業とはならなかった。そこで、売り買いや誘拐により女中や妓女となった者のほかは、占い師、仲人等特殊な職業を除いて、働き場所や仕事も持てなかった。数千年間、中国女性は社会的意味を与えられない存在であったといえる。西欧文明が流入し国家が衰勢に傾いた清末、ようやくその様相に変化が起こった。

夏曉紅『晚清社会与文化』*1によれば、清代に至るまで纏足に反対する発言は常にあり、清朝歴代君主は頻繁に禁止令を発したが、漢民族には纏足しないと結婚に不利とする考えが強く、効果はなかった。晩清に至り、キリスト教布教師とキリスト教関係刊行物が批判の声をあげた。1883年康有為は二人の娘を纏足させず「不纏足会」設立を協議した。中国における最初の試みであったが頓挫した。1895年英国人立德夫人（Mrs. Archibald Rittle 1845-1926）が重慶に「天足会（纏足しない天然の足を奨励する会）」を発起した。以後、維新派人士や洋務派官僚の多くが賛同し、各地の紙誌が纏足禁止を説く論説を載せ、全国に「天足会」、「不纏足会」が結成された。

2) 女子教育

夏曉紅の前掲書によれば中国最初の女学校は、1844年英国人キリスト教布教師亜而爾德西女（Miss Aldersey）が寧波に設立した女子塾であったという。以後、各地の教会関係者によって続々と女学校が建てられた。中国人有識者は中国人による女子教育機関設立を急務と考えた。1897年4、5月、梁啓超は『時務報』に載せた「変法通義」に「論女学」と題し女子教育の重要性を説いた。各界人士の賛同と懸念、模索を経て、1898年5月中国最初の女学堂が開学したが、戊戌変法の失敗により、1900年閉校となった。1902年蔡元培、蔣緯喬等革命派人士が上海に「愛国女学」を設立した。当時、不確かな統計ではこの時期、中国国内に数百のキリスト教系女学校、数千から数万の学生が存在したという。中国人の設立した女学校も各地域毎に数十校、数百から数千人の学生を擁していたという。儒教の女徳称揚を趣旨とするものから西洋文明、革命思想の鼓吹まで、各校の教育方式と内容は様々であったという。

2.社会実態

1) 清末女性の境遇

清末から民国半ばにかけて、女権思想に目覚めた女性も民族革命、社会革命に参加し結婚に主体性を貫いた。張竹君(?)^{*2}は独身主義を掲げ、秋瑾(1874-1907)^{*3}は夫を捨てて留学し、徐宗漢(1876-1944)^{*4}は、黄興の逃走に同行して結婚し、向警予(1895-1928)^{*5}は親の意向に逆らい自ら縁談を断り、郭隆真(1894-1931)^{*6}は挙式の席で破談を宣告した。張競が『恋の中国文明史』で‘恋愛への追及が革命と微妙に絡んでいた’^{*7}と指摘しているように、革命運動への参加は、女性が結婚相手を自分で選ぶことのできる唯一の道であったともいえる。しかし目覚めた女性の中でも彼女たちは少数の例外であったろう。現在最も知られる清末女性は‘江湖女侠’と謳われた革命家秋瑾であろうと思われるが、当時、政治社会に大きく関わって新聞雑誌紙面を賑わせ、風評に上った女性として以下の四人が挙げられる。

(1)胡仿蘭

1907年4月江蘇省沐陽に起こった「胡仿蘭事件」は当時各地に報道され、社会を震撼させたという。胡仿蘭は徐家に嫁いでいたが、女学を興し纏足を廃し女子の害を取り去ろうと呼びかけた。彼女が纏足をほどくと徐家の女性たちにも影響され纏足をやめる者が現れた。夫の両親は怒り暴力に訴えた。召使に無理やり彼女の脚を縛らせ、監禁して食事を与えず阿片を飲んでの自害を迫った。実家の胡家が迎えを寄こしたが、徐家の姑は‘死ぬまでは帰らせない、生きて返すと思うな’と承知しなかった^{*8}。死後も地元誌に纏足を止めた報いと喧伝されたという。小説『中国之女銅像』^{*9}は彼女をモデルとしている。

(2)陳範、陳韻芬父娘

『蘇報』発行者陳範(1860-1913)の長女陳韻芬(1883-1923)は自らも『女報』を発行して女権を鼓吹し、父と同様、上海で革命宣伝活動の先頭に立っていた。しかし、『蘇報』事件で日本に亡命した陳範は生活に窮し、娘をさる商人の妾に嫁がせようとした。陳韻芬は‘父命には従うしかない’と承知したものの、怒った秋瑾らに縁談を壊された。この時秋瑾は、ついでに陳範の二人の妾を自立させるための募金を集め、陳範と別れさせるという快挙も成し遂げている^{*10}。当時、先進的言論活動の最前線にいた陳範父娘の関係でさへこの有様であった。旧中国社会において、女性が家長の決めた婚姻を拒否することは支配体系の否定を意味し、

国家への反逆に等しかった。大多数の女性には、‘父命にしたがう’ほかに選択の余地はなかったと思われる。

(3) 賽金花（本名趙彩雲 小説中傳彩雲）。

既述の如く、最初の天足（纏足しない天然の足）運動、女学校の創設は、キリスト教関係者の提唱により始まった。西欧文明と関わる時には礼教の女性拘束が作動しにくいように見える。最も有名な女性は小説『孽海花』のモデルとなった蘇州の名妓賽金花（1871-1936）である。彼女は十六歳で状元洪鈞の第二夫人となり、駐欧公使となった洪に同行して渡欧した。帰国後洪が死ぬと、婚家を出て上海で妓館を開き、洪の親族、友人からの批難と妨害にあい、北方への移転を余儀なくされた。庚子事変（1900年）の際、語学力を買われて連合国側との折衝に駆りだされ、脚光を浴びた。連合軍司令官ワルデルゼー元帥に訴えて連合国軍の略奪暴行を禁止させ、殺害されたドイツ公使の夫人を説得して報復措置要求を思いとどまらせた。その後二度結婚して死別し、晩年は貧窮に陥り北京の陋屋に逼塞して不遇に終わったという。奔放な生涯を送った彼女も纏足していた。

(4) 羅伽陵

清末民国の政財界に権勢を誇ったユダヤ人富商サイラス・アーロン・ハルドーン（Silas-Aaron-Hardoon 1849-1931）の妻羅伽陵（1864-1931）も、清末民国の政治社会に大きな影響を及ぼし風評に上った女性である。貧しい生い立ちで纏足せず、文字を読めず、若年から針仕事で世過ぎしたというが、鹹水妹（外国人相手の娼妓）とか娼婦であったとも取りざたされた。ユダヤ人商人の夫を助けて阿片や土地投機で財を成した。彼女は仏教に皈依し革命僧黄宗仰に私淑して「愛国学社」、「愛国女学」に資金援助し、清末革命運動と繋がりが深かった。黄宗仰を通じて孫文にも資金提供している。女医張竹君の病院と女学校開設も助けている。民国期には、仏教のほかに儒教復興事業にも肩入れした。上海有数の富と皇太后（光緒帝皇后）の母の養女という看板を盾に、政財界の要人、文化人と誼を通じ、広大な庭園を建造して、儒教の古礼再現や結婚式等各種の催しを執り行なった。学校の創設運営、仏典、儒教經典の刊行等多くの文化事業にも携わった。小説『海上大觀園』*11のモデルとなった。

胡仿蘭の婚家の暴挙や陳範父娘の関係は、女性の解放にあたって最大の難関が家庭の束縛にあったことを示している。賽金花の境遇のヨーロッパ時代と中国時代との落差はあまりにも大きい。ヨーロッパ時代の賽金花は公使夫人として上流社会に迎えられ華やかに過ごした。

庚子事変の際もワルデルゼー元帥やドイツ公使夫人の心を捉え交渉を有利に導き、救国の英雄と謳われた。しかし中国社会においては、夫の死後は婚家に留まれず商売も妨害され、謂われない情事を取りざたされ、落魄に陥った。当時の外国語ができ救国に功あった女性としては不遇に過ぎるといえよう。中国社会の階級意識、妓女への侮蔑が原因であろうと思われる。夫がユダヤ人であった羅伽陵の場合、家庭の専制に煩わされることはなかった。しかしその出自、前歴の詮索や私生活と無教養を嘲る声^{*12}は生涯絶えなかった。文化事業に傾倒したのは、事業上の便宜以外に中傷を相殺しようとする意図もあったであろう。清末から民国終盤まで三十年にわたり民族革命家、清朝遺臣、民国朝野の著名人、僧侶、国学者と各方面の人脈を惹きつけた才覚と眼識は、比類ないものと思われるが、ついに称揚されずに終わった。

2) 清末男性作家の実生活

(1) 林紓(1852-1924)

夏曉紅『晚清文人婦女観』^{*13}によると、林紓は十八歳の時、同郷の高名な儒者の娘で同年の劉琮姿と結婚した。彼女が四十六歳で他界すると、翌年二十四歳の楊郁と結婚し数名の子女を儲けて三十年連れ添った。しかし、“中年にして妻を失うに一妾を置く” 古来の礼法通りに、正妻にしなかった。林紓は楊郁を敬愛し、彼女の五十歳の誕生祝いには祝辞を寄せて謝意を表した。この時、先妻の生んだ長男が継母の扶正（正妻に改める）を懇願したので楊郁の意志を確かめた。彼女は林紓の真意を酌み辞退したので、やはり側室のまま留めおいた。亡妻劉琮姿への愛情も抱き続け、晩年に描いた小説『剣腥録』(1912)の女主人公に劉麗琮というよく似た名を付けた。

(2) 劉鶚 (1857-1909)

十七歳で王氏と結婚し二十年連れ添ったが、王氏の生存中から妾二人を娶っていた。王氏の死後も赴任する先々で7年間に三人納妾し、五人の妾がいた。他に日本を遊歴した折にも日本女性を妾としている。それぞれが息子を設け、孫の代には、『老残遊記』関係者は大人数となった(岡崎俊夫・飯塚朗訳『老残遊記』付「劉鉄雲略年譜」平凡社＜中国古典文学大系＞⁵¹ 昭和四十四(1969)年)。

(3) 吳趼人(1866-1910)

妻の名は馮宝裕。李葭榮の「我佛山人伝」によれば馮氏とは夫婦の情愛深かった。一男一女を儲けたが男児は夭折した。娘に纏足をさせず、纏足しない天然の足を奨励する「天足会」に入会させた。

(4)李伯元 (1867-1906)

李伯元は結核を病み、妻鐘氏との間に子はなかった。孫を望む李伯元の母呉氏は、姪の侍女であった王氏を気に入って連れ帰り、息子の妾とした。王氏は忍耐強く勤勉で、相ついで病に斃れた鐘氏、李伯元、呉氏を看取った。後事を処理した後、彼女自身も疲労が重なり咯血して死んだ。(魏紹昌編『李伯元研究資料』所収李錫奇「李伯元生平事蹟大略」 p 37 (上海古籍出版社 1980 年 12 月))

(5)連夢青 (生卒年不詳)

浙江省銭塘の人。名は文徴、筆名は憂患余生。1903 年清露密約を暴いて逮捕、惨殺された国民党員沈蓋の友人で、上海に逃れて、李伯元の編集する『繡像小説』に「隣女語」(1903,1904)を連載した。呉趼人「近十年之怪現状」には、馴染みの妓女秦佩金を崇め奉り、彼女に入れあげて金に困る姿がユーモラスに描かれている。彼はこの女性に真剣に恋していたように見える。

彼らはみな、作中で女性の不幸な境遇に同情を寄せ、理不尽な暴力に怒る“人権作家”である。彼らの結婚について詳細は伝わっていないが、一世代近く若いと思われる連夢青を除けば、年齢から見て家長の決定に従う伝統婚であったと思われる。彼らが家長として、妻や子に強圧的に接した様子は見られない。連夢青に至っては妓女に隷従する様が小説のネタになるほどであった。さすがに清末の先進的男性作家は、一般男性に比べれば女性を軽視せず対等に遇していたように見える。それでも劉鶚、李伯元は納妾している。矛盾した行為に見えるが、当時の中国において妾は正式の婚姻関係にあった。売買される女性の立場として妾が一番格上であった。遊びや使役に留めず正式に娶ったのは誠意や尊重の表れであったのかもしれない。

第二節 小説に描かれた中国女性の恋愛、結婚

1. 清代小説中の男女関係

論者の知る清代小説に登場する印象的な男女関係は以下の如くである。

1) 夏敬渠『野叟曝言』（清初？）

【璇姑】：好漢劉大は、恩人文素心の人物に傾倒し縁組を望む。素心に妹璇姑を妾として娶せ、合わせて報恩も果たそうと目論み、躊躇する二人を説得する。素心の妻田氏も夫の納妾を歓迎する。

吳趸人はこの小説を‘荒誕不经’（『月月小説』第8号＜説小説・雑説＞1907.5.26）と貶している。

2) 曹雪芹(1715-1763?)『紅樓夢』（1791）

【林黛玉と薛宝釵】：官軍八旗で皇室にも連なる名家の公子賈宝玉は、祖母の寵愛のもとに壮大な庭園で従姉妹や侍女たちとともに育ち、風流を楽しんで榮達を望まない。芸術家肌で繊細病弱な従妹林黛玉を愛するが、賢明温順な従妹薛宝釵と縁組される。黛玉は咯血して死に、宝玉は家出する。

世間と隔絶した邸宅内での、前世の因縁話を背負う美女たちとの交流は、読者にとってこの世ならぬ夢物語であったろう。正反対の性格の二人の従妹の人物像も典型化が過ぎ、非現実的である。この書が百年余にわたり中国の読者を虜にしたのは、やはり男女交際や自由恋愛への憧れであったろう。当然、勉強せよと説教する薛宝釵より愛情を求める林黛玉に人気が集まった。憧れ実現の場は必然的に遊里に求められ、林黛玉を源氏名とする芸妓が輩出した。

3) 文康（乾隆末？—1865年以前）『兒女英雄伝』（1850頃？）

【何玉鳳と張金鳳】：何玉鳳は十三妹を名乗る女侠客。悪党和尚に捕らえられた安公子と手籠めにされかけた張金鳳を救出し、二人を同時に守って同席させるには、夫婦にするしかないと強引に娶せる。後に、十三妹は実は安公子の父安学海の親友の娘であったと知れる。安学海は彼女を嫁にと望み、張金鳳に説得され公子に嫁ぐ。

十三妹は、不正の財貨を奪って母を養い、冤罪を被り死んだ父の仇打ちを悲願とする女盗賊である。悪党を一刀両断に切って捨て強きを挫き弱きを助ける女侠で、切れの良い科白や竹を割ったような性格等中国伝統小説の中でも出色の女性像であるといえる。大人しく優しい安公子を‘良い婿だわ’と張金鳳に取り持つ行為に、彼女自身の公子への好感が現れている。淑やかで思慮深い張金鳳は何玉鳳の気持ちを汲み取り、嫁いだ後に今度は自分が仲立ちしようとして心に決める。作者が男性である故か、話はただ安公子にのみ都合よく展開していく。また十三妹は、父の仇討ちが済んだとなると、何玉鳳に戻り、儒教の教条を遵守する賢婦賢妻に変身する。雄々しく愛らしい十三妹の不自然な変身は惜しまれる。しかし、作者文康は作

中に度々“『紅樓夢』とは違う古い考え”を強調し、“堅実健全な世界”を趣旨としていた。纏足で剣を振るい気弱な公子をずけずけと叱咤し、緑林の好漢たちから“畏怖される女侠”像は、“仇敵からの避難”や“母の扶養”という設定に対する緊急避難的対応として描かれたと思われる。清中期には、“夫に尽くし家運を盛り立てる複数の妻”が、普遍性をもつ幸福な女性像であったのであろう。

4) 韓邦慶 (1856-1894) 『海上花列伝』 (1892-1894)

【沈小紅】：はげしい気性と弁舌で張蕙貞の馴染みの高官王蓮生(清末の外交官馬建忠がモデル)の心を奪い、旦那にする。ある日、売れっ子役者小柳児との情事の現場を押さえられ、縁切りされる。(第33回)

【張蕙貞】：沈小紅が馬脚を現わす日を騒がず待つ作戦が功を奏し、王蓮生に身請けされる。しかし妾となって嫁いだ後、王の甥と通じて殴られる(第34回)。

二人とも妓女なので、花柳界の手練手管、色恋の機微は憚ることなく描かれている。しかし、売られて妓女となり親兄弟を養う境遇、馴染みを得て稼ぎ、借金を返し自由を得ようと奮闘する逞しさ、必死の境遇の中でさへ、危険を冒して恋を求める女心が活写され、作者韓邦慶の女性性への理解が窺われる。

5) 劉鶚(1857-1909) 『老残遊記』 (1903-1904?)

【翠環(環翠)】：十六歳。富裕な商人の娘だったが、水害で家を流され妓楼に売られる。客あしらいが下手で稼ぎが悪く、凶悪な置屋に転売されることになる。姉芸者翠花の馴染み黄人瑞が医師老残と金を出し合って身請けし、老残の側室に贈る(第13、14、17回)。後に泰山で出家する(続集第2-6回)。

老残は行き掛かり上、翠環の保護者となり、翠環は老残を恩人として崇めている。両者に恋情は発生しない。洪水で一夜にして苦界に堕ちた体験で無常感にとらわれ、恋に目覚めず、脱俗の思いに陥った少女の心境が窺われる。

【逸雲】：二十歳代後半。泰山の尼寺斗姆宮の尼。恋の破綻から悟りの境地を得る。翠環の身の振り方を段取りした後、貯めた布施で自身を身請けして、修行の旅に出るという(続集第2-6回)。

老残たちは、逸雲の体力知力優れ、悟りを極めた人間性の深さに敬服する。彼女は、悟りの契機となった悲恋の経緯と自身の恋愛心理を詳細に語る。おそらく彼女が、中国小説史上、恋心を自覚して一人称で語った最初の女性であろう。

6) 李伯元(1867-1906)『官場現形記』(1901-1906)

【蘭仙】：江山船（乗客を接待する遊女を置く長江客船）の妓女。十六歳にならない年齢。馴染みとなった趙補蓼に金をねだる。趙が金持ちの同僚文西山から借りた金を与えたので、文が空き巣にあった時、冤罪をきせられる。世をはかなみ獄中で阿片を飲んで自殺する。
(第12、13回)

船主の実子ではなく、買われてきた娘である。‘どのみち妓女の生活だっていいことはない’と死を選ぶ少女の悲惨な境遇を、李伯元は同情の筆致で描いている。

7) 曾樸(1872-1935)『孽海花』(1905、1907、1927年)

【珠兒】：江山船の娘。皇族で独り者の浙江省学台祝宝廷（皇族宝廷がモデル）に見初められ、玉の輿に乗る。

江山船の娘だが船主の実子であろうと思われる。母親は、正妻の地位と両親の扶養、莫大な結納を学台に要求し、承知させる。

8) 曾樸『孽海花』(1903-1931)

【傅彩雲】：モデルは実在の蘇州の名妓賽金花（本名趙彩雲）。状元金霁青（状元洪鈞がモデル）に見初められ第二夫人となり渡欧。ヨーロッパで霁青の目を盗みワルデルゼー中尉（後の八か国連合軍ワルデルゼー元帥）や下男と火遊びし、霁青の死後も放埒な生活を送る。

彼女も纏足し、侍女の肩に両腕を預けて歩行する様子が描かれている。自由に行動できない纏足で、作中の記述のように自在に外出し放蕩したとは考えられない。ワルデルゼーとの情事も年齢や状況からあり得ないとされる。事実無根の記事をほとんど本名で書かれた賽金花は、曾樸に激しく抗議した。

9) 吳趸人(1867 - 1910)『二十年目睹之怪現狀』(1903-1909?)

【上海総督令嬢】 毎日茶館へ通っていた令嬢が、公館の物干し台から城壁の上に板を渡して城壁上に逃げ、駕籠かきと駆け落ちする。総督は駕籠かきの故郷で暮らす二人を捉え、

駕籠かきを誘拐罪で収監する。連れ戻された令嬢は自殺を図って絶食する。総督夫人は娘のために駕籠かきを釈放させ、結婚を許す。夫人はさらに娘婿に緑営軍隊長の官位を買い与え、夫を急かせて城門見張りの職に就かせる(第9回 - 10回)

上海の茶館では街娼が男性客に同席し、中には一般女性も出入りし男女同席の事態が問題になっていたという。自由に外出し駕籠かきと駆け落ちした令嬢は自由結婚（家長の決定に従わず自分で結婚相手を決める）を实践したことになる。総督は乾物店の徒弟から成り上った下層出身者である。学がないので家庭内の礼教規範が厳しくなかった。城壁上に移動する脱走劇が可能であったとすれば、令嬢も纏足していなかったことになる。しかし、実話であったとしても、呉趼人の脚色が相当加わっているであろう。

小説に描かれた男女関係からは、清代初期から後期に至るまで文人階層の男女には、通常遊里以外で異性と知り合う機会も結婚の自由もなかったこと、富裕層、貧困層に関わりなく結婚を決めるのは家長や主人であったことがわかる。変化の機運到来を見せた清末には、好む相手を伴侶とすることに象徴される、自分の望む人生を追及したいという思念が表面化しているように見える。自由結婚への憧れが、自害や脱俗も含め、自身で人生を選択決定しようとする意志に昇華していく様相が、小説から窺われる。呉趼人の小説は、実際に下層民が官位を買って高官に成り上がり、礼教規範が緩んでいる事、西洋の思想や生活様式の影響濃い上海では、茶館や酒楼といった男女の出逢える社交場がある事、自分で伴侶を決め家出する女性が出現している事等の新‘怪現状’情報を発信していた。当時の青年読者は、紙誌記事から、未知の相手との未知の人生という可能性を夢想したのではないと思われる。

2. 清末小説中の‘新女性’像

清末小説中に描かれた先進的女性については黄錦珠の研究『晚清小説中の「新女性」研究』*14がある。該書の定義によれば、‘新女性’とは、‘伝統女性の規範—自由結婚、公開の場での男女社交、男性との同席回避を突破しようとする姿勢’を貫こうとする‘新観念、新作風’を備えた女性であるという。黄錦珠によれば現存する女性解放を描いた小説は十四作のみである。彼女は主に『女子権』袁貞娘、『未来世界』汪墨香、『新石頭記』東方美、『新鏡花縁』黄舜華、『新紀元』金景嫻等十人の女性像を分析している。上記の中でも呉趼人の作品『新石頭記』は《理想小説》、《科学幻想小説》或いは《社会小説》と銘打たれており、女性解放をテーマとするわけではない。

黄錦珠の解析によれば作中の女性たちは、女権獲得を主張し、纏足に反対し、教育を受け、留学し、経済的自立を目指す。彼女たちの就いた職業は、教師、報刊主筆や編集者、翻訳者、女医、科学者、革命運動、救国事業の参謀や女志士である。興味深いのは、その多くに夫がおり、彼女たちの運動は、舅姑と夫の説得懐柔から始まることである。みな、天足（纏足しない天然の足）で外出する権利を獲得するが、公共の場で男性と出会うと、双方いたたまれず、社会に女性の居場所のないことを痛感する。多くの作家は、‘自由結婚’、‘交際自由’、‘愛情’の文字を使うのがやっとなで、公共の場において同室、同席、会話する情景は描かれない。清末の作家と読者にとり‘男女公開自由社交’は未だ‘想像之外’（p136-137）であったと思われる。黄錦珠は未婚女性の‘情欲’描写についても探したが、見つけることはできなかった。男女は‘情欲平等’であるべきという意見は理念上は完璧であったものの、現実には、‘胸が動悸’し‘顔が赤らむ’様を描くのが限界であったという（p159-160）。結局、‘新女性’の恋愛を描いた作品の存在は確認されていない。

吳趼人の‘写情小説’の女主人公は女性解放を主張するわけではないので‘新女性’には含まれず、したがって作中の検討対象としても取り上げられていない。吳趼人には、問題の改善において抜本的解決を図ろうとする傾向があった。纏足の禁止について『新石頭記』第8回で、‘何故女子に勧めるだけでなく（女子を玩具として久しい）男子にも勧めないのだ？（何不予劝女子之外，兼劝男子呢？）’吳趼人全集版 p65）と主張している。女性の解放策としても、個々の問題の解決よりも女子教育の推奨を第一義と考えた。親友の周桂笙はその著『新庵詠屑』に収めた「言情」、「徳皇子結婚自由」、「自由結婚」等の雑文で婚姻の自由を称揚している。吳趼人は、周桂笙と時事を論じあえば周が新文明の輸入を主張し、自分は旧道徳の復活を主張するので‘しばしば意見が合わない’と評語で述べている。彼らは女性の地位や婚姻形態について日頃議論を交わしていたと思われる。周桂笙は、中国の女性は‘法律が許しているにも拘らず再婚を恥として（夫死之后，法律虽许别嫁，而中国妇女，人人皆以再叫醮为耻）’守節し、自ら礼教に縛られ愚弄輕蔑を被る事態を招いている問題について、‘わが友吳趼人は、当面の急務は教育の普及にあり急いで婚姻の自由を論じることにはない（吾友南海吳趼人征君之言曰：中国今日对于此問題，当務之急，乃在于普及教育，而并不在乎亟亟提唱婚姻之自也）’と述べた。それは‘根源を正そうとする考え（此誠正本清源之论）’であったと証言している*15。周桂笙の証言から類推すると、吳趼人は女性の不幸不如意全般の原因を教養の欠如にあると考え‘教育の普及’により恋愛や婚姻が「根本的解決」を得ることを期待していたものと思われる。吳趼人は先ずは、旧社会における境遇の中に生きる女性の可能性を描こうとして《写情小説》を描いたのであろう。

3.清末小説中の男性

小説中に取り上げられる以下のような男性の所業は、話題になるという点から見て、当時の一般男性から見ても破廉恥や無節操、強圧的度合いの酷い部類なのであろう。またそのような人物も実在していたのであろうと思われる。

1) 『老残遊記』(『続集』第2回、6回) 一尼に夜伽を強要

【泰安県宋知県公子】泰山の尼寺斗姥宮で、十五歳の尼靚雲に懸想し、夜伽を迫る。拒絶されると父親の威光を笠に寺の閉鎖を言い渡す。偶々、老残と友人の京官徳慧生夫妻が斗姥宮に宿泊し、宋知県を脅し寺を救う。

2) 『官場現形記』(第30、31回) 一娘に妾奉公を強要

【冒得官】食い詰めた武官の官照を買い、本人に成りすます。獵官運動が功を奏したところで身分詐称がばれる。冒得官は嫌がる娘を説得して統領の妾に差し出し、免官を免れる。

3) 吳趼人『二十年目睹之怪現狀』(第76、77回) 一婚約者に不貞の濡れ衣

【車文琴】洒脱な首都官僚で、先妻の死後、母方の従妹との再婚が決められていたが、故郷揚州に置き去りにし、北京で妓楼遊びに興じていた。婚約者は両親既になく、しっかり者であったので自ら北京に出てきて婚約履行を迫る。車文琴は、休暇を取って故郷で結婚しようと言いくるめ揚州に返す。彼には自分に嫁ぎたがっている馴染みの妓女がおり、親族に婚約者の不貞を言い立て破談にする。婚約者は恥じて自殺し、車文琴は親族に婚約不履行を訴えられる。

4) 『二十年目睹之怪現狀』(第82、83、回) 一娘を大官の男妾に縁組

表具店の徒弟朱狗は候総督(モデルは張之洞)の男色相手を務め、候虎と改名して武官に取り立てられ、総督の女中を娶った。候虎の妻が急死すると、言撫台は総督におもねて、娘を後添えに娶せようと申し出る。総督は喜び候虎を昇進させる。言夫人は、激怒し唾を吐きかけて夫を罵り、‘娘は言姓であっても私の生んだ娘ですよ。あなた一人の娘ではないのを分ってるの？あの娘のことは何であれ私に相談すべきなんです。しかも人生の大事というのに釣合いも考えず！私の娘は器量が悪いが、だからといって馬の骨の男妾の嫁にやるほどじゃない！ましてや卑しい下女の後添えなどとは！あなたは何で娘をそんな人

間にくれてやろうとするんです？娘の大事は私にも半分責任があると分ってるの。簡単に嫁にやってこの娘の一生をどうしようというんです！（女儿虽是言姓，却是我生来的，须知不是你一个人的女儿！是关着女儿的，无论什么事，也应该和我商量商量，何况他的终身大事！你便老贱不拣人家，我的女儿虽是生得十分丑陋，也不至于给兔崽子做老婆！更不至于去填那臭丫头的房！你为甚便轻轻的把女儿许了这种人？须知儿女大事，我也要有一半主。你此刻就轻轻许了，我看你怎样对他的一辈子！’ p691）と縁組を拒絶し、娘とともに実家に帰ると宣言する。呉趼人は、回末に長文の評を附し、男子たる言撫台は、‘叡智も女子に及ばず志操も女子に及ばず、奇妙なことだ。金と権力にかまけると叡智は呆け志操は崩れるということか（智出女子下，志出女子下，可谓怪事。大抵利禄为之，遂令智昏志坠耳 p697）’と恐妻の言夫人を持ち上げている。

5) 男性側の恋

(1) 『孽海花』【祝宝廷】（『孽海花』第7回、14回）

杭州江山船の娘珠児を見初めて正妻とする。結婚後も才芸豊かな彼女に夢中となり、中傷を意に介さず官途を捨て遊歴生活を楽しむ。しかし珠児が急死したため自暴自棄となり、放埒と不摂生を重ねて病死する。

かつて改革の上奏文を奉った皇族で、妻を亡くした風流な独り者という人物設定だが、モデルは実在の皇族、礼部右侍郎宝廷であるという。政情不安な清末には、出世より恋を選ぶ役人が現れていたことを窺わせる。

(2) 『官場現形記』【趙補蓼】（『官場現形記』第13回、14回、16回）

匪賊討伐軍の胡統領に随行した二十代の幕僚。故郷を離れて寂しい境遇で、気立てのいい妓女蘭仙に惚れる。薄給なのに馴染みとなり、気風のいい同僚文西山から金を借りて蘭仙に与える。不運にも文西山が盗難に遭い、蘭仙は濡れ衣をきせられ自害する。趙補蓼は悲嘆にくれ、彼女のために挽歌や伝記を書いて追悼し、七言絶句を数首作り、三日三晩泣き続け、鬱々と過ごす。

小説からは、清末に至っても女性の人生全般が家長や宗族間の取り決めに拘束されていたこと、婚約者に嫁ぐほかに選択肢がなかったことがわかる。婚約者を自害に追いこむ車文琴の行為は無情で卑劣だが、一族の差配に依らず、好きな相手と結婚したいという欲求が根底にあるのも確かであろう。祝宝廷、趙補蓼の恋情には、役人と妓女の酒席の一興や疑似恋愛といった伝統的交情とは異なった、対等の男女関係が表れている。男女の知り合う機会がほかになかった以上、妓楼の出会いが真剣な恋に発展することもあり得たのであろう。男性の恋

慕の思いは、従来の旧小説にはほとんど描かれてこなかった。祝宝廷が、実在する名門出身の高官であることを考えれば、清末には男性側にも、自ら理想の伴侶を求めようとする意識が高まっていたといつてよいのかもしれない。

第三節 吳趼人の女性観

1. 吳趼人の女傑体験

1) 一族の女性

吳趼人は『趼塵筆記』に母の言葉（＜神筮＞＜猴酒＞）や叔母についての語り伝え（＜星命＞）を記している。吳家は吳趼人の祖父の代から傾き始め、父の代は遠方に職を求め離郷した。かつ祖父の家系の男子は短命で、吳趼人の父は 42 歳、吳趼人自身も 44 歳で急死した。父の兄弟も夭折もしくは四十歳代で死んでいる。吳趼人には兄と妹がいたが、兄は幼時に夭折した。従弟たちも成人前に死亡、吳趼人の息子も夭折している。母親は長命で、吳趼人の生前から郷里で妹夫婦とともに暮らしていた。吳趼人の妻馮宝裕(1871-1944)は 73 歳、娘錚錚(1905-1971)は 66 歳まで生きた。吳趼人の周辺では男性の影が薄く、女性に存在感があり、吳趼人は生涯を通じて同族間においては男性よりも女性との接触のほうが多かったのではないと思われる。

『二十年目睹之怪現狀』には、‘姉姊’と呼ばれ‘九死一生’を薰陶する従姉が登場する。彼女は経書の神怪解釈を‘宋儒の毒’と批判し(p194-196)、『女子は人前に顔をさらすべからず(女子不可抛头露面)’、『男女七歳にして席を同じくすべからず(七年男女不同席)’、『家庭内の話題は閨室に留め、公務の話題を閨室に入れない(内言不出于閨,外言不入于閨)’、『女子は才無きを徳とする(女子无才便是徳)’といった通行する女性解釈を否定し (p 158-160)、女子教育を訴える才媛である。‘九死一生’は作中で、彼女の訓導を受け‘この姉さんがいれば私は大いに進歩するに違いない。以前から彼女が詩詞隨筆を作れると知ってはいたが、まさかこれほど学識優れていようとは、まさしく眼前の泰山を知らずだった (…有了这位姊姊,不怕我没有长进.我在家时,只知道他会做诗词小品,却原来有这等大学问,真是有眼不识泰山了)’と感服する(p155)。吳趼人はその上に‘私もこんな姉さんがほしかった (我亦愿有此等姊姊)’と眉註を付している。‘姉姊’と呼ばれるこの女性は‘九死一生’の母方のまた従姉で、若くして寡婦となるが、姑は不憫に思い実家の母親の旅寓に付き添わせる。帰郷後、同族から養子を迎え亡夫の継嗣とし学問を教えて過ごす。女性の無学による家庭争議を問題視し、理解ある自身の夫の母を姑の理想像としている。

‘九死一生’の閨歴が吳趼人自身の人生に倣っていることから、彼女にもモデルの存在があったと予想される。おそらく一人の人物ではなく、吳趼人周辺の女性たちの様々の境遇や個性が‘姉姉’という女性の資質として結実したものであろう。ただ、才識と気概については、近似した女性の事蹟が残されている。

曾祖父吳榮光には、息子たちを凌駕する娘がいた。吳趼人の祖父の妹で、吳趼人の大叔母にあたる。名は尚熹、字禄卿。号は小荷、または小荷女史、南海女史。詩才画才を謳われ、‘生来男子に譲らない（此身原不讓男兒）’と詞題に付すほど、‘豪気であらゆるものを排撃する（豪宕之氣、足以凌轢一切）’‘錦繡の女傑（巾幗中之豪傑）’であったという*16。彼女は1808年生で、吳趼人の幼少年期にはまだ健在であったか、或いはその言行が語り草となっていたと思われる。‘宋儒の過ち’を批判する『二十年目睹之怪現狀』‘姉姉’は、‘豪気であらゆるものを排撃する’大叔母吳尚熹の言行に類似した属性を付与された人物形象であるといえよう。

2) ‘二十年目睹’の女性

(1) 『胡宝玉』（『上海三十年艶跡』）

『胡宝玉』は『上海三十年艶跡』と改名されて1906（光緒三十二）年に出版された。別名を『上海三十年来北里怪歴史』といった。その名の示すように妓女の逸話集である。歴代伝説の名妓と花柳界、游客にまつわる逸話を文言で叙述している。三十数名の妓女を取り上げており、その中には、曾樸の小説『孽海花』のモデルとなった賽金花や、吳趼人が『二十年目睹之怪現狀』で話題にした汽船会社督弁第二夫人金姨太（第51-52回、78-79回）のモデル金巧林等、時代の脚光を浴びた女性もいる。他の芸妓もそれぞれ実在人物であろう。

原書名になっていた胡宝玉は、美貌と気概で江湖に名を轟かせ、多くの逸話を残した歴代屈指の妓女であったという。彼女は眼識優れ、流行を作る名人だった。鹹水妹と付き合っ外国語を覚え、紅木の家具をそろえ、部屋を洋室にしつらえ、扇風機を置き、前髪を短く切る劉海スタイルを上海花柳界に広めた。役者との交流や放埒な行動、手腕で名を馳せた。眼力に長けており、気前のよい金持ちを選んで骨の髄まで搾り取った。吝嗇ではないが、金銭感覚に優れ金使いには慎重だった。花柳界では、支払いを踏み倒す客を罵倒打擲する習いだが、宝玉は面子を立ててある時払いにしてやるので、よく貧乏した。しかし、あるのに出さない吝嗇な客を憎み、宝飾品ブローカーの阿六と組んで五百金を巻き上げ、溜飲を下げたこともある。彼女の美貌に惹かれて通いつめる薄給の店員には、金を返し‘悪所に来てはいけませんよ’と諭した。ある年、宝玉は金がなくなり年越しに困った。そこで奇想天外な一計

を案じ、お供を引き連れ汽船に載って寧波の有名な富豪を表敬訪問した。感激した富豪は彼女をもてなし、三千金の餞別を送った。しかし、猛々しい役者に見とれ気があると誤解されて、二百金を脅し取られたりもした。美貌を武器に華北から広東まで艶名を馳せ、財布の肥えた客を貪り、顔の良い客を食った。容色が衰えると表に出ず、若い妓女を買い置屋を営んだ。伝説の豪商胡雪岩の堂名であった‘慶余堂’の看板を揚げ‘女雪岩（雌雪岩）’となり、宿願を果たした。四十歳を超えて突然、陳氏に嫁ぎ世人を驚かせた。抱えの妓女たちを捨て値で請け出させて、先に嫁がせてやり、数百函のハンカチや数百ダースの石鹸を嫁入り道具に持って行った。

吳趼人は<前言>で“名妓は古来風流佳話で名を伝えた。胡宝玉の奇聞逸事、風流佳話も伝わるに価するもので散逸させるに忍びない”と述べている。胡宝玉について、吳趼人は‘彼女は手腕をもって名を著そうとしたのではなく、ただ手腕をもって自立しようとしたのである。自立できれば名を著せる。君子は自立を貴ぶゆえである（宝玉非欲藉權術以著其名也、欲藉以自立耳。能自立即著、是故君子貴自立）’^{*17}と、地の文で述べている。また吳趼人は、全文、妓女と花柳界の話題である「胡宝玉」を、随所で《社会小説》と呼んでいる。彼が、妓女を蔑視せず、実社会で働く社会の中での存在として見ていたことがわかる。

作中の記述によれば、胡宝玉は、役者の勇ましさを羨み、誤解されるほど見つめたという。従妹が役者デビューすると、宝玉を見ようと祝儀が飛び人が集まった。彼女は男装でファンの前に現れ、威風凛々を薙ぎ払い‘大人先生’に引けを取らなかった。また伝説の豪商胡雪岩を襲名するのが悲願であったという。自立して一家を成し、雄々しさを好み、男装で公共の場に出現する胡宝玉は、一人前の社会人として男性同様の世評と処遇を求める、気概ある女性だったのだろう。

吳趼人は上海の小新聞編集者として取材や見聞を重ね、実在する女性の様々な奇行や武勇伝に触れたのだろう。海外に門戸の開けた先進都市上海に求職したことで、内陸部の古都や郷村では発現し得ない女性の行動形態に通暁することができたのであろう。彼は実社会に出てから、礼教の規範を超えた女性を‘目睹’する体験に恵まれ、女性の潜在能力や自立の可能性を確信するに至ったと思われる。

(2) ‘清国の少女傑’ 薛錦琴

論者は、吳趼人が創作の方向性を見定めるに至った出発点は清朝とロシアの結んだ東三省割譲の密約に反対して張園で開かれた演説決起集会いわゆる「張園拒俄演説会」への参加で

あったと考える。「張園拒俄演説会」は1901年3月15日に第一次、同月25、26両日に第二次集會が開かれ吳趼人は二日目に演説した。そこで彼は同じくその日に演説した16歳の少女薛錦琴(1883-1960)を目撃する。薛錦琴は広東省香山県の人、第一次集會で演説した薛仙舟の姪である。薛錦琴の父親は天津太沽洋行の買弁で、彼女は九歳の時から漢学を十二歳の時から英語を学び、十五歳で上海の女学校に入ったという*18。拒俄演説会の後、内外に称賛を浴び救国の象徴的存在となった。アメリカに留学し中華民国成立後帰国、教育部の要職に就いた。原籍が孫文と同じ広東省香山県で、叔父の薛仙舟は、民国成立後は孫文の招請を固辞し、銀行業と中国合作事業に挺身した*19。

吳趼人が1905年に描いた小説『新石頭記』(40回)は、『石頭記』の主人公賈宝玉が還俗して見聞した俗世のありさまを描く章回小説である。作品は、賈宝玉の帰り着いたのはすでに幾世を経た清末であった、という設定のもとに清末社会の実態を描写する。その第十七回に賈宝玉が、張園拒俄集會に参加する場面があり、そこでは演説に立った四人の人物の挙措風貌と発言が詳しく取り上げられている。吳趼人自身が第二次の集會で演説した十七人の論者の一人であったので、『新石頭記』の場面はある程度の実体験に基づいて描かれたといえる。作品中に取り上げられた四人は、彼にとって関係もしくは印象の深かった人物であったのであろう。集會の実際の情景や実在人物がどの程度反映されているのか、その史的資料価値の解明についてはここではひとまず措く。ただ、演説した四人のうち多くの字数を費やしている二人は、僧侶と少女という特異な人物設定から、吳趼人と同じ第二次集會の日に演説した黄宗仰及び薛錦錦をモデルとして特定できる。

黄宗仰は江蘇常熟の人、号は中央、烏目山僧と名のり、この時、富商ハルドーン(哈同)と夫人の羅迦陵に招かれ上海にいた。この翌年から蔡元培たち有志と語らって『中国教育界』を結成、会長を務めた。『蘇報』事件の際、章炳麟、趙容の救出に尽力し、日本に亡命中の孫文に資金援助した‘革命僧’として知られる*20。作品中では僧侶が出て来たというのでもととのざわめきに笑いが加わり、黄宗仰の演説は何も聞こえない。次に薛錦琴が壇上に立つと満場驚きで静まりかえる、ということになっている。作者の脚色がどの程度施されているか分らないが、少女が政府批判の演説に立ったというだけでも衆目を集めたに違いなく、吳趼人が強い印象を受けたであろうことも想像に難くない。薛錦琴の登場する場面は以下の如くである。

ふと見ると壇上に一人の十四、五歳の少女が立っていた。宝玉はあっと驚き心に思った。近ごろは何とこういう女の子がいるのか、ほんとに思いもよらないことだ。そこで耳をそ

ばだてて聞いてみると、彼女がこう言うのが聞こえた。「一人の人間が一つの国家に生れるのは、頭髮が頭に生えるのと同じです。一人の人間が一国の大事をやろうとするならば無論やり遂げることはできません。例えば一本の頭髮を持って一人の人間をぶら下げようとするようなもので、どうしてぶら下げることなどできましょう。もし、頭髮全体を手に持てば、無論一人の人間をぶら下げることができるでしょう。だから一国の大事を成そうとするなら、やはりぜひとも国じゅう四億の人間が心を一つにしようとするべきで、それならどうして成し遂げられないことがありますでしょうか！」聴衆は一斉に拍手した。その後の喧騒はますますひどく、何一つ聞こえなくなった。

…只見台上站着一个十四、五岁的女孩子。宝玉吃了一惊，暗想近来居然有这种女子，真是难得。因侧着耳朵去听，只听她说道：“一个人，生在一个国度里面，就同头发生在头上一般。一个人要办起一国的大事来，自然办不到。就如拿着一根头发，要提起一个人来，那里提得起呢？要是整把头发拿在手里，自然就可以把一个人提起来了。所以要办一国的大事，也比得要合了全国四百兆人同心办去，那里有办不来的事！”众人听了一齐拍手（第 17 回）。（吳趸人全集版 p138）。

この演説の約半年後に彼女も叔父の薛仙舟もアメリカに留学する。薛仙舟の留学先はカリフォルニア州立大学、薛錦琴はシカゴ大学を卒業したらしい*21。拒俄集会での演説で薛錦琴は当時‘中国のジャンヌ・ダルク’と報じられたが*22、出国後も彼女の愛国のシンボルとしての立場は確固たるものであったようだ。翌年九月帰国して創設直後の愛国女学校を訪問した彼女のために歓迎会が開かれた*23。また 1903 年に拒俄運動が拡大した際、『蘇報』は「錦琴はアメリカに留学中で中国には第二の錦琴がない…」と報じた*24。さらに、『奴痛』と題するコーナーに、中国人は二重の奴隷だからという理由で在米の薛錦琴が間借りを拒絶されたという出所真偽の怪しい話を載せた*25。

薛錦琴の演説は日本でもニュースとなった。明治 34（1901）年 4 月 4 日の『時事新報』*26 は‘南清の志士悲憤慷慨一堂に会し露国々旗を寸断々々に蹂躪 十六才の少女李鴻章を斬れと絶叫’という見出しで、薛錦琴をメインに張園拒俄集会を紹介した。週刊『婦女新聞』も薛錦琴の記事をたびたび取り上げている。まず、4 月 15 日に「少女の慷慨演説」と題して彼女の演説が翻訳登載された*27。二か月後には薛錦琴の父と懇意という天津在住の日本人が彼女の写真と略歴を寄稿し、その一文が「清国の少女傑」と題して掲載された*28。さらに八月、渡米の途路に日本に立ち寄った彼女を取材した記事「薛錦琴女に與へたる書」は、彼女の‘秀麗なる容姿と快活なる举止’や‘慷慨の血’を賛美した*29。

何よりも興味深いのは、当時、女権運動家として名高かった福田英子の公開書状「薛錦琴女に與ふるの書」で、該誌に二号にわたって連載された。激烈な性格の福田は、薛錦琴の果敢な行動に共感したようで‘天我東亜の国に降すに義烈なる貴女を以てす。妾等何ぞ欣喜に堪えんや’と絶賛している*30。この書状は中国の各誌も翻訳転載した*31。福田英子も薛錦琴と同様、政府批判演説で一躍脚光を浴びたのが社会運動家としての出発点である。しかし、福田はその後夫を亡くし、投獄履歴により教師もできず、当時の知識人女性としては珍しく自ら呉服を行商して生活を支え、貧窮の中に女手一つで子供たちを養育した。その生涯は、官憲の弾圧のみならず、苛烈な性格が上流婦人活動家に敬遠され孤立気味だった*32。不遇に終わった福田と社会の絶賛を受けて迎えられた薛錦琴の人生の差は、階層や政治状況の違いだけでは説明のつかない問題を孕んでいる。社会の受容態勢、人々の反応が女性の生き方を如何にあらしめるかを決定する鍵であるということがわかる。

薛錦琴は 1911 年にはまだアメリカにいたと思われる*33。その後、帰国して、1913 年に教育部で要職に就き*34、翻訳なども発表している*35。近年になり孫元が米国在住の遺族に取材した成果を纏めインターネット上に搭載した論考「南洋中学最早の女生」*36により彼女のその後の消息を知ることができた。孫元によると、彼女は 1915 年広東出身の林天木と結婚し一女を得た。彼は留学後革命軍の武昌起義に共鳴して帰国、辛亥革命後は中国公學や復旦大学で教鞭をとった。公務の傍ら夫妻で自宅に小学堂を起し十数名の生徒を指導した。しかし、日中戦争の際に桂林に逃れ資産を奪われ夫も病死する災禍に遭う。戦後は香港で国家銀行に勤め一族を養ったという。日本軍の侵略、国共内戦までまずは意に適った順調な人生であり、中年に国難と不幸に遭いながらも自立し穏やかな晩年を迎えたようである。

一族の女傑の薫陶を受けて育った呉趼人は、もともと女性の力に関心が高かったと思われる。長じては上海に生計を求め大衆新聞の記事を書く中で、多くの気骨ある芸妓の逸話風聞に触れた。さらに政治運動の中で、救国の星として‘中国のジャンヌ・ダルク’と謳われる少女薛錦琴と遭遇する。呉趼人は彼女と同座したことで、救国の一環としての女性性を意識するに至ったと思われる。小説家に転じる以前から、呉趼人は女性を社会的存在と認識しており、気概ある女丈夫を見聞するにつれ、中国における女性のあり方への関心を深めていったといえよう。そのような彼の女傑体験を念頭に置きながら、小説における女性像、男性像の構築という点に照準を当てて作品解析を試み、《写情小説》の意義、影響力について検討したい。

(3) 小説における女性性の構築

①「電術奇談」、『恨海』、「劫余灰」、「情変」—恋心と自立

女性の潜在能力、社会におけるあり方に関心の深かった吳趼人は、小説執筆にあたってどのような構想を立てたのだろうか。中国において男女の愛情を描いた小説は言情小説と呼ばれてきた*37。それらの小説は‘父母の命、媒酌の言（家長の指示と仲人の薦め）’による婚姻を必須条件とする儒教倫理の制約を強く受け、恋愛関係の結末は概ね、文人、貴公子と権門高官令嬢との団円や妓女との悲恋が常套であった。縁組は家長の命によって成され、妻妾は睦まじく家を守るのが婦徳とされた。先に挙げた『野叟曝言』や『兒女英雄伝』の婚姻状況は常態であったと思われる。実生活においても清中期の人沈復(1763-?)が自叙伝『浮生六記』*38に綴った亡き愛妻芸は自分とうまの合う芸妓を夫の妾に迎えようとする。清中期の小説『紅樓夢』の賈宝玉は、恋愛感情を優先したために家庭生活は破綻し、家運を挽回できない。『紅樓夢』への対抗意識を前面に打ち出す『兒女英雄伝』は、二人の美女が互いを推薦しあい同じ男性に嫁ぐ。二人は協力して夫の科挙合格、立身に尽くす。さらに万全を期して、有能と見こんだ侍女を夫の妾に格上げし身の回りの世話を任せる。旧中国において家庭生活の最終目標は家の維持発展であり、恋愛感情は結婚条件の埒外にあったかのようである。

清末になると西洋近代文明に触発され、出版状況も恋愛状況も‘文明’（開明）化する。新聞や雑誌が創刊され、外国の恋愛小説が翻訳掲載された。それらの翻訳恋愛小説はまさに異世界の文化として清末社会に出現した。吳趼人は、1903（光緒 29）年から 1905（光緒 31）年にかけて、翻案小説「電術奇談」を《写情小説》と銘打って発表した。以来、中国においても中国人作家の創作になる“○情小説”と銘打った恋愛小説*39が盛んに描かれた。吳趼人は「電術奇談」翻案から、1910（宣統二）年 10 月の急死までの八年間に、四篇の《写情小説》を描いた。《写情小説》は民国以後盛行した社会性に乏しい‘鴛鴦蝴蝶派’*40小説の濫觴を成したといわれている。しかし吳趼人自身は以下の如く、能力ある女性の恋愛感情の表明、自立心、行動力を称揚する姿勢を貫いて作品世界を展開している。

○「電術奇談」（『新小説』第 8 号—第 2 年第 6 号〈原第 18 号〉連載。光緒 29 年（1903）8 月 15 日—光緒 31（1905）年 6 月）は英国小説の日本語訳の中国語訳翻案である。ヒロインはインド藩王の姫である。彼女は英国人技術者の恋人を追って家出する。ロンドンで恋人と資産を失い、危難を乗り越え自立し、恋人と再会する。吳趼人は、ヒロインの行動から、女性の恋心が自立の意志

に連動し得ることを知り、以来《写情小説》を執筆し、女性が自我を発現する契機について思索を進めたと察せられる。奮闘する女性括りで前年に同座した薛錦琴の姿が重なり、“自我を発現し覚醒した女性の救国への寄与”という構想が生まれたのではないかと推察される。

○『恨海』(10回)(1906年)は最初の創作《写情小説》である。首都官僚の息子と富裕な都市商人の纏足した娘の愛情を描く。二人は婚約していたが、礼教に縛られ同席できず義和団の騒乱に生き別れる。瀕死の婚約者に再開したヒロインは、礼教に捉われず人前で手ずから介護して最期を看取り、出家する。

○「劫余灰」(16回) 創作《写情小説》。(1907年—1908年)。広東郷紳の息子と農村儒者の纏足していない娘の愛情を描く。結婚を控えて、それぞれ誘拐され死が報じられる。ヒロインは婚約者との心の絆を支えに脱走、生還し、その婚約者の家に嫁ぎ舅姑に仕え帰還を待つ。

○「情変」(『輿論時事報』1910年5月から9月まで連載。作者病没により第8回で未完)は清後期の作家宣鼎の既刊作品を原作とする翻案改作である。農村大地主の息子と武術見世物興業師の娘の愛情を描く。ヒロインは美少年に惚れ、自ら求愛し夜這いする。親に知られ引き離されると、武術の技を駆使し男を攫って逃げ、同棲する。

このように、最初の翻案小説「電術奇談」のヒロインは、高貴な身分と父王の庇護を捨て異国の恋人への愛を選ぶ。異国で不慮の危難に遭うが得意な音楽で自立しようと奮起する。そのような、ヒロインの恋心から自立心が誘発されるという展開を、後の三作が敷衍している点を特徴とする。しだいに主人公の所属階層と地域の自由度が増し、男女の接触度、恋愛成就率が上がってきている。吳趼人は中国社会の中で、儒教上の拘束が低く‘写情’しやすい地域、階層を模索していたと思われる。先に述べたように吳趼人は、自身の原体験により、女性の能力の社会改革への関わりという意義を認めていた。彼は「電術奇談」に触発され、女性の愛情表現と自立の連動性に着目して‘写情’に取り組んだのであらうと思われる。

②『新石頭記』一性差を意識しない男女関係

『新石頭記』は《理想科学小説》と銘打ち、理想の中国像探求を目指した。登場する女性は二人いる。どちらも“理想の中国女性像”として登場していると思われる。一人は既に言及した救国を訴え公共の場で演説した実在女性薛錦琴をモデルとする少女である。もう一人は女科学者東方美である。登場場面は以下のようにわずかであるが、鮮烈な印象を残す。彼女は、公共の場に姿を現し、男性と同席対座し、応接する。士大夫階層の女性が親族以外の

初対面の男性を交えて歓談する情景は、動乱や災害等非常時の場面を除けば中国小説に描かれた例を知らない。

東方美は温厚で穏やかに泰然としていた。(中略)。鷹揚で風格があり浮わつた態度ではないのに、恥じらいや怯えはなく、普通に皆と言葉をやり取りしていた。彼女自身が女性を意識していないばかりか、対座する相手も彼女が女性であることを忘れていたかのようであった。

東方美温厚和平，自然庄重。(中略)。東方美也是落落大方，固然没有那轻浮样子，却也毫不羞缩，一样的应酬说话。非但她自己不像以女子自居，就是同她对坐的人，也忘了她是个女子。(第39回 P312)

男女同席の嫌疑を気にせず自然体で社交し、学問を修め科学者として国家建設に貢献する東方美は、まさしく先にあげた黄錦珠の著書『晚清小説中の「新女性」研究』に挙げられている‘新女性’の条件を満たした女性であるといえる。吳趼人の四編の《写情小説》と『新石頭記』に登場する女性の特徴は、女性が自立に踏み出す足掛かりとして恋を称揚したこと、性差を意識しない男女関係を描き得たことであるといえよう。黄錦珠は該書において、当時の作家の限界として、女性の公共の場における‘空間自由’を描くのに苦慮したこと、女性の情欲を描写できなかったことを挙げている。‘新女性’を描こうとする意図をもたなかった吳趼人の《写情小説》が、かえってそのどちらも描き得ているのは興味深い事態である。

近年、中国と台湾における研究に《写情小説》解釈の試みが見られるが、みな『恨海』、『劫余灰』、『情変』を三部作として同列に論じている。しかし先に述べたように、初めて《写情小説》の名を冠した作品は「電術奇談」で、吳趼人の創作ではない^{*41}。登場人物も外国人である。最後に描いた「情変」は、前世代の作家宣鼎の著した「秦二官」の改作^{*42}である。人物プロットともに吳趼人の創作ではないので、前二作とは設定や視角が異なっている。

「電術奇談」の翻案はほかならぬ吳趼人自身の創作に大きな影響を与えたと思われる。彼は外国人の恋愛を描いた小説に触発されて、中国人の恋愛を描く意欲を抱き、創作《写情小説》『恨海』の執筆に取り組んだという推察が成り立つ。《写情小説》を読解するには、吳趼人に影響を与えた他作家の作品という括りで、最初の「電術奇談」と最後の「情変」を同列に論じるべきであろう。

そこで先ず、同種の執筆意識の下に創作したと思しい『恨海』、『劫余灰』兩作品から、吳趼人が‘写情’に見出した意義を検討し、彼の女性と恋愛に関する考え方を確認しておきた

い。本論の引用には『吳趼人全集』第5巻版を使用した。

2. 創作《写情小説》『恨海』と「劫余灰」―守節という処世

1) 『恨海』(1906)

1906（光緒32）年10月に書き下しで出版した小説『恨海』は、《写情小説》の嚆矢とされる。吳趼人は「電術奇談」脱稿後、『二十年目睹之怪現』、『新石頭記』、『糊塗世界』の連載を抱えながらも、『恨海』を書き下ろし刊行する。刊行の半年後、彼は‘わずか十日で脱稿した。（中略）書中の言葉も考えもすべてありきたりで古くさく、とりたてて新鮮でもなく我ながらまことに遺憾である。幸いだったのは、全文に情を描きながらも道德の範囲を逸脱しておらず、大君子に唾棄されるには至らなかったことのみである（仅十日而稿脱…然其中之言论理想，大都皆陈腐常谈，殊无新趣，良用自歉。所幸全书虽是写情，犹未脱道德范围，或不致为大君子所唾弃耳）’^{*43}と述べている。まずは無難に‘写情’を果たし、“国難の中の悲歎離合”という設定が受けて、芝居や映画にもなった（魏紹昌篇『吳趼人研究資料』p139）。

既述の如く民国以後の中国では、吳趼人の《写情小説》は概ね“社会性のない恋愛小説”、“封建制の強い旧小説”と評されてきた。民国以来の定説では、男女の愛情故事に終始、但し庚子事変の動乱を反映した歴史意義を認められると評されてきた。文革終結後の中華人民共和国に至っても同様に、盧叔度は、

吳趼人の《写情小説》を描こうとする主張は理解できるが、結局（『恨海』、『劫余灰』）は旧套を脱し得ず、封建文人の思惟を暴露している。阿英の言うとおり、吳趼人の《写情小説》は“実際には旧来の才子佳人小説の変相であり、そこに現れているのは旧態依然たる封建思想なのである”

《恨海》《劫余灰》…可以了解吳趼人之所为《写情小说》，无非是旧一套，充分暴露了封建文人的思想情趣。阿英说的对：吳趼人的《写情小说》“实际上不外是旧的才子佳人小说的变相，反映的仍旧是一派旧的封建思想”。（「関与我仏山人後略—長篇小説部分」《中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3 期 总 76 期》p99）

と評している。

吳趼人は、中国小説史上初めての創作恋愛小説『恨海』を上梓するに当って、先ずは以下の如く‘情’の定義づけを試みている。

これは私の持論である。人に情のあるのは生まれながらの資質である。人事を解するより先に情は存在するのだ。普通、嬰兒の泣く、笑うもすべて情なのである。決して俗人の云う性に目覚めるというあの情ではない。俗人は単に男女の情交のみを情とみなしている。私の言う生来備わっている情とは生れつき心中に根ざしており成長すると一つとしてこの情を用いないものはない。人がそれをどう発揮するかというだけのことなのだということをわかっておかねばならない。君国に発揮すれば忠、父母に発揮すれば孝、子女に発揮すれば慈、朋友に発揮すれば義なのである。思うに‘忠孝’の大節でこの‘情’より出ないものはない。男女の情交などについてはただ痴と呼ぶべきであろう。情を用いる必要もなく用いるべきでもないのに勝手にそれを情とする者までおり、そのようなのは魔とよぶべきである。さらに言いたい。先人は‘守節の婦’を、心は枯れ木、冷えた灰の如く枯れ井戸に漣のたたないように情に揺れることはないのだという。しかし、私は決してそうは思わない。情に揺れないということが最も情に長けているということなのだ。俗人はただ男女の情交をのみ情とみなし情というものを軽く見すぎている。そのうえ多くの写情小説は結局情を描かず魔を描いている。魔を描いておきながら情を描いたと称する。まことに筆端の罪過というものだ。

我素常立过一个议论，说人之有情，系与生俱来，未解人事以前，便有了情。大抵婴儿婴儿一啼一笑，都是情，并不是那俗人说的情窦初开那个情字。要知俗人说的情，单知道儿女私情是情，我说那与生俱来的情，是说先天种在心理，将来长大，没有一处用不着这个情字，但看他如何施展罢了。对于君国施展起来便是忠，对于父母施展起来便是孝，对于子女施展起来，便是慈，对于朋友施展起来便是义。可见忠孝大节，无不是从情字生出来的。至于这儿女之情，只可叫做痴。更有那不必用情，不应用情，他却浪用其情的，那个只可叫做魔。还有一说，前人说的，那守节之妇，心如槁木死灰，如枯井之无澜，绝不动情的了。我说并不然，他那绝不动情之处，正是第一情长之处。俗人但知儿女之情是情，未免把这个情字看的太轻了。并且有许多写情小说，竟然不是写情，是在那里写魔；写了魔，还要说是写情，真是笔端罪过。（『恨海』第一回 p 3）

彼はこのように、‘情’を人間性の発露である故に人倫の根幹であるとまで力説して、道徳上の非難に備えようとした。従来通りの才子佳人小説の焼き直しを意図していたならば、それほど意気込みで執筆意義を表明する必要があるとは考えられない。実際、それ以前の言情小説やその後の“鴛鴦蝴蝶”派小説が、“不道徳”という非難を慮ったり、ことさらに恋愛小説執筆の意義を申し述べたりすることはなかった。吳趼人は常ならぬ覚悟をもって『恨海』執筆に臨んだということになる。彼は、作中で女性が愛情を自覚し表明すれば、‘大君

子’の批難は必定であろうという予測のもとに、愛情の意義を力説し社会認知を得ようと努めたのであろう。

吳趼人が、『恨海』における‘写情’に何を試みようとしていたのか、確認しておかねばならない。作品設定は次のようになっている。

【時代背景】1900年、義和団事件

【出身階層】首都官僚、富商

【女性像】富裕な商家令嬢。愚直で温順、纏足している。十三歳まで家塾に学び、かろうじて文字を書ける。

【男性像】首都官僚令息。聡明温厚な才子。

【関係】幼馴染、家塾仲間、父命により婚約。

【結末】悲劇

粗筋は以下の通りである。

北京在任の官僚、陳戟臨の二人の息子は幼い頃、隣家の商人の娘張棣華、王娟娟とともに陳家の家塾で学び、長男の陳伯和は張棣華と次男の陳仲靄は王娟娟と婚約していた。義和団の乱の勃発により、陳夫妻は殺され、伯和は棣華母娘に付き添い棣華の父のいる上海に向かう。南下の途次、伯和は男女の嫌疑を憚る棣華を気遣い屋外に起居して病に罹り、母娘とはぐれてしまう。その後母も衰弱死し棣華は一人上海の父のもとに辿り着く。ようやく探し当てた伯和はアヘン中毒になり心身荒み果てていた。棣華は嫌疑を恐れず瀕死の伯和を看病する。伯和は棣華に心を許し裏切りを詫びて死に、棣華は“陳家で守節(婚約者や夫の死後、位牌を守って再婚しない)”しようと父に無断で出家し尼になる。一方、婚約者を捜して縁談や妓楼遊びを斥け世間知らずの堅物(‘迂儒’)と呼ばれる仲靄は、妓女となった娟娟に出逢う。彼女は恥じて逃げ去る。仲靄は自分たち兄弟と婚約者たちの運命を悲嘆し、俗世を遺棄して行方を絶つ。

この小説で、吳趼人は、義和団事件の動乱の渦中という特殊な状況下における親の決めた婚約者同士という間柄の男女の交流、恋心の萌芽と醸成を描いている。

主題となっているのは都市出身士人階層の男女間における嫌疑遵守の絶対性である。幼時より親しい隣人として家塾で共に学び婚約もしている男女が、老母を抱えての逃避行の最中に男女の嫌疑を憚って会話はおろか同席さへ厭い、離散と破滅の事態を招く。登場人物は文字通り命をかけて男女間の道德律を守っており、随所に‘大君子に唾棄’されぬようにとの作者の苦心の跡が窺える。婚約者同士が親しく寄り添うのは伯和の死に際、棣華が尼となる

決意をした後なのである。棣華が伯和への愛を自覚する場面も現実の交流としては描かず、伯和の夜着を使用したり伯和の夢を見たりした時の棣華の胸のときめきに象徴させている（第5回）。また、棣華が‘古人の割股療身には効用があるのかしら’と思い立ち腕の肉を切り取って衰弱した母に食べさせる場面を唐突に挿入する（第8回）。棣華が儒教倫理を遵守していることを読者に印象付けるのに効果的ではある。しかし、義和団事件の動乱の最中を衰弱した母を介助しながら逃げる纏足の少女の行動としては状況面、情緒面ともに不自然感を免れない。

しかし、道中に遭遇する破壊と戦禍、北京から南下する避難民の群れ、車馬や船がすし詰め状態となる街道や河川の描写、習った文字も忘れかけ救援の手紙を書くのに難儀する棣華と、少女が文字を書けるというだけでも周囲が驚嘆する場面の描写等は臨場感に溢れ、動乱と危険の様相が活写されている。そのように、『恨海』は、纏足したヒロインが危難の中で、恋情を自覚し、嫌疑（男女関係を取りざたされるぬよう男女の同席、直の会話を禁止する礼教の規定）を恐れながら、人前で救出要請の手紙を書き、婚約者を介護し、父に無断で出家する経緯を描いた作品である。異性を意識し羞恥、懊悩する女性の心理を一人称で描いた作品は旧小説に例を見ない。また、動乱に見舞われた女性が社会と対峙し、人目に曝されながら脱出し、愛を自覚して婚約者を介護する、という描写は、社会の中の女性を描いたという点で画期的であったといえる。

儒教倫理を慮っていた少女の恋の自覚という設定下に、女性の恋愛感情を一人称で描写した点がこの小説の特徴である。

私たちは幼いころはふざけあって遊んでいたのに、五、六年会わない間に彼はこんなに私を気遣ってくれるようになった。自分の病氣も治っていないのに私が気に病まないようにと外に出て行った。彼の病は私を気遣ってくれたせいだ。

棣華暗想：我們還是小時候開過玩笑，這會隔到五，六年不見了，難得他這等憐惜我，自己病還沒有大好，倒說怕我熬壞，避了出去。他這個病，是為迴避我，…p10（第2回）。

と後悔する棣華は、アヘン中毒で衰弱した伯和と再会すると、嫌疑を振り切り看病に勤しむ。‘未婚の妻’棣華が仰臥すら自力でできない伯和に口移しで薬を飲ませ、肩を貸し腰を抱いて寝台に運ぶと、‘案の定、ありえないとか、恥知らずとか、ひそひそとあれこれ囁かれるのはやむを得なかった（‘未免窃窃私议有说難得的，有说不害臊的，纷纷不一。’）’（第10回P73）。

‘恥知らず（不害臊）’という非難は、結婚前からの男女関係を邪推する声と思われる。旧社会の未婚の女性にとり、貞節への疑いは死に等しい恐怖であったはずである。呉趼人は、伯和への愛情を募らせながら嫌疑を恐れて避け懊悩する棣華が、‘嫌疑を恐れない’と世人の目に立ち向かうに至る様を詳細に描いた。作中の‘写情’は男性の健康を気遣う心理描写に終始し、呉趼人自身が‘ありきたりで古くさい’と自覚する出来栄であった。その程度の描写でも、男女が同席し愛が芽生え醸成される過程である。批判の言辞が予測され、儒教論を振りかざした前言で牽制しなければならないほど冒険であったのだろう。『恨海』は、女性が、嫌疑を憚り懊悩する心理、男性への愛を自覚する過程、さらに愛情が嫌疑の恐れに勝り、男性との直の会話、接触に踏み切る心理を詳細に描写した、中国小説史上最初作品であるといえよう。

さらにこの小説は、女性の心身両面を縛る枷である儒教道徳と纏足という普遍性に富む問題を提起して、当時の読者の関心を集めたと思われる。棣華たちの南下の情景は、纏足する女性の不慮の災禍に遭って陥る危難を如実に表した。貧窮した難民と異なり下男や侍女を伴った逃避行でありながらも、棣華母娘は纏足している為に移動が不自由で互いに支えあいようやく車に乗る有様である（第8回）。“街道に車馬がひしめき前進できず、銃声や焼き討ちに怯える”状況下でも、自力では逃げられない。緊急避難時に唯一の頼みの婚約者は助勢どころか接近さへ困難で、歩行すら危うい女性だけの逃避行を余儀なくされる。それはどの家庭においても遭遇し得る事態であったろう。作者の自認する通り嫌疑を重視したことにより、男女の同席、接触の禁忌を描きながらも‘大君子’からの道徳上の誹りは免れた。同時に‘大君子’ではない多くの一般読者は、自身や家族の身の安全性について危惧の念を抱いたに違いない。その点においてこの作品は、禁忌への疑念を提示し、女権の拡張に向けてある程度の啓蒙の功用を果たし得たといえよう。

2) 「劫余灰」(1907-1909)

『劫余灰』十六回は1907（光緒三十三年丁未）年11月から1909（戊申）年1月まで《苦情小説》、《言情小説》と銘打って『月月小説』第1年第10号から第2年第12期（原24号）まで連載された。呉趼人は第1回で“世の自然と人、あらゆる生き物は‘情’によって動かされる。古来より軽佻浮薄の輩が‘情’を男女の悦楽のみに限定して‘情’の範囲を狭めその意義を貶めがちとなったのは‘情’の悲運（‘劫運’）であった。今や痴情のみが語られ‘情’は‘劫余灰’となり果てた。そこでこの小説を描き‘劫余灰’と名付けることにした”

（自从世风不古以来，一般挑担(換於人扁旁達)少年，只知道男女相悦谓之情，非独把情字的范围弄得狭隘了，并且把情字也污蔑了，也算得是情字的劫运，到了此时，那情字也变成了劫余灰了。我此时提起笔来，要抱定一个情字，写一部小说，就先提了个书名，叫做《劫余灰》。P83)

との趣旨で、執筆意図と書名の由来を述べている。作品の設定は以下の通りである。

【時代背景】1905年以前の清末（科举、買猪仔 が作品背景となっている）。

【出身階層】広東の郷紳（農村の官僚経験者、知識人）。

【女性像】偏屈儒者の娘。才色兼備で気丈、天足（纏足しない天然の足）。

【男性像】郷紳一族の息子。秀才に合格、聡明で果断。

【関係】幼馴染、男性側から縁組を希望し婚約。

【結末】一応の団円。

この小説は郷村士人階層出身女性の儒教制約下における婚姻と恋の萌芽、处世を描いている。わずか十日で一気呵成に仕上げた『恨海』と異なり、優れたプロットと丁寧な心理描写で同族間の不和、旗人官僚の横暴、‘賣猪仔’、国内産業の衰退などの内憂外患と個人の運命を交錯させ深みのある作品となっている。煩雑になるが回を追って粗筋を挙げる。

〔粗筋〕

〔第1回〕

広東省崗邊の小地主朱小翁はその学識に高い世評を得ながら仕官せず、偏屈（‘古怪’）呼ばわりされている。彼は一人娘婉貞に纏足させず学問を教えて育てる。隣人陳公儒の妻李氏は実子がなく亡き妾の生んだ耕伯を育てている。李氏は婉貞を耕伯の嫁に望み、弟陳六皆を仲人に立て朱家に縁組を申し入れる。

〔第2回〕

朱小翁は婉貞と同等の学識ある婿を望み、陳耕伯が秀才に合格すれば承諾するという条件を出す。耕伯が合格し両家の婚約が整うと、朱家では朱小翁の弟仲晦、趙氏夫妻に手伝いを頼む。

〔第3回〕

陳耕伯が学友の柴也愚、遊於芸と共に失踪する。新聞に広告を出すなど八方手を尽くすが杳として行方は知れない。叔父仲晦は小翁と婉貞、女中の杏児を外祖母の誕生祝に誘い出し、船で省城へ向かう。

〔第4回〕

朱小翁が仲晦に誘われて下船した間に、婉貞、杏児、趙氏を乗せた船は出港し行方知れずとなり仲晦夫妻も姿を晦ます。朱小翁は弟が香港に煙館を開くという触れ込みで転居したと聞き香港へ行くが見つからず、煙館の主人から賣猪仔の恐ろしさを聞く。省城に帰る船中で陳公儒に会う。

〔第5回〕

陳公儒も香港で耕伯が目撃されたと聞き、探しに来たが見つからなかった。朱婉貞は仲晦によって広西の桐州、三岔河の阿三姐に売られており、幽閉されて鞭打たれ妓船で客を取るよう迫られ首を吊る。

〔第6回〕

婉貞は蘇生し、さらに酷い折檻を受ける。彼女は従順を装い、阿三姐の嫁阿鳳に文字を教えて筆絡し、紙と筆を手にいれ逃げる機会を窺う。

〔第7回〕

婉貞は、城隍廟に参拝しないと災厄に遭う年回りに当たると阿三姐を騙す。参詣の当日、婉貞は偶々遇った李琛知県に、密かにしたためておいた血書を差し出し、保護される。

〔第8回〕

婉貞の父が碩学硬骨の世評高い朱小翁であると知った李琛知県は、婉貞を好遇する。婉貞は祖父と父の体面を慮り叔父に売られた点を伏せて供述する。ところが李知県は売買契約書から杏児を捜し出し保護する。杏児から叔父の姦計を聞いた知県は婉貞の孝順と聡明に感嘆する。知県は広東会館理事のつてで婉貞と杏児を帰郷させる。ところが肇慶峡で船が転覆、婉貞だけが救出されなかった。

〔第9回〕

婉貞の水死が報告される。李氏は、婉貞の凶運が耕伯の命を剋したせいで耕伯が失踪したと言いはり、陳公儒と言い争う。婉貞は旗人式鍾の舟に救われるが、式鍾は婉貞を妾にしようとする。婉貞は拒んで式鍾を罵倒する。怒った式鍾は彼女を打ち殺し、死体を公共墓地に運ばせる。

〔第10回〕

途中大雨になり、人夫たちは婉貞の棺を置き去りに雨宿りに行く。婉貞は失神したまま夢に郷里崗邊に帰るが父や陳夫妻には婉貞が見えず、耕伯だけが彼女を認めて連れ帰る。彼の情誼を尽した応対に恋情を募らせ、結婚式を挙げたところで目覚めて蘇生する。棺の蓋を蹴り開け荒野を走って逃げ、妙悟と翠姑という二人の老尼に保護される。

[第 11 回]

妙悟尼は出家して貞徳庵を建て亡くなった夫の墓を守っているという。婉貞は夢に耕伯と遇ったことを凶兆かと心配するが、妙悟尼は耕伯が郷里を忘れず帰ると慰め、四句の偈を与えて‘情’について講ずる。婉貞は婚約者の叔父陳六皆の営む宝飾店に手紙を書くが返事は来ない。病に倒れたところへ、妙悟尼の知己の名医黄学農が訪れる。

[第 12 回]

陳六皆は舶来産業の攻勢で店が潰れ、数日前まで黄学農の家に滞在していたとわかる。黄学農は婉貞を治療し彼女の帰郷の付き添いを引き受ける。婉貞の評判が広まり、潤筆を求め車馬の往来が絶えない。半年後、婉貞は全快し潤筆代を礼として置き、一年ぶりに故郷へ帰る。

[第 13 回]

婉貞を小翁の家に送り届けた黄学農は、妙悟尼から預かった婉貞の潤筆代を残して立ち去る。半年後、陳六皆が仲晦の消息を伝える。長沙で仲晦に遇った六皆は、酔った仲晦から婉貞の誘拐と耕伯の失踪が彼の仕業であり、耕伯が南ナントカという地にいるらしいことを探り出す。

[第 14 回]

仲晦から耕伯が南寧で米屋の番頭をしていると聞き出した六皆は、南寧に耕伯を探しに行くがすべて出鱈目であった。怒った朱小翁は湖南に赴くが仲晦は訴えられ拘禁されている。

[第 15 回]

小翁、六皆は、獄中の仲晦に耕伯の居所を詰問して拒否される。差役に袖の下を渡して聞き出させようとするが、見抜いた仲晦は、耕伯は香港で瘟疫にかかり死んだと述べる。悲嘆にくれる婉貞は陳家で守節する決意を固め、道士に招魂させて慟哭し吐血する。

[第 16 回]

以来、婉貞は陳家で舅姑に仕える。三年後李氏は七十歳で亡くなり、六皆の孫を恒農と名づけ耕伯の継嗣として養育するよう遺言する。耕伯の失踪に懲りた公儒の望みで他所に就学させず婉貞と小翁が教育に当たる。さらに十五年後、恒農十六歳、公儒九十歳、小翁六十九歳、婉貞三十六歳の時、親戚一同の集う公儒の誕生祝の席に、突然耕伯が帰還する。彼は仲晦に試験場から連れ出され、二人の友人とともに猪仔館に売られ香港から舟で東南アジア（巫東由）に運ばれ、アヘン農園で働かされていた。三年後、隙を見て銀粉水を飲んで顔を黒くし現地人に成りすまして逃げ、舟でシンガポールに渡る。商店で働きながら金を貯めて

帰国しようとするが、店主の蔡柏臣が彼の学才を認め婿に望み、軟禁して帰さない。蔡氏を娶り二男一女をもうけ、ようやく妻子とともに帰国を許されたのだった。一同は彼の生還を喜んだものの、朱氏、蔡氏の扱いに苦慮する。蔡氏が朱氏に本妻を譲り、互いに姉妹と呼び合い皆を安心させる。再会した婉貞、耕伯は晴れて結婚式を挙げ、その後恩愛に満ちた生活を送る。

このように、「劫余灰」は天足で学識ある女性が攫われて売られ、恋情を自覚し、自力で脱走し、潤筆料を稼ぎ、婚約者の帰還を期待しつつ婚家に押しかけ守節する、二十年後に妻子を伴って帰還した婚約者の正妻として婚礼をあげる、というストーリーを描く。民国以来の定説は『恨海』に同じく男女の愛情描写に終始したというものである。しかし、『劫余灰』の特徴は、ヒロインの婚約者への愛の確認が自己確認に連動する過程にある。母を交えた幼児の思い出を回顧するという形を取りつつ、好意の確認、愛情の醸成が描写されている。呉趼人は、ヒロインの婚約者への愛情が芽生え、自覚され、深まる過程を描くのに意を尽くしている。‘男女の悦楽のみ’描くのではない‘写情’に努めたのであろう。

朱婉貞と陳耕伯は幼馴染だが、二人の接点は幼時に限られている。婉貞は父に就いて、耕伯は省都の師に就いて勉学し数年離れていた（至于婉贞与耕伯，却是从小儿常常相见，在一起玩笑，耳鬓厮磨的。虽然自从耕伯到省城读书之后，隔别了几年。第3回 P99）。

成人後、婉貞の美貌と学徳を気に入った陳家に望まれ縁組が適う。第2回で婚約が調うと婉貞は亡くなった母と幼時の耕伯との思い出にふける。

五、六歳のころあれこれ親しい往来があった。母は彼が一番のお気に入り、会うごとに私と彼と一緒に膝に抱っこして、この子をお婿さんにできたらいいのにと言っていたものだ。その時は幼くて恥じらいもなく一緒にニコニコ笑っていた。今母の願いがかなったというのに、可哀そうに不運なお母さんはそれを見ることができなかった。ここまで思うとつい涙がこぼれた。

因为这个，又想起自己母亲，记得五六岁上，凡遇有来往应酬。我母亲最欢喜的是他，每每见了，便把他和我两个，一对儿抱在膝上，说是得了这个女婿便好。那时自己年幼，不解羞惭，也跟着嘻嘻的笑。此时已遂了母亲的所愿，只可怜我那苦名的娘，没有眼睛看见了。想到这里，不禁落下泪来。（P92 第2回）

婉貞は母の思い出と絡めて耕伯に初めから好意を抱いており、彼との縁組を自然に受け入れている。第3回で陳家からの申しこみに朱小翁が条件付きで承諾したことを告げられた婉貞は、

口には出せなかったが心中では以前私たちがいつ会ったか、いつどこで遊んだか、どこでおしゃべりしたか、この耕伯をどんなに人懐こく可愛いと思ったか、一つ一つ思いが湧き起ってくる。それなのに彼が合格しない限り結婚を認めないなどと余計な事を言う父が恨めしかった。こっそりと彼が早く合格し結婚が成就しますようにと祈っていた。

他口中雖未便说出,心中却把从前我两个曾在何处相见,何时何日在何处同玩耍,在何处同谈笑,觉得这耕伯如何亲热,如何可爱,一一都潮上心来,倒觉得父亲一定要等他进了学,方才许亲,未免多事,暗暗地祷祝他早点进了学,以便成就这件好事。(p99 第3回)

婉貞はその後、妓船や旗人官僚式鐘に捕えられ貞操の危機に瀕する旅に、‘陳さん、陳さん。御帰還なされたら後添えをお娶りになって。薄命の身はもはや朽ち果てているでしょう。(陈郎啊,陈郎!他日荣归续娶,薄命人只怕已经肉尽枯骨的了! (p115 第5回)’、‘もう嫁ぐ夫のある身です(已经定有夫家的 p145 第9回)’と陳耕伯の存在にすがる。当初、婉貞にとって婚約者の耕伯は心の支えであり社会との紐帯であったことを示している。式鐘に打たれ生死をさ迷ううちに彼女の魂は故郷に帰る。父や舅姑に呼び掛けるが無視され泣いていると、耕伯だけが気づき労わってくれる。彼について帰宅し婚礼を挙げ、思いを語り合ううちに蘇生する。

このように呉趼人は先ず、婉貞が幼児の仲良しで、母のお気に入りだった耕伯を好もしく思い結婚を楽しみにしていた、という伏線を敷いた。その上で、生き別れた後、危難に見舞われる度に婉貞の耕伯への思慕と愛情が醸成されていく、という設定で彼女の恋心を描いている。仕上げに、耕伯が文字通り“白馬の貴公子”となって登場する夢の描写*44を用い、二人の関係と再会、愛情を確認し結婚を願う彼女の思いを念入りに総括する。繰り返して述べてきたように、親族以外の男女の同席は絶対禁忌であった。まして未婚の男女が二人だけで語り合い、女性が愛を自覚し醸成する過程である。夢と設定しても、批難は必至と覚悟されたであろう。しかし、その場面により婉貞は、自分を認めてくれるただ一人の人であり ‘よその人とはもとより違う、私が命を懸けて一生を捧げるに値する人(与别人又自不同,也不枉我一向出生入死的代他苦守 第10回 p150)’ という耕伯への愛を自覚する。彼女は保護された後、耕伯が夢に現れたことを吉凶の暗示とみなし気にかかる。“耕伯が故郷を忘れず帰還する暗示だ”

と聞かされ、さらに絆の確信と帰還への期待が強まる。この設定は、婉貞が耕伯を夫とすると固く決意し、耕伯不在の実家に嫁ぐ伏線となっている。守節は儒教道徳を遵守する“貞女”の行いであるが、吳趸人は、愛情の自覚、生還への期待からの選択として描いた。愛を人生選択の核としている点にこの小説の特色があるといえる。

婚約者同士が心を通わせ愛を確認する経過は、長い夢の中で叙述されている。夢で耕伯と過ごし結婚式を挙げた記憶が、覚醒した婉貞に夫婦の絆を実感させた。吳趸人は、夢の記憶が妻となった現の感覚をもたらすという巧妙な手法で、女性の愛と自己実現を描き出した。古来より、夢に真理や本性、天の啓示を知るという設定は中国文学の常套手法であるが、現実の恋人や婚約者への恋情を反映させる手法は稀ではないかと思われる。最初に翻案した「電術奇談」では、ヒロインの夢に行方不明の恋人が現れる。原訳にない場面で、評者の周桂笙は、“愛情のさりげない描写を考案した衍義者の妙手”に感嘆を表している。吳趸人は《写情小説》の角書きを採用した段階から、女性の恋情を描く創意工夫を凝らしていたことがわかる。

3) 守節の意味

吳趸人が『恨海』、『劫余灰』両作品を執筆した目的は、先ず清末の知識人家庭に育った婚姻前の女性を描く時に、どのような愛情表現が可能であるかを追求することにあつたと思われる。儒教倫理下での許容範囲において恋愛感情を描くには“幼馴染”、“縁組の成立”という基本設定及び、“夢の中の愛情交感”というアイテムが不可欠の要件であつた。さらに、両作品における作者の試みは愛情表現の方法を模索するだけではなかったと思われる。主眼はむしろ、当時の女性が不測の危難に遭ったときどのような対処が許されるか、既定の人生設計に支障が生じたときにどのような路線変更が許されるか、といった女性の人生のあり方そのものを勘考することにあつたのではないだろうか。

『恨海』のヒロイン張棣華は、愚直で危機に瀕しても儒教道徳に束縛され事態を打開できない。纏足している為に行動も受動的にならざるを得ない。生家は豊かだが、辛うじて文字を知るばかりで自活の術をもたない。男児を設けた第二夫人に気兼ねして父の家にも居づらい。世間から嫌疑を冒したと邪推されてもいる。母と婚約者陳伯和を喪った彼女に残ったのは、亡き婚約者の避難時に見せた優しさや、‘姉さんを裏切ってしまった(姐姐，我負了你 p 74)’という詫びの言葉への後悔と哀惜である。彼女は手足の爪と黒髪を切り伯和の袖に入れ、‘陳

さん、私を冥途の旅にお供させて（陈郎，你冥路有知，便早带奴同去也！）（第10回p75）と慟哭し、未婚の夫に‘守節’して尼になる道を選択する。彼女は、“なぜ勝手に決めたのだ”と悲嘆する父親に“死にたいけれど死ねば親不孝となるので、次善の策として出家するのです”と訴える。この作品の意義は、弱者としての旧時代の女性の人生を正面から描いたことにある。しかし、彼女は婚約者と過ごした思い出や愛情を縁に、自ら先の人生を選択する。知りもしない相手の位牌に嫁ぐ通常の守節とは根本的に異なる人生であるといえよう。

『劫余灰』のヒロイン朱婉貞は‘古怪’な父のお蔭で学殖豊かで才気あふれ、かつ天足（纏足しない足）だった。彼女は機知と行動力を駆使して一人で危難を切り抜けることができた。仮死状態で納棺された婉貞が蓋を蹴破り豪雨の荒野を走って逃げ出す場面で、作者は次のように述べている。

みなさん、その安物の棺は半寸にも満たぬ厚みで適当に何本かの釘で打付けてあるだけ、そこを婉貞に天足（纏足しない天然の足）で思いっきり蹴りあげられれば開かないはずがないというもの…。二本の天足のお蔭で躓くこともなかったのです。

看官，须知他那薄棺，并不到半寸厚，草草用几个钉钉起来的，婉贞又是一双足，被他恨极一踢，如何不开？…。幸得一双天足，还不至十分蹉跌。（p151 第10回）

脱出後は賢徳の誉れを得て潤筆の依頼が門前を賑わす。作者吳趼人の執筆意図は、女子教育の必要と纏足反対を訴えることであつたに違いない。彼は『恨海』で張棣華を、学力や活動能力にハンディを負いながら危難に耐える女性として描いた。翌年発表した『劫余灰』では朱婉貞を、自力で活路を切り拓ける女性として描いた。女性のあり方についての彼の考え方は、“女性は教育を受け纏足を止めるべきだ” *45 ということに尽きるだろう。

しかし、正反対の資質を持つ二人の女性は、最終的には同様に未婚の夫に‘守節’する人生を選択する。張棣華と異なり、朱婉貞は父娘二人暮らしで、潤筆代を稼ぐだけの学識と‘幾ばくかの田地’がある。そのまま元の生活に戻れたはずであるが、それでも陳家に嫁いで‘守節’する道を選択する。婉貞を“剋夫の命”の持ち主で耕伯の死に責任を負うと信じる李氏につらく当たられながら舅姑に仕え、陳六皆の孫を“夫”耕伯の嗣子として養育し十八年を過ごす。そこへ、耕伯がシンガポールから妻と三人の子供をつれて帰還する。二人の妻の処遇が合議され一族郎党及び今の妻は婉貞の‘功績’を敬慕して第一夫人と認定し‘夫婦恩愛めでたく’“団円”を迎える。

この結末については、民国以降文革前に、日中両国を通じて唯一「劫余灰」を論じた澤田瑞穂によって、‘旧小説の常套に墮して’おり‘新しい小説ならば真の悲劇はここから始まるはずである’と作品の非近代性が問題にされている*46。しかし、呉趼人の描いたのは近代社会ではなく、封建体制下にある清末である。士大夫階層の理念としてはそれが自然な対応であつたろう。家の存続のために納妾を図るのは常識で、何ら問題のある行為ではなかった。権力者の暴虐を暴露批判し、貧民や不幸な女性に同情し、しかも肺結核を患っていた李伯元でさへも、老母の納妾の勧めを拒まなかった*47。また、第二夫人以下の女性が男児を設けると当然のように優遇された*48。当時の社会実態が子のある事実婚の妻より子のない“未婚の妻”を優遇したとは考えにくい。作品中でも婉貞の父朱小翁が娘を正夫人と認めさせるために、陳家に尽くした功績を言い募り頑張る場面が描かれている。婚家で“未婚の妻”として夫を待つ人生は封建的であるが、女性自身の意志に発した決定であり、男性への愛が動機付けである点も、当時として画期的設定であつたと思われる。

清代社会はことさらに貞女烈婦を称揚した。貧しい庶民はいざ知らず、豊かな士大夫家庭においては守節が最も良識に富んだ選択とされた。清末民国に至ってもその実態は変わらなかったようである*49。婉貞が‘守節’を申し出ると耕伯の母李氏は‘うちの様な福分薄い家にそんな賢徳の嫁はお門違いです。どこか御大家にまた嫁にやっておしまい（我寒家没福，消受不了这种贤德媳妇，叫他另嫁高门罢）’と拒否する。夫の陳公儒は‘そのような言葉は断じて口にしてはならない。我ら士大夫の家の者がそんなことを言うのかと、人様の耳に入れば笑いものになるではないか（然而这等说话，却犯不着说，叫人家听见我们书香人家的人，怎么说出这等话来，岂不是令人笑杀？p190）’とたしなめる（第15回）。以後‘婉貞は陳家で守節し近隣朋友一人として彼女を尊重しない者はなかった（从此婉贞在陈家守节，坊邻亲友，没有一个不敬重他。第16回 p192）’。つらく当っていた李氏も臨終に際して義弟の孫を嗣子として養育するよう婉貞に遺言する。嗣子を定めさせるのは財産分与や相続を認めたことになるので、子のない寡婦への厚遇を表すという*50。‘守節’して婚家に尽し称揚を得るという設定は、婉貞の世評と人生設計を順当たらしむるには絶対不可欠の要素であつたことがわかる。

呉趼人は天足、学識、封建家庭内における自己実現の達成という同時代の女性に可能な方向性を提起したと思われる。災禍に見舞われた女性が、血書を書き知県に直訴、無辜の危難を訴え、手籠めにしようとした役人を罵倒して逃走し、謝辞する婚家に押しかけ強引に守節し、地元の尊敬と継嗣を得て一族と地域に立場を確立し、妻子とともに生還した夫の正妻の

立場を獲得する。呉趼人は封建社会の女性が自力で人生を切り開く様相を描き、当時として可能な限りの社会性を付与したといえよう。

先述したように呉趼人は『恨海』第一回で‘守節の婦’の心情について、‘枯れ木、冷えた灰’にあらず‘情に揺れないということが最も情に長けているということなのだ’と述べている。彼自身は‘守節’という倫常をどのように考えていたのだろうか。『二十年目睹之怪現状』第34回で、語り手‘私’こと‘九死一生’が守節について言及している。‘九死一生’は知人黎景翼が弟希銓を死に迫りやりその上に弟の妻秋菊を妓楼に売ったと知る。‘九死一生’は義憤に駆られ秋菊を救出し旧主人である蔡侶笙の家に送り届ける(第32回-34回)。女中の秋菊を養女として黎家に嫁がせた蔡家の夫人は秋菊を引き取り‘うちで生涯操を守らせませす(他就在我这里守一輩子 p269)’と請け合う。‘九死一生’は‘何を守節など言う事がありましようか! 希銓は半身不随で結婚後も同衾しなかったそうです。しかも今は景翼めに売りとばされ、もう恩も義理もあつたものではない。その上に守節などという道理があり得ましようか。早く別の縁組を見つけてやり婚期を逃さないようにするのが肝要です。(不講什麼守的話! 我聽說希銓是個癱廢的人, 娶親之後, 並未曾圓房, 此刻又被景翼那廝賣出來, 已是義斷恩絕的了, 還有甚麼守節的道理, 趕緊的同他另尋一頭親事, 不要誤了他的年紀是真。P269)’と反対する。

しかし夫人は‘人様が正式に娶ったのを同衾したかどうか誰に分かりましよう。…もし守節しなければ礼法にも道理にも申し開きがたちません(人家明媒正娶的, 圓房不圓房, 誰能知道。…倘使不守, 未免禮上說不過去, 理上也說不過去。p270)’と逡巡し、夫の蔡侶笙に判断をゆだねる。蔡侶笙は‘女子は夫に終生従うものであれば守節せねばなりません。今その家が災禍に見舞われ、このような破廉恥な人でなしに虐げられ、どこに節を守らせようというのか? この子は今年やっと十九歳で、これからの人生を損なわせてよいものでしょうか。嫁がせるしかありません(講究女子從一而終呢, 就應該守; 此刻他家庭出了變故, 遇了這種沒廉恥、滅人倫的人, 叫他往那裡守? 小孩子今年才十九歲, 豈不是誤了他後半輩子? 只得遣他嫁的了。第34回 p272)’と‘守節’に及ばないという決断を下す。

『二十年目睹之怪現状』の中で、蔡侶笙は清貧で慈愛深く民に慕われる高潔な役人という理想の人物形象を賦与されている。その侶笙の示した“情況によっては女性の後半生の幸福を優先する”という決断は、呉趼人自身の守節を否定する考えを表していると言えよう。先述したように、周桂笙は、日頃から守節の不条理や夫の横暴を打開する方策について、呉趼人と論じあっていたことを随筆に書き留めている。伝統社会は‘守節’を女性の美德として称揚していた。彼女たちがその後の人生に居場所を得るための選択肢は家庭や一族、地域

社会に称賛を得るための方策をとるほかなかったであろう。呉趼人は『恨海』、「劫余灰」の結末に、封建社会に自我を確立して生きる女性のあり方、可能性を描いたといえる。

後年、魯迅に妻として拒絶されながら終生を婚家で嫁として魯迅の母に仕えた朱安夫人*51について云われるように、伝統社会においては女性が許嫁者に嫁げない事態は家と自身の名誉に係わる問題だった。また嫁いで後は夫との関係がどうであろうとも婚家をおいてほかに居場所はなかった。婚姻対象を喪った伝統女性にとって‘守節’とは、社会的立場を確保し共同体の認知を得られる唯一の生き方であったのだといえる。朱婉貞と張棣華は、婚約者への恋慕と思い出を縁に守節し、結果的に世間に敬愛される立場を確保し得た。女性に居場所のない封建社会においても‘烈女、貞女’は地方史に載り頌徳されて家の榮譽となる。彼女たちは粘り強く居所を得て、旧社会の女性として可能な限りの自立を果たし得たといえるであろう。

3.翻案《写情小説》「電術奇談」と「情変」

1)清末における恋愛小説試作

呉趼人は1903年、《写情小説》「電術奇談」を雑誌『新小説』に連載し始めた。創作ではないせいか、民国以後の中国においてこの作品はほぼ看過され、ほとんど論じられることはなかった。文革終結後の中華人民共和国で、おそらくはじめて「電術奇談」を論じた蘆叔度は、以下のように酷評している。

（「電術奇談」は）喜仲達と林鳳美の悲歡離合の愛情物語を描き、何ら社会意義を持たない。（中略）寅半生が（1906年春『遊戯世界』に載せ）千字も費やして「電術奇談」について詳細に論評した《閑評》にも斬新な見解は見られず旧文人の論評した旧小説の限界を超えられなかった。

《电术奇谈》…,最初自称是“写情小说”,后来改称“奇情小说”。“写情”也好,“奇情”也好,不外是写男女之私,写喜仲达和林凤美悲欢离合的爱情故事,没有什么社会意义.寅半生这篇长达千字的《闲评》,也没有新颖的见解,跳不出旧文人评点旧小说的局限.(p96) *52

しかし論者は、「電術奇談」を呉趼人のみならず以降の中国小説にも影響を及ぼした多大な社会意義をもつ作品である、と考えている。この小説のヒロインは、率直に恋心を表明する女性である。彼女をはじめ中国社会と価値観の異なる作中人物像は、当時の読者を驚かせた

であろう。また既述の如く、「電術奇談」で吳趼人が‘傀儡師’と呼んだ蘇士馬と同類型の悪役が、その後の吳趼人作品には頻出する。「電術奇談」は、吳趼人の女性観及び悪党観に天啓を与え、創作の方向性を定めた作品であったと思われる。

登場人物は英国人と印度人でその中国社会と異なる行動様式が、吳趼人や評者の周桂笙に与えたであろう驚きや感銘は、随処に付された眉註や寸評の筆致からも窺われる。既述の如く、「電術奇談」の翻案を通じて女性の求愛という題材に関心を持った吳趼人は、二作の《写情小説》『恨海』『劫余灰』を創作した。もともと吳趼人は‘嬰兒の泣く、笑う’と同質の‘人の天性になる’愛情表現の発露を意図していた。しかし、道徳的通念に阻まれ、「電術奇談」のヒロインのような率直に求愛し自立を目指す女性像を描くには至らず、当初の目的を果たせなかった。「劫余灰」連載終了後、吳趼人は《写情小説》の次作を創作しなかった。それでも二年後に、他作家の作品を借用してまで「情変」を描いたという事実は、中国人女性の求愛行動の描写に、彼が強く拘わっていたことを窺わせる。また、「情変」原作に、彼の念願を果たし得るほどの資質を見出したのであらうと推量される。

そこで吳趼人の《写情小説》執筆に、ひいては中国恋愛小説全体に影響を投げかけた「電術奇談」の原作「新聞賣子」及び「情変」の原作「秦二官」についての考察が必須の課題となる。この二篇の作品に、吳趼人の《写情小説》執筆意欲を刺激促進する要素があったという前提の下に、二篇の原作の基本的性格および吳趼人が何を改変し、何を改変しなかったかを検討してみたい。

『新小説』連載時の「電術奇談」には、天部に眉註が、各回末に評が付されていた。眉註と回末評は『吳趼人全集』では割愛されている。そこで、本論の引用文は、『我仏山人文集』第6巻版（花城出版社1988年8月）を使用した。「情変」は『吳趼人全集』第5巻版を使用した。

2) 「電術奇談」(1903-1905)―原作との差異

雑誌連載時の「電術奇談」には「<写情小説>電術奇談（一名催眠術）」という作品名に続けて日本菊池幽芳氏之著・東莞方慶周訳述・我佛山人衍義・知新主人評点という断り書きがあるだけで、原作名の記述はなかった。評点担当の知新主人は周桂笙である。最終回の第24回（《新小説》第2年第6號）に付された<總評>に、吳趼人は改作の方針と方法を記しているが、原作名はない。民国以後、この作品は全く注目されなかったので、‘日本菊池幽芳氏之著’は二十世紀末に樽本照雄が特定するまで八十年余不明のままとなっていた。樽本の検証

によると、「電術奇談」の原訳は英国雑誌の懸賞小説を菊池幽芳が英文から日本語に翻案した「新聞賣子」、それを方慶周が文言で中国語に訳述し、さらに呉趼人が白話文の章回小説に改作して連載するという径路で、雑誌『新小説』第8号から第18号〈第2年第6号〉まで、1903（光緒29）年10月から1905（光緒31）年7月までの間、各号に二回から三回分ずつ連載された。方慶周の文言訳文を呉趼人が改作するに至る経緯、《写情小説》という名称の由来など、未だ不明の点が多い。しかし、原作が英国小説であったことが判明し、作品の中国社会との異質さに首肯できることとなった。

菊池幽芳の原作「新聞賣子」の粗筋は次のようなものである。

インド藩王の娘麻耶子は英国人技師泰蔵と恋仲となる。彼女は帰国する泰蔵の船に密かに乗りこみ英国に渡り結婚を承諾させる。泰蔵は友人の医師利一を訪ね催眠術の実験で命を落とす。利一は遺体をテムズ川に捨て泰蔵になりすまして銀行預金を引き出し、泰蔵の所持していた麻耶子の宝飾類を奪い、パリに逃げる。麻耶子は探偵を雇い恋人の行方を捜し、利一の化けた泰三が彼女の資産を奪って逃げたとわかると、音楽で自活しようと志す。しかし莫連女お艶と情夫の拘り新吉が彼女を騙し、薬で眠らせ拐そうと企む。悲嘆にくれて入水自殺を図ったところを身体面貌の引き攣った醜い新聞売子三吉に救われる。麻耶子は三吉の説得で生きる気力を取り戻し、得意な歌と踊りを活かして自立しようと決意する。倫敦座に出演し一躍スターとなった麻耶子はパリ興行に出る。パリの利一は麻耶子に恋して劇場に通いつめ、腕輪を贈る。贈られた腕輪は麻耶子が泰蔵に与えたものだった。真相を確かめようと利一を尋ねた麻耶子は、催眠術をかけられて操られるが、三吉や探偵に救われる。囚われた利一は獄中で自殺する。ある日三吉は電線に感電して昏倒する。目覚めると引き攣れが取れ、記憶を取り戻し泰蔵にもどった。二人はインドの父王の許しを得て結婚する。

翻案「電術奇談」最終回の第24回（『新小説』第二年第6号）に呉趼人は、以下のようなやや長文の[総評]を付している。催眠術で人を使喚する人形遣いの重要性と、印度貴族女性の精神的成長と自立の過程にこの作品の面目があることを強調している。呉趼人は、麻耶子を鳳美、泰蔵を仲達、利一を蘇士馬と中国名に改訳している。

人の情は天より受けて常にその身と共にある。忠孝節義であれ姦淫邪盗であれ情に根ざさないものはない。善悪に分かれるのは正邪の用い方が違うからである。鳳美を見ればはじめは仲達を恋い慕う私情にすぎなかった。しかし密かに恋人を追いはるばる海を渡るの

はどれほどの冒険であったことか。巡り会った時どれほど嫺々としていたことか、愛を失った時どれほど悲嘆にくれたことか、銃を撃って復讐した時どれほど激烈であったことか、一人のか弱い女性がこれほどの立ち回りを演じたのである。ゆえにこの書は写情小説ではあっても色恋の修羅場とお涙頂戴に終始するものとは違うのである。この書は写情として論じれば鳳美、仲達、敏達は傀儡、士馬は傀儡の糸を操り、そのほかの人物は傀儡芝居の見物人である。催眠術として論ずれば士馬は薬であり仲達鳳美は試薬表である。そのほかの人物は見物人である。

人之有情，稟諸先天，与此身相存亡者也。无论为忠孝节义，为奸淫邪盗，莫不根之於情。其所以分善恶之途者，特邪正之用不同耳。观于凤美，初不过眷恋仲达之一点私情耳。然观其暗随情人，远渡重洋时，何等冒险；韶安相遇时，何等委婉；相失思念时，何等悲苦；放枪复仇时，何等激烈。一弱女子耳，耳演出如许活剧！故此书虽是写情小说，耳较诸徒写淫啼浪哭者，又自不同。此书以写情论，则凤美、仲达、敏达是傀儡，士马是牵动傀儡之线索，自余诸人，是看傀儡戏者。以催眠术论，士马是药，仲达、凤美是试药表，自余诸人，是观演技者。（『我佛山人文集』第六卷 P183）

各回末尾の[評]には、第6回まで‘周桂笙 評’と署名がされている。第7回以降の[評]には署名がない。署名するのを止めただけなのか、呉趼人自身や他の人間が評を書くことがあったのかはわからない。‘忠孝節義であれ姦淫邪盗であれ情に根ざさないものはない’という、『恨海』など著述の処所に見られる持論を述べているところから、[總評]に関しては呉趼人が評者であろうと思われる。改変の方針については、第24回末尾に続けた[附記]で、次のように断っている。

この書の前訳はわずか六回のみでしかも文言であった。ここに二十四回に分け白話に改めた。翻訳の痕跡は許されたい。原書の人名地名は皆日本語を西洋語の音に合わせたもので訳者が一律に改めた。人名は中国で見慣れた名に改め地名はすべて中国の地名を借用した。読者に頭を悩ませず記憶の難儀を覚えずにすむようにである。幸い小説はストーリーを重んじ名詞を重んじてはいない。書中に見える議論諧謔はすべて翻案者が挿入したもので前訳にはない。翻案者はこれを借りて読者の興味を引きつけたので蛇足と誹ることなきように。

此书原译。仅得六回。且是文言。兹剖为二十四回。改用俗话。冀免翻译痕迹。原书人名、地名，皆系以和文諸西音，经译者一律改过，凡人名皆改为中国习见之人名字眼，地名皆借用中国地名。俾读者可省脑力，以免艰于记忆之苦。好在小说重关目，不重名词也。书中间有议论谐謔等，均为衍义者插入，为原译所无。衍义者拟借此

‘原書の人名地名’とは‘原書’ではなく原訳で、原作である英国雑誌の懸賞小説を菊池幽芳が英文から日本語に翻案した「新聞賣子」を指している。登場人物は英国人だが菊池幽芳は人名を麻耶子、泰蔵（三吉）と日本名に改めた。原訳「新聞賣子」を中国語に翻案した「電術奇談」で、呉趼人（或いは訳述者方慶周）はさらに、麻耶子を鳳美、泰蔵を仲達、三吉を鈍三と改め、地名も中国名に改めた。樽本は、心理描写や物語の伏線、若干の加筆を除いては作品の大筋に関わる改変はないと検証している。

では呉趼人は、大筋に関らない部分の加筆箇所は何を描いたのか。文言から白話に改めたとはいえ回数を四倍にも引き延ばせば、自然、内容に作者の信念や主張が反映されるのではないだろうか。先ず呉趼人が読者を引き付ける意図で挿入した‘議論諧謔’及び人名地名以外の改変部分について、以下中国語翻案版に沿って検討を進めたい。

(1) 改変箇所：

[削除箇所]

重要な削除箇所は二つだけと思われる。一つは巻頭の断り書き ‘小説「新聞賣子」を掲ぐるに就き’および‘はしがき’で、この削除により八十数年間にわたり原作が謎に包まれることとなった。もう一ヶ所は第3回（明治30年1.3）、‘摩耶子を抱きよせて花の唇に暖かき接吻！’という一文である。清末に結婚や男女交際を論じた議論の中でも接吻を容認ならないとする意見がまみられる*53が、呉趼人も同様であったことがわかる。

[加筆箇所]

加筆箇所には人物の言行、心理についての作者の所感（「付記」にいう‘議論諧謔’）、作品の精度と意義に関わる加筆などがある。

① 人物の言行、心理描写

○仲達が催眠術の施術中に事故死する場面（第3回）。

作者が地の文で義侠心に厚く財を惜しまない仲達の人品を称え、積年の労苦と突然の不幸を悼む。

○仲達の死を知った鳳美が舞踏家を辞め喪服に換えて仲達を弔う（第23回）。

○鳳美が命の恩人の鈍三に百元を送り、鈍三は雑貨屋を開く（第23回）。

○仲達が一千元を送って亡き蘇士馬の夫人王氏を救済する（第24回）。

これらの改変は、作者が原作を変えてでも作者の道義心に適った対応を作中人物に採らせようとした結果の改変であろう。

②風俗文化、婚姻観の相違点への言及

<付記>にいう‘議論諧謔’とは、以下のような文化的社会的側面に於ける作者の所感を述べた部分に当る。

○不祥の兆しに変色すると伝えられる宝石が青に変色したので鳳美は仲達の身を案じ、仲達は迷信だと一笑に付する場面（第2回、第4回）。

○古今の医者が名医の世評を得るために用いた様々な詐術について蘇士馬が熱弁を振るう場面（第2回）。

○鳳美が印度、英国、中国の風俗、人種、宗教の差異について言及する場面（第6回）。

なかでも最も重要な加筆と思われるのは、人物、言行の改変に窺われる作者の価値観と連動する点から見ても、以下のような仲達や王氏の言葉で語られる信義や友情（‘徳性’）を軽視する風潮への慨嘆であろう。

仲達は言った。“世の中の型通りの虚礼ほど人の特性を損なうものはない。見過ぎ世過ぎをする人が如何に温厚誠実であろうとも永らく世間に染まっておればそのうち温厚誠実もどこへやら人が変わり口先だけになります。一見よくできた人が実は腹の中には‘欺瞞’をどっかり居座らせ人を欺くばかりか自分まで欺こうとするのです。”

……须知这世故上虚文客套，最是能妨害人德性的呀！不信但看那专问在世故上周旋的人，任凭他性质如何忠厚，只要被世故熏陶的久了，渐渐的把忠厚两个字丢往爪哇国去，心肠变了，面目换了，嘴也油滑了。外面看着是很圆通一个人，其实他的心里早有一个欺字打了底，不但欺人，还要欺自己，…（第2回 p17）

王氏は言った。“世間の人は同じ逆境にある時は誰もが刎頸の交わりだとか言い、義兄弟の誓いまで立て、苦楽を共にするどころか生死を共にするとまで言います。いざ片方が成功してみればもう知らんぷりですよ”

如今世上的人，同在患难时，没有一个不说是甚么刎颈之交，还有拜把子换帖的，非但说是同甘共苦，还要说甚么同生同死呢。等到有一个发了财了，谁还认得谁来？只怕那穷朋友找得去，他还用得着一句《孟子》，叫做‘出诸大门之外’呢。（第5回 p41）

第二回の仲達の言葉について、評者の周桂笙は次のように述べている。

仲達の世間を論じる一連の言葉もまさしく衍義者の挿入によるものであろう。そのことばの何と痛切であることか。私はもとより今の社会の人間を理解しがたい。しきりに要領好さを重んじ、直言を憚らない君子を疎んじる。ああ、道德心の亡びた社会に何を咎めようというのか。

仲达论世故一段文字,当亦为衍义者所穿插。然其言论。一何痛切耶!吾固不解今之社会中人,动以圆通为干练,转使率直君子,所如辄左。呜呼!德性之不存,我于社会乎何尤。p19

また、愛情や結婚に関する重要な加筆が数箇所挙げられる。先ず次のような中国に於ける婚姻観に符合した心理描写が加筆されている。

鳳美は阿卷が亡夫と口にするのを聞くとと思った。“この人の夫は亡くなっているから亡夫と呼べる。私のように父母の命、媒酌の言を得ていない未婚の妻は彼を夫と呼ぶこともできない”と思うとつらくなった。

原来他听得阿卷说出亡夫两个字,心中想道:“他的丈夫没了,所以称做亡夫。可怜我的喜君,他倘是有甚长短,我这个没有父母之命、媒妁之言的未婚妻,只怕还够不上拿着两个字来称呼我的喜君呢!”想道这里,不由的一阵心酸起来。(P32-33 第4回)

さらに、鳳美が汽船に乗ると自分を裏切ったはずの仲達が港で手を振っている。船は何故かインドで仲達が開山した金鉱に辿りついた。鳳美の父が優しく出迎え傍らで仲達が微笑んでいる(第10回)という、鳳美の長い夢が加筆されている。

この場面には周桂笙が註を付し、鳳美の潜在意識下の愛情と願望を、泣くや喚くやの修羅場なしにさりげなく、夢の形で巧みに表現していると賛美している*54。この場面は原訳にない。呉趼人は女性の恋情を夢に託けて描写しようと意図したと思われる。先述したように『恨海』、『劫余灰』の夢の場面にも同様の趣旨が認められる。既述の如く、黄錦珠の研究によれば清末小説中の‘新女性’を描いたどの作品も、女性の‘情欲’を表現し得ていないという。呉趼人は、婚約者や恋人を思慕する心理を女性の言葉で叙述し、夢を活用して男女の逢瀬を描いた。それらの叙述は、彼女たちの本心が吐露され、心奥の希望を垣間見たかのよ

うな感触を読者に抱かせる。呉趼人は、特定の異性に対する女性の恋情を、描写の工夫により表現し得た最初の作家であったと思われる。

③作品の精度、意義付けに関わる工夫

以下のような山場となる箇所について、場面と登場人物の言動を詳細に説明する加筆を行い、ストーリー展開の円滑化を図ろうとする配慮が施されている。何れも原訳にはなかった場面である。

○蘇士馬は仲達をアヘン死の如く偽装するが、煩悶して寝付かれず翌朝は妻への言い訳に苦慮する（第3回）。

○詞（第11回）p379

○旅館での鳳美救出、蘇士馬との乱闘場面（第22回）

○鈍三の感電場面（第24回）

○喜仲達の蘇生と復活、鳳美との再会場面（第24回）

(2) 容認箇所：

「新聞賣子」の特徴は女性主導の恋愛、家長の理解、男性側の献身の三点である。原作が英国の懸賞小説であったので中国の風俗伝統と異質の男女関係が現れることになった。呉趼人はこの三点についても削除改変しなかった。

①女性主導の求愛

○ヒロイン王鳳美は高貴の出身にも関わらず、帰国する仲達を追って出奔し密かに乗船して仲達の船室を訪ね「あなたはインドにおいての時はわたくしを本当に愛して下さってどれほど深い誓いを立てたことか。まさかすべて嘘だったとおっしゃるのですか？（郎君在印度時，十分愛奴，说不尽的海誓山盟。今闻郎君此言，莫非从前都是一片假意么？ 第1回 p5）」とかきくどき、仲達が結婚を承知すると彼の膝にすがって泣き崩れる。彼女は恋人を主導して恋を成就させ、意志の強さ、行動力を発揮し自立を果たす。実社会の中国女性はもちろん、従来の中国小説に登場するヒロインにも見られない“求愛し自立する”女性だった。

②家長の理解

○鳳美の父の藩王は‘東アジア人でありながら専制をよしとせず、娘に対してもあまり拘束しなかった。そこで鳳美は仲達とよく顔を合わせ、やがて二人に愛が芽生えた。

更兼那酋长虽是 东亚人,却不以种种专制为然,故对自己女儿,亦不十分缚束。所以凤美常常与仲达相见,久而久之,未免两情爱慕(第1回 p6)。

○‘鳳美は父に手紙で事情を打ち明け許しを請う。父からはすべて許す、娘を思うあまり度々病に墜ちた。すぐに婿と一緒に帰ってきてくれ、と返事をよこす。

凤美把前后经历的情节, 祥详细细的写了一封信, 寄给他父亲, 求他父亲恕罪。后来得了个回电, 说一切事都不怪, 只有挂念得很, 几次因念女生病, 务必即日同女婿回来云云(第24回 p183)。

この部分は菊池幽芳の原訳では‘快く承諾するとの返事があり’という短い一文であったが、呉趼人は加筆して父親の心情に解釈を施している。儒教倫理に捉われない家長なら、かく反応すべきであるという呉趼人の考え方が現れている。後に、呉趼人が中国を舞台に自由恋愛を描いた「情変」の父親は駆け落ちした娘に激怒し、殺そうとか、売って縁を切ろうとか口にしては妻に止められる。それが、娘の恋愛に対する通常の処遇とされていたのであろう。「電術奇談」は非アジア文化圏の作品を翻案したことにより、一気に礼教規範を取り払えたといえる。鳳美の父親が娘の交際を束縛せず、出奔した娘を案じ結婚を許すという「電術奇談」の設定展開が、当時の読者をどれほど驚かせたか想像に難くない。鳳美の父は、以降に書かれた恋愛小説諸作品に表れ始めた“理解ある家長”の起源であるといえる

③男性側の献身

鈍三（実は記憶を喪失した仲達）が鳳美を思慕崇拝する言葉や献身的に尽す様子が随所に描かれている。

○‘鈍三がひたすら鳳美に忠誠を尽くす様はまるで忠犬の主人に対するが如くただ鳳美のためにもみ存在するかのようだった

他那一片忠诚, 犹如忠犬对了主人一般, 巴不能够把整个身子都为凤美用第16回 p119)’。

○‘鈍三は言った。おいらはこんなに醜いからお嬢さんは嫌だと思うだろう。

钝三道: 不过因为我生得丑陋, 恐怕小姐看着我讨厌罢了第16回 P120)。

○‘鈍三は、毎日鳳美の玄関にたたずみ鳳美が劇場に出かけるとこっそり劇場まで付き添っていき終わる頃にまた劇場の入り口に待ち受けてこっそりと鳳美の家まで付き添っていく。毎日そんな具合で自分でも訳の分からぬままにそれを実に楽しいと感じていた。

那钝三天天踩在凤美的门首,看凤美出来到戏园,他便暗暗的跟到戏园。约摸散戏时,他又先等在戏园门首,等凤美出来,他又暗暗的跟到他家里。天天是这样,他自己也莫名其妙,以为这是一件极快活的事 p134 第 18 回)’。

○ ‘李さんの身に災難が起こりそうだ。おいらは守りにいかなくては。

我料得李小姐身上必有灾难,我要去照应他第 18 回 p135)’。

○ ‘おいらだって自分でも動作がとろいのはわかってるよ。けど李さんに何かあったら命がけで力の限り助けたいんだ。

我也知道我自己身子不灵便,但是李小姐有甚事情,我情愿粉身碎骨,也要尽我的力量去做的。p135 第十八回)’。

○ ‘おいらは李さんの為ならどこへ行こうと糞を食らおうたって平気だ。

我为了李小姐的事,那怕到了那里要吃粪,我也不怕。第 18 回 P138)’。

当時の中国の小説において、父親や夫の専横と女性の献身は通常の設定であったが、その逆は稀である。この鈍三もまた、以降の中国恋愛小説に頻繁に描かれ始める“献身する男性”の起源であるといえる。呉趼人はこの女性主導の恋愛、献身する男性という非中国的男女関係に改変を加えなかった。恋に人生設計に積極的に意思表示し自立を目指す鳳美や、彼女に無私の愛情と献身を捧げる鈍三たち非中国世界における男女のあり方は、読者の目にとりわけ斬新に映ったであろう。

「電術奇談」を翻案して恋愛と自立に奮闘する外国人女性の姿を描写する機会を得たことは、呉趼人にかつて目撃した救国運動に加わる少女のイメージを彷彿とさせたのではないだろうか。呉趼人が「電術奇談」翻案の後、恋愛小説の執筆に勤しんだことから、この作品が彼に与えた衝撃の大きさが察せられる。彼は清末社会と中国人女性を題材とした恋愛小説創作を試み、相次いで『恨海』、『劫余灰』を発表した。以来《写情小説》というジャンルが確立し恋愛小説が盛行する。加えて以降の中国恋愛小説には、先に見た“女性主導の恋愛”、“献身する男性”、“家長の恋愛容認”といった特徴が顕著となる*52。「電術奇談」は呉趼人の創作姿勢を決定づけ、さらには清末民国の中国恋愛小説の方向性に大きな影響を与えた作品であるということができよう。

次に、中国人作家の作品を下敷きにして描いた「情変」について検討したい。

3) 「情変」(1910)

(1) 原作「秦二官」梗概

『情変』は女幻術使いの過激な求愛行動と両性の逆転した男女関係を描いている。1910年、呉趼人は急死の四か月前から「情変」を連載し始め、全十回予定の八回途中で絶筆とな

った。急死直後に単行出版されており*55、連載当時に世評の高かったことを窺わせる。ヒロインは優しい美少年に告白し、夜這いし、ついには幻術を使って拉致、駆け落ちし、軽業興行で男を養うという、すさまじい求愛行動を展開する。

論者は2001年、「情変」が実は吳趼人の創作ではなく、前世代の作家宣鼎の短編『夜雨秋灯録』を原作とする改作であることを知った。原作『夜雨秋灯録』は清末に広く流布したという。吳趼人はそこに収録された短編「秦二官」に着目し、上記のヒロイン像、基本ストーリーを変えずに十倍以上の長さに引き延ばした。翻新小説、或いは擬旧小説と呼ばれる創作様式は古典小説の筋立てを借りて新たな展開、解釈を施すもので、吳趼人も『新石頭記』(1905)や『白話西廂記』(1921年没後刊行)を描いている。「情変」は粗筋や登場人物の基本設定等作品の骨子を変えずに長くしただけであり、その分野にはあたらない。原作の粗筋をもとに改作したという点から見て「情変」には、翻案小説という呼び方が最も適切であろうと思われる。以降、その用語を用いたい。

『情変』原作については、『夜雨秋灯録』刊行から半世紀も立っていない民国においても、粗筋の一致さへ指摘されなかった。吳趼人作品で『二十年目睹之怪現狀』や『九命奇冤』、『恨海』、『劫余灰』等は民国以後も刊行されたが、「情変」は遺作であるにもかかわらず、出版も研究もされなかった。文学革命後の民国文壇において、吳趼人の《写情小説》への評価が低かったとはいえ、『恨海』は複数回再版されている。「情変」が出版もされず話題にもされなかったのは、その内容の過激さが問題となったためかもしれない。

「情変」は、民国以来長らく稀覯本に属していたと思われる。中華人民共和国成立以後、現物の作品がなく政治性のない「情変」は、各文学史にも取り上げられなかった。阿英は1960年に「情変」を原載誌の切り抜きをもとに『晚清文学叢抄』に収録し、“吳趼人が『痛史』を未完のままに、「情変」を描いたのはなぜか”と問いかけ「情変」研究の重要性に言及している。しかし文革直前であったため、研究対象とされる時間的余地はなかったであろう。かくて、発表以後百年余にわたり「情変」は吳趼人の創作とされてきた。文革後の中華人民共和国で相次いで出版された吳趼人全集、作品集においても、「情変」は創作として扱われている。中国作家のそれも比較的近い時代の作品の翻案であるものを、発表後100年以上過ぎた現在においても調査が及ばず、創作として扱う研究熱意のなさは、この作品に対する軽視の表れであるといえよう。

文革終結後にいち早く、個別作品の検討、文学史の再構築を主張した盧叔度は、中国文壇でおそらく初めてこの作品を論じた。

（「情変」は）寇阿男と秦白鳳の愛情物語で、思想内容は才子佳人小説の旧套を脱しきれていない。男女の私事を描くばかりで何ら社会的意義を持たない。この書も吳趼人の失敗作である。ただし彼は、秦白鳳にひたすら思い焦れ、艱難辛苦に遭いながらも封建の柵を乗り越えて貫こうとする、寇阿男の一途な愛情を描いた。そのことには、ある程度の封建制に反対する意義があるといえよう。

《情变》是写寇阿男与秦白凤的爱情故事,思想内容跳不出才子佳人小说的窠臼,只写男女之私,没有什么社会意义,此书也是吴趼人的失败之作,但他写寇阿男对秦白凤一往情深,历尽千辛万苦,冲破封建网络,追求真挚的爱情,还是有一定的反封建意义的. (p99)

（盧叔度「関与我仏山人後略—長篇小説部分」《中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3 期 总 76 期》）

‘社会意義’を持たない‘男女の私事’と酷評しながらも、‘寇阿男の一途な愛情’を作品の意義と認める見解は、「情変」が初めて得た公正な評価であるといえる。しかし既述の如く、「情変」は吳趼人の創作ではない。まずは原作の内容、吳趼人の改変部分を検討しておかなければならない。

原作は宣鼎（1832－1880？）著『夜雨秋灯録』巻三に収められた短編小説「秦二官」である*56。宣鼎は安徽省天長の人で字を子久、号を瘦梅と称した。吳趼人より一世代上にあたる文人である。光緒三年（1877）上海申報館より『夜雨秋灯録』を出版。光緒六年（1880）『夜雨秋灯続録』が死後に出版された。「秦二官」は文言で女幻術使いの恐るべき所業を述べる五千字程度の短編である。その梗概は以下の通りである。

【登場人物】寇阿良、寇四娘と夫（阿良の父母）、袁三小（阿良の夫）、秦生（秦二官、秦白鳳とも呼ばれる）、秦生の叔父

【粗筋】華南の田舎に秦二官という十六歳の美少年がいた。東隣の輕業興行師寇一家には十四、五歳になる阿良という娘がいた。阿良は美貌の二官を見初めて口説き夜這いして密会を重ねる。二官の叔父は阿良の父を恐れて二官を奉公に出す。阿良は男装して屋根伝いに忍び込み二官を薬で昏倒させて攫い同棲する。白蓮教に与する両親は幻術を見世物にする阿良から秘密の露見することを恐れ、阿良を連れ戻して従兄の袁三小と結婚させ行方をくまらず。安心した二官が帰郷する途次、袁三小と知合い、阿良の夫と知らずに意気投合する。阿良は夫を殺害して二官を攫い軟禁するが、逃げ出した二官の訴えで逮捕される。二

官は袁三小の肖像を掲げて阿良の処刑を見届け、その場で自害する。処刑場で阿良の妖美に魅せられた獄卒は彼女の死霊に憑りつかれ頓死する。

このように「秦二官」は、凶悪な妖婦の伝奇として描かれている。

(2)「情変」概要

①梗概

「情変」は『輿論時事報』に1910（宣統二）年6月22日から連載され、作者呉趼人の急死により第8回途中で中断したが10回分の題目を事前に予告している。以下に登場人物と粗筋を挙げる。

【登場人物】

寇阿男、寇四爺と寇四娘（阿男の父母）、余小棠（阿男の夫）、秦白鳳（幼名秦二官）、秦亢之（白鳳の父）、秦繩之（白鳳の叔父）、何彩鸞（白鳳の妻）

【粗筋】

全十回予定の章回体白話小説に改作。〔〕内は楔子で呉趼人が予告した題目。彼が急死したため第9、10回は題目のみ残る。

【第1回】〔走江湖寇四爺賣武 羨科名二官讀書〕

白蓮教の後裔で揚州の村落の小地主寇四爺は同業の余四娘と結婚するが、飢饉に見舞われたので武芸の見世物興業に出る。文人大地主の秦亢之は息子の二官を抱いて見送る。秦亢之、繩之兄弟は飢饉に備えて数十年蓄えたカボチャを供出し村を救う。やがて八歳になった二官は家庭教師につき学名を白鳳と名のる。

【第2回】〔寇阿男京華呈色相 秦紹祖杯酒議婚姻〕

武昌で見世物や武術師範をしていた苟夫妻には女兒が生まれ阿男と命名する。帰郷した一家は六歳の阿男を秦家の塾に入れる。数年のうちに二人に恋心が芽生えるが、苟夫妻は阿男を連れて娼探しの旅に出立し、白鳳には何彩鸞との縁談が持ち上がる。

【第3回】〔思故郷浩然有歸志 恣玩皮驀地破私情〕

秦亢之が急死。白鳳は学問をやめ小作管理に追われ阿男への想いも薄れる。阿男の妨害で娼選びが頓挫し寇一家は帰郷する。白鳳のそっけない態度に悩んだ阿男は病に陥る。翌年、回復して散歩に出た阿男は白鳳に出逢い結婚を迫る。

【第4回】〔寇四爺遷怒擬尋仇 秦二官渡江圖避禍〕

阿男の恋情を知った寇四娘は卦が良ければ秦家に縁談を持ち出そうと約束する。何家との縁談を知った阿男は夜半ひそかに供物を携えて白鳳を訪ね、二人で天地に拝礼し婚姻の誓約とする。連夜の密会が露見し、怒った寇四爺を恐れた叔父の縄之夫妻は白鳳を鎮江の何家に預ける。

[第5回] [訂因姻縁留住東床客 恋情欲挾走西子湖]

寇四娘は仲人を立て秦家に縁組を申し入れるが、縄之は寇家の稼業を厭い白鳳を鎮江に隠す。寇夫妻は恋煩いに倒れた阿男を連れて旅に出る。ある夜、阿男は白蓮教の術を使い千里を駆けて白鳳を探しあて、攫って共に杭州へ逃れる。

[第6回] [籌旅費佳人施妙術 怒私奔老父捉嬌娃]

阿男と白鳳は杭州で暮らすうちに金がなくなり街頭で幻術を披露する。鎮江に娘を探しに行った寇四爺は秦縄之と遭い、白鳳の失踪した部屋で光圓の術を使い、二人が杭州にいるのを突き止める。四爺は縄之と共に杭州に赴き阿男を捕まえたものの、白鳳を見失う。

[第7回] [甘舐犢千金嫁阿男 賦関雎百輛迎淑女]

連れもどされ病に伏した阿男を四娘は瓜州鎮の実家で養生させ甥の余小棠と結婚させる。白鳳との再会を望みに鬱々と過ごす阿男は、ある日、白鳳と何彩鸞の結婚の祝い船を目撃する。白鳳は叔父に連れもどされ、何彩鸞と結婚したのだった。

[第8回] [何彩鸞含冤依老衲 秦白鳳逐利作行商]

白鳳は彩鸞と円満な家庭を築くが、妊娠中の彩鸞が六ヶ月で男児を出産し叔父の縄之は激怒する。

呉趼人の急死により第8回で中断し、第9、10回の執筆は実現しなかったが、楔子に題目が予告され、おおよその粗筋を示している。[第9回] [感狭義交情訂昆弟 逞淫威变故起夫妻] は、白鳳と小棠に友情が芽生え、阿男の‘淫威’により阿男と小棠夫妻に異変が起こる。[第10回] [祭法場秦白鳳殉情 撫遺孤何彩鸞守節] は、(阿男の) 処刑場で白鳳が‘情に殉じ’、何彩鸞が守節して遺児を育てる—という執筆予定であったと推測される。白鳳の妻と遺児の存在を除けば原作「秦二官」とほぼ同じ筋立てである。呉趼人は五千字の文言短編小説を十倍にもなる白話長篇に引き伸ばし、同じストーリーを描いたことになる。

ただ創作方法は異なっている。「秦二官」が、阿良の蛮行とその顛末を淡々と叙述しているのに対し、「情変」は、阿男の一途な恋心や周辺人物の心理描写に留意している。また粗筋を踏襲し長くしただけではなくその過程で、登場人物の基本設定や性格、人間関係、生活

様式等、事件の蓋然性を高める背景描写に留意し、細かな改変を施している。吳趼人は伝奇的色彩の濃い「秦二官」を現実色濃くリメイクしたといえる。

②翻案の動機—男女性の逆転

既述の如く、吳趼人の翻案した「電術奇談」の作中人物像は女性の活躍、男性の献身という中国社会にない男女のあり方を知らしめた。以来、自立を目指す女性と支える男性という、伝統的通念になかった男女関係は、清末民国初の恋愛小説に広く現出することとなった。雑誌『小説月報』に辛亥革命（1911年）以前に発表された短編だけでも以下のような作品が挙げられる。

陳景韓「女探偵」『月月小説』第13 - 15期（1908.2.8 - 4）

包天笑「一縷麻」『小説時報』第2期（1909.11.13）

無名氏「明珠宝劍」『小説時報』第4期（1910.11.26）

悵盒「泰吉了」『小説月報』第2年臨時増刊（1911.8.19）

許指巖「緑窓残涙」『小説月報』第2年臨時増刊（1911.8.19）

鳳雛「情天紅線記」『小説月報』第2年8期（1911.10.16）

指巖「榜人女」『小説月報』第2年8期（1911.10.16）

ただし、その濫觴を成した吳趼人の創作《写情小説》において、そのような男女像が描かれたのは、「情変」がはじめてである。

これまで論じてきたように、吳趼人は「電術奇談」の翻案を契機に中国を舞台とする恋愛小説執筆を試み、『恨海』、「劫余灰」を描いた。その結果、儒教の禁忌に阻まれ成人（十三、四歳）後に男女が接触できない中国においては、士大夫階層の子女を素材とする限り、女性側の愛情表現や求愛行動には、精神面肉体面の制約が多かった。吳趼人は「秦二官」の人物設定により、女性性のあり方に開眼したのではないかと思われる。冠阿男が士人階層ではなく曲芸興行を生業とする郷村の武侠の娘であることは「情変」の処々に取り上げられている。

○村娘にはもともと束縛はない。ましてや彼女は武芸を見世物にする人間で外を出歩いたとしても何ということもないのだ。

乡下姑娘本来也没甚拘束,况且他又是走过江湖的人,在外头逛逛,更不算得甚么了。（P249 第3回）

○秦冠両家は代々の隣人で一方に男児があり一方に女兒がありいずれも風采優れている。これまで縁組をという話が起らなかったのだろうか。縄之の妻も夫に提案したことはあ

るが、縄之は彼女が武侠の娘なので体裁の悪いのと、聞かん気そうなのを気にして取り合
わなかった。

秦, 寇两家, 历代乡邻, 一家有个男孩子, 一家有个女孩子, 都生得十分秀气, 一向岂有没个联婚的意思? 便是绳
之娘子, 也曾向丈夫提及。绳之总嫌他是个江湖的女子, 一则怕名声不好听, 二则怕他的脾气举动, 怕有不妥之处,
所以一向搁起不提 (p258 第5回)。

○阿男は女ながら武術興行を売り物に世を渡し知識も豊かで決断力があつた。

阿男是个女孩子家, 却是走过江湖, 见多识广, 会打主意的人 (p263 第五回)。

武侠の娘の恋愛ならば儒教的制約からの非難を被る心配があまりない。そのうえ恋愛成就に
は白蓮教の秘術が不可欠なので現実感を伴わない。普遍性のない階層の女性が主人公であれ
ば、幼馴染の男女に芽生えた恋心と情動の必然的帰結を詳細に描写しても、社会的指弾を被
る懸念が少ない。呉趼人は「電術奇談」以来中国女性の恋心を描こうと試み、人物像や状況
設定を模作し続けていた。「秦二官」という伝奇小説に会いようやく、その女主人公阿良
の社会的属性、奇矯な性格、男勝りの言動に、‘写情’に格好の器を見出したのであろう。

「秦二官」阿良は行商の美少年を見初めて誘拐、曲芸で稼ぎ同棲する。人妻や娘を拐かす
役人や無頼漢は旧小説にお決まりの悪役像であるが、その女性版である。纏足の女性にはも
ともと無理な設定である上に、幻術なくしては実現不可能である。それ故阿良には、清初蒲
松齡『聊齋志異』(1766)や紀昀『閱微草堂筆記』(1800、1807)に登場する妖しの美女の如き怪異
の趣が濃い。それに対して「情変」の阿男は、一人で村内を散歩する田舎娘という設定が強
調され、神秘性が伴わない。呉趼人は、女主人公の名前自体を阿良から阿男に変え、家業と
行動力、男女の役割逆転という「秦二官」に顕著な特質を取りたてて増幅させている。家伝
継承者として育てられた阿男は豪胆で軽拳妄動、坊ちゃん育ちの秦白鳳は温和で弱気という、
両者の性格の男女逆転を表す描写が随所に加わっている。さらに、白鳳は阿男の強さに、阿
男は白鳳の優しさと美しさに魅かれたという設定のもとに、自我を枉げず恋愛を主導し生活
力のある阿男、彼女に服従を余儀なくされる白鳳という相互扶助関係を構築した。

作中、阿男の武芸の技と果敢な気性、白鳳の温厚従順な人柄を対比し、生い立ちから家庭
環境にわたり、以下のような原作にない詳細な描写が加えられている。

○白蓮教の後裔で武術宗家の寇四爺は男児を望んだが女児が生まれた。やむを得ず女児を男
児に擬して阿男と命名し、家伝の武芸と幻術を娘に伝えた (第2回)。秦家は大地主で代々
学問をし、慈善を家訓としてきた。幼児から秦家の家塾で共に学んだ白鳳と阿男に、年頃
になると愛が芽生える。

○阿男は白鳳に求婚するが進展せず、ついに夜這いを断行する。

○白鳳は、男装の阿男の身ごなしに驚嘆し ‘これほどの手腕の持ち主は女子にはもちろん男子の中にも何人いることか。彼女と一緒に遊んでいた頃に習っておけばよかった。（这等身手, 莫说是个女子, 就是男子当中, 也寻不出几个。及时和他长在一起, 倒要跟他学学）’ と称賛に堪えない（第4回 p 248）。

○阿男は白鳳の制止を聞かず、供物を捧げ天地を拝して婚儀とし、白鳳に関係を迫る。

○密会が発覚し阿男と引き離された白鳳は気がふさぎ鬱々と日を送る。阿男は男装して出奔し、白鳳を攫って駆け落ちし、曲芸で生活するが、父親に連れ戻される（第5回）。

○父親は、娘に怒り売って厄介払いしようとする。阿男は白鳳との暮らしを思い出し、‘杭州にいた時、ある日すねてご飯を食べないでいると、白鳳はベッドまで茶碗をもってきて必死で彼女をなだめ涙を流した。今、私が病気でご飯を食べなくても、私が悪いのだけど、生みの親の母さんでさへ声をかけただけだった。本当に親身に心配してくれる人は彼だけなのだ（她想起在杭州时，有一天和白凤赌一口小小的气，开出饭来，不肯去吃，那白凤拿了饭碗，捱到床前，百般的哀求，要她息怒，是她故意装娇不理，白凤急得眼泪也淌了下来。此时我有病不吃饭，便是生我下来，养我长大的母亲，也不过叫一声，不吃就算了。算来止疼止痒、贴心贴肝的人，只有他一个）（第7回 p283）’ と、想いを募らせる。

このように呉趼人は、阿男が優しい白鳳に魅かれ、白鳳が豪胆な阿男に憧れるという相互扶助の取り合わせを設定し、二人が恋に奔る蓋然性を高めようとしている。

「秦二官」の女主人公阿良の非凡な能力、直情径行の性格、二官への一途な愛等、その言行は呉趼人の敷衍した「情変」阿男と変わらない。しかし阿良は最期に及んで獄卒を取り殺すという妖異を現わし魔性を強調されている。作者宣鼎は豪気で情の深い女性と怪異を好んで描いた。「秦二官」と同じく『夜雨愁燈録』（1877）に収録された「麻瘋女邱麗玉」のヒロイン邱麗玉も次のような幻想的な女性である。

癩病を病んだ邱麗玉は、親に騙されて婿入りしてきた男を哀れみ逃がす。後に病が進行した邱麗玉が不思議な道士の導きで男を訪ねると、男は恩人の邱麗玉を献身的に看病する。瀕死の邱麗玉が匿われている蔵で、酒甕に黒蛇が誤って落ち、薬酒が醸される。彼女は蛇酒の薬効により奇跡的に病癒える。

黒蛇の功德や死霊の祟りという怪奇性は、作中の女性に妖異の様相を帯びさせた。宣鼎は、女性の恋を異類婚姻譚と同次元の怪異譚として描いたといえる。呉趼人は、怪異譚に擬えられた「秦二官」を、プロットや配役のみ採用し、舞台を清末に変え、地主の息子と武侠の娘

の恋として描いた。登場人物に現実味、人間味の増したことで、恋への憧れや理想の伴侶との出会いや意中の相手との結婚を、読者に夢想させる効果が生じたのではないだろうか。「情変」には愛情の芽生えから駆け落ち、同棲まであらゆる礼教上の禁忌が描かれている。これほど過激な恋愛衝動が当時の紙誌に掲載されたことには、驚くばかりである。如何に指弾されようとも、創作ではなく昔の作家の著した怪奇譚であるという事実を、切り札として持っていたからであろう。呉趼人には、清末の読者に同時代における恋の可能性を提示しようとする意図があったと考えられる。

(3)「情変」の加筆部分

①女性側の求愛行動

呉趼人が、通行する他作家の既刊作品を借用し新たに数万字を費やしてまで伝えたかったのは、如何なる思惟だったのだろうか。その改変付加した部分について検討してみたい。内容面における改変付加は主に二点、登場人物―特に阿男の求愛行動と作者の儒教講釈である。原作「秦二官」は、妖婦の引き起こした“奇譚”の叙述に重点が置かれていた。それに対し、「情変」では男女が恋の逃避行に奔る過程、心理の描写に重点が置かれている。呉趼人は、以下のように女性の阿男が主導し秦白鳳は終始諾々と従う関係を詳細に描写した。

○二人は七、八歳から毎日一緒に学び遊んで共に育ったが、十四、五歳になると寇四爺は阿男の技に匹敵する婿を探すために曲芸興行に旅立つことにする。出発の日、阿男は‘私が好き？（哥哥，你到底爱不爱我？）’、本当に好きなら絶対に待っていて（你如果真爱我，便请你务必等着我）’と白鳳に告白する（第2回p222）。白鳳を思う阿男は懸命に婿候補を斥け帰郷する。その間、白鳳は父親を喪い小作管理に追われて阿男を思慕する暇もなく、さらに何彩鸞との縁談が持ち上がるが断れない（第3回）。

○阿男は白鳳の胸にすがり、何家の縁談を断り阿男を娶ると一族に宣言してくれとかき口説く。白鳳が縁組は本人の自由にできないのだと拒む（第4回）。

○阿男は深夜に蠟燭や線香、供物、酒肴を携えて白鳳の部屋を訪れ、天を媒酌人に夫婦の誓いを交わそうと提案する。たじろぐ白鳳に阿男は‘軽率だのなんだのと恐れていては願いがかなう日は来ないわ（处处怕鲁莽，这件事就没有成功的一日了）’と、婚儀を断行する。

○‘遅いから帰れ’という白鳳に阿男は‘天に誓った私を追い払うの？（天地也拜了，好意思还赶我呢）’と関係を迫り、以後夜毎の逢瀬を重ねる（第4回p251）。数ヵ月後二人の仲が知れ渡

ると、白鳳の叔父秦繩之は阿男の父親寇四爺の怒りを恐れて白鳳を何家に預け、寇四爺はほとぼりを冷まそうと妻子とともに軽業興行の旅に出る（第5回）。

○白鳳は鬱々と過ごし病に陥る。阿男はある夜、親元を出奔し、白蓮教の道術を駆使して白鳳の居所を探し当て侵入、拉致する。その間、白鳳は驚きと喜びと恐怖で啞然とするばかりだった（第5回）。

○杭州で路銀が尽き途方に暮れる白鳳に、阿男は大道芸で商いの元手を稼ごうと提案し、曲芸興行を行う。

○寇四爺は興行中の阿男を捕まえ連れ帰るが白鳳を捕り逃す（第6回）。母親の寇四娘は阿男を従兄弟の余小棠と結婚させる。阿男は一途に白鳳を思い、何があろうと二人の仲を全うしてみせると決意する（第7回）。

○白鳳の方は終始受け身体勢で、阿男がいなくなると路頭に迷い自殺を図って失敗し、叔父に連れ戻され、何彩鸞と結婚する。彼女は寇阿男に劣らず美しくかつ温順な性格で、白鳳は阿男を思いながらも満足して睦まじく暮らす。白鳳は生活の安定を考え、行商に出ることにする（第8回）。

呉趼人はさらに、白鳳に求愛する阿男の心情を詳細に描写した。例えば、眉目秀麗の白鳳に魅かれる阿男の恋の心理は次のように描写されている。

○‘田舎にこんな人はめったにいないわ。お父さんと山東や北京や揚州に行き、数千里を越え数十の埠頭を渡り、数えきれない人を目にしたけど、これほどの殿方がいたかしら。私たちは筒井筒の仲、今になって人に攫われたら私の思いはどうなるの。

莫说乡下人家从来没有过这样的子弟，便是我跟着父亲走山东，走北京，走扬州，地方走了几千里，码头过了几十处，过眼的人也不计其数，何尝有一个及得这个如意郎君的？我从小儿和他耳鬓厮磨的，此刻长大了，婚姻大事，倘是被别人抢了，叫我何以为情？（第4回 p 245）’。

駆け落ちして連れ戻されそれぞれ別の相手と結婚しても、まだ白鳳との恋の成就を求める阿男の執着は、次のように一途な恋心として描かれている。

○きっと彼も私と同じく自分で決めさせてもらえなかったのだ。次の人と結婚しても私と同じで元の人を思っているのかしら？もし彼もこんな気持ちでいるなら、私はいずれ、水火も恐れず必ず添い遂げてみせよう

他也和我一般不由自己主的。但不知他娶了新人之后，也和我一般，对了新的不忘旧的不是？倘使他也是这样存心，我将来便赴汤蹈火，也要图个天长地久的。（第7回 p 289）。

このように、原作「秦二官」の阿良が“魔性の妖婦”として描かれたのに対し、「情変」の阿男は、有能で強い自我を持つ飾らない女性として描かれている。呉趼人は阿男の恋心と拉致駆け落ちの蛮行に多くの紙幅を費やし、その手腕を、白鳳の言葉や地の文で称賛した。彼女の求愛行動に対する肯定、容認の表れであるといえよう。

また、内容のほかに、時代設定も変えられている。原作阿良の両親は白蓮教徒で、阿良の曲芸興行による露見を恐れ逐電する。「秦二官」の時代設定は清中期白蓮教の乱勃発前ということになる。「情変」の時代設定は阿男の父寇四爺が白蓮教の末裔とされていることから清末に近いと思われる。白蓮教草創期の構成員であった父親をその末裔に変更する必要性は、ストーリーの骨子展開の上では特に認められない。同時代の恋愛として描くために時代設定を引き下げたとしか考えられない。

呉趼人はあらかじめ冒頭＜楔子＞で読者に、‘中国人の目で読み、外国人の目で読んではならない（拿中国眼镜来看，不要拿外国眼镜来看）’、‘白蓮教の幻術（白蓮教的幻术）’を‘出鱈目と罵る（骂小子荒唐）’ことなきように、と断っている。その意図は、白蓮教の秘術を含め、話の同時代性、現実性を強調することにあつたと思われる。阿男が武芸幻術を駆使して白鳳を追う様子は、以下の如く念入りに描写されている。

○両親を安眠香で熟睡させ馬を盗み男装して出奔し、どんな馬も千里を走るという神駿靈符を馬の脚に貼り、山東省沂州から鎮江の何家へと駆け、軒を越え屋根に上り窓から白鳳を攫い、飛び降りて馬に担ぎ上げ杭州まで逃げ去る。

＜楔子＞で二人の再会、逃避行成功の決め手である幻術の信憑性に疑念を抱かぬようあらかじめ読者に釘をさしたのは、阿男の駆使する技を現実のものとして描こうとする意図による伏線であろう。あくまで‘西洋人’の近代文明と対峙する同時代の中国世界を作品の舞台として、求愛行動を敢行する中国人女性の強い自我と意志を描こうとしたのであろう。

②儒教的価値観

もう一点の付加成分は、登場人物の言動に表れる儒教的価値観を取り立てて強調する類の口上である。例えば、七、八歳から毎日一緒に遊んで育ったが十四、五歳になると男女の嫌疑のかかるのを免れず隔たりができた（第2回）と記して、はじめ阿男と白鳳の關係に道德的逸脱のなかったことを強調する。第4回で白鳳が、幼馴染の阿男と一緒にになりたいのはやまやまだが、如何せん、こういうことは長上が決めるもので、自分たちの恋心は空しい夢に終わるだろうと諦める場面で、‘みなさん、これこそ白鳳が礼を以て己を持する長所なので

す。他の人間が写情小説を描くときっと惚れたの捨てたのと艶話を描くでしょう（諸公、这是秦白凤以礼自守的好处。别人做写情小说，无非是写些痴男怨女 p248）’と、地の文に自賛を割りこませている。また第5回では、‘情を通じてから娶ったという汚名は終生ついて回る（如果将错就错成了亲，这个先奸后娶的名气，是终身赖不掉的 p258）’と冠四娘の縁組申し入れを断る秦繩之について、‘繩之は田舎の人とはいえ学問をしたことがあるので廉恥を弁えているのです。今どきの自由結婚を云々する人がお構いなしに情を通じ、その後で例の文明の礼とやらをとり行い、疑問も抱かないのとは違います（繩之虽是乡下人家，却还读过两句书，守着点廉耻；不像那些个讲究自由结婚的人，只管实行了交际，然后举行那个甚么文明之礼，不以为奇的 p258—259）’と、やはり地の文で講釈を施している。

日本で最初に「情変」の内容を紹介、論じた麦生登美江「吳趼人の「近十年之怪現状」と『情変』について」（『清末小説研究』第5号1981. 12. 1）は、作中散見する吳趼人の儒教解釈について、‘情に溺れて道德を踏み外すことを戒めようとする意図が濃厚’、‘阿男の不身持が招いた災いであるから、世の娘たちは身を慎しむようにと警告している’（p68）と解釈している。しかし、儒教道德面の賛美を阿男の不身持への非難と解釈するならば、作者が阿男を‘女だてらの武侠稼業で知識も経験も豊富で決断力のある人間’とその人物像を積極的に評価し、白鳳が阿男の能力に驚きや憧れを抱き、阿男の白鳳へのひたむきな恋心について詳細に描写した執筆態度との間に、矛盾が生じる。

吳趼人は登場人物にも、儒教絡みの配慮によると思われる改変を施している。原作「秦二官」では阿男の父親や白鳳の叔父は端役で、名前もつかず、発言もしない。「情変」ではそれぞれ冠四爺、秦繩之と名付けられ、家長として阿男と白鳳の恋愛を阻む。また「情変」に登場する秦白鳳の父秦亢之と妻何彩鸞は原作にない人物である。「情変」第1回は飢饉の折に秦亢之が、代々飢饉に備えてカボチャを蓄える習いであった秦家伝来の備蓄と私財を投じて村を救済する、という逸話から始まる。この美談は後に繋がらずに場面が切り替わっており、ストーリー展開上では不必要な追加でしかない。第8回で阿男から離れた僅かの期間に白鳳は慌ただしく妻を娶る。六ヶ月で男児を出産し繩之の怒りを買うという辻褃合わせまで施しており、無理にも男児出生の事項を付加しようとしたように見える。作者の急死によりそこで中断したため関連性の有無は謎のままである。しかし、作者が先に挙げていた各回の題目によれば、阿男が夫を殺して処刑され、白鳳が夫妻に‘殉じ’て死に、彩鸞が‘守節’して遺児を育てる、という筋立てであったと推測される。白鳳の自害までは原作と同じであるが、彩鸞と遺児の存在は原作にない追加である。吳趼人が白鳳の父親と妻、遺児を追加し

たのは、先祖の善行による子孫の継続という果報を特記するためであったと考えられる。積善の家なので後嗣を得て存続する天佑を得たという儒教の見解を提示しようとしたのではないだろうか。彼は「電術奇談」においても鳳美の鈍三への報謝、仲達の“信義”を重んじる信念と亡友夫人への救恤を付加している。「瞎騙奇聞」（1904）や「発財秘訣」（1907）では逆の症例―“悪事による祖宗断絶の報い”を取り立てて論じている。

吳趼人は「情変」随所で、秦白鳳とその父と叔父である秦亢之、繩之兄弟の徳行を称揚した。彼が男性側のみ特性を言い募った理由は、白鳳が道義礼節を重んじる家庭に育ち自制心を養っていたこと、恋の進展に男性側の誘惑が介在していないことを特筆しようとしたからであろう。

作者が作中にとりわけ意識して主張した思惟が、意志力、身体能力全般における、男女の逆転にあったことは明らかである。吳趼人は随所で阿男の行動力、自活力を称賛している。また白鳳の諦念を訴えつつも拒まない受動的な姿勢も“礼節を知る君子”であると称揚する。

「情変」に描かれたこのような男女関係から、吳趼人が、女性側の能動的恋愛行動と男性側の受動を、恋愛成立の絶対条件と考えていたことがわかる。吳趼人は、原作の男女逆転構造に天啓を得て、翻案を手掛けたと考えられる。

既述の如く、吳趼人は、女性の恋の芽生えとそれに伴う自我の発動、成長の過程を描写することに‘写情’の意義を認めていた。逆に男性には道德面の自制を求め、‘痴男怨女’―“惚れた、捨てた”の展開を‘写魔’（『恨海』第一回に見える吳趼人の造語）とみなし《写情小説》と認定しなかった。実際に伝統小説では、唐代『西廂記』から明代に大量に通行した恋愛小説まで、社会構造上“女遊び”、“お涙頂戴”となりがちであった。吳趼人の《写情小説》を描く意図は女性の恋情の描写にあり、あくまで女性側の求愛が絶対要件であったと思われる。最初の「電術奇談」のヒロインは、恋を諦め帰国する男性を追って英国に渡り、自立を目指し成長する。吳趼人は[總評]で苦難を乗り越えたヒロインを絶賛している。『恨海』、『劫余灰』も男性側の献身に女主人公側の恋心が芽生え、成長する過程を描写の主眼としている。吳趼人は「情変」に、男性側の道德的自制心の強さを加筆したうえで、女性側が気の弱い恋人を叱咤激励し恋の逃避行を敢行する、という原作の基本的ストーリーを踏襲した。女武芸者阿男の求愛行動は、士人家庭の女性を主人公とする前二作に比して一気に能動性、行動力が高まった。

以上の考察から、吳趼人の四篇の《写情小説》成立の経緯は以下のように概括することができる。彼は、「電術奇談」翻案により女性を強くする“恋の力”に気付き、中国の社会構

造下における‘写情’小説執筆を試みた。設定に苦慮しつつ『恨海』、「劫余灰」を描きながら、恋愛の発生を可能とする環境を模索するうちに「秦二官」を知り、その怪異性を取り去ったうえで、ストーリーと女主人公の個性を活用した。男性側には儒教道德の制御をかけ、女性の‘情’のみ発動させて「情変」に翻案し、会心の‘写情’を目指そうとした。

さらに家長世代の人物設定が補強され、伝統価値観、良識との対立が図式化されている。吳趼人は、当時盛んに議論を呼んでいた結婚問題を念頭に置いていたと思われる。自由恋愛、結婚と現実の障壁を描いたことで、「情変」は同時代の読者の普遍的関心に対応した作品となったといえよう。

③「情変」執筆の意義

旧中国社会において婚姻は、概ね運勢や相性、財産、家門の釣り合いによって決められた。‘結婚は長上が決めるもの’という白鳳の諦念が通例であった当時の青年にとって、阿男が白鳳の容貌や人柄に癒され、白鳳が阿男の技能や活力に支えられるという当事者の精神的欲求から成立する結婚は、思念の外の人生であったろう。「情変」は当時の読者に、先ずは“家”ではなく自身の精神面、行動面の支えたる伴侶を求めようとする発想を提示し得たであろう。大多数の中国女性は、実生活においても小説中においても、自活どころか歩行も不自由で、実家や婚家で家長に従って一生を終えるほか生きる術をもたなかった。伝統社会の中国女性の日常においては、阿男の屋根まで駆け上がる身体能力や武術、曲芸で身を立てる生活力、想い人の獲得を計画断行する力技は、龍女や螺螄や白蛇の精の神通力と同類のもので、ほとんど異界の婚姻譚と感じられたであろう。

しかし実は、汽船や汽車等近代交通手段が普及し、海外に門戸の開けた清末においては、現実とかけ離れた夢でもなかった。纏足禁止の声が高まり、女子教育が奨励され、海外留学という選択肢の加わった清末女性にとって、自ら伴侶を決め、同棲し自活する、という選択は夢物語ではなく、可能性の見える人生設計となりつつあった。実際に、黄興の日本亡命を助けて同行し結婚した徐宗漢、孫文に従って革命事業に加わり、中国革命同盟会員と結婚した吳弱男、吳阿男姉妹等先進女性の選択肢ともなった。「情変」は、自身の進路についての可能性に思い至る契機を読者に提供したに違いない。纏足を止め、学力、運動能力を高めれば、親の世代と違う人生が開けるという展望を、若年層に与える効用を果たし得たのではないだろうか。

文革終結後の中国において「情変」を含めた《写情小説》もようやく研究対象としてとりあげられ、男女の逆転という点に注目が及ぶことになった。于東昇「論吳趼人的写情小説」*57は、吳趼人を清末の家庭と女性を映す‘時代の感応者(他是那个时代的感応者p57)’と評価した。そこで《写情小説》『恨海』、『劫余灰』、『情変』三部の分析を試み、‘吳趼人の《写情小説》の系統性’としてヒロインの意識や、志向の方向性、家庭関係を図式化した。しかし、念入りの整理検討を行いながら、肝心の恋の萌芽や醸成に触れず、

吳趼人の三部の《写情小説》には封建的色彩が濃厚であり、強い道徳的教戒性を帯びている。しかも三部の作品は孤立することなく互いに補完し合いながら道徳的教戒系統を構成し完成させている。

吳趼人の三部写情小説具有极浓的封建色彩,带着强烈的道德说教性.而且三部作品并不孤立,是在相互补充的情况下构成其完整的道德说教系统的. (p59)

と、‘道徳的教戒性’のみ取り上げているのは不可解である。彼は、『恨海』、『劫余灰』、『情変』の分析を通じて強い女性の出現に着目した。

最も突出しているのは三部の作品が女性を主たる経糸とし、かつこれらの女性が例外なく強い性格の人物であることである。…女が強く男が弱いというモデル様式からは、近代中国社会の夕日の残照が見出される。作家が女性にこれほど高い地位を与えるのは、社会構造の質的変化を察知したゆえと言わざるを得ない。吳趼人の理想とする女性は美しく情が濃く教養があり忍耐強く犠牲的精神に富む人物像である。…吳趼人がかくも女性を重視し、しかも、女性をこれほど強くかつ男性を情けなく描く様は、非近代的中国社会においては想像もつかぬものである。吳趼人は思想家ではないにしろ時代の感応者であり、芸術面で当時の社会の変動を表現したのだということができる。

最突出的是三部作品不仅以女性为主要线索,而且这些女性都无例外地是强性人物,(p56)。…女强男弱的范式使我们看到了近代中国社会的夕阳余辉,……作家给女性这么高的地位不能不说是社会新质的参透影响.吳趼人理想的女性是美丽、钟情、有文化而富于忍让和牺牲精神的. (p57)……吳趼人如此注重女性并将女性写得这样富于强力且不惜贬低男性,这在非近代的中国社会是难以想象的.我们不能说吳趼人是思想家却可以说他是那个时代的感応者,他以艺术方式表现出那个社会的变动. (p57)。

于東升は、吳趼人の描く女性像に驚きを示し、その斬新さを高く評価した。その点において、《写情小説》や“鴛鴦蝴蝶”派恋愛小説をひとしなみに‘低俗’と断じていた従来の研究とは一線を画している。しかし、于東升は、‘女が強く男が弱いというモデル様式’を‘近代中国の夕日の残照’と捉えている。この場合の‘近代中国’を中国における歴史区分通りの“阿片戦争(1840)以降五四運動(1919)まで”の意に解すると、後文にある(男が弱く女の強い男女関係は)‘非近代(阿片戦争以降五四運動までではない)中国においては想像もつかない’の件りが読解できなくなる。そこで“近代化した(西洋化の進んだ)社会”の意と解釈しておく。彼は「情変」を吳趼人の創作として論じており、そのために基本的な誤りが生じた。実際には「情変」は原作「秦二官」の設定をそのまま踏襲している。このモデル様式の発案者は、吳趼人ではなく、原作者宣鼎である。吳趼人より一世代前の作家である宣鼎が、近代化した中国の‘社会構造の質的变化’を見出していたとは思えない。

そもそも、‘女が強く男が弱いというモデル様式’も‘近代化していない中国社会においては想像もつかぬもの’であったともいえない。小説でも‘非近代社会’を背景とする『兒女英雄伝』に先例があり、現実の夫婦関係においては頻繁に見られた様相であったと推察される。また吳趼人の《写情小説》の中では「情変」にのみ適用し得る特質である。『恨海』の張棣華は‘強い女性’とは言えない。「劫余灰」の朱婉貞は強い女性であるが婚約者の陳耕伯も強い男性である。それを吳趼人の《写情小説》の特質とすることはできない。吳趼人は‘女が強く男が弱いというモデル様式’を描こうとしたわけではなく、強い女性が恋心を梃に自我を貫き、恋愛を主導し人生を切り開く姿、それを理解、容認する男性という様式を描こうとしたのだと、論者は考えている。植民地化に瀕し動乱の気運濃い清朝最後の年に発表された「情変」は、恋人を追い、家長に背いて自活し、自身で将来を決めるという、当時の大多数の女性に思いもよらなかったはずの可能性を提示し、意識の改造を促すのに功あったと考えられる。

(4) 吳趼人の恋愛観—‘情の原理’と‘悟り’

原作「秦二官」の女主人公阿良は“情人を攫い夫を殺害し獄卒まで取り殺した”妖婦として描かれている。吳趼人は阿良と同じ行動に奔る阿男の恋心と果敢な求愛行動、意志と実力を讃嘆の筆致で描写した。

恋愛についての吳趼人自身の考え方はどのようなものであっただろうか。彼は1906年に

『恨海』で、情とは忠孝仁義と同種の人の天性であるという見解を述べた。続く「劫余灰」でも同様の記述をしている*58。ところが1910年に描いた「情変」楔子では、次のように述べ「情の原理を究め得た」と述懐している。

痴男怨女情天に墜ち 人間に并蒂の蓮開き出ずる
驟雨狂風に双蒂落ち よき縁は悪縁と変ずる
何ぞうだうだ自由を説く 喜びがなければ憂いもなきを
今こそ先人の言葉がわかる 仇でなければ出会わない

皆さん、この八句の拙い詩をどう解き明かすかわかりますか。まさしく私こと戯作者が情の原理を究め尽し道理を悟った云いなのです。情の原理を究め尽したからには無情の人ではないか。如何にして《写情小説》を云々するのか、おかしいではないかと言われます。まこと情の極まるところでようやく情の原理を究め得るものなののでしょうか。情の原理がわかってのち、情により道理を悟ることができるのです。情により道理を悟ったからには写情小説を云々する、これぞ正しく現身の説法というものです。私の出鱈目ではなく蒲柳泉先生も言っています。‘恕は情の行き着くところである’（『聊齋志異』巻八「花姑子」*59をご覧ください）。私はこの‘恕’の字を‘情’の字に踏襲して説くのですから、この書を「情変」と呼ぶのです。およそ情の極まるところ逆に情ではなくなる。そこで異変が起こる。異変がないなら逆に情とはなりません。これが本書の眼目なのです。

痴男怨女墜情天 开出人間并蒂蓮
雨驟風狂双蒂落 好姻緣變惡姻緣
何苦紛紛說自由 若无歡喜便無愁
而今好悟前人語 不是冤家不聚頭

諸公知道這八句歪詩是甚么解說？正是我說書的勘破情關悟道之言。有人駁我說，既是勘破情關，便是個無情之人，如何又說起寫情小說來，豈不是自相矛盾？不知正是情到極處，方能勘得破情關；情關破後，便可以因情悟道；既然因情悟道；說起寫情小說來，正好現身說法。這句話並不是我杜撰的，蒲柳泉先生曾經說過，他說：「恕者，情之至也。」（見《聊齋志異》卷八《花姑子》）我就拿這個「恕」字，來演說「情」字，所以這部書叫做《情變》。大抵情到極處，反成了不情，于是乎有變；倘無變，反不成為情，這便是本書的大概。（p 203）

ここで述べている‘情の原理’とは、冒頭の詩にいう‘仇でなければ出逢わない’であろう。呉趺人は、恋心の芽生えを恋愛当事者と本来関わりのない‘縁’のなせる技と解するに至ったと思われる。彼は、恋の出逢いが‘仇’かもしれない‘縁’に導かれる故に、‘驟雨狂風’に遭えば‘悪縁’と‘変’じ妄執と化し、破局を招くと考えた。

「情変」における‘変’—異変とは、楔子で予告した第9回“逞淫威変故起夫妻”という題目から見て、（原作の粗筋通りならば）冠阿男が夫殺害に至る行為を指すものであろう。

‘情の行き着くところ逆に情ではなくなる’とは、第10回の題目にある“祭法場秦白鳳殉情”という結末、自分も処刑され恋人も自害する事態を招いた阿男の妄執を指すのであろう。愛情の変質と破局は、原作にない作者の創作になる阿男の夢—阿男が白鳳の心変わりを責め斬殺すると、勿ねた白鳳の首がまた生え赤顔虬髯の大男に変じて阿男の首を刎ねる（第3回）—という件りに象徴されている。‘情の原理を究めて道理を悟った’とは、‘情’に異変はつきもので、破滅に至る事態も原理に適った結末とみなし達観する心境に達したという意味であろう。呉趺人は恋を‘縁’ある必然と達観し、内在する負の側面を容認する心境にあったと思われる。

加えて、彼の本意は、恋心を女性の自己発現の発露として称揚するところにあった。その意図から、阿男の夜這い、拉致、同棲の敢行を可能とした知力、身体能力に賛辞を呈し、無謀や道徳性に言及しなかったのであろう。彼は、阿男のような“強さ”と自立心の獲得を女性にとっての当面の課題と見なしていたと思われる。阿男の人物形象は、女性の意志表明、実力行使を最優先課題とする呉趺人の見解を示している。当時の一般女性は、人生設計はおろか、生殺与奪も家長の意のままだった。呉趺人は恋心の発動から、女性が自我に目覚め自己実現の意志を抱き、自ら人生を決定し得ると考えた。女性の覚醒や解放の緊急性、重要性の前には、恋の結果如何は当面の問題とならなかったであろう。彼をその認識に導いたのは、既述の如く「電術奇談」ヒロインの求愛行動である。後述する「上海遊驂録」には、妓楼遊びした交際相手を殴る“サングラスをした纏足しない女性”が登場する。彼女に対しても非難の言辞はない。作品中では、男性側の放埒に始まる恋愛小説を‘痴男怨女’、‘写魔’と否定する一方で、女性側の求愛行動を称えた。妄執から異変を生じ、破たんを招きがちな恋の‘道理’に潜む問題点はさておき、先ずは女性の求愛に始まる自我の発現、自立の達成を肝要とする心境に至っていたと考えられる。

「情変」に提示された、意中の男性に自ら求愛し、かつ理想の伴侶とともに家長の拘束を離れて自活するという人生設計は、青年の都会での就業就学、海外への留学が一般化し始めた

民国前夜においては、むしろ実現可能な夢に見えたであろう。『輿論時事報』に連載されていた8回分「情変」が未完であるにもかかわらず、呉趼人の死後ただちに単行出版されたいいこと、「《輿論時事報》編者跋」が、（連載が始まると）‘すこぶる読者に歓迎された。噂は伝わり衆人の話題となり、読む人は皆賞賛した（已备受閱者之欢迎。然則一紙风传，噴噴于众人之口音，洵乎有目共賞）’*60と述べていることから、連載時の反響が高かった、刊行が望まれた等の背景が窺われる。旧社会の青年男女が自ら結婚相手を決めるには、阿男のように夜這い、駆け落ちを断行するほかなかったであろう。清末民国時期の青年読者は、阿男の行為から現実打開の可能性に思いを馳せたかもしれない。清末は“自由結婚”論が盛んであった。自由恋愛に憧れる世代が「情変」の展開に期待し読者層を成したであろうと察せられる。「情変」は、清末青年男女に自由結婚の条件を示唆する役割を果たしたといえよう。

作品冒頭の楔子で呉趼人は、愛情が‘変’じ破綻に至る恋の“道理”の結末、‘仇敵でなければ出逢わない’という自由恋愛の困難についての自身の‘悟り’を先ず表明している。彼はそれでも、愛情を継続する困難よりも、先ずは女性が恋の自覚により自我を確認し、自己実現することの意義を重視したのであろう。

4. 呉趼人の創作の原点－救国と‘写情’

1) 『二十年目睹之怪現状』－ 清末女性の現実

呉趼人の《写情小説》執筆の契機となった「電術奇談」と‘情’の原理を究明できた「情変」は、女性の異性への求愛が自立心や生活力への連動という形で発現するケースに彼が着目していたことを示している。呉趼人が現実に中国の女性のおかれた状況をどのように眺め、作品中に投影していたのかをまとめてみたい。

『二十年目睹之怪現状』は多くの作中人物にモデル考証が成されている。作中の記述に現れた女性たちの様相は、当時の女性の置かれた現実と、呉趼人が清末女性をどのように捉えていたかを表しているといえよう。登場する女性を社会階層や立場によって類別すると以下のように既婚女性（母親・姑・妻・妾）、未婚女性（娘・女中・妓女）に分けられる。本論では『呉趼人全集』版を使用した。

(1) 女性の社会地位

作中に登場する女性の社会地位は家長の権力に比例している。作中に見られる富家の娘の進路は結婚のみである。貧家の娘の進路は結婚以外に女中と娼妓が挙げられている。いずれも当時人身売買のケースが多かったので職業と呼ぶには語弊がある。しかし、作中に挙げられた話題に見る限り女中、娼妓、妾の立場は流動的で、以下のように、社会階層、地位の向上に奮闘する女性たちが描かれている。

○王族の乳母の娘桂花は役人の妻となるために上海で野鷄（流娼）となって金を貯める。純朴で優しい田舎者を婿に選ぶと官位を買い与え役人夫人の地位を手に入れる（第3回）。

○多福老人の息子吉元の夫人の女中が多福老人を籠絡し正夫人におさまる。もと女中の姑はもと主人の嫁吉元夫人をいびる（第103—104回）。

○汽船会社督弁の妾金氏はもと上海の妓女だった。金持ちに落籍されるが、金品を持ち出して出奔し馴染客であった督弁の妾となる。金氏の金で出世した督弁は彼女に夫人の格式を許し正室も彼女に一目置いた。彼女の葬儀は破格に盛大だった（第78—79回）。

夫を得た妻の家政権力は存外に強く、既婚女性が夫や息子、嫁に権力を振りかざす以下のような話題が挙げられている。

○汽船会社督弁が漢口で美人を見染める。夫人と妾の金氏は漢口を急襲、新居に踏みこみ督弁を連れ帰る（第51—52回）。

○馬子森の母は息子の給料を取り上げ道士や僧侶に貢ぎ、息子の散財を許さず接待の席で殴打する。夫の交友を詮索する妻が、遊所と間違えて民家に押し入り、余所の老婦人を殴打する（第76回）。

しかし、寡婦となった女性は収奪の危機に曝される。

○‘九死一生’の母は夫の遺産をその兄や親友に奪われる（第2回、第21回）。

○黎景翼は弟の黎希銓を陥れて死なせ、弟の妻秋菊を妓楼へ売る（第32—第35回）。

○莫可規は死んだ従兄莫可文に成りすまし、その官位と妻を手に入れる（第98—99回）。

これらの話題は、女性の権力基盤があくまで夫であったことを示している。

(2)女性の艱難辛苦

作中の女性たちは種々の危難に見舞われる。その原因の多くは家庭内の確執及び男女間の収奪関係にある。以下のように普遍的家庭問題は妻妾間及び嫁姑の確執であった。

○‘九死一生’の伯父の妾が情夫と駆け落ちした。妾は情夫に金品を持ち逃げされ入水自殺する。伯母が妾の品性を侮辱するともう一人の妾も服毒自殺する。その棺に伯父が腕輪を入れたのを咎めて言い争ううちに伯母も憤死する（第23—24回）。

○苟才夫人は長男の嫁をいびり、妻を庇った長男まで虐待し死なせる（第87—90回）。

呉趼人は‘九死一生’の従姉の言葉で嫁姑問題の本質を指摘している。

‘だいたい姑というのも若い時には嫁を体験し、嫁の時には姑にいじめられ罵られても言い返せずぶたれてもやり返せず、長年我慢して姑が死ぬとやっと手足を伸ばせるのです。自分の息子が成長し嫁を娶ると自分の時代がやってきたと思い自分が曾てされた事をすべて嫁にやり返すのです’。

大抵那个做婆婆的，年轻时也做过媳妇来，做媳妇的时候，不免受了他婆婆的气，骂他不敢回口，打他不敢回手，涯了若干年，他婆婆死了，才敢把腰伸一伸；等到自己的儿子大了，娶了媳妇，他就想这是我出头之日了，把自己从前所受的，一一拿出来向媳妇头上施展p201。（第26回）

彼女は、‘若くして寡婦となった嫁を労りしばしば実家に帰らせ南京までの遠出を許す’自分の姑を理想像として挙げている。また、呉継之の母親は姑の前で萎縮する継之夫人を、家族の和が第一であり礼教規範に拘ってはならないと諭す（第26回）。呉趼人はこの老婦人たちを模範として示すことで、世の婦人の啓蒙を図ろうとしたのであろう。

四川学台が七、八十人もの女を買って離任した話題（第80回）は女性の売買が合法的投資行為であったことを示している。呉趼人は作中に、男性が出世や蓄財の為に、政略結婚や贈妾、酒色接待などを手段として女性を利用する、以下のような事例を取上げている。

○体調不良を訴える総督に求職中の役人が‘医術に優れた’妻を紹介する。妻は妾たちにいかわしい現場を押えられ袋叩きに遭うが、夫は役職を得る（第3回）。

○苟才は寡婦となった長男の嫁を、総督に妾として献じる（第87—90回）。寡婦の嫁は‘私は両親が男に生んでくれなかったのが恨めしい。何も自分の意志でやれず人にされるままになるしかないなんて’と嘆く（第89回）。

○湖広総督候中丞の男色相手候鎮台の妻が急死する。言撫台は娘を後添えに娶せると約束し総督を歓ばせる。令嬢は泣いて嫌がり、言夫人は夫を罵り縁談を拒絶する。陸觀察はお手付きの女中碧蓮を、令嬢の身代わりに嫁がせ言撫台から謝礼を得る（第82—83回）。

○葉伯芬は妾に娶る約束でいた芸妓陸蘅舫を先行投資の腹積もりで権門子弟趙嘯存に譲る。

趙嘯存は江西巡撫となり夫人の死後、妾の陸蘅舫を正室に直す（第90、91回）。

○莫可文は夫人を同席させて大官や幕僚を接待し職を得る（第98—99回）。

○温月江は妻の部屋を訪れていた翰林（学術系官僚）武香楼を見逃す。彼は‘緑帽子をかぶった（妻に不倫された）’代償に、科挙に合格し翰林に採用された（第101回）。

温月江は『漢口日報』事件の梁鼎芬を暗喩している。ほかにも汽船会社督弁と妾の金氏、候総督、侯鎮台、陸觀察、葉伯芬などのモデルとして当時の顯官の名が挙げられている。男女間の収奪関係は通常金銭地位を巡る策謀を前提としており、必然的に社会の疲弊を反映していたといえる。

(3)女子教育

吳趸人は女性の愚昧を問題としている。息子の給料を取り上げて僧や道士に貢ぎ酒席で狼藉を働く馬子森の母親や、夫に過干渉し余所の家で暴力を振う妻について、吳繼之の言葉で次のように述べている。

‘どのような家でも家庭内にはどうしても人に言えない隠し事があるものだ。その然る所以を問えば何と九十九パーセントはご婦人がたのしでかしたもののなのだ。私が思うに要するに女性に学のないのがいけないのだ’。

…总觉得无论何等人家,他那家庭之中,总有许多难言之隐的;若要问其所以然之故,却是给妇人女子弄出来的,居了百分之九十九。我看总而言之:是女子不学之过。P647（第77回）

嫁姑の問題についても従姉の言葉で次のように述べている。

‘女を集めて一斉に学問を始めさせ皆が道理をわきまえるようになるのでなければ望みはないでしょう’。

“…除非把女子叫来,一齐都读起书来,大家都明了理,这才有得可望呢。P201（第26回）”

また改革を志した現当主と、一族と謀って現当主を幽閉した（第45回、第53回）塩商先代当主の妾羅魏氏は、光緒帝と西太后を暗喩していると指摘されている。この記事は吳趸人が女性の認識を国家の興亡に関わる問題と捉えていたことを示している。吳趸人は『二十年目睹之怪

現状』を描いて清末社会の解析に努め、女性の無学や従属的立場、それにつけこむ男性の非道な行為に起因する社会の病理を検出した。彼は無学愚昧により収奪に曝される女性の危うい人生と、社会の悪弊や列強諸国の収奪に曝される国家の危機を同一線上の問題とみなしていたといえよう。

2) 自己実現と恋の相関

(1) 外国女性主人公の翻案《写情小説》「電術奇談」―‘写情’指南

既述の如く吳趸人を《写情小説》に開眼させ、小説執筆を指南したのは翻案小説「電術奇談」であった。中国に於いて男女の愛情を描き‘言情小説’と呼ばれてきた小説は、概ね権門の子女同士、学才の誉れ高い文人と高官令嬢や歌妓との縁談を素材とし、その常套を外れると“淫書”とされた。吳趸人が1903（光緒二十九年）年から1910（宣統二）年にかけて発表した一連の《写情小説》は、中級階層知識人家庭の子女の恋心を描くもので、従来の‘言情小説’にない現実感を伴っていた。

最初に発表した「電術奇談」の特徴は女性主導の求愛、家長の理解、男性側の献身の三点である。恋に自立に奮闘するヒロインや、娘の意思を尊重する父親、女性に無私の愛情と献身を捧げる男性、非中国世界における男女のあり方は、当時の読者を一驚させたであろう。この作品が吳趸人自身に与えた影響の大きさは、その後、彼が恋愛小説の執筆に取り組んだことから察せられる。清末の革命女士たちの例にみられる*59ように自己実現欲求は先ずは愛情の表白、意思どおりの結婚を希求する形で顕われがちである。吳趸人は「電術奇談」を翻案した事で、その事実に思い至り、女性の自己実現欲求と恋愛衝動の相関に目を開いたのであろう。「電術奇談」は、吳趸人にとっては恋愛小説執筆の指南車であったといえる。吳趸人が「電術奇談」を発表して以来‘写情小説’というジャンルが確立し清末に恋愛小説が盛行する。加えて、おそらくはこの「電術奇談」を濫觴として、以降の中国恋愛小説に“女性主導型恋愛”、“献身型男性”、“家長の恋愛容認”といった特徴が顕著となった。「電術奇談」はその後の中国恋愛小説の方向性を定めた作品であるといっていよう。

(2) 中国女性主人公の創作《写情小説》―伝統倫理との軋轢

「電術奇談」以降に吳趸人の発表した中国人女性を題材とした恋愛小説『恨海』、『劫余灰』、『情変』は、ヒロインの恋の自覚と成長、乙女心の丹念な描写という、「電術奇談」の手法

を踏襲している。吳趼人が中国における結婚、恋愛問題を模索する契機や手本が「電術奇談」にあったことを示している。

①『恨海』

『恨海』は中国小説史上初めて、女性の心情と行為を社会の中の女性の人生として描いた作品であるといえよう。この作品は、儒教倫理と纏足に縛られ心身ともに不自由な伝統女性の人生を浮き彫りにして、当時の読者の関心を集めたと思われる。また、『恨海』は婚約者と同席する羞恥や罪悪感に悩み、恋心を自覚し思いつめるヒロインの乙女心を一人称で描写した。旧小説の作中で女性心理の詳細な描写に終始する手法はあまり見られない。異性との接点や女性性という意識のない当時の読者は、女性の心情や社会状況、人生の可能性について熟考する必要性に気付かされたのではないかと思われる。さらに、張棣花は社会動乱の最中で男女の嫌疑、異性忌避の伝統倫理に拘束される女性と設定されている。緊急事態における、張棣花の恋の萌芽や煩悶、愛情の表明を決意する心理の展開は、清末女性全体の命運に関わる問題でもあった。『恨海』は、男女の同席を忌避せず、扶助しあう重要性を読者に知らしめ、女性解放に寄与したといえよう。

②「劫余灰」

この作品もヒロインの婚約者を愛慕する心理、天足（纏足しない天然の足）と学識を活かして自力で危難を乗り越える行動力を詳細に描写し、女性を社会的存在として描いた。吳趼人が読者に訴えようとした第一の眼目は、纏足しない足と女子教育の効用であったろう。さらに、婉貞には、旧小説に登場する士人階層や富家の令嬢と異なる、自分の気持ちを見究め自分で人生を決める近代的人物像が付与されている。彼女は伴侶との愛情関係について思索し、双方の情愛、絆を確信し、主体的に計画行動し、自ら意思決定して人生を選択する。吳趼人は婉貞の行動に、当時の女性としてありうる限りの可能性を投影したといえる。

(3)中国女性主人公の翻案《写情小説》「情変」—求愛する女性

吳趼人は、原作「秦二官」の“武侠の娘の恋”という設定と粗筋を活用し、さらに“儒教拘束の緩い農村”を舞台に、“求愛する女性”、“献身する男性”という男女性の逆転を拡大し、自活力を持つ女性が男性を主導する恋愛を描いた。やはり、ヒロイン阿男の恋の心理を詳細に描き、彼女の果敢な求愛行動を称揚している。この作品は自由恋愛を断行する女性

とその破綻を描くとともに、当時の読者に実現の可能性を示唆する役割を果たし得たと考えられる。

3) 清末女性の活路

吳趼人が女性の力を意識し創作の方向性を定めた契機は 1901 年〈拒俄演説会〉での薛錦琴との邂逅にあった。薛錦琴の愛国演説は彼に、社会的存在としての女性に目を開かせ、女性のあり方の国家のあり方との関りという問題意識を抱かせたといえる。以来、彼は伝聞逸話の収集に勤め『二十年目睹之怪現狀』を描いて清末社会の実態に迫ろうとした。その中で有為の女性を輩出し得る社会環境と女性を挫く社会要因の究明に努めたと思われる。同時に彼は、非需要文化圏の女性を主人公とする「電術奇談」翻案を契機として、纏足と伝統倫理の拘束を受けない女性の、意思に基づく結婚の希求と自己実現能力とに目を開かれた。さらに、家長や夫の意識の違いに着目した。

吳趼人は、それらの政治運動、文学生活から得た見地を動機として、《写情小説》創作を試みた。その小説中の女性描写は、彼が女性の自我と愛情の開放に着目し、女性と社会の望ましい在り方について思索していたことを示している。実際に清末民初には、目覚めたもしくは恵まれた女性が海外に留学し、多くの先進女性や革命女士を輩出した。彼女たちの自立解放への希求は先ずは意思に基づいた結婚の実現という形で表現された*61。

吳趼人は伝統社会に生きる女性の自己実現への道を探り、女子教育と纏足禁止に活路を見出した。さらに愛情問題を、女性解放と救国の根底に関する要諦とみなした。その独自性、新しさは女性の自立と救国との相関に着目したのみならず、さらに、女性の自己実現欲求と異性への愛情表明との相関に着目した点にある。

吳趼人は最終的に、男女の立場逆転を特徴とする作品「秦二官」の特性に着目し、「情変」として翻案した。彼は「情変」に、男性をリードし自力で恋の成就を目指す阿男の求愛行動を描いた。彼自身、娘に‘吳錚錚’と雄々しい名を与え纏足を禁じ天足会（纏足しない天然の足を奨励する会）に入会させた。彼は中国女性が纏足から解放され危難から身を守り、教育を受けて自立し、かつ救国の助けとなる社会を志向したと思われる。かつその契機として恋愛感情に着目した。それは当時においては卓越した認識であった。作品の連載出版量から見ても清末民国初の社会に相当の警醒を果たし得たと考えられる。

五歳で父親を喪った吳趼人の娘吳錚錚（1905.3.28－1971.1.4）は無事に成人し、広東人蘆玉麟と結婚して一男一女に恵まれ解放後も長く上海に健在でいた。彼女は父が‘例え嫁に行

けなくとも纏足させてはならん’ と妻に娘の纏足を禁じた事*62 を覚えていた。2012 年ノーベル文学賞を受賞した作家莫言は、「ノーベル賞授賞式講演」で亡き母の凛々しく貧しく苦しい人生について語った。1922 年生れという莫言の母は解放後の農村で密かに落ち穂拾いをして見張りに見つかり、纏足のため逃げられず捕まって殴り倒されたという。纏足が平和な時代にも女性の生存を脅かしていたことに驚かされる。一世代上で 1905 年生れの呉錚錚が日本軍の侵略、国共内戦、文革の動乱を生き延びるのにどれほど天足の恩恵に浴したか想像に難くない。天足と教育（呉錚錚の受け得た教育は明らかでないが、呉趼人は生前に小学校を創設している）は先ずその娘の人生に効用を現したといえる。

呉趼人は薛錦琴を目撃した原体験に基づき、救国への助勢という観点から、行動力と学識定見ある女性を称揚して作品中に反映させた。さらに女性の愛情開放と自己実現との相関に着目した。それは、当時“文明（開明）”を標榜する男性の中であってさへ稀有の主張であったに違いない。彼は《写情小説》において、愛情を自覚した女性が自らの意思で人生を選択する姿を描いた。愛情に基づく結婚をはじめ、自身の志を貫き自立した女性が救国を担うことを期待して、作品中で女子教育、天足を訴え、男性の意識変革を求めた。その意義と功績は高く評価されるべきであろう。

註

- 1 夏曉紅『晚清社会与文化』（湖北教育出版社 2001. 3）
- 2 [張竹君] 生卒年不詳。広東省出身。夏葛女医学堂に就学、1900 年卒業。徐宗漢の援助で広州に医院を開き、演説会を開いて維新思想を鼓吹し、馬君武らに求婚されたが独身主義を貫いた。後に伍廷芳夫人、哈同夫人羅伽陵らの援助で上海に数カ所の医院を開き、さらに女子に就業の必要性を説き自立手工学校を開いた。（馮自由『革命逸史』二集「女医師張竹君」（民国 54 年 10 月 台湾商務印書館）
- 3 [秋瑾]（1874-1907）浙江省紹興出身。1904 年婚家を出て日本に留学。翌年帰国し光復会に参加、『中国女報』を発刊。1907 年、紹興大通学堂督弁の時、光復軍の組織を謀り、逮捕処刑される。（馮自由『革命逸史』二集「鑑湖女俠秋瑾」）
- 4 [徐宗漢]（1876-1944）広東省香山県出身。家塾で学び、一度嫁ぐが死別。1907 年中国革命同盟会に参加。黄花岗役で負傷した黄興と夫婦を装い脱出、結婚する。赴仏勤工儉学を援助、貧困児童教育に勉めた。（馮自由『革命逸史』三集「徐宗漢女士事略」）

- 5[向警予] (1895-1928) 湖南省出身。湖南第一女子師範などに就学。1918年、南方桂系軍閥周則範の求婚を拒ける。翌年留仏し蔡和森と結婚する。21年に中共入党、28年、逮捕処刑される。(戴緒恭『向警予伝』(1981.5人民出版社)
- 6[郭隆真] (1894-1931) 回族。河北省出身。1913年に天津直隸第一女子師範に入学。17年、親が無理に嫁がせるが挙式の席で婚姻の自由を演説して破談にする。20年、勤工儉学で留仏。23年に中共入党、地下党活動に従事。31年逮捕処刑される。(戴偉『中国婚姻性愛史稿』十章1992.11東方出版社)
- 7 筑摩書房1993.5.30 p267
- 8 夏曉紅『晚清社会と文化』湖北教育出版社 2001.3 p259
- 9 南武静観自得齋主人『中国之女銅像』(改良小説者 1909)
- 10 馮自由『革命逸史』第二集「鑑湖女俠秋瑾」(台湾商務印書館 1943 年)
- 11 哈同 (サイラス・アーロン・ハルドーン Silas-Aaron-Hardoon 1849-1931)。ユダヤ人富商。清末民国期、上海で威勢を誇った。洋行職員だったが1886年中佛混血児とか鹹水妹とか噂される出自不明の女傑羅伽陵を妻とし哈同洋行を起こした。常に妻の助言を仰いで阿片売買と金融業、不動産業で巨万の財を成し、以後半世紀近く上海に伝説と化すほどの栄華を誇った。羅伽陵は仏教を信仰し、烏目山僧黄宗仰に『大藏經』の校訂刊行を依頼した。1902年、革命団体『中国教育会』会員であった黄宗仰の要請に従い愛国学社及び愛国女学に資金提供した。一方で、皇太后と義女の誼を結び、民国期には軍閥要人と交流を深めた。
- 烏目山人著『海上大觀園』<62回未完> (上海東亜書局1924年。1934年10月上海中央書店から重印。1991年5月上海古籍出版社から再版(重印版を底本とし呉桂龍<前言>を附す)は、羅伽陵(1864—1941)の存命中に書かれた伝記小説である。作者は羅伽陵と雇用関係にある人物といわれている。そのため羅伽陵像は多分に美化されている。(拙稿「羅伽陵と『海上大觀園』に描かれた螺螄一婚姻観の変化につれて」『野草』第62号 1998年8月)
- 12 王国維は 1916 年上海に来て羅伽陵に雇われた。小説『海上大觀園』では王清如の名で登場する。彼は舅の羅振玉にあてた書信に‘名誉すこぶる芳しからず…下等の人物’と書いている(『王国維全集』<書信>中華書局 1984)。
- 13 夏曉紅『晚清文人婦女観』(作家出版社1995.8)
- 14 黄錦珠『晚清小説中の「新女性」研究』<文史哲大系186> 文津出版社有限公司2005年1月)
- 15 『吳趼人全集』第 9 卷 p231
- 16 (王俊年「吳趼人年譜」『吳趼人全集』第 10 卷 p9、p61)
- 17 『吳趼人全集』第 7 卷 p 306
- 18 週刊『婦女新聞』58 号 (明治 34.6.17) 森井生「清国の小女傑」による
- 19 秦孝儀主編『革命人物誌』第 18 集 1978(民国 67)年 6 月中央文物供応社

- 20 馮自由『革命逸史』第三集「烏目山僧黃宗仰」1965(民國 54)年 10 月台灣商務印書館
- 21 上海圖書館編『中國近代期刊篇目彙錄』(以下『彙錄』)(上海人民出版社 1965.12)所載『中華婦女界』一卷五期(1915.5.25 民國 4 年 5 月 25 日)に「< 図画 > 薛錦琴女士(美国芝加哥大学畢業生)」とある
- 22 週刊『婦女新聞』53 号(明治 34.5.13) 景山事福田英「薛錦琴女に与ふるの書」内容紹介の但し書きによる
- 23 蔣維喬「中国教育界の回憶」上海通社編『上海研究資料統集』(民 62.6.25) 中国出版社所収
- 24 『蘇報』(1903. 5. 20 光緒 29.4.24) < 學界風潮 >
- 25 『漢聲』[湖北学生界第七八月号合冊](黃帝紀元 4394 年 6 月朔日) < 雜俎 > [奴痛]「記薛女士」
- 26 『時事新報』(明治 34.4.4) (『新聞集成明治編年史』卷 11 所収)
- 27 「少女の慷慨演説」週刊『婦女新聞』49 号(明治 34.4.15)に翻訳登載。
- 28 同 18
- 29 週刊『婦女新聞』68 号(明治 34.8.26)「薛錦錦に与へたる書」春浦生
- 30 景山英事福田英「薛錦琴に与ふるの書」(一) 週刊『婦女新聞』53 号(明治 34 年 5 月 13 日)、「薛錦琴に与ふる書」(つづき) 同誌 54 号(明治 34 年 5 月 20 日)
- 31 『清議報』82 (1901.6.16) (日) 福田英子「致薛錦琴書」『女学報』第二年一期(1903.2.27 光緒 29.2 朔日)「日本女士福田英子致薛錦琴書」
- 32 福田英子(1865—1927) 岡山県出身。自由民権運動に参加、入獄。社会主義者となり「平民社」と交流、田中正造と谷中村を支援。「社会主義同志婦人会」を發起し、雑誌『世界婦人』を発行した。中国革命同盟会機関誌『民報』発刊にも尽力した。1904 年『妾の半生涯』出版。(村田静子『福田英子—婦人解放運動の先駆者』岩波新書 1959 年 4 月)
- 33 『彙録』所載『留美学生年報』庚戌一期(1911.7)に「論德育之必要」薛錦琴とある
- 34 『彙録』所載『神州女報』月刊第二号(1913.4 民国 2 年 4 月)に「図画教育部正長薛錦琴君肖像」掲載。
- 35 『彙録』所載『中華婦女界』第二卷五期(1916.5.25 民国 5 年 5 月 25 日)に「社会罪恶問題実地研究 狄波拉之家族(未完)」(美) 戈達德著 香山薛錦琴女士訳、同第二年六期(1916.6.25 民国 5 年 6 月 25 日)に同(続)掲載
- 36 孫元「南洋中学最早的女生」2013.2.16 閲覧
<http://www.nygz.xhedu.sh.cn/Dangan/printpage.asp?ArticleID=697>
- 37 吳礼權『中国言情小説史』(1995 年 台湾商務印書館)
- 38 清沈復『浮生六記』。自叙伝。六記中四記のみ現存。岩波文庫版(昭和 13 年)訳者佐藤春夫の解説にによると、1877(光緒三)年楊引傳が蘇州の露天で作者手稿本を発見、上梓した。1923 年樸社が愈平白の校点により復刻、1980 年 7 月人民文学出版社が愈平白校点本を復刻した。

39 拙稿「恋愛描写と男女のあり方—清末民初の短編小説から」『一海・太田退休記念中国学論集』（2001年4月30日 翠書房）所収

40 民国に入ると『遊戯雑誌』（月刊。1913(民国2)年11月30日創刊。全19期を發行）、『礼拝六』（週間、1914(民国3)年6月6日創刊。1916年4月29日まで100期を發行して停刊。1922年9月復刊。1923年まで100期を發行、全200期で終巻）、『小説叢報』（月刊。1914(民国3)年5月25日創刊。1918年8月まで全44期を發行）など、大衆の娯楽雑誌が相次いで發刊され、鴛鴦蝴蝶派と総称された。資産や詩文書画の技で生計を立てる旧文人と異なり、新制学堂を卒業して勤め人となる新知識人庶民を讀者層とした。

41 樽本照雄「吳趼人「電術奇談」の原作」（『中国文芸研究会会報』第54号1985年7月）、「吳趼人訳「電術奇談」余話」上、下（『清末小説から』第41号1996年4月、第42号1996年7月）

42 拙稿「吳趼人「情變」の原作について」（『清末小説から』第62号 清末小説研究会2001.7.1）

原作は宣鼎『夜雨秋灯録』卷三「秦二官」。宣鼎（1832-1880?）は字子久、号瘦梅。安徽省天長の人。

光緒三年（1877）、上海申報館より『夜雨秋灯録』出版。光緒六年（1880）、『夜雨秋灯続録』を死後に出版。清末、広く流布し多数回にわたり翻刻された。『筆記小説大観』版は「秦二官」を未収。清・宣鼎著、項純文校点『夜雨秋灯録』（1995.9）黄山書社版に収録

43 吳趼人「説小説」『月月小説』第一年第八号「雑説」（趼）1907年5月（光緒三十三年四月望日）

‘吾前著《恨海》,仅十日而稿脱,…………。然其中之言论理想,大都皆陈腐常谈,殊无新趣,良用自歉。所全书虽是写情,犹未脱道德范围或不到为大君子所唾弃耳。’『吳趼人全集』第8卷p220

44 婉貞の夢に現れる陳耕伯：

一个少年郎君骑着一匹白马,按辔缓行而来,打从婉贞身边掠过,对着婉贞定眼一看道:“咦!朱家表妹,为何一人在此?”婉贞也定眼一看时,不是别人,正是自己朝夕纪念,名分已定的未婚丈夫陈耕伯。不觉心中又惊,又喜,又羞耻,又惶恐,一句话也答不出来。耕伯早已翻身落马,又鞠躬问到:“端的表妹为甚一人在此?”婉贞此时心中梦如乱丝,觉得有许多话要说,却又没有一句说得出的,好容易把一句话提到嘴唇边来,却不知怎样又缩了下去。便不由自主的扑簌簌滚下泪来,犹如断线珍珠般,要收也收不住。耕伯道:“表妹想是受了委屈了。我这里左右有空轿子,就请表妹登轿,先到我家再说。”说时便有仆人招呼,把一乘空轿子抬过来。婉贞此时身不由主,恍恍惚惚,便坐在轿中,轿夫抬起便行。只见耕伯依然骑马在前先导。回视两旁,却又不是荒野之地,六街三市,异常热闹。婉贞坐在轿中,也自莫名其妙,暗想:“我今番回来,父亲脾气向来是古执的,一时动气不理我,也不是怪。只是公公、婆婆,何以也不理我起来?公公且不必说他,至于我婆婆,从前名分未定,一老亲称呼时,便十分疼我,一见了,便侄女长,侄女短,何等亲热!方才见了,就犹如没有看见一般,可见得从前亲热,都是假的。只有耕伯见了我,便那等小心怜爱,足见到底是夫妻情重,与别人又自不同,也不枉我一向出生入死的代他苦守。等一会到了,少不得要把我一身所经的细诉与他,还不知他怎生怜惜我呢。”一路上胡思乱想,耳边厢忽听得一阵鼓乐喧闻。自顾身上,穿的是凤冠霞闥。抬头看见轿前的耕伯,也是

穿了一身吉服,在那里下马。心意中想:“莫非今日是亲迎吉朝么?”正那么想着,轿子已经停下。便有两个喜娘,过来揭去轿帘,搀扶出轿。入到一所大宅内,拜堂行礼,一般的拜见公婆。婉贞偷眼看时,那公婆却是喜孜孜笑溶溶的,不似从先那一副冰冷面目。傧相送入洞房,便出去了,房中只剩了新夫妻。一时耕伯走近身边,软语温存,百般慰贴。婉贞此时倒休答说不出话来。侧耳听一听,外面人声寂寂,远远的好像已打三更。耕伯还坐在身边,喁喁细语,说道:“我们从小儿便大家相爱,不料今日天从人愿,成了百年好事。想表妹的心也和我一般的,为甚么对此良宵,倒默默无言,学起息夫人来了?”婉贞低低答道:“妾得侍郎君,三生有幸。只是文定那天,忽然传说郎君走失无踪,不知一向在何处?却使妾多受一番磨折。”婉贞说话时,却仍是低着头的。(第10回 p 149-150)

45 纏足について呉趼人は、『新石頭記』以外にも「説小説・雑説」で言及している。「鏡花縁」について「私が一番好きなのは、女兒国王が林之洋に纏足を迫るところだ。それは、日ごろ女子の小足を玩具にしている男どもは、自らその苦痛を味わい我が身の災難に置き換えて反省せよ、と言っているのだ」(『月月小説』第8号1907年5月)と述べている。

46 澤田瑞穂「清末の小説」『清末小説研究』第1号(清末松小説研究会 1977.10.1)

47 孫の誕生を切望する李伯元の老母は、或る日、姪の侍女を気に入り、息子の妾として自宅に連れ帰った。(魏紹昌編『李伯元研究資料』所収李錫奇「李伯元生平事蹟大略」p 37(上海古籍出版社 1980年12月))

48 第三夫人だった王独清の母は、男児を設けた功績により第二夫人に昇格した。(王独清著 田中謙二訳『長安城中の少年 清末封建家庭に生れて』(平凡社<東洋文庫>昭和40年12月10日))

49 守節について以下の著作を参考にした。

○夫馬進「中国明清時代における寡婦の地位と強制再婚の風習」前川和也編『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から』所収(1993. 4. 10ミネルヴァ書房)

○白水紀子『中国女性の20世紀 近現代家父長制研究』(2008. 6. 30明石書店)によると貞女、烈女の表彰は明清代より盛んになったが、守節が厳格に守られたのは豊かな士大夫階級においてのみであったという。

○野村鮎子『歸有光文学の位相』(平成二十一年二月二十七日 汲古書院)によると、守節に反対する意見は明代にすでにあったらしい。明代の古文家歸有光(1506-71)「貞女論」は「婚約者が死去した場合、女性が未婚のまま独身を貫くことへの反対意見である」という。

50 嗣子を定めて養育させるについて註49 夫馬進、白水紀子の論著に言及されている。

51 魯迅夫人朱安について以下の論文を参考にした。

山内一恵「魯迅にあてた朱安夫人の影響—「家」との関係をめぐって—」

(『東洋大学大学院紀要』第20集 1984. 2)

桧山久雄「魯迅の最初の妻朱安のこと」『吉田教授退官記念 中国文学論集』(東方書店 1985年7月)

52 盧叔度「関与我仏山人後略—長篇小説部分」(《中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3期 总76期》)

53『新小説』第2年第5号 1905(光緒 31)年5月に登載された「論《写情小説》新社会之關係」で松岑は次のように述べ接吻を容認ならない行為としている。

歐化風行，如醒如寐，吾恐不數十年後，握手接吻之風，必公然施於中國之社會，而跳舞之俗且盛行，群棄職業學問而習此矣。

54 周桂笙は以下のような評を施している。『我佛山人文集』第6巻 p80)

寫採蓮謔浪笑傲。旁若無人。一見即知為下賤流品。寫夢境迷離徬。而入夢時便見仲達。將醒時又見仲達。可見鳳美腦筋中固未嘗須臾忘仲達也。無端插入一夢。想是欲寫情。至於無可着筆。故作此變幻耳。吾意原譯稿必無此一段。後取閱之。果無此一段。衍義者真狡獪哉。

55 樽本照雄『清末民初小説年表』に『情変』8回時事報刊 庚戌 1910 とある。未見。

56 「情変」原作は宣鼎『夜雨秋灯録』巻三「秦二官」である。宣鼎『夜雨秋灯録』原刊は1877（光緒三）年（上海申報館）。作者宣鼎（1832-1880?）は字子久、号瘦梅。安徽省天長の人。光緒六年（1880）、『夜雨秋灯続録』を死後に出版。清末、広く流布し多数回にわたり翻刻された。『筆記小説大観』版は「秦二官」を未収。項純文校点（黄山書社 1995.9）版を使用。（拙稿「吳趼人「情変」の原作について」『清末小説から』2001.7.1）

57 于東昇「論吳趼人の写情小説」（『南京大学学報<哲学人文社会科学>1989年3期）

58 「劫余灰」第11回

59 《聊斋志异》巻八《花姑子》

畢史氏曰、人之所以畢於禽獸者幾希、此非定論也、蒙恩啣結至於沒齒、則人有慚於禽獸者矣、至於花姑、始而寄慧於憨、終而寄情於忍、乃知憨者慧之極、忍者情之至也、仙乎仙乎、

60『我佛山人文集』第6巻(花城出版社)p517に付載

61 先進女性や革命女士の結婚については註1-6に挙げた外、次のような人々が知られている。

[李淑卿] (1881-1964)

広東省出身。湖北に育ち、19歳で共進会に参加した。指導者の劉公と結婚し革命運動に従事した。

[湯国黎] (1883-1980)

浙江省桐郷出身。上海務本女学卒業、1911年女北伐隊を組織、神州女学を設立した。章炳麟と結婚した。

[吳阿男] (1889-1978)

安徽省蘆江出身。南洋華僑徐瑞霜と結婚、革命運動に従事した。姉吳弱男は章士釗と結婚した。

[湯修慧] (1890-1986)

江蘇省吳県出身。浙江省立女子師範卒業。ジャーナリスト邵飄萍と結婚し、夫とともに『婦女時報』、『婦女雜誌』、『京報』等の発行に尽力した。

[許宝馴] (1895-1982)

浙江省杭州出身。書家、画家。文学者俞平白と結婚した。

[楊之華] (1900-1973)

浙江省杭州出身。作家、文筆家。上海大学に学ぶ。社会主義青年団を経て 1924 年中国共産党入党。労働運動に従事した。作家瞿秋白と結婚した。

[安娥] (1905-1976)

河北省獲鹿出身。本名張式儂。作家。1925 年中国共産党入党。宣伝活動、文芸運動に従事した。劇作家田漢と結婚した。

62 『吳趼人全集』第 10 卷 p 63、p 64

第三章 再評価—‘救世’と‘厭世’

第一節 ‘理想科学’小説『新石頭記』における‘文明’探究

小説による啓蒙改革を志して三年目に吳趼人は、『石頭記』の主人公賈宝玉が清末社会に現れ理想世界を遊歴する、という構想の小説『新石頭記』(40 回)を描き始めた。『南方報』に連載された後に単行出版され*1、執筆年時はおよそ 1905 (光緒 31) 年 8 月から 1907 (同 33) 年 2 月の間と特定できる*2。吳趼人は<「近十年之怪現状」自序>で、この作品について‘理想、科学、社会、政治’をテーマとしたと述べている*3。‘獸心’、“拝金主義”蔓延する清末社会のあり様を否定し世人に覚醒を求めていた吳趼人は、『新石頭記』の中に自身の理想とする政治社会像を提示した。本来、この小説は吳趼人の精神的、思想的枢軸と見なされるべき作品であるといえる。

しかし『新石頭記』は、中華民国成立後の中国近代文学史において甚だ軽視され、作品研究はおろか長らく単行本も出版されなかった。民国時代にこの作品を論じた楊世驥は、

『新石頭記』は壮大な構想の小説で、作者の目指した描写の要点は三点ある。その一つは宝玉の見聞を通じて当時の時代の様相を映し出すこと。二つ目は、宝玉の遊歴した“文明境”を通じて作者の理想とする科学世界を描き出すこと。三つ目は宝玉帰国後の言論を通じて政治改革についての主張を述べることである。従ってこの宝玉は実際には作者の全思想の化身である。

『新石頭記』是一部規模極為宏偉的小説,作者所欲描寫的要點有三:第一,他想借寶玉下山的見聞,寫出當日時代的面影;第二,他想借寶玉的遊歷“文明鏡”,寫出他所理想的科學世界,第三,他想借寶玉回國後的言論,寫出他對政治改革的主張.因此,這位寶玉實際就是作者全部思想的化身.

と解析している。しかし内容については、

第一点については非常に成功している。とりわけ庚子義和団の乱の顛末は自在にエピソードを盛りこみ最も精彩ある部分である。(中略) 第21回以後で文明境を遊歴する見聞は、作者の幼稚な提案で恰好ばかりと言わざるを得ない。事件を写実描写した後に荒唐無稽で根拠のない世迷言を継ぎ足した失敗は喻えようもない。宝玉が文明境から帰って後の感想や、作者の述べようとする政治主張もわけがわからない。

關於第一點，作者是寫的非常成功的。尤其是庚子義和團之亂起訖的經過，作者很自如的給穿插的進去，可以說是全書最精彩的部分。(p114) (中略) 『新石頭記』第二十一回以後，寫寶玉遊歷“文明鏡”的見聞，那是作者一種極幼稚的癡想，未免太架罵了。在寫實的故事之後，忽然接上一段荒謬不經的敘述，其失敗是不用言喻的。寶玉自“文明境”歸來後的觀感，作者大約欲寄託他政治的主張，但頗為隱晦。(p119)

と、酷評している*4。

文革終結後に『新石頭記』を論じた盧叔度は、

『新石頭記』の作者は庚子事変前後の北京の情景を映し出すという側面に筆を割いた。しかし作者の階級的限界により義和団の反帝闘争の進歩的意義を正しく知り得なかったばかりか、憎悪の感情を抱いて義和団を歪曲して描写し、不当な言いがかりをつけた。『新石頭記』を創作傾向について論じればやはり非常に誤ったものである。

《新石头记》作者花了一些笔墨从侧面反映庚子事变前后的北京情形，可是由于作者的阶级局限性，他不仅不能正确地认识义和团在反帝斗争中的进步意义，反而怀着憎恶的感情，对义和团作了歪曲的描写和无理的责骂。从《石头记》的创作倾向来说，也是非常错误的，…(p90—91)

と全否定している*5。

民国における『新石頭記』への批判の要点は、‘荒唐無稽の世迷言’を並べた‘科学思想’、‘分けのわからない救国思想’にあった。解放後、中国共産党政権下においては、‘義和団の榮譽を歪曲し言いがかりをつけた’思想性が先ず問題とされた。この作品の否定された原因として、義和団を歪曲して描写しているかどうかは小説としての出来映えに関係しない。‘荒唐無稽’な‘科学思想’、救国思想については、これまで論ずるに十分な研究がなされ

てこなかった。まずは作中の‘科学思想’と‘救国思想’について検討を進め、呉趼人の胸にあったのはどのような社会、理想であったのか確かめておきたい。彼の描いた理想の未来世界は、思いもかけぬ“地球”規模の世界、未来への可能性を、清末の人々の視界に広げたのではないだろうか。

まず、『新石頭記』に描かれた未来世界の風物、機器を整理し、個々の知識情報の出処について考察したい。さらに、呉趼人の情報のとらえ方から、彼が、どのような価値観に基づいて未来構想を立てたかをみていきたい。

1. 『新石頭記』梗概

『新石頭記』は曾雪芹の『石頭記』から賈宝玉、焙茗、薛蟠、甄宝玉の四人の人物と‘補天’の石の見聞という枠組みを借りたいわゆる‘翻新小説’である。作者と同時代の上海、北京、武漢を背景とする現実社会を描き、泰山近辺の異境を理想社会「文明境」の舞台としている。主な登場人物は以下の通りである。

○＜賈宝玉＞

俗界を離れ幾世幾劫を経て、女媧氏の最後の石が補天の願を果たしていない事を思い出し、俗界にもどると清末だった。

○＜焙茗＞

賈宝玉の従僕。宝玉を探すうちに仙童像となり、宝玉が躓くと蘇生する。泰山への途次、盗賊の矢にあたり仙童像にもどる。

○＜薛蟠＞

酔って眠りこみ目覚めると、汽車ができていたので上海に来て輸入商になる。買弁に騙されたり義和団に入ったり「自由村」に行ったりして、宝玉に見聞を広める機会を与える。

○＜柏燿廉＞（‘不要臉’を暗示*6）

梅開洋行の買弁で、外国語はできるが漢字は一字も読み書きできない。外国を崇拜し中国を蔑視している。

○＜呉伯恵＞

賈宝玉に外国語を教え、江南製造局や拒俄演説会に案内する。改革派の友人を救いに湖北へ行き武昌で逮捕された宝玉を救う。

○＜学堂監督＞

湖北の実力者。彼の演説を批判した宝玉を逮捕し暗殺させようとする。既述の如く實在

の武昌知府梁鼎芬がモデル。

○＜王威儿＞

キリスト教徒と争って外国に怨恨を抱き義和団に参加し薛蛮を誘う。連合国軍に鎮圧されると前歴を隠すため宝玉の殺害を謀る。

○＜劉学笙＞（留学生を暗示？）

字は茂明（質名？）薛蛮を‘野蛮自由村’へ招く。‘文明境’の入境検査の結果が‘性質汚濁、野蛮気象’と出て入境拒否された。

○＜老少年＞

「文明境」と外部との境界を守る番人。宝玉を境内に案内する。発表当時から、作者の意見を代弁する役柄*7とみなされていた。呉趼人自身も“老少年”の署名を使っている*8。

○＜東方文明＞

名は強、文明と号する科学者。実は宝玉の姻戚甄宝玉。‘真文明国を創造して偽文明国と対抗し、彼らが反省して真文明に学び戦わずして文明世界に導く（38回）’ことを生涯の悲願としている。

これらの人物形象には‘偽文明’‘真文明’という作者の価値観が表れている。ストーリーは前半、後半に大きく分かれている。概要は以下の如くである。

〔第1回—21回〕

大荒山で修養を積む賈宝玉は幾劫を経てふと女媧石補天の願を果たそうと思い立つ。俗界に舞い戻ると1901年の上海*9だった。従者の焙茗や薛蟠と再会し、外国語に堪能な呉柏恵や外国を崇拝し中国を蔑視する柏耀廉と知り合う。『知新報』、『時務報』、『清議報』等の新聞雑誌や翻訳書を読み感銘を受けた宝玉は、江南製造局を見学して翻訳書を買ひ、外国語を習い新知識を得る。宝玉は薛蟠の来信に応じて北京に赴き、薛蟠が友人王威儿に誘われ義和団に加わったことを知る。連合軍が入京すると、王威儿は宝玉を殺して口封じしようとする。宝玉は上海に帰り呉柏恵と張園の拒俄議事に出席し、救国を訴える少女を目撃する。

宝玉は漢口、武昌に行き、学堂監督を批判して恨まれ、拳匪の残党という冤罪を被せられ投獄される。看守に暗殺される寸前を呉柏恵に救われるが、幾度も死地に遭って社会の暗黒を痛感し、薛蟠のいるという「自由村」を尋ねて旅立つ。強盗兼業の宿屋や盗賊に遭いながら泰山を目指し東へ向かう途次、祥光を受け牌坊が現れる。

〔22回-40回〕

‘文明境界’と書かれた牌坊内は、‘文明’と号する大科学者‘東方強’の指導する‘文

明境’で中に‘文明自由村’があった。‘自由村’には‘文明自由村’と‘野蛮自由村’の二種類あるという。様々の科学技術に驚嘆した賈宝玉は案内人の‘老少年’とともに各地を遊歴し、たまたま、鵬を捕らえたのを機に、鯤魚の捕獲を依頼され、海底艇で地球を一周、種々の生物を生け捕りにする。真文明の確立をめざす東方文明父子の指導で社会改革を成し遂げ、平和と自立繁栄を達成した文明境の社会形態、行政理念を知り感服する。

東方文明を表敬訪問した宝玉は彼に世兄と呼ばれて当惑する。夜半、夢に上海へ帰り立憲政体の採用、治外法権の撤廃などその後の政治情勢の好転を聞く。万国博覧会で中国皇帝を会長とする万国和平会に出かけると皇帝は東方文明であった。その演説に感動し拍手して目覚める。東方文明が実は甄宝玉であり‘文明境’に実現した平和と繁栄で補天の願がすでに果たされていたと悟った宝玉は不要になった石を老少年に与える。老少年は山中に落とした石を探して、洞穴の前にそびえる怪石に刻まれた奇文を発見、それを小説体に改め『新石頭記』と命名する。

このように『新石頭記』は、前半で清末社会の様態を、後半で「自由」、「文明」のユートピアと理想の未来世界を描いている。理想の未来を夢想する心の裏側には現実への失望や憤りがあつたはずである。吳趼人がこの小説を書いて望ましい未来像を提示しようと考えた契機は何処にあつたのか。前半の最後に武昌で学堂監督に謀殺されかけた事件で、賈宝玉は‘野蛮’、‘暗黒’の清末社会’という認識を決定的にした。既述の如く、この学堂監督は実在の武昌府知府梁鼎芬がモデルであり、『新石頭記』の設定は作者自身の実体験を反映している。作中では、武昌の体験が賈宝玉の現実社会への憤り、理想社会への憧憬を強める契機とされている。この設定は、『漢口日報』事件を契機として、吳趼人が小説中で理想の未来追求を試みるに至った事を表白しているといえる。

2. 未知の世界情報源

賈宝玉の文明境での体験を、そこで見聞した未来世界の風物や機器を中心に整理すると以下ようになる。[]内の数字は登場する回である。

1)[科学機器]

○水制 [23]：不潔な銅製からガラス製に改良した水道の蛇口

○地火灯[23]：地面を掘って地火を採取、鉄管を配置し、灯火用、工業用に使う

- 助聴筒： [23]補聴器、耳に詰める小さな筒、遠くの小さな音声も聞き取れる
- 飛車 [25]：飛行機、電気可動のエンジン、機上に昇降機、尾部に進退機、四面に安全用スプリングを装着、車輪と両翼を除去、チャーター制
- 總部鏡 [24]： i -ivの外に、呼吸観察用、知能測定用、知識注入法を開発中
 - i 驗骨鏡・三脚に立てた鏡、人が立つと全身の骸骨がうつる
 - ii 驗血鏡・全身の血液の運行が鏡にうつる
 - iii 驗筋鏡・全身の筋肉が鏡にうつる
 - iv 驗臟腑鏡 心臓、腸、胃、肝、胆、肺をうつす
- 分部鏡[24]：脳、眼、耳、鼻、五臟六腑等を個別に観察する部分鏡
- 海底戦船[25]：軍事用潜水艦、鉄製、楕円形、船室の入り口と窓以外は継ぎ目がなく、マスト、煙突もない、無声電炮、透金鏡等を装備、五十尺長、平時は電気で船内に酸素を製造し、海底に潜行
- 助明鏡 [25]：千里鏡、測遠鏡とも呼び、かけると海上の船が眼前に見える
- 無声電炮[25][26]：電気大砲、戦船の船体が砲身、船首と船尾が砲口、金属透過鏡で照準を定める、水陸両用、ほかに電気銃もある[第 30 回][第 34 回]
- 透水鏡 [25]：船の欄干に架けた単筒の測遠鏡から覗くと水底が見える
- 無線電話[26][29]：携帯電話筒を振るとベルが鳴り話ができる
- 獵車 [26]：パイロット無しで自動飛行、収納用檻、電気銃、昇降機、中から外が見え、外からは見えないシールドガラス（障形軟玻璃）を装備
- 照像鏡子 [28]：ポラロイドカラー写真機
- 海底獵艇[29]：狩獵用潜水艦、鯨型で鰭や鱗までついている、鱗は船室の入り口、発光する両眼は電灯、電気で運行、海底用透水鏡、行駛機、燃灯機、製造機、炭素回収機、定南針、発亮機、透金鏡等を装備
- 発亮機 [25][26][29]：発光放電装置、戦船は探照と号令用、海底獵艇は夜漁用船体はソーダガラス？（軟玻璃）の層で電気を遮断する
- 透金鏡 [29]：操舵室の大きな圓いガラス製鏡、船縁でもないのに海が見える
- 入水衣[29]：潜水服、軟皮（ゴム？）製
- 空調 [32]：船内で人工空気を生成、冷暖二気管により適温を維持
- 隧車 [33][34]：電気自動車で、レールのない地下商店街を走る
- 電火蒸気[35]：蒸気で作動させた機器の運動で電気を得、エネルギーに用いる

- 射電筒 [38] : ガラス製、砲弾を使わず電気を放出、当たると感電死する
- 蒙汗薬水[38] : 開発中、薬品をまき朦朧とした敵を生捕り、解毒剤で蘇生させる

2)[地理／動植物]

- 鵬 [26-28] : 五十二尺長、三十尺幅の巨鳥、爪に鱗がある、アフリカまで追い捕獲
- 海馬 [29] : 虎に似る、凶暴、水陸両生（セイウチ?）
- 海鰐 [29-30] : 『水経注』にいう海鰐魚の数百丈大はなく、五、六十丈程度黒っぽく鱗がな
いらしく弾丸を弾くので、放電し電気ショックで捕獲
- 人魚 [30] : 群居して潜水夫に噛みつく
- 鯨魚[30] : 『山海経』記載のまま鶏に似た姿、鵠に似た声、赤い三尾、六足四目
- 浮珊瑚[30-32] : 五色珊瑚とも呼ぶ、南極に群生、五色でガラス製の如く透明
水に浮き、冷気を発散
- 冰貂 [30-32] : 狐色の貂鼠（テン?）、南極の氷岩に穴居、水温上昇で死ぬ
- 漩渦底 [31] : 南氷洋の海底から垂直に沸き立つ地球の中心点の水と周辺の渦巻
- 寒翠石[31-32] : 南氷洋海底にそびえる淡緑色の切り立った大石、冷気を放散
- 澳大利亞洲隧道[31] : 南極の帰途、洞穴に逃げた海鰐を追って発見した、オー
ストラリア大陸を貫通する海底トンネル

ちなみにライト兄弟の飛行機が動力飛行に成功したのは 1903 年、電動式潜水艦の実用化は 19c.末-20c.初、X 線発見は 1895 年、世界初の無線電信実験は 1905 年、電線式の電話局が南京に開設されたのは 1900 年である。『新石頭記』に描かれた科学技術は、当時、欧米においても最先端技術だった。また、南極大陸初上陸は 1895 年、以後、各国の南極探検競争は、1911 年、スコット隊南極点到達まで続く。

3.情報源

1)古典籍・小説・新聞雑誌

呉趺人は、これら、ほとんど実物を知らないはずの機器や地理についての知識をどのようにして得たのだろうか。その情報源として確認、或いは作者との関わりがほぼ確認できる出版物は、次のとおりである。

書誌	記載箇所
『山海経』[海外南経][北山経]	『新石頭記』第 25 回、第 30 回
『鏡花縁』	『新石頭記』第 25 回、第 37 回、「説小説」
『莊子』[逍遙遊]	『新石頭記』第 27 回
『水経注』	『新石頭記』第 29 回、第 31 回
『時務報』1896.8-11	『新石頭記』第 7 回
『知新報』1897.2-1898.12	『新石頭記』第 7 回
『清議報』1898.12-1901.12	『新石頭記』第 7 回
『点石斎画報』	『二十年目睹之怪現狀』第 22 回 『新庵訳屑』「世界最長之髭」評語
ジュール・ヴェルヌ「海底旅行」	『新石頭記』第 25 回～第 35 回
ジュール・ヴェルヌ「地心旅行」	『新石頭記』第 23 回

『山海経』『鏡花縁』については、『新石頭記』の中で次のように言及されている。

○老少年は言った。‘腹立たしいのは、当世の時事に通達していると自認する人間で、何かといえば五大州世界とやら言い、天文地理知らぬこと無しと言っておいて、自らの経験は少しもなく、数冊の翻訳書で見たにすぎないのに、自国の古籍の記述をすべてなきものとし、荒唐無稽の談と片づける。今、鰐魚を捕獲し、『山海経』の濡れぎぬをはらし、時事通達の口を塞いでやれました。

我最恨的一般自命通达时务的人,动不动说什么五洲万国。说的天文地理无所不知,却没有一点是亲身经历的,不过从两部译本书上看了下来,却偏要把自己祖国古籍记载,一概抹煞,只说是荒诞不经之谈。我今日猎得獐,正好和『山海経』伸冤,堵堵那通达时务的嘴。(第 30 回 P236)’

○宝玉は言った。‘《鏡花縁》とやらに周饒国とかが、飛車を作ることができると言っています。理想にすぎず、言えるだけで実行はできないと思っていたのに、何と今になって、ほんとうにこんな事があるとは。

当日看了一部小说,叫做什么『镜花缘』,说什么周绕国,能做飞车。以为不过是个理想,能说不能行的。谁知到了今日,果然实有其事。(第 25 回 P190)’

○飛車隊について論じていて、宝玉は言った。‘ああいう荒唐無稽の小説はともすれば 神怪を説き、雲の際での大戦などと言いますが、図らずも今日、この眼で実物を見ることになりました。

在那里议论飞车队的事。宝玉道：那些无稽的小说，往往说神说怪，说什么云端大战，不图今日我亲眼见了这实事（第37回 p292）’

『莊子』『水経注』は中州古籍出版社版の注において典拠として詳しい検証がされている。また、『時務報』、『知新報』、『清議報』は『新石頭記』に書名が挙げられている。『時務報』や『清議報』には、気球や潜水艦、南極、北極探検の記事が、当時の最新情報として取り上げられており、吳趼人がそれらの雑誌から知識、情報を得ていたことがわかる*10。

そのほか『月月小説』、『繡像小説』、『小説林』、『新小説』などの小説雑誌には梁啓超「新中国未来記」をはじめ、ユートピアや月世界探訪をテーマとする小説が掲載され、当時の人々の未知の科学文明への驚嘆や期待、異世界への憧憬を表している。吳趼人の小説雑誌への関心と関わりの深さを考えれば、当然、内容の多くを見ていたと推測される。それらの雑誌の執筆者でもあり、少なくとも自分の作品の掲載号は見えていたはずである。また吳趼人自身が編集者であった『月月小説』が載せている潜水艦や地下鉄、空中飛艇の写真は、彼の異世界への関心を示しているといえよう。

2) 『点石齋画報』

また、異質の文明に対する人々の好奇心をかきたてた情報源として看過できないのが絵入り雑誌『点石齋画報』*11である。該報の記事や絵は、吳趼人が未知の事物の具体的形状を知るのに役だったと思われる。『点石齋画報』は、1884年から1896年の間、吳趼人が小新聞編集者として活動していた同時期の上海で刊行されていた。その名を彼は、『二十年目睹之怪現狀』22回、『新庵詠屑』「世界最長之髭」評語で挙げている*12。該報の研究には武田雅哉の専著があり*13、その絵が当時の人の脳裏に斬新な映像を焼き付けたことはすでに指摘されている。吳趼人も例外ではなかったであろう。彼が未知の世界、事物を理解するのに該報の絵は絶大な視覚効果を与えたと思われる。

『点石齋画報』の中でも、『新石頭記』に対する視覚イメージによる影響がとりわけ憶測される絵について、そのタイトルと内容を以下に挙げておく。

『点石齋画報』	『新石頭記』
「龍頭走水」（丙 3-19） 蛇口が水を垂直に吹き上げる	< 水制 >
「水底行舟」（土 6-46）	< 海底戦船 > 煙突なし

楕円形の潜水艦、煙突あり	
「水中砲弾」(忠 8-61) 軍艦が電氣を用いて水中に砲弾を発射	< 無声電砲 >
「水底行車」(庚 4-26) 水底トンネルを走る汽車、海底トンネルと地下鉄を重ねたイメージ	< 澳大利亜隧道 > < 隧車 >
「寶鏡新奇」(利 3-19) 三脚に立てた鏡に五臓六腑を写す	< 總部鏡 >
「狐入人腹」(木 11-87) 病人の腹の内部を大鏡に写す。	< 總部鏡 >
「学究作賊」(庚 7-51) 宝玉が強盗に使った火薬の銃	< 洋槍 >
「水怪普搏人」(行 3-22) 魚首人身、直立する怪物	< 人魚 >
「巨魚駭聞」(土 10-77) 五十余丈、鯨に似た巨魚	< 海鰐 > 体長が同じ
「沙魚化虎」(絲 3-24) 虎頭魚身の怪物	< 海馬 > 同じ記述
「海狗鳴冤」(文 9-70) オットセイらしき海獣。	< 冰貂 >
「海底仙山」(匏 11-83) 海底の岩石草木	< 寒翠石 >
「海底清泉」(行 4-27) 海底から垂直に沸き上る水流	< 漩渦底 >
「地火明夷」(丁 10-73) 火山爆発の様	< 地火 >
「鳥不知名」(午 8-58) ダチョウに似た巨鳥	< 鵬 >
「鳴鳳呈祥」(土 10-74) 人頭、鵬らしき鳥	< 鵬 >

「飛鳥牽人」(貞 11-81) 鷹に似た巨鳥	< 鵬 >
「人鷹相搏」(戊 1-3) 鷹に似た巨鳥	< 鵬 >
「大鳥伏誅」(樂 11-81) 鷹に似た巨鳥	< 鵬 >

上記の素材により、『新石頭記』に描かれる個別の機器、地理、動植物の記事が、どの程度、以上の書物に依っているか、整理してみると以下ようになる。(○内の数字は素材として依拠する度合の高い順位、呉は呉趼人の独創または改良)

[機器名]	[情報源]
水制	①『点石斎画報』
地火灯	① 呉 <四川煮塩法>②「海底旅行」<海底炭坑> ③『点石斎画報』<火山>
助聴筒	① 呉 <華自立の発明>
飛車	①『鏡花縁』②『山海経』[海外南経] ③ 呉 <ヘリコプター型>
(気球)	<‘野蛮’で危険な気球>①『点石斎画報』 ②『清議報』③『時務報』
總部鏡	①『点石斎画報』②『時務報』<X線> ③ 呉 <東方徳と華自立の発明>
分部鏡	① 呉 <東方徳と華自立の発明>
海底戦船	①「海底旅行」②『点石斎画報』 ③<旧式戦艦>『清議報』『時務報』
助明鏡	①『点石斎画報』②「海底旅行」 ② 呉 <東方美の発明・眼鏡型?>
無声電炮	①「海底旅行」② 呉 <華自立の発明>
透水鏡	①「海底旅行」
無線電話	① 呉 ②『清議報』<無線電信>

獵車	①呉<自動操縦>②<華自立の發明>
照像鏡子	①呉<ポラロイド・カラー・カメラ> ②『時務報』
海底獵艇	①呉<鯨型>
発亮機	①「海底旅行」②『時務報』
透金鏡	①「海底旅行」②『時務報』
入水衣	①「海底旅行」
空調	①「海底旅行」
隧車	①呉<地下タクシー>②『地心旅行』 ③『月月小説』<地下鉄写真>
電火蒸気	①「海底旅行」 ②『点石斎画報』<電気の知識>
射電筒	①呉<東方法、多芸士、華自立の發明> ②「海底旅行」
蒙汗藥	①呉

【地理／ 動植物】

[地名・動植物名]	[素材]
鵬	①『莊子』[逍遙遊] ②『点石斎画報』<鵬、駄鳥、鷹>
海馬	①『点石斎画報』②「海底旅行」
海鰐 人魚	①『水経注』②『点石斎画報』<クジラ>（「海底旅行」<クジラ>?） ①山海経』[北山経]②『点石斎画報』 ③「海底旅行」<ジュゴン>
*魚	①『山海経』
浮珊瑚	①「海底旅行」
冰貂	①「海底旅行」<ラッコ>②『点石斎画報』<アザラシ>
南氷洋	①『点石斎画報』②『時務報』（「海底旅行」?）

漩渦底	①『点石齋画報』 / (「海底旅行」?)
寒翠石	①「海底旅行」 ②『点石齋画報』
澳大利亞洲隧道	①「海底旅行」 <アラビアントンネル> ②『点石齋画報』

このように素材として考えられる出版物を整理してみると、「海底旅行」、『点石齋画報』の際だった比重の高さがめだつ。事実の概要だけを知るニュースや時事文と異なり、具体的かつ鮮明に情景や形状が知覚できイメージが増幅される点で、小説や絵の影響は強力なものであったのであろう。

呉趼人が『新石頭記』に描いた‘科学世界’について、民国期に楊世驥は‘荒唐無稽’な空想と評した。しかし、作中の‘科学世界’は情報源を上記の如く指摘できることから、実際には清末当時の報刊に記載、紹介された先進技術であったことが明らかになった。清末に『新石頭記』を読んだ読者にとり、描かれた‘科学世界’は絵空事ではなく、憧憬する文明情報の具現化であったといえる。読者は、『新石頭記』の作中世界を現実を目指すべき指標と受け止めていたであろう。

3) 漢訳ヴェルヌ「海底旅行」、「地心旅行」

これら典拠として明らかとなっている古典や時事文と、作品中の機器、生物などを照合してみると出处不明なものがまだ多く、ほかの典拠の存在をうかがわせる。『新石頭記』に名は挙がっていないものの、呉趼人が読んだことが確実に見られ影響の推測される出版物について考えてみる。内容に大きく関連すると思われるのがジュール・ヴェルヌ『海底旅行』、『地心旅行』の漢訳版である。

漢訳「海底旅行」(21回)の原作は、フランスの作家 ジュール・ヴェルヌ の小説『Vingt Mille Lieues sous les Mers (邦題『海底二万里』) (1870)である。1866年、海上に出現し、各地で海難事故を引き起こした、鯨より大きく発光する怪物の正体究明を依頼されたアナロックス教授と従僕のコンセイユ、ネッド・ランド親方が海に落ち、その怪物実は謎の潜水艦ノーチラス号に拾われ体験する海底の冒険を描いた作品である。その中国語訳は、雑誌『新小説』第1-6、10、12、13、17、18号(1902.11-1905.7?光緒28.10-31.6?)に21回にわたり連載された。創刊号には英国蕭魯士原著、南海盧籍東訳意、東越紅溪生潤文と署名されているが、樽本照雄によっ

て日本語の抄訳本の重訳であると検証された*14。しかも原作の約四分の三で中断し、部分的には翻案に近い箇所もある。呉趺人は、『新小説』8号(1903.9)から『二十年目睹之怪現狀』、「痛史」、12号から「九命奇冤」の三本の小説を、ほぼ休載なく24号まで連載していた。彼はその間、第10号以降連載分の「海底旅行」は、確実に読んでいたであろう。また、執筆陣に加わる以前から該誌を知り「海底旅行」を読んでいた? (小説ではあるが『二十年目睹之怪現狀』第1回は、上海から‘日本横浜新小説社’に投稿するという設定になっている) 或いは、執筆開始後にバックナンバーを読んだ? といった前後状況が想定できる。それらの点から、彼は1-6号連載分についても読んでいたであろうと推定するのが妥当ではないかと思われる。

そこで、『新小説』連載の「海底旅行」と『新石頭記』の内容を照合してみると、以下の如く対応する描写が見られた。下線部が一致箇所。()内は訳語、<>内は『新石頭記』に登場する機器、動植物名。《原》は、原作の邦訳版*15との異同。

「海底旅行」	『新石頭記』
欧露世（アナロックス）教授と高昔魯（コンセイユ）・李蘭操（ネッド・ランド）親方は、怪物が <u>継ぎ目のない鋼鉄の潜水艦</u> であったと知る。(1-6回)	<戦船>純是一塊鐵造成的, 沒有一條接縫
謎の <u>潜水艦</u> は、李夢（ネモ）船長の指揮する内支士（ノーチラス）号で、操縦から炊事まで電気を動力とし、 <u>海水の塩分から電気を製造し</u> 、空気の製造もできる(7回)	<戦船> <四川地火煮塩法>
ノーチラス号は <u>楕円形で両端が尖った葉巻型</u> 、船の外壁の羽目板を開けると広間の <u>ガラス窓から海底の光景を見とおせる</u> （第8回）	<戦船>橄欖一般 <透金鏡><透水鏡> 玻璃窗…只見白茫茫一片汪洋
<u>潜水服</u> を着て、海底の森で、 <u>ガラス球に電気を蓄電し銅鉄を被せた電鎗</u> （電気銃）で、 <u>水獺</u> （カワウソ? 《原》ラッコ）、大鯊魚（サメ）、海豹（アザラシ）、 <u>海馬</u> （セイウチ《原》無し）を狩る(9-11回)	<入水衣> <電槍><貂鼠（海獺か?）> <射電筒>炮身…玻璃做 <海馬>（名前のみ同じ）

船を攻撃する原住民を、 <u>電流で撃退</u> する。 (12-13 回)	<海鰐>を放電で倒す
ネモ船長は <u>千里鏡</u> （望遠鏡）で海上に何かを発見する。翌日、仇敵への報復攻撃？により死んだ船員を <u>海底の珊瑚の森</u> に埋葬する。 (14-15 回)	<千里鏡>(レンズだけの眼鏡型？ 名前のみ同じ)<浮珊瑚>(浮く点が独創)
紅海で鮫魚（ワニ？《原》 <u>人に似たジュゴン</u> ）と戦う。 ネモ船長が <u>亜刺伯海隧道</u> （アラビアントンネル）と名付けた <u>蘇彝士河</u> （スエズ河）地底を抜ける海底の通路を、機関室前面の球形のガラス窓（《原》舷窓にはめたレンズ状のガラス）にある <u>照明灯</u> （《原》操舵室後方の <u>電気反射鏡</u> ）で航路を照らして通り、紅海から地中海に直行する。(18-19 回)	<人魚>(何なのか不明) <発亮機>全船発亮,以便照海的. (但し全 船に電流を通す形式?) <澳大利亜洲隧道>(オーストラリアとなった理由が不明)
大西洋で <u>海底火山</u> に登り、アトランティス大陸を発見する。翌日、ノーチラス号は、海底死火山の内部に寄港する。そこには、 <u>電気を生むナトリウムを得る為に燃やす石炭</u> を採鉱する海底炭坑がある(21 回)	<寒翠石> <電火蒸気>要焼一回火蒸来気出,運動了機器,生出了電火.

上述の如く、『新小説』連載の翻訳は原作の四分の三強で中断している。その欠けた後半部分には、鯨との戦闘、南氷洋の航海と南極点への到達、ノルウェー海の大渦巻の場面があり、それぞれ、『新石頭記』の<海底戦船>と‘大鯨魚’の戦闘[第 25 回]、<南氷洋>[第 30 回]、南極点の<漩渦底>[第 30 回]の項目への影響が考えられる。とりわけ、潜水艦と鯨の戦闘場面は、楕円形の船体が突進し鯨身を貫通するという独特の発想で、偶然の類似とは考え難い。しかも、『新石頭記』は、鯨らしき生物を‘海鰐’の呼称で通しており、この場面のみ‘大鯨魚’の呼称が使われているのである。また、南氷洋で、ネモ船長と賈宝玉の、氷の下で凍っていない海を航行しようと言う特殊な台詞が一致している。しかし、これらの場面の影響関係については、『新小説』版「海底旅行」が連載終了後に、翻訳を完成して出版

された可能性や（『新小説』は作品毎に通しページ番号を打っている）、呉趼人が『新小説』版以外の翻訳の存在も知っていた、或いは友人の翻訳家周桂笙から続きを聞いていたといった仮説が確認されてはじめて論じ得る問題なので、現段階では留保せざるを得ない。

漢訳「地心旅行」は、呉趼人の友人で『月月小説』の共同編集者、周桂笙が訳している。ほかに呉趼人は、魯迅の訳が載った雑誌『浙江潮』の名も筆記に記している*16。さらに呉趼人は『賈島西鼓詞』序に「南北氷洋は、このうえない冷たさだが、氷をうがちトンネルにし地球の中心にいけば、その熱度は地球表面の赤道下より百千万倍になるのがわかる（南北氷洋冷極矣。然使凿氷洋为隧而探地球之中点吾知其热度将十百千万倍於地球外之赤道下者。）」と記しており、これは「地心旅行」の記述に一致する*17。これらの点から彼は「地心旅行」を読んでいたであろうと推察される。この小説は、地底の状況や通行の可能性という点で、『新石頭記』に幾分かの影響を与えたと考えられる。『月月小説』のグラビアに載せられた実際のニューヨーク地下鉄の写真を編集者である呉趼人は当然見ていたであろう。『新石頭記』で老少年が「レールを敷き定刻に発車する地下鉄道より安全で無駄がない」と自負する「レールのない地下を走る電気自動車」は、「地心旅行」をヒントに考え出されたのかもしれない。

4. ヴェルヌ思想への共感―被抑圧国支援

呉趼人がこのように科学機器や生物地理を熱心に描いた意図は何だったのだろうか。「東方強」率いる「文明境」の独自開発になる発明品は、『鏡花縁』の飛車を発展させたヘリコ型自動運転飛行機、伝統的製塩法を発展させた地火エネルギーの活用、西洋の科学製品を「仁」の思想に基づき改良したポラロイド・カラー写真機や無線電話や地下タクシー、敵を殺さずに戦闘不能にする爆弾「蒙汗薬水」など、中国思想や伝統産業と西欧科学との融合を特徴とする。清末の洋務政策は現行の礼教支配体制下に西洋の科学技術のみ導入しようとした。呉趼人は発明品自体の製造法、運用法に中国の地場産業を取り入れ中国人の感性を勘案した改変を施している。その点で洋務派官僚の中体西用論とは異なっている。

また賈宝玉は東方一族が「仁」の精神に則って開発した“ヴェルヌ型”最新飛行機や潜水艦に試乗し地球を一周、伝説の「鵬」や「海鯨」を捕殺し、未知の生物や地理を発見し、『莊子』や『山海經』以来数千年に及ぶ絶対神秘を克服する。「文明境」の創建者である科学者「東方強」、号を「東方文明」と呼ぶ名は、そのように“反侵略精神”に基づく科学技術により自立自強を果たし、「東方」を「強」く「文明」化して新たな発展を目指すという方向性を示している。

呉趼人はさらに、‘東方文明’の念願を‘野蛮’国の文明を超克する‘真文明’の創造にある、と設定している。清末時期、‘文明’と‘野蛮’については様々に論議された*18。西欧化の立ち遅れを‘野蛮’、‘非文明’とする声も高かったが、呉趼人のいう‘野蛮’国とは現世界の列強諸国にはかならない*19。彼の価値観は実在の潜水艦を「野蛮人の兵船」と呼び、それに対抗する文明境の海底戦船として‘楕円形のマストも煙突も継ぎ目も無い’「海底旅行」ノーチラス号と同形の潜水艦を選択した点に象徴されている。ジュール・ヴェルヌ「海底二万里」は清末に数種翻訳された。先に述べたように『新小説』連載の「海底旅行」には改作に近い部分がある。以下に挙げるのは字句に大きな改変加筆の見られる場面である。

第 17 回 ネモ船長はインド洋で、サメに襲われた水夫を救出、真珠を与える

第 19 回 トルコに反乱をおこしたクレタ島付近で、ネモ船長は連絡員に金塊をわたす。

第 20 回 ノーチラス号はビーゴ湾で、1702 年の海戦で金銀財宝を積んで沈没したスペイン船の金塊を積み込む。

改変加筆された理由は、一見して明らかであろう。第 17 回など、原作の邦訳では‘あのインド人は圧迫された国の人間です。私はまだ、いや最後の息を引きとるまで、そういう国の味方であるつもりです！’という短い台詞にすぎない部分が、インド民衆の悲惨と英国の圧政を憤る百数十字を費やした演説に変わっている。海底の財宝を被圧迫民族に提供し、仇敵国の戦艦を報復攻撃しながら海底探検をするというこの小説は、列強の侵略に憤る中国の訳者や読者には単なる空想読み物に留まらない意味をもって受けとめられたと思われる。

「海底旅行」の思想は呉趼人の世界認識にも強く訴えるところがあったのであろう。前項に概要を挙げたように『新石頭記』は現実の中国社会を描く前半から異境の理想社会を描く後半へと展開していく。‘文明境’は‘補天’を達成していたので、賈宝玉が持っていた石は、最後に不要となる。作者は、第 40 回の末尾で‘補天’の石に次のような結末をつけ作品の由来譚としている。

これより、女媧氏の使い残したあの一個の石は、大荒山青埂峰から、文明境界靈台平方寸山の斜月三星洞に移ったのです。みなさん、信じないのなら自分で行って見てごらん下さい。しかし、至誠熱情あふれる愛国愛種の君子、氣力を傾け国粹の保全に勉める偉丈夫であればこそ、たどりついて見ることができるのです。もしくそくらえの外国かぶれだったら靈台平方寸山斜月三星洞に行かせてもその奇文は絶対に見ることができません。何故だと思いますか？実はその奇文は偉丈夫が読むためにあるのであって、小人が読むために

あるのではないのです。だからくそくらえの外国かぶれの奴隷、小人はそこへ行っても石の上には架空のくねくねした横文字が数行出ていて、こう書いてあるのです：

从此,女娲氏用剩的那一块石就从大荒山青埂峰下,搬到文明境界灵台方寸山,斜月三星洞去了。看官如果不信,且请亲到那里去一看,便知在下的并非说谎。然而,必要热心血诚爱种爱国之君子,萃精荟神,保全国粹之丈夫,方能走得得到,看得见。若是吃粪媚外的人,纵使让他走到了灵台方寸山斜月三星洞,也全然看不见那篇奇文。你道为何?原来那篇奇文是预备丈夫读不预备奴隶读;预备君子读,不预备小人读。所以那吃粪媚外的奴隶、小人,到了那里,那石面上便幻出几行蟹行斜上的字,写的是:

All Foreigners thou shalt Worship. Bealways in sincere friendship.

Tis the way to get bread to eat and money to spend;

And upon this thy family's living will depend;

There's one thing nobody Can guess:

Thy Countrymen thou canst oppress.(p319-320)

‘石’には、作中で柏耀廉や劉学笙として描かれている‘吃粪媚外的’、‘小人’の徹底拒否を明言している。呉趼人は作中で、老少年の言葉を通じて、列強の‘oppress—抑圧’文明の否定と、‘愛国愛種’、‘国粹の保全’という価値観に基づいた国家構想を開陳している。

老少年は、作中で薛蟠の向かった‘野蛮自由村’を現世界の列強諸国の‘文明’社会であると暗示し、列強諸国の行為を‘強盗’や‘虎’の‘横暴’と例えている。

二人の人がいて、一人は勇猛な武人、もう一人は結核を患っているとする。勇猛な武人が結核患者を散々脅した挙句殴る蹴るで半殺しにしたなら、道理があるといえますか？文明人の行いと言えましょうか？司法は彼を捕え裁くでしょう。それでも彼自身は“私のこういうやり方はとても文明なのだ”と言います。いま文明と称する国でこうでないものはない。皆、よその国の弱点につけこみ侮蔑し放題、果ては人の土地を分割し政権を侵犯したうえ、保護だというのはです。

譬如有两个人,在路上行走。赳赳武夫,一个是生癆病的。那赳赳武夫对这生癆病的百般威吓,甚至拳脚交下把他打个半死。你说这赳赳武夫有理么?是文明人的举动么?只怕刑政衙门还要捉他去问罪呢。然而他却自己说“我这样办法文明得很呢”。你服不服?此刻动不动讲文明的国,那一国不如此?看着人家国度弱点,更任意欺凌,甚至割人土地,侵人政权,还说是保护他呢 p221 (28回)。

この‘野蛮’文明国の行為についての表現は特定の事例を意識しているかのように具体的である。これは実際に‘散々脅された挙句に半殺しにあった’呉趼人の父の体験を指しているであろう。呉趼人は列強兵士の暴挙を幼いころから聞かされ、長じて父の遺文を発見しその詳細を知る。彼は父の体験を記した『趼塵筆記』〈紀痛〉の一文に次のような評を付記し、列強の国力は‘文明’ではなく‘野蛮’であると断じている。

趼人氏いわく：西洋人に聞けばそれぞれ自国を教化された国であると自負し我が国を教化半ばの国であるという。教化されたものを文明というならばかえって野蛮ということなのだ。ここに記した一文は我が家の私事に過ぎない。私はこれを心に記すべきで筆で記さねばならぬわけではない。ぜひともこれを記そうとするのはまさしくその文明を讃えようとするからである。願わくは外族を尊び神聖とし崇拜するものとともにその是非を論じたものだ。

趼人氏曰：聞諸西人，每自負其國為被教化之國，指吾國為半教化之國；被教化者謂之文明，反是則野蛮矣。右紀一則，我家之私事耳，吾記之，當記之以心，不必記之以筆；其所以必記之者，正所以頌其文明也。願與尊外族為神聖而崇拜之者共商之。

‘文明’諸国への不信を家訓として育った呉趼人には、武力を背景とする列強諸国の近代文明が‘野蛮文明’であることは、自明の理であつたろう。‘文明’自由国家の建設と‘野蛮’自由国家への抵抗という構想にたつ『新石頭記』の機器の多くが原形を「海底旅行」の中に見つけることができるのも当然のことであるかも知れない。

第二節 『新石頭記』における“ユートピア”追求

呉趼人は小説による啓蒙改革を志し（1903～）、《社会小説》や《写情小説》を発表しながら‘理想、科学、社会、政治’をテーマとした小説『新石頭記』（40回）（1905～1907）を描いていた。彼は現実政治や社会形態、生活様式の実態を検討するのに並行して理想社会の構想を進めていたことになる。既に論じたように呉趼人は‘文明境’を現実の‘野蛮文明’国家と異なる‘補天’の命題を達成したユートピアとして描き、独自の科学技術を運用して自立発展し得た理想社会と設定している。彼はそこにどのような政治制度、社会形態を構想していたのだろうか。

1. 理想の政治体制と社会生活

1) <行政区画>

文明境は全二百万区に区切り、各区百平方里の敷地を有する。東、西、南、北、中央の各部に分けている。各部は、中央を礼、楽、文、章、東方を仁、義、礼、智、南方を友、慈、恭、信、西方を剛、強、勇、毅、北方を忠、孝、廉、節の各字に分かれる。村は字の下単位。

2) <政治体制>

老少年は、世界の政体を‘専制’（文明／野蛮）、‘立憲’、‘共和’の三種に分け次のように分析する。

[共和制]

各党派が対立しあい政府は党派の抗争に左右され、政治方針が一貫しないから‘最も野蛮な方法’である。

[立憲]

党派の争いは避けがたく、選挙被選挙権の枠により‘富豪政体’に転換しやすい。かつ住民を食い物にしてきた地方の郷紳が議員になれば、専制よりもひどい‘悪紳政体’になる。

[野蛮専制]

中央政府が地方官を威圧し暴官汚吏がはびこる。教育が普及せず‘文明’に達していない国家では‘野蛮専制’よりは立憲制のほうがましである。

[文明専制]

‘民の好むところを好み、民の憎むところを憎む’を皇帝や官僚が実践する最も望ましい政治体制である。はじめ文明境では立憲政体を取り、‘徳育’を普及させた段階で、専制政体に切り替えた。実態は責任者間の合議政治のようなものであるらしい。

[党派]

党派はなく外国を競争の対象としている。同胞の中で無数の党派に分かれ攻撃しあうような‘野蛮で凶悪な暴挙’はない。意見が違えば討論しあい解決する。(35回)

3) <教育>

‘強制教育’の法令を定め教育偏重の政治を行い、特に‘徳育’を重んじている。無料で

は依頼心を養い独立精神が培われないという理由で義塾は廃止された。全国の学校に行けない貧家の子弟は半日学堂に学び公的機関が貧家の子弟を半日雇用する。

4) <宗教>

文明境には廟、教会がない。‘教’は‘無知な愚民’には必要で、迷信を打破し大義を知った民衆には無用である。‘無教の野蛮国’も‘有教の文明国’もあり得ない、と老少年は解説する。

5) <産業>

[工業]

衣料工場では、人手を要せずに、綿花が紡績機、染物機、織機等へ自動的に運ばれ、衣服になり、箱詰めされる。(34回)

[農業]

各地主が田畑を持ち寄って会社組織とし、共同で機械を使って農作業を行うので、田畑には畦道がない。(35回)

6) <軍備治安>

沿岸防衛の海軍、国境警備の陸軍が飛行隊や電力潜水艦などを装備、専守防衛に徹する。毒ガス弾など‘不仁’な兵器を排除し、無害の麻酔ガス‘蒙汗薬水’の開発に努めている。国内に兵士、警官は無用で、字典は‘賊’‘盗’‘奸’‘偷竊’の文字を削除した。(26回)

7) <生活>

[造園]

賈宝玉は、空間だけで凝った造形のない洋式花園を茶館と見誤り(10回)、『文明境』の花園で楼閣や四阿の精緻な造形技術を賛美する。

[食生活]

米麦、肉食は体内に残留し、煮炊きで食品中に「火毒」が含まれ病を誘発するという考えから、食品を蒸気で蒸しエキスを液化して飲む方法が発明された。地域毎に炊事センターを設け食糧パイプで各家庭に食事を配給する。(23回)

[医療]

体内を鏡に映し治療する‘総部鏡’、‘部分鏡’が発明される。死んだ器官の解剖は無意味である、手足を切断する西洋医の外科治療は‘野蛮残忍’、‘不仁’と否定されている。十二経絡を見、接筋接骨止痛の処方をする中国古代医の技術が再評価されている。

[エネルギー]

四川の地火で塩を煮る方法を応用し地火エネルギーを取り、鉄管を敷いて灯火用、炊事用、工業用に使う。炭鉱は使わず外国に輸出し境内は清潔である（23回）。

[交通]

運行時間で出発が決まるのは‘野蛮’なので飛車を必要に応じて雇う。地下道はレールを敷かず随時電気自動車を雇う。地上の車両通行を禁止し歩行者は安全である（25回）。

[性差]

私徳を区別し学堂を別置するほかは女子が男子を避ける決まりや男女間の境界はない。手をつなぎ抱き合い接吻する‘悪習’もない。辞典は‘娼妓嫖伶’の文字を削除した(36回)。

[飲酒]

老少年は、中国人は開化が早く先天的に規則礼法を守る自制心が備わり酔っても乱れない。自称‘文明人’は開化が遅かったので一たび酔えば抑えが利かなくなり事件を起こす、と分析する（32回）。

このような制度政策の下に、‘民衆は男女を問わず自立し、救貧院も善堂も無用の長物’（28回）という社会が達成された。‘文明境’の特質である専守防衛の軍事システム、民意に従う君主制、生活健康を優先した交通や衣食システム、個々の自制心に任せた異性関係などについては材料がみつからない。おそらく呉趼人の独創であろう。

2. ‘文明’と‘野蛮’

作中で賈宝玉の到達した‘真文明国’を運営するのは‘民生に尽す君主、官僚’で、国家の基幹方針は‘教育偏重’と‘徳育’である。‘文明’自由国家の建設と‘野蛮’自由国家への抵抗を国是とする。呉趼人は賈宝玉の閱歴を通して自身の理想及び清末に論議を呼んでいた‘文明’という問題を探究しようとしたと思われる。

老少年は‘孝悌忠信礼義廉恥を各人が肝に銘じていてこそ文明の文字を地名とできるのだ（28回）’と宝玉に解説する。先述したように老少年は呉趼人の分身とみなされている人物像である。‘文明’の本質は儒教思想の‘孝悌忠信礼義廉恥’という理想にあるというその

解説には、作者自身の‘文明’解釈が表れているといえよう。作中で宝玉の得た‘文明’体験と感想を順次追ってみると以下のようなになる。

1)現実の‘偽’文明世界

賈宝玉は清末の上海で‘何かというと“文明”とか“野蛮”とか口にする (22回)’社会風潮を見聞する。

(1) 外国製品、新思想との接触

俗界に來た賈宝玉は外来の科学機器や生活様式と接触し新思想に触れる。彼は『事務報』『知新報』『清議報』を読み漁り、江南製造局で翻訳書を買ひ、吳伯恵に外国語を習う。宝玉のこの体験は十七歳で上海に出て江南製造局に奉職し編集者、執筆者として諸雑誌に関つた作者吳趸人の実体験そのものであるといえよう。

(2)外国崇拜と中国蔑視の風潮

近代科学、技術革新に接した賈宝玉は、中国人が技術習得に努めなければ、外国製品と国産品の貿易は量、質ともに不均衡になる一方だという懸念を抱く (5-6回)。また外国人の勢力をかさに中国人を抑圧する人間 (8回)、キリスト教徒や外国人の威勢で裁判に負けた王威儿 (12回) 王本 (13回) と知合う。怨恨から義和団に加わる彼らの妄動的排外思想を批判する。同時に中国人に汽船の製造運転は無理だという汽船の買弁 (4回) や‘中国人の仕事は一つも信用できない’と公言する洋行買弁柏耀廉が盲目的に外国を崇拜し中国を蔑視する態度にも怒る。先に論じた「発財秘訣」はじめ著述の随所に‘外国崇拜と中国蔑視’に対する批判を展開している吳趸人の主張がここにも貫かれている。

(3)国内問題

①纏足

賈宝玉は「不纏足会」や「天足会 (纏足しない天然の足を奨励する会)」で“女性側に一方的な不纏足を勧めても片手落ちで、女子を玩具とみなす男子の考え方を改めなければ纏足の風習を根絶することはできない”と主張する (8回)。これは娘に纏足を禁じ「天足会」に入会させた吳趸人自身の信念であろう。

②治安悪化

清朝は義和団を黙認していたが連合軍が義和団を鎮圧すると禁圧に転じる。王威儿ら義和団員も一転して外国兵に恭順の態度を示す（15回）。その戦乱で北方は盗賊が横行、疫病が蔓延する（21回）。

③役人の横暴

学堂監督に濡れ衣を着せられた賈宝玉は、改革派弾圧が激しく‘民衆の難儀はこのうえもない’政治に失望する（第18回）。この話題は『漢口日報』事件における吳趼人の体験に依拠し、その上に賈宝玉の逮捕収監謀殺計画という脚色を施している。『新石頭記』執筆の二年前に雑誌編集者として梁鼎芬を批判し言論弾圧を被った体験を、今度は小説の素材として取り上げ梁鼎芬を再度指弾したことになる。

④列強の植民地政策

賈宝玉は、清朝がロシアと結んだ東三省割譲の密約に反対する張園議事に出席、少女の愛国演説に驚く。張園議事は吳趼人自身が演説し、愛国少女薛錦琴を目撃した集会である。作中の記述は議事の情景についての貴重な史的資料といえる。先述したように彼は作中地の文で演説する少女の存在そのものへの驚嘆を表明している。その後の彼の社会認識や創作姿勢への影響の大きさを窺わせる。

このように混沌たる様相を呈した1901年の中国社会を閲歴した賈宝玉は、義和団や学堂監督に殺害されかけたことを思い‘野蛮国と言われるのは無理もないし暗黒世界と言われるのも無理もない。どうやら私の補天の志はかないそうもないようだ(怪不得说是野蛮之国,又怪不得说是黑暗世界。想我这个志愿,只怕始终难酬的了)’（第20回 p152）と結論するに至る。吳趼人が賈宝玉に体験させた列強の侵略行為、官界の言論弾圧、雑誌や江南製造局への接触と新知識の吸収、纏足に対する反対表明、反帝国主義愛国運動などはすべて自身の実体験であった。清末中国を‘暗黒世界’と述懐する賈宝玉の見解も、吳趼人自身の認識であったといえる。彼は‘理想小説’として描いた『新石頭記』で‘補天’し得た‘文明世界’をどのように夢想していたのだろうか。

2)理想の‘真’文明世界

‘暗黒’、‘野蛮’の中国に失望した賈宝玉は‘私は近頃、自由がどんなにすばらしいかと人が言うのを耳にするので、‘自由村’の自由を見に行ってみたい(因为我近来听人家说的那自由有多少好处,要去看看那自由村的自由。)’と‘自由村’にいる薛蟠を訪ねて行く（第21回 p158）。文明境

に辿り着くと案内人の老少年から自由村に‘文明自由村’と‘野蛮自由村’の二種類あると知らされる。老少年はその違いを‘秩序’の有無に帰し次のように解説する。

文明自由であるほど秩序は整然とし、野蛮自由であるほど秩序を破壊します。文明野蛮の中間にある者はひとたび自由を得るとまるで天国だという。真に自由な国民たるや、各自みな自治能力を持ち、社会の規則を守り、法律の境界を明確にできる、そうでなければ、自由を言っではならないのだと御存じない。あの野蛮自由はことごと家庭革命と言い、倫常をすっぱり投げ捨て先賢先哲の遺訓を野蛮の筆頭だと罵ります。

大抵越是文明自由,越是秩序整饬;越是野蛮自由,越是破坏秩序。界乎文野之间的人,一经得了自由,便如同天堂。不知真正能自由的国民,必要人人能有了自治的能力,能守社会上的规则,能明法律上的界线,才可以说的自由。那野蛮自由,动不动说家庭革命,首先把伦常捐弃个干净,更把先贤先哲的遗训,叱为野蛮。’(第23回 p174-175)。

ここにいう‘先賢先哲’とは孔子を指す。第28回で、老少年は‘孝悌忠信礼義廉恥を各人が心に刻みこんでこそ文明の二文字を地名とすることができる(那孝悌忠信礼仪廉耻,人人烂熟胸中。这才敢把“文明”两个字做了地名。P220)’と、文明境が孔子の教えを規範としていることを言明する。‘無知な愚民’に‘教’が必要であるなら、儒教を奉じる中国は‘有教の野蛮国’ではないかという疑問に、彼は

中国が文明でないなどということはありません！中国には今まで孔子だけがいて何たら教などはなかった。孔子も教主と自称したことなどなかった。惜しいことに後世の人が孔子の道徳を伝授し広く伝えることができなかったので、中国は文明になれなかったのです。

中国何尝不文明!中国向来也只有一个孔子,没什么教。孔子也不曾自命为教主。只惜后人传授孔子的道德未能普及,所以未能就算文明罢了。 p 221’

と主張している。ここで‘孔子の道徳’は‘文明’の成立に必須の要件と意義付けられている。‘孔子の道徳’という表現を取っているのは朱子学と区別するためであろう。呉趼人は、道徳を‘教’とした‘宋儒’—‘中古の賤儒’が經典に付会し‘専制の毒’を増幅させた害悪について、処所で述べている*20。

さらに老少年は‘太古’の社会こそ‘文明’社会であり‘堯舜以前の人間なら崇拝するに足る’と主張する。その理由として、

衣服を造り、家屋を造り、文字を定め、百草を試し、農事を教え、火きりをもんで火を取り、干支を造り、暦を定めていた頃、すべて無から有を生み創造したのです。崇拝せずにおれましようか？太古の人々はすべてしっかりやってのけ、堯舜の代に至ると何もせずとも天下は治まったのです。天下が治まったのは、古人がうまく治めさせてやっていたのだと知らねばなりません。何故、堯舜三代を崇拝し太古の人を忘れるのでしょうか？

那时候制衣服、制宫室、制文字、尝百草、教稼穡、钻燧取火、作甲子、定岁时，都是无中生有创造出来的，还不可崇拜么？太古的人，一切都做好了，到了尧舜就垂拱而天下平，需知他那个天下平，是古人同他平好了的。何以要崇拜唐虞三代，倒把太古的人忘了呢？ p284（36回）

と‘太古の人’の知恵を称揚する。文字や干支を発明したのは伝説の三皇の一人、伏羲、農業、医薬を伝えたのはやはり三皇の神農であるとされる。現在、火の使用を確認されている‘太古の人’は、清末にはまだ発見されていなかった五十万年前の北京原人であるという。賈宝玉がやはり三皇である女媧のやり残した‘補天’完成に思い至る『新石頭記』は、そので出しから、呉趼人の理想世界像の一端を表明していたといえる。呉趼人の理想とする‘堯舜以前’の‘太古の人’とは神話上では、伏羲、女媧、神農三皇時代、考古学的には旧石器時代の農耕集団から古代王朝成立までの民ということになる。

老少年の解説を総括すると、三皇時代の古代中国社会は、文化遺産と自治能力により平和を維持し得た理想的文明社会であった。治世理念は‘孔子の道徳’、‘先賢先哲の遺訓’である。それは、為政者が‘古人’の創造性を活かし‘無為にして天下を統治’する集団維持、秩序形成のノウハウであったようである。‘孔子の道徳’とは古代人の開発した生活技術や共存方法の総称であるとする点に呉趼人の独自性が見られる。

3. ‘救世’への展望

‘文明境’という架空世界に描いた‘民の望むところを欲する’皇帝に‘統治させてやる’民衆の合議により運営される形式的専制体制こそ、呉趼人の理想とする国家像であった。第40回に賈宝玉が夢に次のような東方文明の演説を聞き拍手して目覚める場面がある。

この平和会議は地球全人類の平和を求めねばならず各国政府はその保護と平和の責任を負わねばならない。赤色、黒色、褐色等あらゆる人種を平等に待遇し、その政府、国民を圧迫してはならない。人類たるもの、保護するとしても断じて強圧してはならない。相手の水準に劣る点があっても、我ら文明各国は個人であれ社会であれ、無知識の人を援助し教育する責任を均しく負う。相手を異民族、異人種として、おのれの隆盛をたのみ侮蔑するにまかせてはならない。故にこの開会から強権主義を撲滅し平和主義を実行せねばならない。

此和平会当为全球人类求和平,而各国政府,当担负其保护和平之责任。如红色种、黑色种、棕色种,各种人均当平等相待,不得凌虐其政府及其国民。此为人类自为保护,永免苛虐。如彼族程度或有不及,凡我文明国,无论个人、社会,于此等无知识之人,均有诱掖教育之责任。…不得以彼为异族、异种,恃我强盛,任意欺凌!故自此次开会之后,当消灭强权主义,实行和平主义。P316

この演説は呉趯人の“理想世界”像を表している。宝玉は夢に以下のような中国政治情勢の進展をみる。

- ① 庚子事変以後、徐々に戊戌の新政に似た新政が実施され始める。
- ② 反米華工禁約運動が上海に起り政府は改革の気運を悟る。
- ③ 政府は立憲を検討し五人の大臣を海外視察に派遣する。
- ④ 立憲政治が施行され治外法権が撤廃される。
- ⑤ 上海の城壁が壊され市内や周辺地域、長江流域に市場が開ける。
- ⑥ 「万国博覧会」および「万国和平会」が開催される。
- ⑦ 東方文明が中国皇帝となり万国和平会会長を務める。

庚子事変の後、1901年清廷は「変法上諭」を發布し維新を宣言する。1905年5月の反米華工禁約運動には呉趯人自身が熱心に参加した。五大臣外遊は6月で、9月に清廷は、科挙の廃止と、準備期間をおいての立憲制実施を宣布した。①から③までは『新石頭記』連載を始める1905年9月までの史実である。④以後の夢想は作者自身が実現を願う未来の中国像であろう。『新石頭記』連載は第十一回で中断した。その後三年間に第四十回まで続けて完結させ1908年単行本を刊行した。その間に④から⑥の「万国博覧会」開催に至る展開は、一般的に期待され議論に上った方向性であろう。⑦の‘中国皇帝’である「東方文明」の「万国和平会」会長就任の項目は、当時の維新派にも守旧派にも問題外の“絵空事”であったら

う。1907年オランダで開かれたハーグ和平会議は中国でも話題にされたが、交戦前提で各種の取り決めが協議され、軍縮や平和とは程遠い内容だった。また、清廷は将来の立憲君主制実施を宣言していたが、既述の如く‘真文明境’では、立憲制をへて君主専政制に移行したとされている。しかも‘東方’姓の皇帝に代わっている。賈宝玉の夢という設定であっても、反逆罪に問われかねない。作者吳趸人の文字通り夢見る理想世界であったのだろう。

第26回で老少年は‘文明境’の政治体制について以下のように紹介している。‘文明境’の政体は、はじめ専制を廃止し立憲政体をとった。貪官汚吏蔓延る‘德育’のない国柄では、立憲しか方法がない。立憲しても民を食い物にする地方の土豪劣紳が議員になる‘悪紳政体’であるが、議員が互いに牽制しあうので、中央政府が全国に圧制を布く‘野蛮専制’よりましであるからだ。‘文明境’内には、‘万慮’、字を‘周詳’という英雄が表れ強制教育制度を敷いた。五十年後に万氏は、‘德育’が普及すれば立憲を廃止せよと遺言した。国民は外国を賑わす‘均貧富党’について検討し、‘富家’を政治の禍根と見なし、議員に政権を皇帝に返上させ‘専制政体’に切り替えた、という経緯をたどったという。

吳趸人は、老少年の言葉を通して、自身の政治理念を次のように開陳している。‘共和制’は無数の党派が林立して争い、勢力に拠って互いに付和雷同し、政治方針が定まらないので最も野蛮な政体である。‘立憲制’も、選挙権被選挙権に制限があり‘貴族政体’が‘富家政体’に変わっただけである。そこで‘均貧富党’とか‘社会主義’が現れた。それも長い目で見れば四分五裂する時が来るに違いなく長期にわたる安定は望めない。したがって最良の政治体制は‘文明専制’である。‘文明専制’の施政方針は、‘民の好むところを好み、民の憎むところを憎む’という『大学』の教えである。ただし、‘德育’の普及しない国情では皇帝、官僚が民の為の政治を実践しないので‘野蛮専制’に陥るだけである。‘德育’の普及した国では、皇帝や官僚に徳性が備わり悪逆非道をはたらかないので、‘文明専制’は最も望ましい政治体制である。

吳趸人は維新派積年の目標であった立憲政策を‘野蛮専制’を回避する緊急避難と考えていたようである。彼は富裕郷紳層の国政壟断を避けるには、徳性優れた為政者による専制政体がむしろ望ましいと考えた。その実現のために国民の教育、德育の強化による政治家の質の向上を第一義とした。手本は、古代文明を築いた古人の創造性、組織運営術である。目標は、欧米列強諸国の近代科学を吸収し中国の伝統技術、地場産業を応用した技術開発による近代化、‘仁’の理念に則り専守防衛に徹した防衛力の強化と自立である。吳趸人の選挙不要論は、清廷の立憲制実施上諭に官民沸く時勢に逆行するかのようであるが、中国の社会体

制を熟察した適切な分析であるといえよう。‘文明専制’政体の為政者も皇帝は科学者、官僚の母体に徳性優れた‘百姓’を想定しているのも、実質は民主政治に近い。当時としては極めて独自性に富んだ、民衆中心の発想に立った見解であったといえよう。

呉趯人の抱く理想の未来世界像は、東方文明を長とする科学者一族の名に具象化されている。東方文明の本名は強、長男は東方英、二男は東方徳、三男は東方法、娘は東方美、娘婿は華自立と設定されている。それらの名には、‘東方’の‘強’い‘真文明’の主導により、英国、ドイツ、フランス、アメリカの列強諸国、自立した中国が集い平和世界を実現する、という世界像が明示されている。注目されるのは、帝国主義列強を訓導するのが、強国となった中国ではない点であろう。世界平和を実現し自立した中国を含めた西欧世界を主導するのは、古代人の伝えた‘東方’の理念である。

呉趯人は‘仁’の思想を“古代人の創造”に変わる平和統治のノウハウとして帝国主義列強に対峙するという構想の下に、‘野蛮文明’を超克する‘真文明’世界という理想世界を描いた。すでに王制を転覆して共和国を樹立し西洋文明化をすすめる民国時期の人々にとり、‘堯舜以前の人間’の運営した‘太古の社会’とは、‘分けのわからない’珍妙な主張でしかなかったろう。『新石頭記』に描かれた‘万国和平’の理想社会も、植民地化に瀕する当面の危機的状況を前にしては夢想というほかはない。しかし呉趯人の、‘文明’概念についての分析や民衆政治という選択肢は当時においては斬新な正論であった。歴史上思想上に何らかの影響を持ち得たのではないかと考えられる。

第三節 「上海遊驂録」 — ‘厭世主義’ と ‘恨み’ について

1. “改革派投機分子” の描写 — 政治面における否定の最大要因

「上海遊驂録」(10回)は、雑誌『月月小説』第6号から第8号に、《社会小説》と銘打って1907(光緒三十三年)2月から4月にかけて連載された*21。阿英は『晚清小説史』でこの小説を詳しく紹介し、呉趯人の思想に‘反動的’との評価を下している。解放後の文学史の多くは、この小説を例に挙げ‘1907年以降、呉趯人の思想は反動に転じた’という見解を示している*22。その理由として、作中人物李若愚が革命派、立憲派への反対と‘旧道德’回復の必要性を表明し、‘厭世’思想を吐露した点が挙げられている。この李若愚は『晚清小説史』における阿英の指摘以来、呉趯人の分身とされている。そのように「上海遊驂録」は民国以後、思想面において一貫して批判され、長らく出版も研究もされずに忌避

されてきた。文革前に『二十年目睹之怪現狀』に関連して「上海遊驂録」に触れた簡夷之は

辛亥革命前夕、改良主義者は封建制度を‘汲々として危うしとみた。’もはや‘怪現狀’は最重要課題ではなく、救国が肝要だと考えた。そこで譴責の筆、‘文明の輸入’を擱いて‘固有の道德’により‘不道德’な革命党人連中を討伐しようとしたのである。

那是辛亥革命的前夕,改良主义者看到了封建制度的“岌岌可危”,觉得它的“怪现状”已经是无关重要的事,最重要的是挽救它的危亡;于是抛下谴责之笔,抛下“输入之文明”,而要用“固有之道德”来挾伐那些不“道德”的革命党人了.*23

と論評し、北京大学中文系一九五五级《中国小说史稿》は

(道德を提唱する) というこのような古臭く時局に疎い観点は、歴史の現実を前にしては挫折せざるを得なかった。1907年以降、資産階級民主革命の声は日増しに高まり、吳趸人の思想も完全に反動に転じた。彼は革命に反対し、反清に反対し、本来あった反封建色も色褪せた。…このような意気地なしは真に資産階級改良派の投降主義、奴隸根性の表れである。

提倡道德(《上海游驂录》)…这种陈旧不堪的迂腐观点,在历史现实面前,是不能不碰壁的.一九〇七年以后,资产阶级民主革命声势壮大,吴趸人的思想也完全输入反动.他反对革命,反对反清.原来的反封建色彩也就消褪了,…却这样胆小如鼠!真是资产阶级改良派的投降主义奴性的表现 *24

と全面否定した。文革終結後に「上海遊驂録」を論じた盧叔度も

吳趸人はこの短文に彼の社会改良、革新についての意見を發表した。‘急ぎ我が国固有の旧道德の恢復を図る’は、吳趸人の一貫して主張してきた時局に疎い唯心主義である。「上海遊驂録」を思想内容から見ると、やはり相当に落伍したものである。

吴趸人在这篇短文里,发表他对改良革新社会的意见,是“急图恢复我固有的旧道德”,这是吴趸人一贯的迂腐的唯心主义的主张.从「上海游驂录」的思想内容来看,也是相当落后的.*25

と批判している。清末小説の再検討が試みられている現在、多くの論者が従来の文学史上の評価に異を唱え始めた。高国藩は『阿英『晚清小説史』等における「上海遊驂録」に対する評価は、‘作品の実際にそぐわない（这也与作品实际不符…）’と論じ、

要するに「上海遊驂録」に対して中正な評価が成されてこそ、吳趼人の全著作を関連付け、その思想の基本的方向性を見出し、事実に従って究明する正確な結論を導き出せるのだ。

总之,唯有对《上海游驂录》有一个中肯的评价,才有可能联系吴趼人全部著作,找出他进步的主流,作出实事求是的正确结论. (p385) *26

と述べて、解析を試みた。現在、高国藩をはじめ中国人研究者の論評は、「上海遊驂録」の作品完成度の高さを相殺する思想面の‘守旧’性に戸惑い、解釈に苦慮するという様相を示している。この作品の考察には先ず、吳趼人の政治体験や心境についての検討が必要となる。先述の如く、論者は吳趼人の‘革命党人’誹謗には根拠があり、描写に実事性が高いことを発見した。その事實は、‘時局に疎い’観点という従来の論評の出発点を改められるのではないだろうか。先ず、作品と作中に述べられた吳趼人の政治的見解を概観しておきたい。

1) ‘革命派’ 俄か ‘名士’

【第1回～第3回】

湖南の寒村を官兵が襲い村人を‘革命党’に仕立てあげて殺戮する。学問三昧の生活を送っていた才子辜望延は‘革命党’の冤罪をきせられ家を焼かれ忠僕を殺される。辜望延は報復のためにその‘革命党’になろうと決意し、上海に逃れる。従兄辜望廷の営む陶磁器店に身をひそめながら、民族産業や社会の現況に触れ、新書に接して外来の新思想を学び、時事に通じていく。

【第4回～第7回】

‘革命党’員を探す辜望延が‘頑固派’李若愚の紹介で‘革命志士’や留学生と知り合う。辜望延は彼らの醜態を具に見聞し‘革命党’に失望する。

【第8回～第10回】

李若愚と自称‘革命派’との間に論戦が交わされる。上海まで指名手配が回り、逃亡を余儀なくされた辜望延が、学問見識を深め救国事業に尽くそうと決意し、日本へ渡るところで終る。

阿英は『晚清小説史』に、革命運動の是非について分析した李若愚の言葉を紹介している。李若愚は、‘革命派’を批判し‘道德’恢復により自立を図ろうと提案しているが、阿英はその意見を、‘唯心的な世情に昏い主張（唯心的迂腐主张 p40）’と断じた。李若愚は革命への反対理由を二点挙げている。‘現状からみれば、断断乎として革命を論じてはならない理由が二つある。一つには時勢が悪い（以现在而论,有断断乎不能讲革命的两个道理；第一是时势不对）’のだ。‘一旦国内に事が起これば、外国人は教会の保護だの産業の保護だのに名を借り干渉してくる。（一旦我国内有事,外人便要以保护教堂,保护产业为名起而干预）’、‘これは“漁夫の利”ではないか（这不是“鹬蚌相持,渔人得利”么？）’、‘貿易通商（通商互市）’したら安心といって実質は‘領土を割譲（割地）’しているのもお笑い草だ、これは‘革命成らずして先に分割されてしまっているのじゃないか（这不是未曾革命先瓜分了吗？ 第6回 p466）’。二つには自称‘志士’の人格である。中国には昔から‘少しばかり詩詞や賦を作れるの、古文を作れるの金石が分かるの（会作些诗词歌赋,或能作两篇古文,会懂点金石）’といったは‘名士を任じる（是自以为名士的）’手合いがいた。今、‘数冊の訳書を読んで種族の説とやらを知るや、奇を衒って革命逐満の説を唱える（看了两部译本书,见有些甚么种族之说,于是异想天开,倡为革命逐满之说）’連中も‘やはり名士の変型にすぎない（还是名士的变相罢了 p473-474 第7回）’。この李若愚の述べる理由は、‘時局に疎い’ものとはいえない。むしろ吳趼人は現実的側面から革命の是非を論じているといえる。

2) 俄か 仕立ての‘立憲’政体

李若愚は立憲運動についても、現状についての考察から反対との結論に至っている。

‘現在の地球上の国々の政体により論ずれば立憲政体が最も良いというだけにすぎない。将来進歩してくればもっと良いものが出るだろう（不过以现在环球各国政体而论,是立宪政体最好罢了,将来进化起来,总有比这个还好的）（第10回 p488）’、‘たとえ立憲でも治国は覚束ない。専制よりもひどいことになる（就是立宪也未见得能治国,还怕比专制更甚呢？）（p488）’と主張し、以下のような事態を予測する。

地方自治から論ずればどうせ何人かの郷紳が取り仕切ることになる。…専制の時でさへあれほど悪徳郷紳が横行していたのだ。連中に全面的にまかせて処理させるなど、虎に翼

をつけるようなものではないか。専制の時ならまだ地方官が審査して処罰できたが、今や彼は一方の代表であって処罰もできない。専制の時なら官吏が悪くても離任していく日があった。郷紳というのは永久にその地に居る。正しく骨肉の腫瘍だ。議院開設、議員選挙に至っては人格まで云々というわけにいかず、推して知るべしだ。

就以地方自治而论,无非几个绅董出来办事。你想专制的时候,还有那横行乡里的恶绅,何况全盘交给他办理,不是如虎添翼么?专制的时候,地方官还可以详革惩办他,此时他是一方之代表,奈何他不得。专制得时候,官吏不好,还有去任之一日。这绅董是终久在一处的,那才是附骨之疽呢。推而至于开设议院,选举议员,都未曾论到人格如何。据我看起来,以此昏天黑地的人才去办事,终不会好的 (p488)

吳趼人は、『二十年目睹之怪現狀』で、自身の経験に照らして同族共同体の悪弊を述べている。同族共同体に依拠する度合の高い地方政治における立憲君主政体の展開については、とりわけ危惧を抱いたのであろう。

折しも「上海遊騷録」執筆の前年(1906)、清朝は予備立憲を宣布し中央官制を改革しており、さらに翌年には憲法大綱と議院法、選挙法要領を作成し九年後の国会開設を予告する。この小説の書かれた1907年はまさに立憲準備の声喧しい時だった。吳趼人はその動きを「予備立憲」(1906)「立憲万歳」(1907)「光緒万年」(1908)等の短編小説に書いている。そこには、身内から議員を選出するための資金作りに宝くじを買い「立憲準備」する人間、阿片を禁煙用の「滋補薬」と呼び、妓女を「奥方」、妓館を「公館」と呼ばせ、遊蕩をやめて生活を一新し「大改革」したと喜ぶ「立憲鏡」、立憲とは名目が変わるだけで実質の変化はないと知り、身分は安泰だと万歳を叫ぶ役人などが描かれている。吳趼人が立憲、革命いずれの政治運動にも顕在化している投機分子の存在を懸念していたことが分る。

2. 1910年上海—胡適と吳趼人

1) 遊蕩「革命」志士

第二回で辜望延は上海に逃れる船中で留学生の屠牖民、屠辛高と知合う。彼らは、科挙が廃止になったお陰で出世の近道が開けたと喜んでいる。彼らによれば科挙は幼時から十数年も費やして秀才となり、郷試に合格しても会試、殿試がある。順風満帆に全部合格しても相当の年月を要するのが、留学ならたった三年で済む。しかも適当に遊んで新名詞を覚えて来れば、新しい学問など身に付けなくとも充分事足りるのだという。彼らは「今の時勢を論ずれば革命をやらないわけにはいかない(若论现在的时势,实在不能不革命)」(第2回 p446)と「革命派」

を自認している。屠牖民は日本に発たずに上海で色ごとに耽っている。化粧せずサングラスをかけた天足（纏足しない天然の足）の女友達に、妓館に行ったことがばれて殴られ、‘文明国のルールに則って彼女と付き合い交際相手としたのに、相手が私の自由に干渉してくる’とは思ってもよらなかった（我依着文明国之规矩和他结交,认他作一个女朋友,不料他倒干预我的自由起来了）（第8回 p475）’とぼやく。また第4回で辜望延がようやく捜し当てた‘革命志士’王及源は、生業を持たずペテンやいかさま博打で暮らし、阿片窟にいりびたり、妓女に軽侮されている。彼は「革命軍」、「黄帝魂」、「民報」を紹介する‘革命派’で、‘こんな腐敗した政府の禁令など問題でない（这种腐敗政府的命令,靠得住的吗?）’、‘政府が禁ずるから無理に吸って反政府の意志を表明しているのだ（正惟政府要禁,我偏要吃,以示反对之意 p455）’と阿片吸引を正当化している。趨容『革命軍』を読んだ辜望延は、譚嗣同の著書の焼き直しだと一笑に付して、彼らと論争する。

第7回で王及源や譚味辛たち‘革命志士’は李若愚を‘あ奴は保守野郎で奴隸根性の塊だ（这个人是守旧的鬼,而且还是生就的奴隸性质）’とこき下ろす。李若愚は試に彼らを宴席に招き、兩江総督の肝煎りで出版社を開業すると偽り、協力を仰ぐ。はじめ彼らは‘腐敗腐敗’、‘奴隸奴隸’と合唱していたが、‘月50金’の報酬を提示されると、‘これに宗旨などあるものですか。金になりさへすれば私は立憲だって論じますよ（这有甚么宗旨不宗旨,只有有了钱,立宪我们也会讲的 p471）’、‘立憲どころか専制だってかまわない。金さへたっぷりくれるなら（莫说立宪,要我讲专制也使得,只要给的钱够我化 p471）’とその場で宗旨替えに応じる。さらに、阿片を吸うものは職に就けないと聞いた王及源は‘こんなものは政府が禁じなくとも吸ってはならないものだ。況や煌々たる聖旨を承った以上はね。我々が阿片を吸うことで帝までご心痛になると思えば、聖恩の何と偉大な事か。それでも止めないなら生れついでの捻くれ者ということだ（其实这东西就是政府不叫戒,也不应该吃,何况奉了煌煌的上谕呢?平心而论,为了我们吃烟,却累皇上费心,只这一层便是天恩高厚;倘再不戒,就未免自外生成了 p472）’と、直ちに禁煙を誓う。しかも、翌日、給料三カ月分の前払いを求めて来る。

李若愚は、‘彼らを革命党の代表とするわけにはいかないが、こういう人間が多数いるのだ（这几个人虽不能算是革命党的代表,然而此等人也居多数了 p486）’と、自称‘志士’たちの資質を問題としている。彼は‘革命党’の基盤の弱さを危ぶみ、以下のような根拠を挙げる。革命派は‘海外でも付和雷同している者が多く能力があるとは限らないだろう（总是随声附和的多,未必势有能力的 p474）’、‘ホノルルから帰ってきたという商人にあったことがある。興中会とやらに入ったと言って、人に会えば熱心に勧めていた。革命の語について質してみるとさっぱりわか

っていない。彼はこの会は革命党の首領の設立になるとも知らず、会の主旨も知らないのだ。
(前年我遇见一个商人,是从檀香山回来的,说是曾经入了甚么兴中会,逢人津津乐道,及至问起他“革命”二字,他却茫然不解,他也不知道这个会是革命党首领设立的,又不知道会中宗旨 p486)’、‘おおよそ海外に行った者はたいてい出稼ぎに出たのであって、小銭がたまると商売を始めて商人になる。文字も碌に知らないというのに、主旨なぞ理解できるものか。(凡到海外の人,多半都是去做工的,积攒了几个钱便做点生意,于是成了商人.你想这种人,字都不多识一个,那里懂得甚么宗旨 p486)’、‘革命党は海外で今の政府はあてにならない、新政府に変えてこそ僑民が保護されるのだと言って入党を勧める(革命党在海外诱了入党,总说此时政府靠不住,必要换过新政府方能保护侨民)が‘代わりの新政府とは革命政府であり、革命党とは謀反であり、大逆無道で一族誅滅に遭うのだとわかるものだろうか(他那里知道,换过新政府便是革命,政府指革命党是造反,造反是大逆无道,要灭族呢,p487)’(第10回)。これらの指摘は、吳趼人が「中国革命同盟会」についてある程度通じていたことを窺わせる。

吳趼人が面識を得ていたと確認、或いは人脈地脈を持ち得たと想像される著名な文人論客として、陳习之(悦庵)、梁鼎芬、鄭孝胥*27、汪康年、梁啓超、于右任、蔣維喬、黄宗仰、章炳麟、蔡元培、王雲五*28、阿東破佛*29等の名が挙げられる。そのほとんどはいわゆる改良派、革命派に属する人物である。彼と最も親交の深かった周桂笙と李葭荣はどちらも‘革命党’だった。李葭荣*30は「中国革命同盟会」(以下「同盟会」)会員で、吳趼人の死後「我仏山人伝」を書き、「同盟会」機関誌『天鐸報』に載せた。吳趼人は死の前年の作「近十年之怪現状」を『中外日報』に連載していた。同誌も「同盟会」の機関誌的性格を持っていた。李葭荣も一時期その編集に携わっていた。「我仏山人伝」の記述によれば、李葭荣の『二十年目睹之怪現状』評を聞いた吳趼人は、彼を“己の理解者”と呼んだという。周桂笙も「同盟会」会員で、吳趼人は彼を‘肝胆相照らす仲の、志ある人(肝胆照人,今之有心人也)’(「五脏俱全」『滑稽談』(1910)『吳趼人全集』第7巻p427)と評し、‘周桂笙は私の愛友、畏友である。…私は始め愛し、次いで敬い、遂には畏れた、…(周子桂笙,余之愛友,亦余之畏友也。…余始愛之,继敬之,终且畏之,…)彼の文章は美しく調い、なお完璧を期して討議を求めてやまない。私は彼の文章学問に敬服し畏れをなしているのだ(『新庵諧詠 初編』<序>『吳趼人全集』第9巻p301)と語っている。周桂笙も、自分と吳趼人とは‘莫逆の仲’である。吳趼人もかつて人に‘周某と知りあい、上海に二十年流離した甲斐があった(得识周某,不负我旅沪二十年矣)’(『新庵諧詠 初編』<自序>『吳趼人全集』第9巻p303)と述懐したことがあると記している。両者は小新聞編集時代から『新小説』誌上への執筆投稿、『月月小説』の共同編集まで、二十年にわたり公私をともした友人だった。周桂笙は、民国初期には李葭荣と共に『天鐸報』編集に携わった。

吳趼人の‘革命党’批判は、文字通りのものではなく、政府への韜晦や志士を自称する投机分子への諧謔、「同盟会」に内在する不安要素への憂慮等、多様で複雑な意味合いを帯びていたと思われる。彼には、信頼する「同盟会」会員の知友がいたにもかかわらず、‘革命党’に危惧を抱く理由があったといえる。

2) 吳趼人と‘革命党’胡適の接触

既述の如く論者は、吳趼人が1901年拒俄演説会や1903年『漢口日報』事件報道を通じて、『蘇報』や「愛国学社」、「中国教育界」に関った‘革命党人’を見知っていたものと推測している。さらに、吳趼人が作中に描いたような妓楼遊びに耽る自称‘革命志士’と実際に接触していたことを示す証言を見つけることができた。吳趼人側の記録はないが、胡適(1891-1162)は『藏暉室日記』庚戌正月十三日(1910年2月23日)の項に、以下のように吳趼人を訪ねて面談した旨を記している*31。

午後は大雪で、徳安里に李懷湘を訪ねて行った。しばらく居てから、一緒に王雲五*22を訪ね、会えなかったので、吳趼人を訪ねたが彼にも会えなかった。そこで広志小学校に行き、しばらく居ると折よく趼人先生が来てようやく会え、長いこと話しこんだ。私と懷湘は一緒に出て日本料理屋で食事した。食事がすんでまた王雲五のところへ行くと雲五は帰っていた。楽しく語り合い、十時になって私はようやく帰った。

雲五は私に毎日暇な時に小説を訳すようにするとよい。一日千字訳せば五、六十元になり、勉強にもなるだろうと勧めた。私はこの考えに賛同し実行するようになった。

下午大雪,出訪李懷湘于徳安里,小坐,同出訪雲五不遇,乃訪吳趼人,亦不遇。遂至廣志小學小坐,適趼人先生來,乃得相見,坐談良久。余與懷湘同出就餐於一日本料理館。餐已,復同至雲五許,時雲五已歸,暢談至十時余始歸。雲五勸余每日以課餘之暇多譯小說,限日譯千字,則每月可得五六十元,且可以增進學識。此意餘極贊成,後此當實行之。

吳趼人はこの時、四十六歳、「情変」や「我仏山人札記小説」を連載しながら「広志小学校」を運営していた。後世、中華民国の言論文芸界に重きを成した胡適は、この時十九歳、1904年に十三歳で郷里を離れて以来、上海に遊学していた*32。後年書いた自伝によれば、当時、彼と友人たちは‘思想上の一種激烈な変動を経(吉川幸次郎訳。以下引用の訳文同じ)’て‘新人物’を自任し、‘梁啓超さん一派’の著作を読み、嚴復「天演論」を読み耽り、趨容

『革命軍』を筆写し合った。彼は主に思想上の理由から「梅溪学堂」、「澄衷学堂」、「中国公学」と三つの学校を転々とした。1910年当時十九歳の胡適は、家計逼迫し、「華東公学」で小学教師を務めながら、「競業旬報社」に居候しつつ編集費を得て糊口をしのいでいた。彼は、‘憂鬱煩悶の時期に一群のずぼらな友人にめぐりあはせたので、私はそのまゝ彼等について墮落して行った’と懐古している。胡適は飲酒や妓楼遊びに耽る生活を送り、ついに警察沙汰に及ぶ。彼は自らの墮落を痛恨し、起死回生を図って官費留学生試験を受け合格、8月渡米する。二カ月後、10月21日、吳趼人は喘息の発作で急死する。生死の狭間の交流であったといえる。胡適の「日記」には、‘一群のずぼらな友人’たちの名が記されている^{*33}が、大半はその事跡が知れない。字か号しか記されず、本名のわからない者も多い。吳趼人の友人李葭榮は号を李懷霜または李懷湘というが、胡適の友人李懷湘は安徽出身と日記中にある。李葭榮は広東出身なので、別人であろう。胡適は連日のように彼らと芝居や酒樓、妓樓に通う日を過ごしている。彼がそのような体たらくに陥ったのは前年に「中国公学」が内紛を起こして分裂し、分かれた「新中国公学」も潰れ‘意氣消沈し、やるせない気分」に陥った（心緒灰冷、百無聊賴）（『藏暉室日記』p1）からであった。「中国公学」は留日中国人学生が日本政府の「取締規則」に抗議して帰国、創設運営していた学校で、教職員と学生の多くが革命派だった。教員には王雲五や于右任^{*34}、馬君武^{*35}など著名な革命家もいたが、学生は玉石混交であったらしい。胡適も後年、該校の‘レベルは高くなかった’と言っている。胡適は1906年から中国公学に学びながら、編集、文筆活動を行っていた。胡適が泥酔して巡查を殴り留置所に拘置されたのは、吳趼人と面談したひと月後の3月23日で、彼の清末時代の記述はそこで終わっている。

この訪問は状況から見て、初めての対面ではなかったと思われる。胡適、李懷湘のどちらか、或いは両者とも吳趼人と既知の間柄であったとみてよいだろう。王雲五(1888—1979)は胡適と吳趼人の共通の知人であったと思われる。彼は胡適より三歳年長、広東香山県出身で吳趼人と同郷である。上海に生れ一時帰郷したが、1902年から上海に戻り、五金店や洋行で働きながら学校に行き、1906年に中国公学の英語教師となった。民国成立後は『天鐸報』で吳趼人の友人李葭榮、周桂笙とともに革命宣伝活動を行った。また、王雲五は、1905年ごろから『南方日報』副刊で訳述作業を行っていた。吳趼人は1905年9月19日から12月25日まで該報に小説『新石頭記』を連載していた。王雲五は吳趼人とは李葭榮らを通じて知り合うか、『南方日報』で接触があったと思われる。彼らが、これらの報刊を共通の活動の場とする同郷人として日常往来していた可能性も考えられる。さらに、中国公学の教官の一

人で、吳趼人が投稿したこともある『民吁日報』の創刊編集人、于右任の介在もあり得る。吳趼人は李葭荃、蔣維喬、周桂笙、于右任など革命派の友人知人を通じ、胡適ら‘新人物’を知り得たであろう。その中にいた‘ずぼらな’遊蕩志士が「上海遊驂録」に描かれた王及言ら俄か‘革命党’のモデルであると考えられる。

後年、胡適は『五十年来中国之文学』で、清末小説を視界に入れ文学史上に率先して位置づけた。当時においては卓見といえる見識である。彼は該書で、吳趼人小説について、‘吳沃堯は西洋小説の影響を受けたので構成のない寄せ集めの小説を作ろうとしなかった。彼の小説はすべて構成があり組み立てがある。そこが同時期の作家仲間に勝るところである(吳沃堯曾經受過西洋小説的影響,故不甘心做那沒有結構的雜湊小說。他的小說都有點布局,都有點組織。這是他勝過同時一班作家之處。)’(新民國書局 中華民國十八年一月 香港神州圖書公司影印版 P79)、と断言している。

そのように、胡適は根拠を挙げずに、西洋小説の影響を前提として吳趼人の作品を論じている。周桂笙も先に挙げた『新庵諧記 初編』<自序>で、吳趼人の求めに応じて西洋小説を訳してきたが、その原稿が溜まったのでこの訳書をだせる(『吳趼人全集』第9巻 p 303)と述べている。彼らの編集する『月月小説』には、多くの翻訳小説が掲載されており、吳趼人が西洋小説に通じていたのは確かであったと思われる。しかし、その当時から現在まで、胡適の述べる影響関係について傍証も反証も挙がっていない。百年余を経た現在となつては、胡適の個人的体験に基づく見解であったと考えるほかはないだろう。彼は幼少時に旧小説を読み漁ったと自伝に述べている。また、日記に述べているように、趣味と実益を兼ねて当時の小説を翻訳していた。関心の一致から、胡適と吳趼人が面談の際に小説を話題としていた可能性は高い。胡適の見解は、吳趼人自身からの聞き取りに基づいた証言であるという憶測が可能であろう。

胡適の清末時代の日記の示すように、吳趼人が実際に“墮落した自称革命党人”の行状を見聞していた以上、「上海遊驂録」に描いた革命派への不信感、危惧は単なる謂われのない中傷ではなく、実体験に即した見解であったと見なさなければならない。「上海遊驂録」を読むにあたって先ずは、“‘古臭く時局に疎い’ 守旧派、改良派の誹謗中傷”という先入観を廃すべきであろう。

3. ‘厭世主義’の原因

小説界革命を先導した清末小説家吳趼人と文学革命の先陣を切った民国文壇の巨匠胡適は、1910 年を境として幽明を分かった。両者は同時期の上海に‘頑固派’、‘革命派’と思

想信条を違えて接触していた。しかし暴政の否定、救国を共通認識とする点において両者に相通ずるところはあったであろう。その心情が“絶望”という方向性に向かった点も同様に、胡適は遊蕩に耽り、吳趼人は‘厭世’に陥った。吳趼人は、「上海遊藝録」第一回の冒頭に次のように執筆の口上を述べている。政治の腐敗墮落に民衆蜂起の頻発する社会状況と、当時の吳趼人の心境が現れている。

ドカーン、ドカーン。萍郷に乱、醴陵に乱。世論に質せば“これは飢民である。訴えるところのない窮民である”と言う。役所に問えば“これは乱民である。革命党である”と言う。さらに批評をもつばらとする名士たちに問えば“これは官が民を暴動に追いやったのだ”と言う。この三説には各々道理があり、その是非を判別することはできない。いわんや私は近頃、厭世主義なるものを抱いており、その是非を判別する余裕もない。ただこのたびの乱のためにその地から一人の頑固守旧の秀才が追求されて登場し、多くの笑話をこしらえ、私が小説を書く材料を提供してくれた。その上、これらの材料は私の厭世主義を助長するに充分であったので、私はこれを書き記しておいた方がよいだろう。皆さん、そもそも厭世主義とは心熱き人が抱くものであるのか、それとも心冷たき人が抱くものであるのか？私はあれこれと言うまい。それでも古人の詩に云うのを覚えている。“科頭して箕踞す、長松の下。冷眼して見る、世上の人。”後に金匱金聖嘆先生の評して謂うに“これは冷極まる語にあらずして熱極まる語なり。”古人の心を掘り起こしたと云うべきであろう。これに拠って見れば凡そ厭世主義を抱くものは皆心熱き人で厭世の語を口にし、折にふれ厭世の振る舞いを成そうとも、その熱い涙は注ぐところもなく己の腹中にボタボタと流れ落ちているのだ。わが小説の読者諸氏には、厭世の語を弄するを見ることなく、熱き涙のみ見ることを願わん。

轰！轰！轰！萍乡乱，礼陵乱。考诸舆论，曰：“此乱民，此无告穷民。”闻诸官府，曰：“此乱民，此革命党！”闻诸主持清议者，曰：“此官逼民变。”此三说者，各持一义，我不能辨其谁是谁非。况且，我近来抱了一个厌世主义，也不暇辨其谁是谁非。只因这一番乱事，在这乱地之内，逼出一个顽固守旧的寒俊秀才来，闹出了多少笑话，足以供我作小说的材料；并且这些材料，又足以助起我的厌世主义，所以，我乐得记它出来。咳！看官，这厌世主义，究竟是热心人抱的，还是冷心人抱的呢？看官！我也不必多辩。我还记得古人有两句诗，说道：“科头箕踞长松下，冷眼看他世上人。”后来金匱金圣叹先生批评道：“此非冷极语，是热极语也。”可谓把古人心事直抉出来。照此看去，可见凡抱厌世主义的人都是极热心的人，也嘴里说的是厌世话，一举一动行的是厌世派，须知他那一副热泪，没有地方去洒，都阁落阁落流到自家肚子里去呢。我愿看我这部小说诸君，勿作厌世话看，只作一把热眼泪看。P437

まさに‘官が暴動に迫りやった’形で‘革命党’を目指した主人公の辜望延は、作品最後の第10回で、暗然と想いにふける。

辜望延は一人になると歯噛みして憤慨した。恨みは尽きない。あの役人の無道に真剣に革命党に身を投じようとしたのを思い、革命を高談するあの連中の行為を思った。その一派に与すれば己を汚すことになる。あちらも良くない、こちらも良くない。日本へ着いてあちらの中国人の人格を見てみてからまた考えを決めることにしよう。

望延独自一个,咬牙切齿的,恨恨不已.想到那官吏无道,便想认真投入革命党;想到那几个谈革命的行为,倘与他同了一党,未免沾污了自己.左想也不是,右想也不是,且待到了日本,看看那边中国人的人格,再定主意.p491

李若愚も第6回で、自身の‘恨み’について語っている。

“私も以前は公益事業に極めて熱心で終日奔走して已まなかった。後になって具に見れば社会の鬼気千万の様相は言葉に尽くせぬ。誰であろうと結局うまくやれるものではないのだ。だいたい一つの公益事業を提議すれば必ずそこに無数の妨害が起こってきて、後は中途半端な解決のまま落着いたことになってしまうのだ。私はこの種の事実をたくさん見たために、にわかに厭世思想が生じてしまった。もともと山野に隠遁したかったが耕す田地とてなく、打って変わって酒と女主義に転じることになったのだ。”望延は言った。“だいたい厭世主義を奉じる人は冷淡極まりないか逆に熱心極まりないのです。”若愚は言った。“冷たさ極まるの熱さ極まるのと、ただ恨み極まったにすぎない。”

“…我从前也极热心公益之事,终日奔走不遑,后来仔细一看,社会中千奇百怪的形状,说之不尽;凭你甚么人,终是弄不好的。凡创议办一件公益事的,内中必生出无数的阻力弄到后来,不痛不痒的就算完结了。我看得这种事多了,所以顿然生了个厌世的思想,本来要遁入山林,争奈无田可耕,所以就一变而为醇酒妇人主义了。”望延道:“大抵抱厌世主义的人,不是冷极,倒是热极。”若愚道:“甚么热极冷极,不过恨极罢了”。P467

これらの記述は、当時の呉趼人が、政情と‘公益事業’を阻む‘無数の力’への‘恨み’から、‘厭世’の‘熱い思い’を抱くという心境にあったことを示している。

そこで、作中の処々に作者の配した眉語を手掛かりに、‘厭世’、‘恨み’の要因について検討を進めたい。

【第1回】辜望延の村に官兵が乱入し民衆を乱民や革命党に仕立てあげて殺戮する。吳趼人は‘この勇猛さを甲申と甲午の年*36に發揮しておれば中国は早々に文明開化していただろう(他那勇往直前之概若移在甲申、甲午两年去用了,只怕中国早已文明了 p437)’と述べ、以下の眉註を付している。

○このようであれば文明開化できる。どうして世を厭わずにおれようか。

必如此乃得文明,焉得不厌世。(P438)

【第1回】辜望延に言い掛かりをつけて革命党に仕立てあげた官兵は、‘人を殺して血を見ろというやり方は出世したとはいっても骨の折れることだ。やはり人を殺して血を見ないという才覚を身につけてこそ出世も早く骨も折らずにすむのだ(大凡杀人见血的,虽然升了官是费气费力的,总要学到杀人不见血的本事,升官才得快,又不费气力呢 p440)’と言う。その言葉に以下の眉註を付している。

○人心がこのようではどうして世を厭わずにおれようか?

人心如此, 焉得不厌世(P441)

【第1回】官兵の暴虐を省官に訴えるという辜望延を‘坊ちゃんや、勉強はたくさんしなされたが見聞がおありでない。今は道理を言う世の中ではありません。総督はじめ高官が道理を言っていたら地位を保てはしません。…お偉方に道理を説きに行くくらいなら豺狼虎豹に説いた方がましです。(少爷啊!你读的书虽多,阅历却少,你须知,现在不是讲道理的世界,那督抚大吏倘使他讲了道理,他的功名就不保了;…你若要对大人先生讲道理,还不如去对豺狼虎豹讲呢,还是快点走吧(p462)’と諭す老僕の言葉に、以下の眉註を付している。

○嘆きと共に語る、見聞がここに及ぶとは、世を厭わずにおれようか。

慨乎言之,阅历及此,焉得不厌世(p462)。

【第1回】辜望延を探し出して官兵に引き渡そうとする村人の‘今の世の中で道理を言って良い人間になろうとすれば一寸も歩めまい。まして彼一人のためにお役人が怒ってあそこの下僕を殺し家を焼き、近隣まで災難に遭った。やはり彼をひっ捕えてお役人にわたし、仇を討ってもらわなくては(现今世界上,你若要闻理,要做好人,只怕寸步难移呢.况且为了他一个,激的老爷恼了,杀他家人,烧他房子,累的隔壁人家也遭殃,还不应该拿他,送给老爷替我们报仇么? p443)’という言葉に以下の眉註を付している。

○世相人情がこのようではどうして世を厭わずにおれようか? 田舎の人の台詞なのだ。

世道人心如此,那得厌世,是乡下人口吻(P443-444)

【第2回】留学を出世の近道だと喜ぶ留学生たちの発言に、以下の眉註を付している。

○留学生の行動、抱負、見識のこんな有様を見てどうして世を厭わずにおれようか

…观以上一大篇留学生之行径如是,期望如是,见解如是,那得不厌世 (p445)’。

【第2回】従兄の辜望廷は、‘正直で愚鈍な田舎者だが、誠実で友情に篤かった（虽是乡下愚蠢老实人,却是天性极厚,友于甚笃）（p471）’。彼がふさぎこむ辜望廷を心配し新書を買ってきて慰めようとする場面に、以下の眉註を付している。

○この言葉は嘆きとともに語るのである。わずかに愚鈍な田舎者にのみこのような人がいる。ほかに見たことはない。世を厭わずにおれようか。

此语是慨乎言之言,仅于乡下愚蠢人见之,此外未之或睹也,那得不厌世 (p471)。

【第8回】妓楼に行ったのがばれて、交際相手から罵られ殴られると、‘自由に干渉された’と愚痴る留学生の所業に以下の眉註を付している。

○志士がこんなではどうして世を厭わずにおれようか

志士入如此,那得不厌世 (p475)

【第10回】‘望廷は故郷にいた時から立憲準備の上諭を見ており、上海に来ると数種の憲政書を読み、心の中でわくわくしていた。今、若愚のこれまでの議論を聞けば革命もダメ、立憲もダメで、一片の熱き思いは氷点下まで下がっていった（望廷在乡时,早见了预备立宪的上谕,到了上海,看了几种宪政书,心中正在那里喁喁望治,今听了若愚前后的议论,革命又不好,立宪又不好,不觉把一片热心冷到冰点度上去 p488）’ という結論に至る場面に、以下の眉註を付している。

○どうして世を厭わずにおれようか、世を厭わずにおれようか。慟哭する。

那得不厌世, 那得不厌世。一哭 (p488)

【第10回】日本へ行く望廷に、従兄の望廷はそのまま日本人になれと勧めて言う。‘各国の人民はみな政府の保護を受けているのだ。我ら中国の人民だけが政府の餌食だ、向こうの恣に剥ぎ放題、食い放題なのだ。（各国的人民都是受官府保护的,只有我们中国百姓是官府的肥肉,他要割就割,要吃就吃。P490）’ その眉註には次のように述べている。

○暴君が人民を敵側に追いやる。世を厭わずにおれようか。

为渊驱鱼, 为丛驱雀, 世事如此, 那得不厌世 (p490)

これらの記述は、‘恨み’の原因が、官の暴虐と似非志士の所業にあること、厭世感の原因となる‘社会の鬼気千万の様相’とは、官兵から村民、自称志士たちまであらゆる階層に見られる‘世道人心’の荒廃であることを示している。

吳趸人の厭世感については、李葭荣「我佛山人伝」*37に以下の記述が見られる。

怪現状はおそらく人生を振り返った作品であろう。根拠が明らかで読む者は感じ入り、嘆息する。ありのままを描いて、まるで目に映ったもの、経験したことがある情景のようだ。君の厭世の想いはおそらくここに萌したのであろう。私は以前にこのことを君に質したことがあったが、君はこのように語った。あなたは私の理解者だ。救世の心は尽きたけれども後に厭世の想いが生じた。あながち口から出まかせでもない。

《怪現状》盖低徊身世之作,根据昭然,读者滋感喟,描画情伪,犹鉴之于物,所过着景。君厌世之思,大率萌蘖于是。余,尝持此质君,君曰:子知我,虽然,救世之情竭,而后厌世之念生,殆非苟然。

さらに、彼は急死した年の春宵、己の最期を予見するかの如き言葉を李葭荣に語ったという。

以前に星士の術を学んだことがあり、それに従って自制して来た。今年の十二晦朔（旧暦各月の最後の日と翌月最初の日）は、定めに拠れば逃れられまい。

尝肄星士之术,举以自律,今岁十二晦朔,于法不免。（「我佛山人伝」）

また、呉趼人が街で遇った友人に、身体の不具合と死の予感を訴えたことも証言されている。

私は死にかけているのだ。以前は高粱酒を飲むと美味かった。今朝飲むと喉を突きさし舌が痺れるのは何故だ？私の天祿は永くないのだろう。

我殆将死乎?吾向饮高粱,潭潭有味,今晨饮,顿觉棘喉刺舌何也?吾禄其不永矣!※38

このように、呉趼人は死期を悟っていたかのような言辞を残していた。

李葭荣の記述によれば、呉趼人の‘厭世’の思いは『二十年目睹之怪現状』に描いた彼自身の人生体験に萌しているという。彼は死の前年『二十年目睹之怪現状』を第108回という中途半端なところで慌ただしく終わらせている。先述の如く、『二十年目睹之怪現状』は、第1回＜楔子＞が‘九死一生筆記’なる手記の出版に至る経緯、第2回から第108回までがその内容という構成である。各回に‘九死一生’の伝聞見聞として珍妙奇怪な社会事象を並べる形式で第106回まで続き、第107回と第108回で突如‘九死一生’が‘わが生涯最大の失意（我生平第一件失意的事）’を述べる。‘九死一生’の述べた‘わが生涯最大の失意’とは、三叔の死に五叔が関りを拒否し、若年の呉趼人が路頭に迷った従弟たちの救出に奔走した自

身の体験である。作者の願望を反映したか体面上体裁を取り繕ったか、作中‘九死一生’の体験は、事実を美化した設定となっている。それでも、作中随所で‘自己家’の体面を慮っていた‘九死一生’が最後に自身の‘失意’を吐露するという終幕は、吳趼人が自身の人生体験を社会の‘怪現状’と同一視する心情にあったことを表している。

吳趼人の閱歴からは一族の問題以外にも、『漢口日報』事件、『蘇報』の分裂と『蘇報』事件、拒俄運動や反米華工禁約運動等‘公益事業’の頓挫、商務印書館への屈託、李伯元や歐陽鉅源ら作家仲間の死、‘怪現状’を見る仲間として『二十年目睹之怪現状』に登場する方佚蘆（モデルは方逸侶）の発昌機器工廠の破綻*39等、失意の体験が散見される。そうした事態は吳趼人の目には、おしなべて‘世道人心’の荒廃に帰結するところと映っていたのであろう。吳趼人は、政治の腐敗のみならず世人と同族の非道、非情に失意した人生体験を、清末の社会情景の縮図と捉えていたものと思われる。それ故に、“『二十年目睹之怪現状』は己の人生を振り返った作で、その為に厭世感を萌したのだ”と指摘した李葭榮を、知己と呼んだのであろう。

4) 旧道德の恢復

近年、中国における吳趼人研究において、吳趼人の後期作品に価値を認め、その‘国粹’‘旧道德’推奨の思想を解釈しようと努める研究者が現れている。

張強は、

かつてこの点については研究者の非難の声が高かった。私は“旧道德の恢復”は吳趼人の小説創作における原動力であり、救世の術であり、その創作の根幹となる主張であったと考える。我々は今日、現代人の眼差しで“旧道德の恢復”を眺めるが、現代人の意識でそれを徹底的に否定してはならない。当時の歴史背景においてこの主張の果たした、ある種の積極的意義を客観的に評価するべきである。

以往的研究者对此颇多微词.我认为“恢复旧道德”作为指导吴趼人小说创作的原动力,作为他的救世之术,一直贯穿于其小说创作的始终.尽管我们今天可以用现代人的眼光去审视“恢复旧道德”的内涵,但绝不能用现代人的意识去彻底否定它,而应该客观地评价这一主张在当时历史背景下的一定的积极意义.. (P26)*40

と述べている。‘彼は、吳趼人の‘恢復旧道德主張の核心’は雜文中に取り上げている孟子“民为贵,社稷次之,君为轻”の‘民権思想’にある、吳趼人は儒教に‘西方の科学技術を

加味しようとしていた’、その基幹思想は‘資産階級維新派思想’及び‘洋務思想’であるとの観点により、吳趼人の後期作品を詳細に考察分析した。旧道徳恢復’の主張を吳趼人の‘小説執筆の原動力’、‘救世の術’として容認しようとする姿勢は、全否定していた従来の見解からは隔世の感がある。しかし孟子に言及しながら、結論が洋務思想や‘時代の反映’に落ち着いているのは残念である。

時萌も、吳趼人の後期作品に意義を認め、その‘国粹’、‘旧道徳’を推奨する思想の解釈に取り組んでいる。彼は、その朱子学批判を理由に、“吳趼人は実際には旧道徳を克服していた”という解釈を示している*41。しかしそれでは、吳趼人が作中人物を通して力説した‘旧道徳’恢復の主張が無駄な言辞となり、作品の意義が失われてしまう。

論者は「上海遊驂録」における李若愚の‘旧道徳’恢復の主張は、『新石頭記』における老少年の‘太古の思想’談義を抜きにしては解釈し得ないと考えている。しかし現段階では、両作品を並行して解析した論評は見られない。

吳趼人は、小説を通して官界の腐敗を訴え、迷信の根絶、阿片禁止、纏足廃絶等啓蒙活動に勤め、拒俄運動、反米華工禁約運動、洪水義捐金募金、小学校創立運営等に携わった。「上海遊驂録」で‘公益事業’に尽して不本意に終り、‘厭世’に陥ったという李若愚が、最終的に問題の焦点と見たのは、‘世道人心’一道徳人情の衰微という世情の実態であった。吳趼人は、「上海遊驂録」末尾で‘著者附識’として‘旧道徳の恢復’を訴えている。

各人の考え方が異なれば、各人の見方も異なる。各人の見方が異なれば、各人の期待する相手が異なる。各人の期待する相手が異なれば、各人の考える期待を実現する道が異なるのである。私から見れば今日の社会はまことに汲々として危うい。故に急ぎわが固有の旧道徳を恢復しなければ、維持することはできまい。いたずらに文明を輸入すれば改良改革できるというわけではないのだ。言いたいところを小説体で存分に述べた。とはいえ、これは私の個人的見解で、どうしても偏りは免れない。海内の小説家にはやはり社会に関心を抱き、私と見方を異にする者がいるのではないか？各々見解を述べて国事に意見し、社会の状況を討議しあってはどうか。著者附識

各人之眼光不同，即各人之見地不同；各人之見地不同，即各人所期望于所见者不同；各人期望于所见者不同，即各人之思所以达其期望之法不同，以仆之眼光于今日之社会，诚岌岌可危，因非急图恢复我固有之道德，不足以维持之，非徒言输入文明，即可以改良革新者也。意见所及，因以小说体，一畅言之。虽然，此特仆一人之见，必不能免于，海内小说，亦有关心社会而所见于仆不同者乎？盍亦各出其见解，演为稗官，而相与讨论社会之状况欤？

吳趼人が‘小説体で存分に述べた’見解は、李若愚の以下のような言葉に示されている。

(中国に)もし望みがあるとすれば、何とか方法を講じて四億個の道德心を造り上げ一人一人に一つの希望を配分する以外にない。

若要有望，除非设法制造出四万万个道德心，每人派他一个（第10回 p488）

吳趼人の言う‘旧道德’とは従来通りの礼教支配体制を指すのではない。彼は朱子学を‘宋儒’と嫌い、儒教解釈においても自身の見解を唱えていた。「上海遊驂録」第8回で李若愚は、中国人に‘公德’、‘社会上的道德’、‘愛群愛国的道德’がないという非難に、

…古代には社会という名詞はなかったかもしれない。しかし『大学』に‘人の交友は信頼第一だ’と言っているのは何でしょう？古人の‘民は同胞、物は同類’の説はこの‘群’よりさらに大きいものではないかな？孔子が魯へ行って‘祖国を去る時は、歩みを遅くしなければならない’と言ったのが愛国ではないというなら、お教え願いたいものだ。ほかにも‘泛く衆を愛する’、‘忠信を主とする’など、いくらかもある。

…古人的時候,或者不曾有社会的名詞,是说不定的。然而『大学』上“与国人交,止与信”不知说的是甚么?

古人“民胞物与”之说,不知再有比这个“群”大的没有?孔子去鲁曰:“其迟吾行也,去父母国之道也”不知爱国不算,倒要请教。其余如“泛爱众”、“主忠信”等,不胜枚举。“(p479)

と反論する。‘忠君’についても

数年前、『新民叢報』で梁卓如の言った‘皇帝は忠を尽くさねばならない’という言に人々は新しさも極まった言葉だと訝り、先人の言っていないことを言ったと思いこんだものだ。‘忠信を主とす’の‘忠’は主君に対して言うのだろうか。‘教人以善谓之忠’のこの‘人’は、主君のことを言うのだろうか。『左伝』の“齐师伐我”篇については、曹刖が‘何故に戦します’と訊ねると、公は‘大小さまざまな裁きは、分からないことがあれば事実に基づいて慎重に審理した’と言った。刖は言った。“責務を果たしたことになるので、戦するがよろしい。”数千年前に早くも皇帝には責務を尽くす義務があるという言

葉があった。しかも皇帝が責務を果たさなければ民衆を出征させることができなかったのだ。責務を果たすということを何と重視していることか。後世の人は文字面しか見えず読書する時に真髓を理解しようとせず、中古のああいいう料簡の狭い儒者に完全に欺かれ、死ぬまで真髓を分からず、かえって祖国の儒教道德の規律が完全でないと非難するのだ。まことに憐れだ、恨めしい、可笑しい、腹立たしい！

…前两年『新民丛报』上，梁卓如说了一句皇帝要尽忠的话，于是大众诧为新到极处的说话，以为发前人所未发，不知“主忠信”的“忠”字，何尝是对于人君而言？“教人以善谓之忠”这个“人”字，何尝是指人君而言？至于『左转』“齐师伐我”一篇，曹刿问“何以战”，公曰：“大小之狱，虽不能察，必以情。”刿曰：“忠之属也，可以一战。”可见数千年前，早有了皇帝要尽忠的话，并且皇帝必要尽忠，方可叫百姓去出战。看得何等重要，后世的人，鼠目寸光，读书不求甚解，被中古时代那一孔之儒欺骗到底，到了死的那天，还堕在五里雾中，反要怪自己宗国的道德不完全。我看着实在可怜、可恨、可笑、可恼！（p480）

と儒教經典に自身の解釈を施している。

第10回で徳育を提唱する李若愚は、中国人で‘中級以下の階層の者に道德のないのは教育のない為、中級以上の階層の者に道德のないのは、（宋学の）教育を受けた為（中人以下，没有道德，是没有教育之过；中人以上，没有道德，是受了教育之过。p488）’として、その理由を‘宋儒が世に出てより、士大夫の道德は地に墜ちた（自宋儒出世以后，士大夫道德早已丧尽’ p489）’、何故ならば、

宋儒は人を厳しく責めすぎる。何かといえば“天の理”、“人の欲”を言い募る。“天の理”を信ずる者はわずかな“人の欲”もあってはならない。わずかの“人の欲”があつては“天の理”はなくなる。“天の理”がなくなれば小人である。人間に無欲ということがあるわけはなかろう。名誉、女色、財物、利欲にまったく興味がないとしても衣食は必要だ。この衣食が“人の欲”なのだ。それなのに餓えて死ぬは小事、節を失うは大事と言い、婦女子に対してまでも責め続ける。人は責められるのを恐れ、その説によれば、どのみち君子になれなそうもないとなると、易きに流れて小人の方へ行く方がましということになる。これは宋儒の解釈の誤りではないか？聖人は、人の道、日々の要り用、人との接し方、己の成すべき責任を全うすれば、そこに道德があると教えている。何がそんなに厳しいものであろうか。

宋儒责人太甚，动不动要讲“天理”“人欲”：讲天理的，不准有一点人欲。有了一点人欲，便全没了“天理”；没了天理，便是小人。你想一个人岂有无欲之理？声色货利，纵然全不嗜好，饱暖是要图的，这饱暖便是人欲。他却说饿

死是小,失节是大,对于妇人女子,尚且责备无已时,人家被他责备的怕了,依了他的话,左右不能称君子的了,便乐得往小人一边走了。你想,这不是宋儒的谬妄么?圣人教人,伦常日用,待人接物,只要尽我当然之职,便处处有道德,何尝这等严厉? (P489)’

と論じている。李若愚の提唱する徳育とは、朱子学の儒教解釈を廃し儒教經典を再解釈して得た、“宋学以前の儒教道德”である事が分かる。

先に述べたように、この‘旧道德恢復’の主張については、呉趯人が『新石頭記』で‘老少年’の言葉を借りて語った政治的展望を抜きにしては、表面的解釈に留まる恐れがある。

‘老少年’は‘孔子の道德’を、古代農業共同体の民の創出した生存、共存の技や生活術という‘太古の文明’を維持する技術、と定義している。そして、その真髄は（宋学の為に）正しく後世に伝わらなかった。そのため中国は‘秩序ある文明’社会を形成できなかった、という儒教解釈を提示している。呉趯人はそのように、朱子学に体系化される以前の古代草創期儒教に独自の解釈を施し、社会改革の基幹思想とすることを提議した。古代精神文明全般を称揚する彼の思想の基底には、人の自治能力を信頼する人間中心の発想があるといえよう。彼はその発想に基づき、『新石頭記』で理想の政体として‘文明専制’を提議した。徳性優れた‘百姓’が官僚となり‘民の欲する’政治を行うという‘文明専制’は、教育とりわけ‘徳育’の普及を絶対要件とする。‘旧道德恢復’という呉趯人の一貫した主張には、紳商、科挙合格者、買官買職者等富裕者が為政者となる現状を打破し、民衆中心の政体を希求する信念がこめられていると思われる。単に‘時代遅れ’、‘反動’とする非難は適切とは言えない。民衆を主体とする政治体制を模索しようとする姿勢は、清末時期に稀有のものであったといえよう。むしろその斬新さに目を向けるべきであろう。

“教育のない事”、“宋儒の教育しか受けていないこと”を問題とする李若愚の言葉は、旧道德の普及と教育事業とは不可分の関係にあると、呉趯人が考えていたことを示している。

1907年冬、呉趯人は、同郷人士の連帯互助と同郷子弟の教育を訴え、有志の人々と「両広同郷会」及び「広志小学堂」の創設を協議した。「広志小学堂」は翌年正月に開学し、呉趯人は学舎に泊りこみ運営に尽力した。当学堂は呉趯人の没後もしばらく存続したようである*42。広告*43によれば、学費は年三十元、八歳から十八歳の学生を対象に定員八十名を募集している。漢文と英語担当正教員各1名、指導担当志願学生?（‘担任義務講學員’）3名、軍事教連担当教員1名、国語担当正教員1名、さらに、西洋医、漢方内科医と外科医3名の校医

を置き、随時衛生学の講演を行うという。国語担当正教員は呉趼人である。さらに呉趼人が教員を務める夜学も開校した*44。

以後、1910年の急死まで、「発財秘訣」、「劫余灰」、「近十年之怪現状」、「情変」等の長編小説や多くの短編小説、笑話や随筆を雑誌に連載しながら、教育事業に従事していたことになる。おそらく、身体、精神、経済面に相当の負担を強いられていたであろう。それだけの情熱を、かねてより主張してきた女子教育、徳育の普及の実現に傾けていたといえる。彼は「上海遊藝録」で「公益事業」への絶望や「厭世感」を吐露する言辞を弄している。しかし彼は“徳性ある為政者を育成する”ための教育事業に挺身していたのであり、実際には未だ‘救世の心尽き’てはいなかったことが分かる。

註

1 以下の版本がある。①②は未見。③－⑥はすべて②を底本として校点を加えたという。本稿は③を使用した。

①原載『南方報』（1905 光緒 31）。4）によれば光緒 31 年（1905）8 月 21 日第 28 号から 11 月 29 日に第 11 回まで連載。

②『絵図新石頭記』。⑤によれば上海改良小説社より 1908（光緒 34）年 10 月出版。4 巻 8 冊全 40 回。回毎にはじめに挿絵がある。

③『新石頭記』（中州戸籍出版社 1986 年 3 月）②に校点と注釈を加え、‘拳匪’‘義和拳’の文字用語を‘義和団’に統一。挿絵なし。

④『我仏山人文集』（花城出版社 1988 年 8 月）⑤⑥と挿絵に異同がある。

⑤『中国近代小説体系』[近十年の怪現状・新石頭記・糊塗世界・両晋演義]（江西人民出版社 1988 年 10 月）校点は③と同一。用語の統一なし。挿絵をはじめに纏めた。落書きあり）

⑥1998. 8 北方文芸出版社『呉趼人全集』第 6 巻[新石頭記・白話西廂記・海上名妓四大金剛奇書]

回毎にはじめに挿絵をおく。校点は③と同一。用語の統一なし。挿絵は⑤と同一、⑤と同箇所落書きあり。

2 以下の資料から執筆年を光緒 31（1905）年 8 月～同 33（1907）年 2 月間とした。

①『呉趼人研究資料』「原載『南方報』光緒三十一年（1905）八月二十一日至十一月二十九日、報上連載僅至第十一回、光緒三十四年（1908）十月上海改良小説社単行」

②報癖『新石頭記』（『月月小説』6 号 1907.2 光緒 33.1）

③「本社撰述員附告」（『月月小説』6 号 1907.2 光緒 33.1）「啓者僕自前歲六月由漢返滬後…南方報前載新石頭記小説為僕手筆」

3 「近十年之怪現状」＜自叙＞

- 4 楊世驥『新石頭記』『文苑談往』所収。原刊中華書局 1946 年華世出版社影印版 1978.2 を使用
- 5 盧叔度「関与我仏山人後略—長篇小説部分」(『中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3 期 总 76 期』) 6 中州古籍出版社版 (1986. 3) <前言>で、王立言は‘柏燿廉’の名が‘不要臉’を暗示していると指摘している。
- 7 報癖『新石頭記』(『月月小説』第 6 号光緒三十三年 (1907) 年二月所載) は、‘老少年’を作者の意見を代弁する役割とみなしている。
- 8『新石頭記』は『南方報』に連載当初の署名は老少年撰だった。
- 9 第 5 回に‘大清光緒二十七年二月十二日 (1 千九百零一年) ’の日付の新聞を読む場面がある
- 10 以下は『時務報』『清議報』掲載された記事である。

『時務報』(1896.8-11)

- 「測砲線鏡」(訳倫敦東方報)2／「照相新法」(訳日本西字捷報)2
- 「英重気球」(訳倫敦東方報)6／「美国*造潜水戦船」(訳東京日字報)10
- 「気球難破」(訳東京日日報)12／「德国新式気球」(訳英国公論報)12
- 「電線消雷」12／「破水雷新器」(訳倫敦東方報)12／
- 「海底行船新法」(訳英国公論報)13／「螢火魚」(訳英国公論報)13
- 「海底照相」(訳英国公論報)18／「尋船新光」(訳上海西字林日報)18
- 「行軍気球」(訳温故報)31／「易格司射光」(訳上海字林西報)43
- 「探極小輪」(訳倫敦東方報)31／「探極帶脊」(訳倫敦東方報)31
- 「探訪北極」(訳美国格致報)33／「探極述闢」(訳公論報)42
- 「探訪南極」(訳美国格致報)42／「南極」(訳横浜日日西報)43
- 「社会党開万国大会」(訳国民新報) 6

『清議報』(1898.12-1901.12)

- 「新式気球」14(1899.5.10)／「太平洋海底電線」36(1900.2.20)
- 「英国海底電線」42(1900.4.20)／「美人制砲*」67(1900.12.22)
- 「新造水雷艇」73(1901.3.20)／「法国沈設海底電線」76(1901.4.19)
- 「俄国水雷艦」77(1901.4.29)／「海底艇成績」85(1901.7.16)
- 「新制潜水艇」89(1901.8.14)／「近世新砲*」95(1901.10.22)
- 「創設海戦」95(1901.10.22)／「大博覧会」43(1900.4.29)
- 「駁論万国平和會議」10(1899.4.1)／「万国平和同盟説源流考」12(1899.4.20)～15.17
- 「論万国平和會議」24(1899.8.16)／「法国博覧会詳記」55(1900.8.25)
- 「万国平和會議处理国際紛争条約」66(1900.12.12)66.68

- 11『点石齋画報』1884年5月創刊。旬刊。『上海申報』の附属事業。
- 12『二十年目睹之怪現狀』第22回 P159 及び『新庵詠屑』『世界最長之髭』＜評語＞に『点石齋画報』絵為図、一事盛伝觀之、……と、『点石齋画報』の名をあげている。
- 13『世紀末中国のかわら版 絵入新聞点石齋画報の世界』中野美代子/武田雅哉編訳 (1989.2.15.福武書店)、
『翔べ！大清帝国』武田雅哉 (1988.2 リプロボート)
- 14 樽本照雄「漢訳ヴェルヌ『海底旅行』の原作」『清末小説から』2(清末小説研究会 1986.7.1)
- 15 創元 SF 文庫『海底二万里』荒川浩充訳 (1977.4.22 東京創元社) を使用した
- 16 周桂笙訳は 1906.4.13, 光緒 32.3.20 上海広智書局、魯迅訳は『浙江潮』10 期 1903.12.8 に掲載 (清末小説研究会編著『清末民初小説目録』(中国文芸研究会 1988.3) による)。吳趼人は『新笑林広記』収録の「新小説」に『浙江潮』の名を記している。
- 17『『賈島西鼓詞』序』(原載『月月小説』第1年第7号 1907.4, 光緒 33.3 に「地心旅行」の記述と一致する文章が見られる。
- 18「文明と野蛮」の問題は『清議報』だけでも以下のように多くの論議を呼んだ。
- ① [飲冰室自由書]「文野三界之別」27 (1899.9. 15)
 - ② [飲冰室自由書]「維新図説」
 - ③「国民十大元氣論」(文明之精神) 33 (1899. 12.33)
 - ④「論文明之戦争」38 (1900.3. 11)
 - ⑤「文明促進化」59 (1900.10. 4)
 - ⑥「文明国人之野蛮行為」65 (1900.12. 2)
 - ⑦「戦争者文明之母也」66 (1900.12. 12)
 - ⑧「新聞力之強弱与国家文野之關係」69 (1901.1. 11)
 - ⑨「平和者欧州以内之平和也」69 (1901.1. 11)
 - ⑩「十九世紀之欧州二十世紀之中国」93 (1901.10. 3)
 - ⑪「中国文明与其地理關係」100 (1901.12. 21)
- 19『『賈島西鼓詞』序』(原載『月月小説』第1年第7号 1907.4, 光緒 33.3) に「是故善殺人者、一蹴而幾文明」という。「外国崇拜と中国蔑視」に対する批判は『中国偵探案』＜弁言＞光緒三十二年 (1906) 三月上海広智書局出版や「上海遊藝錄」随所に見られる。
- 20 <吳趼人哭>魏紹昌編『吳趼人研究資料』1980年4月上海戸籍出版社所収。原本は光緒二十八 (1902) 年作者手跡石印本、未見。)「佛老二氏以邪說愚民,本不久即可灭绝;宋儒乃舉孔子以敵之,使其教愈熾,居然并孔子而稱為「三教」。吳趼人哭。」

- ＜『自由結婚』評語＞『月月小説』第14号光緒34年2月（1908.3）所載。‘我国旧道德本完全无缺,不过散见各书,有出于经者,有出于子者,未汇成专书,以供研究耳;成能读破万卷,何求弗得。中古贱儒,附会圣经,著书立说,偏重臣子之节,而专制之毒愈诘而愈深;晚近士者,偏重功利之学,道德一涂,置焉而弗讲,遂渐沦丧。’
- 21 本論は月月小説『』連載版と『吳趼人全集』（北方文芸出版社）第3巻を使用した。引用頁は全集版。
- 22 北京大学中文系一五五九級著『中国小説史稿』（人民文学出版社 1960.4.18）
- 復旦大学中文系 1956 年中国近代文学史編写小組(原刊中華書局 1960 年 5 月版 1978 年香港影印版を使用)
- 张炯等主编『中华文学通史』1~10 卷<第 5 卷近現代文学卷>(華芸出版社 1997.9)、
- 易新鼎主編『二十世紀中国小説史發展史』（首都土範大学出版社 1997.12）、
- 于潤琦総主編『百年中国文学史』上巻（1872~1916）（四川人民出版社 2002.6）等があげられる。
- 23 簡夷之「《二十年目睹之怪现状》前言」『二十年目睹之怪现状』人民文学出版社 1959.7)p14
- 24 北京大学中文系一九五五級『中国小説史稿』人民文学出版社 1960.4.18）p524
- 25 盧叔度「関与我仏山人後略—長篇小説部分」《中山大学学报 哲学社会科学版 1980.3 期 总 76 期》)p89)
- 26 〈高国藩「吳趼人」周钧韬主編『中国通俗小说家评传』所収 中州古籍出版社 1993. 9)
- 27 樽本照雄「鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館」4(『清末小説から』第 38 号清末小説研究会 1995.7.1)
- 『鄭孝胥日記』に、鄭孝胥が漢口行き船中で吳趼人と遇ったと記している。
- 28 王雲五『民国人物小伝』（伝記文学出版社 民国 78 年 12 月 1 日）、方漢奇『中国近代報刊史』（山西人民出版社 1981 年 6 月）
- 29 亜東破佛(1876-1946)。本名彭俞、字遜之。江蘇溧陽県人。1907 年『競立社小説月報』を創刊し、「空桐国史」「殲鯨記」等の小説を書いた。民権、維新を鼓吹するが、清朝政府に封鎖され 2 期で停刊となる。吳趼人の「剖心記」に評語を書いた。「剖心記」は該報第二期に載り二回で中断した(1907)。1908 年「中国革命同盟会」入会、革命を鼓吹した。貧窮して浙江に落魄し、1918 年虎跑寺で出家する。以後、山中に隠棲し詩文や禅談関係の著述を刊行する。28 年環俗。(彭長卿「亜東破佛伝記」『清末小説研究』第 5 号 1981.12.1)
- 30 李葭荣。字懷霜。広東省信宜人。「愛国学社」社員。「中国革命同盟会」会員で「南社」社員、民族革命派である。
- 辛亥前後、上海で『天鐸報』主筆を務めた。(方漢奇『中国近代報刊史』(山西人民出版社 1981 年 6 月)p495、p692)
- 『中華民国名人伝』（近代中国出版社 民国 73 年 11 月）
- 31 『胡適之日記』（中華書局 1985）
- 32 耿雲志『胡適年譜』（四川人民出版社 1989. 12）吉川幸次郎訳『胡適自傳』（養徳社昭和 21 年 12 月 20 日）
- 33 夏森林、唐維楨（桂梁）、吳恂昌（君墨）、許政（亮孫）、黄子高、程瑤笙、鐘英、意君、仲誠、陳祥雲、賈微（劍龍、西湖俠隱）、李繼堯、李永清、徐子端、貴俊卿、橘丈、怒剛、翁芸航君、假君墨、小山君、子勤、胡希彭、永茂詢、惕銘、節甫、觀光、李未来、松堂翁、謝卓然、節甫、永茂號、梅溪、吉門先生、王雲五、淡春谷、李懷湘、

黃翠凝、梁孫、建藩叔、宋耀如、善相叔、薛純甫、康普君、鶴翹君、胡二梅、藩允升、守藩叔、徐蔭階、張元愷、士範、歐陽二倩（立斐）、徐浩然、歐陽南傑（立袁）、花端英、純銘、詠春、汪容章、鄭毓如（琦）、嚴伯經先生（蘇州自治局課員、仲實友人）、曹綉君、

（文通：經農、季沆、鐵崖、保民、程雲翁、伯輝、近仁叔、張望、怡孫、紹庭、樂亭、春度、士範、蜀川、仲希、尉慈、漢卿、羅毅）

34 于右任(1879－1964)原名伯循、字誘人。「中国革命同盟会」會員。清末時期は『神州日報』、『民吁日報』等を編集し、『中国公学』教員を務めていた。

35 馬君武(1882-1939)広西桂林出身。伝統教育を受け、庚子事変後、日本、ドイツに留学して科学を学んだ。帰国後、西洋詩文を訳し数種の雑誌を編集し、革命運動に挺身しながら、農耕生活に携わった。詩文に優れ多くの著述を残したが、工業の発展を志し、弾薬製造第一人者となった。

36 甲申は 1884 年の中法戦争、甲午は 1894 年の日清戦争を指す。

37 李葭荣「我佛山人伝」（魏紹昌『吳趼人研究資料』上海古籍出版社 1980.4 所収）

38 杜階平「書吳趼人」原載『小説月報』8 卷 1 号＜談屑＞1917 年 1 月 25 日）

39 上海市工商行政管理局編『上海民族機器工業』（中華書局 1966.2）

40 張強「談吳趼人的“恢復旧道德”『文史哲』1991 年第 2 期」

41 時萌「吳趼人思想、創作纵横談」時萌『中国近代文学論稿』上海古籍出版社 1986.10 所収）。

42『上海県統志』卷十（王俊年「吳趼人年譜」『吳趼人全集』第 10 卷所収 p 45）。

43「広志小学招生広告」（『吳趼人全集』第 8 卷所収 p 224）。

44「広志学校付属国文補習夜塾」（同 30 所収 p225）

結論

第一節 吳趼人作品の特性と意義

1. 原体験

吳趼人が、《社会小説》、《写情小説》というジャンルを着想し、悪党、女性を素材として小説執筆構想を立てるに至った背景には、生育環境、実体験に培われた彼本来の価値観があったと考えられる。既述の如く、吳趼人の曾祖父吳栄光は、大官でありながら私利を謀らず金石学と救国に私財を投じた学殖深い英傑だった。その娘は、気概と才能で勇名を馳せた女画家だった。彼は幼少時より族人中の逸聞に接し、愛国者、女傑を景仰し理想人物とする環境に育った。また長じて、上海江南製造局労働者、小新聞編集者として生活する中で、遊

里に名を馳せた妓女たちの逸話や言行に触れる機会を得た。それらの原体験は、救国を第一義とし、女性を蔑視せず尊重する価値観を培ったと考えられる。

吳趼人の創作の方向性を定めたのは、専業作家転身に二年さかのぼる拒俄運動であったといえる。彼は1901年張園拒俄演説会で大叔母を彷彿とさせる愛国少女薛錦琴の雄姿に接したことで、女傑への崇敬の思いを救国への期待に連ねたと思われる。さらに「電術奇談」翻案の機会を得て、“恋”と自己実現意識の連動に着目することとなった。それらの女性観は、『二十年目睹之怪現狀』で社会の‘頑愚を戒め’、‘九死一生’を訓導する‘姉姉’、『新石頭記』で、公共の場で愛国演説をして賈宝玉を驚かせる少女や、男女間を意識しない所作で賈宝玉を感服させる女科学者東方美の人物像に結実された。彼女たちの形象は、才徳ある女性を改革者たり得る社会の潜在力とみなす吳趼人の認識を示している。

さらに、1902年の武昌府知府梁鼎芬との軋轢により彼の創作意識は、悪党を追求するという方向に導かれたと推察される。梁鼎芬は、曾祖父と対蹠的な、国難を顧みず大官に阿り名利を貪る貪官腐儒だった。『新石頭記』では、梁鼎芬をモデルとする「学堂監督」は、絶望した賈宝玉が理想世界を探して旅立つ契機となる“暗黒世界の象徴”として設定されている。吳趼人は自身の体験により実感した、悪党の所業、女性の生き方と国家の命運との相関や理想世界探求といった中国社会の課題を、その後の小説中に結実させようとしたといえる。

そのように吳趼人は、父祖の体験と生育環境、自身の政治運動、文筆活動を通して得られた原体験に培われた悪党と女性への認識に基づいて、小説を執筆した。その主たる成果は、『写情小説』と『社会小説』の創始、独自の‘文明’論及び‘旧道德’論の開陳の三点にある。以下、その成果と意義についてまとめておきたい。

2. 《写情小説》

1) 文学史的意義

吳趼人は、政治上の体験、文学上の体験を原点に、社会における女性のあり方、恋と自己実現意識の連動に着目し、『写情小説』というジャンルを創始した。吳趼人の『写情小説』創作の特性と意義は、女性が恋情を育む心理過程、恋愛行動を描いた点にある。先ず挙げられる成果は、「電術奇談」を翻案して得た、“求愛自立する女性”、“献身する男性”、“理解ある家長”という人物像を、以降の中国恋愛小説中に普遍化させた点である。その後の中国恋愛小説には、恋を自覚し自立を願う女性、援護する家長や恋人が頻出しているので、吳趼人の観点は他作家の共感を得られたものと思われる。

もう一つの成果として、従来の中国小説に描かれなかった女性像の造形が挙げられる。恋心を自覚して婚約者に献身する『恨海』の張棣花、学識と天足（纏足しない天然の足）を駆使して危難を脱し、婚約者への愛を貫く「劫余灰」の朱婉貞、男装で活躍し美少年に求愛し夜這いする「情変」の寇阿男は、いずれも作中で自身の異性への思いを反芻し、恋を自覚し煩悶する。既述の如く清末期に‘新女性’を主人公として女性解放を謳ったどの作家も、女性の恋情を描けなかった。吳趼人は、女性の恋心と求愛行動を小説に描き、女性の社会性を意識して創作した最初の作家であったと思われる。

従来の言情小説は、題材、設定における許容範囲内に、恋愛の一部始終を叙述するだけで、その間の男女の心理を詳細に描写することはなかった。吳趼人は《写情小説》中に、恋を契機に自我を発現し、恋の成就から自身の進退处世まで、自ら意思決定し行動する女性を描いた。従来の中国小説において、纏足した深窓の令嬢や士大夫階層の女性が、自己主張し社会に関わる存在として描かれることはなかった。吳趼人は女性を、家庭以外の場所で活動交流し、自身の出处進退に悩む固有の人格として取り上げた。女性の心理や行動、まして恋情や求愛を一人称で綿々と描写した《写情小説》の手法は、斬新さと臨場感で当時の読者を驚かせたであろう。

2) 社会的意義

清末民初、女性を取り巻く環境は劇的に変化していた。動乱や困窮は通常、女性に災禍をもたらすが、一部の女性にとっては、拘束を免れ自我を開放する格好の契機であったともいえる。吳趼人が《写情小説》執筆により達成した社会的意義は、女性の恋と救国の連動を視角において、“自我を発現し、存在意義を求め、自己実現を目指す女性”を描いた点にある。作中に描かれた女性の恋の自覚と自我の発動、学識と天足（纏足しない天然の足）の奨励は、読者の女性解放、権利拡張意識を誘発するに効用あったはずである。作中に登場する女性を見舞う社会的危難の指摘や、天足や女子教育の奨励は、列強の侵攻、国家の衰退に、国民が家の行く末や家族の安全を気遣い、不安を募らせる状況下において、時宜に合った指摘として共感を得られるものであったろう。吳趼人の小説は、女性の境遇改善という側面にも、醒世を果たし得たであろうと思われる。

彼の作品は随所に、纏足、納妾、誘拐、人身売買、売春等女性を見舞う災厄、危難を取り上げ、女性を虐げる悪党の蔓延する社会の実態を暴いた。作中の女性は、清末社会において、危機状況におかれた女性の対応、自我の発現、異性への愛の自覚、求愛等、恋の心理と物心

両面での自立の過程をシュミレーションしているともいえる。男女とも同室さへできず、異性の心情や感性や日常生活に理解の乏しかった清末の読者に、異性との関係、人生の可能性等を知らしめ、自己意識を覚醒させる契機となったであろう。

3. 《社会小説》

1) 人物形象の造形

吳趼人は愛国文人の曾祖父を戴く権門に生い立って国難に対峙する士人意識を培い、江南製造局の薄給労働者として雇われ、官界、商界の支配階層、被支配階層等社会の実相を見聞した。その傍ら小新聞編集者として巷説に触れ、社会運動に加わり、政治改革に関わる知識人と知遇を得た。彼はそれらの体験を原点として中国小説史上はじめて《社会小説》を創始した。吳趼人は、西洋文明崇拜、拝金主義の跋扈、道德心の消滅という社会現象に焦点を当て、貴族高官から下層民まで広範な階層にわたる悪党の所業と、社会的弱者としての下層民や女性を見舞う種々の危難、抑圧を描いた。

吳趼人の《社会小説》に顕著な第一の特徴は下層民小悪党の形象である。官職売買が認可された清末官界では、かつて文人階層の特権であった伝統的官界遊泳鍊金術に下層民も参入した。吳趼人はそのような社会構造の変化に着眼し、下男下女や娼妓、雑役や人夫といった下層民が、役人や役人夫人に成り上がる清末の新現象として話題に挙げた。

さらに、軍事情報の売買や売猪仔、洋行買弁等諸外国と関わる新業態や非道な姦計を弄して欲望を追及する人物像を取り上げた。彼らは、現行社会の規制や規約に捉われず利益を追求して暴走する。吳趼人は最初に発表した翻案小説『電術奇談』の悪役像に着目し、‘傀儡の糸（‘情’）を操る’（人の本性に付け入って利益誘導を図る）者と特記した。彼は清末社会の特質を、‘傀儡師’が人心を操り秩序、平穩を破壊する‘絡繰り人形の舞台’と捉えていたのであろう。倫理的、社会的抑制を意に介さず、自身の所属する社会と人の安寧を破壊しながら欲望実現に暴走する小悪党が、新たな社会勢力として取り上げられたのは、中国小説史上はじめてであろうと思われる。

吳趼人の《社会小説》第二の特徴は、《写情小説》の求愛型女子と同様、それまで中国小説に描かれたことのない有能有為の女性形象にある。『二十年目睹之怪現狀』に登場する、女子教育や女性の意識改革、儒教解釈と家庭の抑圧関係是正を訴える‘九死一生’の従姉、朴訥な田舎者を婿に選び官位を買い与え役人夫人になる街娼、私財を投じて詩作の師である馴染み客の苦境を救う妓女、貧しい田舎者の道義心に感じて嫁ぐ金持ちの鹹水妹、妾生活を

嫌い富家への落籍話を蹴る妓女、『新石頭記』の「張園拒俄演説会」で演説する愛国少女、男性陣と男女を意識せず同席し談笑する女科学者、「上海遊騷録」の裏切った恋人に平手打ちを食らわす天足（纏足しない天然の足）、洋装、断髪、サングラスの女性等々、みな信念を抱き、自己主張し、意志を貫く、旧小説にない斬新な女性像である。吳趼人は、従来の中国小説に見られなかった下層民の小悪党、自己確立した有為の女性という人物形象を新たに造形したといえよう。

2)社会悪の追及

(1) 社会事象

吳趼人が作中に描いた種々の悪事は、列強の侵攻下に無法、無秩序の顕在化する政治社会情勢を背景としている。吳趼人の《社会小説》は、倫理秩序が崩壊し、金のための悪事が蔓延する清末社会の様相、国家の衰勢、政治の腐敗、社会の混迷、人心の荒廃を映し出している。悪党の社会的属性は、“官界関連で稼ぐ小悪党（役人とその家族、幕僚、使用人、御用商人）”と“外国絡みで稼ぐ小悪党（買弁、洋行使用人、売猪仔業者）”にほぼ集約されている。彼は、社会悪の根源を、貪官汚吏と列強追随者と見なし、警世を図ったのであろう。

さらに、『二十年目睹之怪現状』で親族に裏切られる吳継之、‘九死一生’、蔡侶生の体験や、「上海遊騷録」で辜望延が郷里を追われ日本に亡命する経緯、「発財秘訣」で冷雁士が一族を支援救済して貧窮する経緯等は、地縁血縁を抛り所に連携運営される儒教型封建社会における官僚支配体制の崩壊を反映している。吳趼人は社会の汚濁にとどまらず、伝統理念や国家体制が根幹から瓦解しつつある時代趨勢を描いたといえる。

(2) 政治改革運動

吳趼人については、“挫折から厭世に至り民族革命や立憲運動に反対する‘反動派’に転じた”という、個人の情緒と政治意見を強引に結び付けた評価が、従来の定論とされてきた。吳趼人の抱いた‘厭世感’と立憲運動、革命運動批判は本来は何の関係もない。政治的こじ付け、或いは感情的な人物評であるといしか言いようがない。

吳趼人は、《社会小説》に描いた事象はすべて実事であると作中に繰り返し訴えている。彼は紙誌編集者、専業作家として社会事象の取材に勤めていたと証言され、作中の多くの登場人物にモデルが確認されている。また、多くの維新派、革命派人士と交友を結んでいた。さらに、胡適の日記により“革命派不良分子”の見聞も実事であることが確認された。彼の

見解が実際の見聞に基づいて状況を分析し、到達した結果である以上、事実関係や分析の是非について先ず公正な調査検討がなされるべきであろう。

吳趼人は作中に政治改革運動の実態を描写し解析している。彼は政治運動の描写を通じて、政治改革、思想改革の現実的可能性を模作し、自身の見解を開陳する一方で読者に意見を求め、世論の喚起を図っていたと思われる。『恨海』、『新石頭記』には義和団の動乱に遭遇した当時の庶民の様相が描写されている。「上海遊驂録」では官兵と革命派不良分子の実態を糾弾し、立憲政体の可否についての分析が試みられた。短編「立憲万歳」、「無理取鬧之西遊記」は立憲派投機分子の実態を揶揄している。『二十年目睹之怪現狀』第58回では李鴻章淮軍の‘革命派’掃討を描いている。いずれも、当時の政治運動の実相を映した貴重な記録である。当時の読者に時事知識を提供し、議論を喚起させるのに功を奏したであろうと思われる。

3) ‘野蛮文明’と‘真文明’の対比

吳趼人は、『新石頭記』に理想世界の科学文明を描いたが、その多くはジュール・ヴェルヌ『海底二万里』に典故が求められる。吳趼人が弱小民族を迫害する強国を否定するヴェルヌ作品から強い影響を受けていたことが明らかになった。作中で吳趼人は、自身の分身とされている老少年の言葉を通じて、独自の‘文明’論を開陳し、理想世界像を構想した。‘老少年’は、現実の中国や他国を抑圧する列強諸国を‘偽文明国’或いは‘野蛮文明国’と呼んでいる。吳趼人が近代文明を列強の侵略と同一視し、絶対目標を救国においていたことがわかる。彼は、古代中国社会の真髓を継ぐという理想国家‘文明境’を‘真文明国’と呼び、‘野蛮’な西洋近代文明と対峙させた。

さらに吳趼人は‘老少年’を通じて、古代社会における‘孔子の教え’に基づく理想世界の構想を訴え、‘真文明’の解説とした。その構想の独自性は、以下の観点にあると思われる。

- 創造的古代中国文明を‘真文明’の真髓と位置付け、‘孔子の教え’と総称した。
- 古代‘真文明’の立役者を‘堯舜以前’の伏羲、女媧、神農三皇時代の古代人とし、その日常生活の技を編み出し‘無から有を生み出した’日々の営為を称揚した。
- ‘真文明’が潰え社会が停滞、荒廃した要因を、“君臣の道のみ重んじ”支配関係を正当化した‘宋儒の毒’に帰した。

吳趼人は、古代の民の創造性、技術維持、共存のノウハウを‘真文明’の真髓とし、‘孔子の教え’と総称した。作中には、‘仁’の理念のもとに発明された機器、科学製品により、弱者を抑圧する列強の‘野蛮文明’に対抗し自立を果たした、理想の‘真文明’国家である中国像が描かれている。

吳趼人は、中国にふさわしい政体として、‘德育’ある民衆が為政者と成り民衆を虐げず善政を行う‘文明専制’を構想した。富裕階層を政治に関与させず、有徳の民が『大学』に見える‘民の欲するところを行う’政治である。この民衆を中心とする政体という構想は、西洋に倣い立憲制を目指していた清末において異例の考え方である。作中で老少年が“均貧富党という外国の流行思想”に言及していることから、吳趼人が社会主義の知識を持っていたことが窺われる*1。“富裕層に政権を渡さない”という視点が、社会主義から触発されたとすれば、当時の世界水準においても先進的段階にあるといえる。しかし、彼が救国の方策として依拠するのは、西洋政治思想ではなく『大学』、『孟子』等儒教經典である。吳趼人の解釈では、儒教とは、伝説の三皇に象徴される王朝形成以前の古代共同体社会伝来の叡智であった。宋学を道德退廃の元凶と否定し、‘孔子の道德’を‘太古の人’の叡智の総称とみなしその復活を提唱する発想、一般民衆の手に政権をゆだねようとする考えはきわめて獨創性に富んでいる。吳趼人は‘旧道德復活’を主張したことで“反動化”したと評された。しかし実際には、その用語は当時としては革新的視点から発していたことがわかる。内容を吟味せず、言葉の印象から“守旧反動”と決めつけてきた従来の評価は皮相的に過ぎるといえよう。

4) 旧道德—古代社会崇敬

吳趼人は‘旧道德恢復’を主張して‘反動’と批判された。礼教支配により道德は廢れたという『新石頭記』李若愚の主張は、王朝支配の基幹思想である朱子学が社会悪の根源であるとする吳趼人の見解を表わしている。‘德育’ある民衆が官僚と成り政治を行う‘文明専制’政体という理想実現の要は、‘旧道德恢復’による‘德育’の普及であった。

吳趼人は、「上海遊驂録」李若愚の言葉を通じて、古代中国文明を創造した“原始共同体社会の叡智”を称揚し、現存の儒教ではない古代中国人の‘旧道德’恢復を提唱した。彼は‘古代の人々’の行政手法を象徴的に‘孔子の教え’と呼び、王朝文明以前の古代社会を‘真’文明とみなし、古代人の集団統治に範を求めた。彼がそのような思索を凝らした背景には、世界の弱小民族国家を亡ぼす帝国主義列強‘野蛮文明’の克服、滅亡の回避という課題があ

った。近代科学文明を絶対視し、こぞって富国強兵策をとる当時の世界にあって、極めて斬新な発想であったといえる。

呉趼人は滅亡回避という課題実現のために、宋学理念に依拠する官僚支配体制を否定し、貪官汚吏の禍根である富裕層を排除し、‘孔子の教え’にもとづく民衆主導體制の実現という抜本的改革を提案したのである。彼は、救国や社会改革を図るにあたって、‘根源を正そうとする’意識を先行させていたと思われる。彼が訴えた‘旧道德恢復’は、社会を再生に導き民族国家を滅亡から救うための抜本的解決策であり、“革新”を目指そうとする意図に発していたといえよう。

第二節 従来の評価と再評価

呉趼人について中華人民共和国では、愛国運動、教育事業への参画という側面においては、ある程度、肯定的に評価されていた。しかし、政治思想面においては、ほぼ全面否定されてきた。近年、異議が唱えられつつある*2ものの、“排外的愛国者”、“旧道德復活を喧伝し帝政を支持する反動派”、或いは“怪現状に絶望し改良思想から守旧に転じた厭世家”、“低俗な恋愛小説の創始者”という論評が一般的評価とされる情況は変わっていない。しかし、彼の交友関係や作品中に展開する議論に照らすと、それら従来の評価は実態にそぐわない皮相的見解に止まっていることがわかる。《写情小説》、「上海遊驂録」、『新石頭記』作中における政治思想、復古思想について批判のみ先行し、十分に検討されてこなかったことが、その原因であろうと思われる。

1. 《写情小説》再評価

呉趼人は、女性の恋心に自己実現欲求の発露、自立心の発現、救国への寄与等の意義を見出して《写情小説》を創始したと思われる。「電術奇談」王鳳美は、恋と自立に邁進する。また、纏足で歩行も不自由な『恨海』張棣花が婚約者と心を通わせた思い出と哀惜にすがって出家する。才気煥発な「劫余灰」朱婉貞は婚約者への愛を貫き婚家に嫁ぐ。直情径行の「情変」寇阿男は求愛活動に邁進する。作中の女性たちは人生の岐路に、自ら身の振り方を決める。呉趼人は中国小説で初めて、女性が自身の思いに気付く戸惑い、恋心を自覚する心理、自身の存在意義を自覚する過程を詳細に描写したといえる。

文革終結までの中国文学史上において、《写情小説》は“社会的意義に乏しい”と貶められてきた。しかし《写情小説》の原点は女性性への開眼であろうと思われる。『新石頭記』

で救国を訴える愛国少女は、張園拒俄演説会で吳趼人と共に演説した実在女性薛錦琴であった。彼女は中国で最初に公式の場で演説した女性として、近年中国においてもその功績が掘り起こされている。また、『二十年目睹之怪現狀』で女子教育と女権の拡張を説く‘姉姉’の主張は、吳趼人一族の名高い女傑の言動の投影と類推される。さらに吳趼人は上海で生活するうち見聞した、苦界の中に自立を図り奮闘する妓女たちの言行が“記録に値する”との見地から『胡宝玉』を描いた。当時から現在に至るまで、妓女の事績を顕彰しようとする認識は稀有のものである。それらの事実から、吳趼人が自身の体験を通じて女性性のあり方に関心を深め、女性の自己発現に意義を見出すに至ったのであろうと考察される。吳趼人の《写情小説》創始は、実体験に根ざした女性性尊重意識に端を発しているといえる。その認識は、男女の境界を意識せず行動する『新石頭記』東方美という‘新女性’像に結実した。

男女の同座が許されない旧社会における未婚の女性が、異性への愛を心の拠り所に自身の生き方を決める、或いは公共の場に顔を出し発言するという設定は、中国旧小説において異例であった。吳趼人の《写情小説》は、中国小説ではじめて社会の中に自己実現する女性を描いたといえる。恋する女性の心理を描写するという執筆方法、求愛と自立という女性性の構築という側面から、当時の社会に及ぼした影響は多大であったと思われる。その意義は高く評価されなくてはならない。

《写情小説》本来の趣旨は、女性が自己実現を目指す契機としての恋を描くことにあった。ところが、作者の意に反して“○情小説”という形式のみ盛行し、低俗と非難される恋愛小説の叢生する事態を招いた。彼がそれらを“写魔であり写情ではない”と躍起となって非難したにもかかわらず、『恨海』は“○情小説”と銘打つ小説盛行の発端とみなされた。周桂笙は、‘婚姻の自由’を奨励する一方で、異性関係の放埒、無責任な結婚という側面を危惧する声をあげていた*3。吳趼人もその点を強く意識し‘痴男怨女’の‘写魔’小説を否定し、女性が恋心の萌しを契機に事態を打開し人生と向き合う人間的成長の過程を描いた。作中に描かれた恋愛はすべて女性側が自覚的に感受し、能動的に行動を選択する。一方で、男性側は礼法上の禁忌を守り、自分からは交情を求めない。その点が、吳趼人の主張するように、《写情小説》を標榜する他の作品との違いであると思われる。しかし、民国に至ると恋愛を含めて娯楽色の濃い《鴛鴦蝴蝶派》の作品が一世を風靡し、《写情小説》はあらゆる恋愛小説の源流と位置付けられることになった。《鴛鴦蝴蝶派》の作品は政治性の低い娯楽小説として解放後の文学史上に価値を認められず、その起源とされた《写情小説》も同様に否定されることとなった。

吳趼人は、中国小説史上はじめて女性の恋情を描き、愛情を支えに自覚的に行動する女性、倫理的抑圧に立ち向かい、自我を枉げずに恋心を貫く女性像を構築した。その作品を読んだ清末の青年男女が、自己実現の可能性に思い至り、都会での就学、海外への留学と飛躍の道を模索する契機になり得たのではないかと推察される。実際に自我を発揚し好ましい伴侶を得、自立して社会に尽くす女性が輩出した清末民国初、吳趼人が、天足（纏足しない天然の足）、女子教育の推進とともに女性の愛情開放を提唱した社会的意義は、高く評価されるべきであろう。“社会的意義のない恋愛小説”という評価は改められねばならない。

2. 「上海遊驂録」、『新石頭記』再評価

吳趼人は『新石頭記』において義和団を批判し‘孔子思想’を称揚した。「上海遊驂録」において革命、立憲思想に対する否定的見解を述べ‘旧道德恢復’を訴えた。それが原因で、この二篇の小説は、内容についてはこれまでほとんど論じられず、論じても研究解析を経ずして“世迷言”や“現実逃避”と断定され、思想性のみ非難されてきた。

論者が『新石頭記』中の機器、生物の典拠を調査したところ、ほぼすべての出典を確認できた。吳趼人が『新石頭記』に提示したユートピア像は、幼稚な空想とする従来の評価に反して、清末に得られた情報を拠りどころとする現実感を伴った理想であったと明言できる。また、機器、生物の多くはジュール・ヴェルヌ『海底二万里』に依拠していた。吳趼人には、列強の侵略に憤り亡国の民を支援するヴェルヌ思想の強い影響が認められることが明らかになった。それは、吳趼人の民族思想が漢民族、満州族という国内政治の域を超え、抑圧と被抑圧という観点で民族関係を捉える段階に進んでいたことを示している。『新石頭記』は、そのような吳趼人の思想上の発展を表した重要な作品であるといえる。

「上海遊驂録」は中国革命同盟会、立憲派を作中で公然と批判したことで、ことさら激しい非難を浴びてきたが、やはりほとんど研究されず、吳趼人の意図についても充分論じられることはなかった。論者は、吳趼人と青年時代の胡適に接触のあった事実を発見した。それにより、吳趼人が「上海遊驂録」作中で非難した低劣な‘革命志士’たちは、胡適とともに遊蕩に耽った友人たちをモデルとする実在人物であろうという推定が可能となった。従来、“革命思想への謂れない誹謗中傷、吳趼人の‘反動化’”と非難されてきた作中の記事は実録であり、清末政治運動の実態についての貴重な証言であることが明らかになった。吳趼人の革命、立憲各派内にいる投機分子への批判は、事実の叙述であり、政治改革の現状に

ついでに呉趼人自身の危惧を表わしている。‘反動化’という批判は不当で誤っており、訂正されねばならない。

3. ‘旧道德’再考

呉趼人の主張した‘旧道德’の内容については、民国には取り上げられることなく、新中国成立後は論じられることのないまま否定されてきた。清末民国において‘旧道德の恢復’という主張自体は特殊なものではない。清末には、近代化の指針や民族の独自性を模索する作業として、従来の思想哲学が再検討された。孔子をキリスト教に対峙し得る存在として位置づけようとした康有為の‘孔教化運動’はそのような意識の象徴といえる*4。「中国教育会」、「愛国学社」を創立して政治改革に携わった章炳麟や黄宗迎は、儒教、仏教の復興を念頭に置いていた。蔡元培も、仏教に関する論稿を発表している*5。『競立社小説月報』を刊行した亜東破佛(1876-1946)や戯劇改革に携わった李叔同(1880-1942)*6も僧籍に入る。復辟を狙う遺老や、国学の衰退を危惧する文人、憂国救世の思いを抱く改革派など、多様な意識の錯綜した民国初期には、復古や仏教再興が叫ばれた。蔣維喬は、辛亥革命以後は仏教に傾倒する。章炳麟は辛亥以後、反袁闘争から対日抗争に至るまで復古を救国の策と主張した。帝政や旧体制の復権を図る政治勢力は、当然、礼教支配に執着した。その動向としては孫伝芳(1885-1935)投壺事件(1925)*7が知られている。ユダヤ人富商ハルドーン(哈同)の妻羅伽陵(1864—1941)をモデルとした小説『海上大観園』には、民国時期に顕在化した復古の思潮が反映されている。羅伽陵と愛人の姫覚弥(作中では螺螄夫人と周肖僧)は、国学を称揚する「広蒼学会」、「耆老会」を設立し古礼を復元し、名士遺老や政府要人の歓迎を受けた。彼らの挙行したのは、まさしく君臣関係の恢復を希求する‘宋儒’の復古である。

呉趼人の主唱する‘旧道德’は、民国以後旧体制派の行った一連の‘復古’の動向とは趣旨を異にしている。呉趼人は多くの著作の随所で、‘宋儒’の非に言及して朱子学を批判し、自身の儒教解釈を唱えている。『新石頭記』で‘老少年’は、‘真文明’を‘孔子の道德’と通称する“先賢先哲の遺訓”により治める、儒家型理想政治形態であると説明している。‘先賢先哲’とは‘堯舜以前’の原始共同体の人々であり‘孔子思想’とは、古代人の創造を社会に活かし平和利用してきた、生活技術、治世経験の総称であるという。呉趼人は、その技術、経験に加え科学技術を獲得することにより実現し得る理想世界を想定し、‘文明境’という形で作中に結実させようとした。彼は、二十世紀初頭の世界では未だ稀有な“民衆主導”の発想に立っていたといえよう。

「上海遊騷録」における「旧道德恢復」の主張には、『新石頭記』に述べられた政治理念を抜きにして「反動」化という片手落ちの即断が下されてきた。吳趼人は、中国の社会構造を勘案したうえで、伏羲、女媧、神農三皇を思わせる異能の科学者「東方文明」を皇帝に戴く「文明境」という政体モデルを提示した。民衆の望みに従う皇帝と学問徳性ある民衆が官僚となり政務に携わる「文明専制」という構想である。彼が「旧道德恢復」を主張したのは、為政者にふさわしい有徳の民衆を育成する必要からであった。小説であり、まして《理想科学小説》と謳っている以上、空想性や、非現実性を云々しても意味はない。先ずは、世界を挙げて富と権力による抑圧が通常であった時代に、民衆主体の政治政体を構想した吳趼人の独創性、先進性、識見こそ評価されなければならない。

4.表現、形式面における再評価

激しい「譴責」の言辞を短所、構成力を長所として挙げ、「話柄」を連ね「まとまりに欠ける」『二十年目睹之怪現狀』の体裁に難点を見とめている点で、民国文壇の巨匠胡適、魯迅、阿英三者の見解は概ね一致している。その論評は、吳趼人の小説の特性と存在意義についての要所を捉えているといえる。しかし、清末社会における作家の意図や読者の期待に則って描かれた小説に、民国以後の価値意識に拠った批判を連ねても無意味であろうと思われる。吳趼人は、当時の社会状況に憤懣を抱き「頑愚を戒め糺さん」という意図をもって執筆していた。その立場に立って見れば、激しい批判の言辞は、多くの社会問題を提起し、作者の問題意識を表明するのに相応しく、かつ同じ憤懣を抱く読者の意に適う表現であったろう。

吳趼人の作品全体を構成面から見てみると、短い話題を連ねた「話柄」の連なり形式を用いた小説は、《社会小説》のみである。吳趼人は、《写情小説》では概ね一貫したストーリーに比較的巧みな構成力を発揮している。《歴史小説》では伝統的演義形式を用いている。彼が、小悪党執筆に「話柄の」連なり形式を採用したのは、むしろそれを、社会事象を反映するのにより適切な形式と判断していた事を示しているのではないだろうか。

「九命奇冤」を、西洋小説の構造に倣って描いた作品の稀少な成功例とする点においても、三者の見解は一致している。前時代の実話を題材に取った「九命奇冤」は、《歴史小説》でもなく社会事象を映すのでもない。善良な庶民、梁天来一家が大虐殺に遭った事件の顛末を描くサスペンスドラマである。吳趼人は周桂笙の翻訳や自作を連載する雑誌に載った多くの翻訳小説を読み*8、西洋警察小説や探偵小説の作風に通暁していた。梁天来一家虐殺事件は、

西洋小説に倣った作風を用いて創作するには、最適の題材であったと思われる。吳趼人は作品ジャンルにより意識的に構成を使い分けていたと考えてよいだろう。

そのように吳趼人は、演義体小説の常套を採用したり、西洋小説の構成に倣ったり、作品領域や読者層に合わせて構成を区別していたと思われる。それらすべての小説において、彼は伝統的章回体形式を採用している。構成上種々の工夫をしながらも、読者が一見して小説と分かる形式で書こうとしたのであろう。英国小説「電術奇談」を日本語に翻訳した菊池幽芳は、人名を日本人名に改め、地名のみ漢字の宛て字で原音表記した。吳趼人は、日本語版を中国語に翻案するに当たり、人名も地名も中国名に改めている。彼はその処置について、読者の見慣れた名詞に改め読みやすくしたとの旨を断っている。彼が、講談や演義体、筆写版で見せ場を味わう形式に慣れ、新聞雑誌に順を追って連載する形式や活版印刷の商業出版形式に慣れていない中国の読者に、馴染みやすくしようと配慮していたことがわかる。

吳趼人はその執筆活動の核に救国救世を据えながら、《社会小説》による政治社会の悪弊、《写情小説》による男女関係、家庭生活、人生観の改革、《歴史小説》による歴史教育等、執筆の意図に合わせて構成を替え、描き分けていたと考えられる。吳趼人の作品のより重要な特質と考えられるのは、自身の価値観や観点を作品化しようとした執筆姿勢であるといえよう。

5.思想上、文学史上における意義

吳趼人は出版界草創期の中国で、社会改革意識を持ち、読者を意識して自身の主張、理念を作品化し伝達に努めた数少ない専業作家であった。かつ、中国で最初に女性の心理や運命を社会事象と関連させて描いた作家でもあった。劣悪な‘暴露小説’、‘愛国者’から‘守旧派’への退行、‘浅薄’な‘譴責’、‘封建’的な‘家族観’、‘低俗’な‘鴛鴦蝴蝶派’の始祖、‘反動’的‘国粹思想’、‘落伍’した‘厭世家’等々といった従来の評価は、皮相的に過ぎ、不当であるといわざるを得ない。

吳趼人の思想面の、作品に反映された意義を概括すると、以下のようになる。

○強い時代意識、社会意識をもって清末の社会悪を追求し《社会小説》を創始した。

○女性に内在する革新性に着目し、なかんずく女性の自己発現の萌芽を恋に見出し、《写情小説》を創始した。

○被抑圧国の救国と抑圧国である列強文明の道義性、民族の伝統と自立といった命題を追求した。

○民衆主導の政治体制のあり方を提案した。

○清末の政治運動について、その実態、展望を考察し、誌上で議論を呼びかけた。

吳趼人の発想は斬新で時事性、独創性に富み、かつ同時代に卓越した公正な見識の持ち主であったといえる。当時の読者に与えた知識と、精神面における刺激や影響力は多大であったと思われる。社会構造の変化や腐敗の実態、女性解放、救国等の懸案を取り上げた吳趼人の作家活動が、世人の意識改革に果たしたであろう意義は高く評価されるべきであろう。

以上の如く、自身の信条や価値観により手法を使い分け、作品化しようとする創作意識を持っていた点、中国小説史上に《社会小説》、《写情小説》という新たな領域を創始した点、下層民と小悪党、女性性の概念に開眼し、女性の命運や悪党の行状を清末の時代情況の投影として描いた点、女性性の発揚や女性の恋情の開放と、民族抑圧からの解放の連動性に着目した点、西洋小説に詳しく構成力に長じ、旧小説の常套を脱した作品を描いた点、一方で読者を意識し、その形式や感覚面での受容態勢に配慮した点等、吳趼人の執筆活動が中国小説史上に果たした意義は大きい。それらの成果はいずれも、伝統的小説概念の範囲を踏み越え、近代文学の草創期を担う役割を果たしたものであったといえよう。

第三節 今後の研究課題

近年、夏晓虹は「吳趼人与梁启超关系钩沉」*9に吳趼人についての二点の発見を公表し、吳趼人のみならず清末小説研究全体に関する新たな論点を提起した。一点は、霍俪白《梁任公先生印象記》—为先生逝世二十周年纪念作—*10に見られる証言である。その記述によれば、吳趼人は戊戌政変後、日本に亡命する途次の梁啓超を上海で招宴しており、吳趼人と梁啓超は戊戌以前から知悉する関係にあったことが明らかになった。もう一点は、『新民叢報』の広告記事《新小説社徵文啓》*11の発見である。その内容は《写情小説》を募集し、かつ『儒林外史』流の描写を奨励するものである。それらの新事実について夏晓虹は、『新小説』発行前に掲載された広告文は発行人の梁啓超の手になるものに違いなく、《写情小説》募集広告は吳趼人に対する梁啓超の影響の証左であり、『儒林外史』流’募集広告は“譴責小説”問題発生由来を示していると述べている。したがって、《写情小説》の着想及び『二十年目睹之怪現狀』、『官場現形記』の作風は梁啓超の意図に由来すると解釈している。夏晓虹により、《写情小説》、《社会小説》の由来という基本的課題が提示されたといえる。

しかし、“譴責小説問題”については、梁啓超が『儒林外史』流の作品を求めているが、搭載された《社会小説》は魯迅により『儒林外史』に及ばない“譴責小説”と査定された、という文学史上の流れ以外の事実関係を示し得てはいない。魯迅や李伯元が募集広告を見ていたと確認できたとしても、梁との関係が確認できるのは吳趼人の『二十年目睹之怪現狀』だけで、李伯元の『官場現形記』は誌面が違ふ。両著はほぼ同時に別雑誌に登載されたので影響関係はない。“譴責小説”執筆を梁啓超の意図とするには、梁啓超と李伯元の交流や両著発表以前の吳趼人と李伯元の交流等、ほかにも証左が必要となる。またすでに、『二十年目睹之怪現狀』、『官場現形記』への『儒林外史』の影響は、胡適『五十年来中国之文学』での指摘に始まり、王俊年「晚清社会的照妖鏡重讀晚清二大譴責小説」*12等最近の多くの論者によっても指摘されている。梁啓超を含め清末社会の悪弊に憤る社会派知識人は、誰もが『儒林外史』を意識したであろう。どの作家であろうと、誰の影響も示唆も要せず、自主的に『儒林外史』の作風による執筆を試みたのではないだろうか。また、魯迅を含めどの読者も無意識に清末《社会小説》を『儒林外史』と比較して読んだであろう。

《写情小説》の着想については、最初の《写情小説》「電術奇談」漢訳者方慶周や評点者周桂笙等他の関係者の意図も含めて考えなければならない。「電術奇談」の翻案者であり、清末小説最初の創作《写情小説》執筆者であり、かつ当初から一貫して独自の写情小説論を展開し、以降も“○情小説”の盛行を慨嘆しつつ持論の普及に努めていた吳趼人の創作が、雑誌主宰者の方針への対応であったと見るには、無理がある。むしろ、吳趼人の意向が雑誌の発行方針に反映されたと考える方が自然であろう。

さらに、夏曉虹は梁啓超の影響について作品上の類似を指摘している。

吳趼人の著した『二十年目睹之怪現狀』は梁啓超の唱導した“小説界革命”の代表作と見なされてきた。吳氏の多くの小説も梁啓超の主宰した雑誌『新小説』に連載を始めた。関係する資料によれば、吳趼人は1904年に日本で梁啓超をもてなしたことがあるばかりか、彼の小説「胡宝玉」は題名、構想から章立てと構成まで、梁啓超の「李鴻章」と極めてよく似ており、明らかに梁の影響を受けている。両人は歩んだ道程から心の軌跡まで一致している。それは、吳趼人の小説創作が梁啓超の維新理想への呼応であったことを表している。

吳趼人撰《二十年目睹之怪現狀》，一向被视为由梁启超倡导的“小说界革命”代表作。吴氏不少的，也是在梁启超主办的《新小说》杂志上开始连载。从有关史料看，吴趼人不仅于1904年在日本招待过梁启超，而且他的

小説《胡宝玉》从题目、构思以至章节设计与梁启超的《李鸿章》均有相似之处,明显受到梁的影响,二人从行迹到心迹遇和说明吴趼人的小说创作是对梁启超维新理想的呼应。(夏晓虹「吴趼人与梁启超关系钩沉」P142 《中国古代近代文学研究》2003年第4期 原2002年于安徽师范大学)

しかし『胡宝玉』の原案は、吳趼人が1989年に刊行した『海上名妓四大金剛奇書』であるとも想定されている(「关于海上名妓四大金剛奇书」魏绍昌『吳趼人研究資料』)。『胡宝玉』と『李鴻章』両作品の類似という指摘は波紋を呼んでいるが、今後の検討を俟たねばならない。

夏曉虹の発見は、梁啓超と吳趼人の間に、少なくとも“小説界革命”の唱導、《写情小説》の構想において意見交換する機会があった可能性を示唆している。《写情小説》のネーミング及び《社会小説》の作風が梁啓超の主唱によったものであるか、或いは吳趼人を含めたほかの『新小説』関係者の意向に沿ったものであるかは今後の検証を要する大きな課題である。

さらに、今まで真偽の定かでなかった吳趼人の渡日、未だ検討されたことのない「電術奇談」翻案に至る経緯についての検証が重要な懸案となった。それらの懸案が明らかにされることにより、吳趼人や周桂笙が日本や上海で梁啓超或いはその周辺人物と『新小説』発刊について協議を持った可能性、夏曉虹の指摘する吳、梁両者のその後の関係と『新小説』停刊との関り等、論議を要する基本的課題が俎上にのぼることになる。

本論における考察は、吳趼人についての中国における政治評価、思想評価の再考に紙幅を費やした。吳趼人作品における構成や表現方法、その思惟や感性等文学上の成果についての考察を今後の課題としたい。

註

1 『新石頭記』第26回で老少年は‘均貧政党’、‘社会主義’を話題としている。

2 欧陽健『晚清小説史』浙江古籍出版社(1997.6)

付建舟『近現代転型期中国文学論稿』(鳳凰出版社 2011.6)

もしも狭量な政治判定を乗り越えることができるなら、この小説が改革の道程において吳趼人が文化と道德の問題を如何に正確に処理すべきかについて真剣に考えていた表れであると理解できるはずである

如果跳出狹隘的政治权衡,就可以发现,正是这部小说,反应了吴趼人对于改革进程中,应如何正确处理文化和道德问题的深沉思考。(P301)

- 3『新庵訳屑』巻下「自由結婚」（四則）（『吳趼人全集』第九卷所収）周桂笙は‘自由結婚’と‘結婚の自由’を区別していたらしく‘自由に結婚する’と曲解され男性の一方的離婚を促す事態を招かぬよう、男性の意識を改革しなければならない、というところまで論を進めている。
- 4「孔子改制考」を書き「孔教会」設立を図り、儒教の国教化を目指した（蕭橘『清朝末期の孔教運動』中国書店 2004 年 11 月）
- 5「佛学与佛教及今後之改革」（1927 年 2 月 30 日）（『蔡元培全集』第 5 卷 中華書局 1988.5）
「佛法与科学比較之研究」序（1932 年 1 月 5 日）（同第 6 卷 1988.8）
- 6 李叔同(1880-1942)。祖籍は浙江省平湖出身、祖父の代から天津塩商。父は李鴻章と同年の進士。陽明学、禪学に通じ教育、慈善事業に尽くした。1901 年「南洋公学」卒業、1905 年日本に留学、絵画、音楽、演劇各界人士と交わった。演劇の天才を謳われ「春柳劇社」を設立、中国新劇の基礎を築いた。帰国後、音楽教師、文芸雑誌編集に携わりながら、書法、絵画、作曲、演劇、篆刻に独自の境地を開いた。1918 年出家し、法名を演音、号を弘一と名乗り、華嚴研究に専心し、後に浄土宗念仏を提唱した。（『中華民国名人伝』第 1 冊）
- 7 投壺は『礼記』に見える古代士大夫の遊びだが、1925 年、北洋軍閥上級武官孫伝芳(1885-1935)が復古の儀礼として行った。
- 8 周桂笙『新庵諧訳初編・卷一<自序>』‘尝出泰西小说书数种，囑余逐颐译译实其报。余暇辄择其解者泽而与之。三四年來，积稿居然成秩矣。略加编次，遂付梓人。’『吳趼人全集第9卷』所収p303)
- 9『中国古代近代文学研究』2003 年第 4 期 原 2002 年于安徽師範大学
- 10『時事新聞』1949 年第 11 期
- 11『新民叢報』第十九号 1902 年 10 月
- 12 王俊年「晚清社会的照妖鏡重読晚清二大譴責小説」p42 p43 . p44 《读书》4 （三聯生活讀書新地書店 1979.7）

【使用論文】

<論文>

- 1 「上海遊騷録」について （『呻吟』 15 号 1982.12）
- 2 『二十年目睹之怪現狀』の目一登場人物の形象を通じて— 『野草』 51 号 1993.2
- 3 小説家吳趼人の出発点
『関西大学中国文学会紀要』 15 号 1994.3
- 4 未来小説『新石頭記』に描かれた理想世界
『太田進先生退休記念中国文学論集』中国文芸研究会 1995
- 5 吳趼人の悪玉小説に見るトリックスター性—「発財秘訣」を中心として
『関西大学中国文学会紀要』 27 号 2006.3
- 6 「電術奇談」翻案から「情変」改作まで—清末における恋愛小説試作まで—
『関西大学中国文学会紀要』 29 号 2008.3
- 7 吳趼人の悪漢小説
『関西大学中国文学会紀要』 31 号 2010.3
- 8 『恨海』『劫余灰』に描かれた清末女性—守節という処世
『関西大学中国文学会紀要』 34 号 2013.3
- 9 吳趼人の創作の原点—救国と‘写情’
『日本ジェンダー研究』 16 号 2013
- 10 吳趼人の《社会小説》—ピカロ体験とピカレスク—
『野草』 93 号 2014.2

<その他>

- 1 1910 年上海—胡適と吳趼人
『火鍋子』 7 号 1993.4
- 2 「清国の少女傑」薛錦琴
『中国文芸研究会会報』 172 号 1996.2
- 3 『蘇報』‘本館記者’の吳趼人批判の背景(上)(下)
『清末小説から』 46、47（清末小説研究会 1997.7.1、1997.10.1）
- 4 「吳趼人「情変」の原作」『清末小説から』、（清末小説研究会 2001.7.1）

「清末の“小悪党”とフェミニズム ―吳趼人の小説の意義―」[初出一覧]

[目次] () 内は初出時の論文名、■は査読付き

序論

第一節 吳趼人の経歴と執筆活動 (書き下ろし)

第二節 先行研究―中国小説史上における吳趼人の位置付け (書き下ろし)

1. 中国文壇における吳趼人研究

1)五四以後―中国文壇における清末小説の位置付け

2)伝記、基礎研究

3)文学史

(1) 中華民国

(2) 中華人民共和国

4)評論

(1) 中華民国

(2) 中華人民共和国

①解放後、文化大革命時期前後の評価―落後、反動

② 文化大革命時期―絶対否定、研究停止

③文革終結後 1970～1980 年代―研究再開の動き

④1990 年代以降―個別作品の検討、新たな研究局面の展開

2. 台湾、香港における吳趼人研究

3. 日本における吳趼人研究

1)伝記、基礎研究

2)評論

第三節 清末のジャーナリズム

1. 清末出版会概況 (書き下ろし)

1)出版業の成立

2)商務印書館の躍進

2. 出版界における吳趼人 (書き下ろし)

3. 報道機関における吳趼人

(原「小説家吳趼人の出発点」*2014年2月改稿)

(■原「『本館記者』の吳趼人批判の背景(上)(下)」*2015年5月改稿)

1) 吳趼人の執筆姿勢

2) 『漢口日報』事件と吳趼人の梁鼎芬あて公開書信

(1) 小説家吳趼人の出発点

(2) 体制側の言論政策

(3) 『蘇報』の報道姿勢

3) 「中国教育界」と「愛国学社」—『蘇報』内の党派対立

4. 政治運動への対峙

第4節 本論執筆の目的と概要 (書き下ろし)

第一章 吳趼人作品の特性と意義

(原「■吳趼人の《社会小説》-ピカロ体験とピカレスク」

はじめに、一. 小説領域の開拓 *2014年4月改稿)

第一節 創作面の創意工夫

第二節 《社会小説》《写情小説》の創始

第三節 執筆姿勢—弱者、下層民への視線

第二章 清末の社会悪

第一節 《社会小説》

(原「■吳趼人の《社会小説》-ピカロ体験とピカレスク

*2013年11月*2015年4月改稿)

1. 下層民小悪党への視点

2. 《社会小説》中の小悪党

1) 『二十年目睹之怪現狀』(108回)(1903-1910)

2) 「近十年之怪現狀」(20回未完)(1909-1910)

3) 「瞎騙奇聞」(8回)(1904-1905)

4) 「糊塗世界」(12回未完)(1906)

5) 「発財秘訣」(10回)(1907-1908)

第二節 吳趼人の価値観

1. 「発財秘訣」 — ‘道德心’ と ‘獣心’

(原「吳趼人のピカロに見られるトリックスター性

— 「発財秘訣」を中心として」 *2013 年 11 月改稿)

1) 道德心’

2) ‘獣心’

2. 『二十年目睹之怪現狀』 — 儒教型行動規範

(原■ 『二十年目睹之怪現狀』の目」 *2014 年 3 月改稿)

1) 見られる側

2) 見る側 — 怪現狀評者

(1) 周辺人物の見解

(2) ‘九死一生’ — 共同体意識

(3) 吳継之 — 儒教型 ‘善行’

3) “見る者” を評する作者の目

第三章 ‘写情’ と女性性

(書き下ろし)

第一節 女性問題に関する社会的文化的風潮

1. 女権運動

1) 天足運動 (書き下ろし)

2) 女子教育

2. 社会実態

1) 清末女性の境遇

2) 清末男性作家の実生活

第二節 小説に書かれた中国女性の恋愛、結婚 — 同時代作品との比較

1. 清代小説中の男女関係

2. 清末小説中の ‘新女性’ 像

3. 清末小説中の男性

第三節 吳趼人の女性観

1. 吳趼人の女傑体験

1) 一族の女傑

2) ‘二十年目睹’ の女性

- (1)『胡宝玉』
- (2)‘清国の少女傑’ 薛錦琴
(原「清国の少女傑薛錦琴」*2014年2月改稿)
- (3)小説における女性性の構築
2. 創作《写情小説》『恨海』と「劫余灰」一守節という処世
(原「『恨海』『劫余灰』に描かれた清末女性一守節という処世」
*2014年1月改稿)
 - 1)『恨海』
 - 2)「劫余灰」
 - 3)守節の意味
3. 翻案《写情小説》「電術奇談」と改作《写情小説》「情変」
(原「電術奇談」翻案から「情変」改作まで
一清末における恋愛小説試作」 *2014年1月改稿)
 - 1)清末における恋愛小説試作
 - 2)「電術奇談」一原作との差異
 - (1)改変箇所：
 - [削除箇所]
 - [加筆箇所]
 - ①人物の言行、心理描写
 - ②文化社会面における議論
 - ③作品の精度、意義付けに関わる工夫
 - (2) 容認箇所：
 - ①女性主導の求愛
 - ②家長の理解
 - ③男性側の献身
 - 3)「情変」
 - (1)原作「秦二官」梗概
 - (2)「情変」概要
 - (3) 「情変」加筆部分
 - (4)呉趼人の恋愛観—‘情の原理’と‘悟り’

4. 吳趼人の創作の原点—救国と‘写情’

(原■「吳趼人の創作の原点—救国と‘写情’」

*2014年3月改稿)

(1)『二十年目睹之怪現狀』— 清末女性の現実

①女性の社会地位

②女性の艱難辛苦

③女子教育

(2)自己実現と恋の相関

①翻案「電術奇談」—《写情小説》指南

②創作《写情小説》—伝統倫理との軋轢

③改作《写情小説》「情変」—求愛する女性

(3)清末女性の活路

第四章 再評価—‘救世’と‘厭世’

第一節 ‘理想科学’小説『新石頭記』における‘文明’探究—作品否定の理由

(原■「吳趼人の‘文明’観」 *2014年3月改稿)

1.『新石頭記』梗概

2. 未知の世界情報源

1)[科学機器]

2)[地理／動植物]

3.情報源

(1)古典籍・小説・新聞雑誌

(2)漢訳ヴェルヌ「海底旅行」「地心旅行」

(3)『点石齋画報』

4.ヴェルヌ思想への共感—被抑圧国支援

第二節『新石頭記』における“ユートピア”追及

(原「小説『新石頭記』に描かれた‘東方’の理想」

*2014年3月改稿)

1. 理想の政治体制と社会生活

1)行政区画

2)理想の政治体制と社会生活

1)<行政単位>

2)<政治体制>

3)<教育>

4)<宗教>

5)<産業>

6)<軍備治安>

7) <生活>

2. ‘文明’ と ‘野蛮’

1)現実の ‘偽’ 文明世界

2)理想の ‘真’ 文明世界

3. ‘救世’ への展望

第三節「上海遊騷録」— ‘厭世主義’ と ‘恨み’ について

(原「**上海遊騷録**」について) *2014 年 3 月改稿)

1. “改革派投機分子” の描写—作品否定の最大要因

1) ‘革命派’ 俄か ‘名士’ (書き下ろし)

2)俄か 仕立ての ‘立憲’ 政体 (書き下ろし)

2. 1910 年上海—胡適と吳趼人

(原「**1910 年上海—胡適と吳趼人**」 *2014 年 3 月改稿)

(1)遊蕩 ‘革命’ 志士

(2)吳趼人と ‘革命党’ 胡適の接触

3. ‘厭世主義’ の原因 (書き下ろし)

4.旧道德の恢復 (書き下ろし)

結論 (書き下ろし)

第一節 吳趼人作品の特性と意義

第二節 従来の評価と再評価

第三節 今後の研究課題

【参考文献】

- 『吳趼人全集』（北方文艺出版社 1998.2）
- 『我佛山人文集』（花城出版社 1988.8）
- 『二十年目睹之怪现状』人民文学出版社（1959）
- 『新石頭記』中州古籍出版社版（1986.3）
- 『晚清文学叢抄』＜小説二卷＞（中華書局 1980）
- 『中国近代小説体系』[近十年之怪现状・新石頭記・糊塗世界・兩晋演義]（江西人民出版社 1988.10）
- 李伯元『官場現形記』（人民文学出版社 1979）
- 曾樸『藁海花』（上海古籍出版社1980）
- 劉鐸『老殘遊記』（齊魯書舍 1981）
- 『聊齋志異』（上海古籍出版社 1979）＜花姑子＞は第 5 卷
- 魏紹昌編『吳趼人研究資料』（上海古籍出版社1980）
- 魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版社 1980）
- 『点石齋画報』（天一出版社1978年）
- 『蘇報』中国国民党中央委员会党史史料編纂委员会藏本（中央文物供应社1968年9月1日影印初版）
- 文康『兒女英雄伝』（人民文学出版社1983）
- 清・宣鼎著、項純文校点『夜雨秋灯録』（黄山書社 1995）
- 魯迅『中国小説史略』（人民文学出版社 1973）、（下冊 1924 年.6）。北新書局 1925 年 9 月重印。
- 胡適『五十年来之中国文学』（神州圖書公司1924）
- 阿英『晚清小説史』（人民文学出版社1980）
- 北京大学中文系一九五五年級『中国小説史稿』编辑委员会著(人民文学出版社 1960.4.18)
- 復旦大学中文系 1956 年中国近代文学史編写小組『中国近代文学史稿』
- （原刊中華書局 1960 年 5 月版 1978 年香港影印版を使用）
- 游国恩 王起 等主編『中国文学史』（人民文学出版社 1964.2）
- 『中国古代近代文学研究』（2003 年第 4 期）
- 『読書』4（三聯生活読書新地書店 1979.7）
- 北京大学中文系著『中国小説史稿』（人民文学出版社 1978.11）
- 時萌『中国近代文学論稿』上海古籍出版社 1986.10 所収。
- 张炯等主編『中华文学通史』＜第 5 卷近现代文学卷＞(華芸出版社 1997.9)
- 易新鼎主編『二十世紀中国小説史発展史』（首都土範大学出版社 1997.12）

- 于潤琦總主編『百年中国文学史』上卷（1872~1916）（中山大学出版社 1998.8）
- 歐陽健『晚清小說史』（浙江戶籍出版社 1997.6）
- 黃修己主編『二十世纪中国文学史』（中山大学出版社 1998.8）
- 周鈞韜主編『中国通俗小說家評伝』（中州古籍出版社 1993.9）
- 于潤琦『清末民初小说書系』言情卷（上）（中華文聯出版社 1997.11）
- 楊世驥『文苑談往』（原刊中華書局1946年 華世出版社1978年影印版を使用）
- 『読小説札記』（香港上海書店 1957.8）
- 『読人所常見書日札』（中華書局 1958.9）
- 鄭逸梅『南社叢談』（上海人民出版社 1981.2）
- 『中山大学学报哲学社会科学版』（1980.3 期 总 76 期）
- 华南师范大学近代文学研究室『中国近代文学評林』中州古籍出版社 1984.11）
- 『中国近代文学評林』第 2 輯（広東高等教育出版社 1986.7）
- 中国社会科学院文学研究所近代文学研究组編『中国近代文学论文集(1919-1979)小说卷』（1983.4）
- 王立興「吳趸人与『漢口日報』—对新發現的一組吳趸人材料的探討」（『中国近代文学考論』南京大学出版社(1992.11)）
- 『中国古代近代文学研究』2003 年第 4 期（原 2002 年于安徽师范大学）
- 付建舟『近现代转型期中国文学論稿』（鳳凰出版社 2011.6）
- 林瑞明『晚清譴責小說の歴史意義』（国立台湾大学出版委員会 1976年6月）
- 陳幸蕙『「二十年目睹之怪現狀」研究』（国立台湾大学出版委員会 1982年6月）
- 吳礼權『中国言情小說史』（台湾商務印書館 1995）『二十世纪中国文学』（台湾学生书局 1992）
- 黃錦珠『晚清時期小說觀念之轉變』（文史哲出版社 1995）
- 黃錦珠『晚清小說中之「新女性」研究』＜文史哲大系186＞天津出版社有限公司2005年1月）
- 黃修己主編『百年中華文學史』（新亞洲文化基金會有限公司 1997.8）
- 中国社会科学院經濟研究所主編『上海民族機器工業』（中華書局 1966 年 2 月）
- 郭廷以編著『近代中国史事日誌』（中華書局 1987.5）
- 楊天石 王学庄編『拒俄運動 1901-1905』（中国社会科学出版社 1979.6）
- 劉紹唐主編『民国人物小伝』第一冊第二冊伝記文学雅誌社 1977）
- 孫常緯編著『上海研究資料続集』民国 62 年 6 月 25 日所収 国士館民国 74 年 6 月）
- 黃季陸主編『革命人物誌』第五集 中央文物供应社 1970
- 秦孝儀主編『革命人物誌』第 18 集 1978(民国 67)年 6 月中央文物供应社
- 『中華民國史辭典』上海人民出版社 1991.8/

馮自由『革命逸史』二集（台湾商務印書館1965.10）

馮自由『革命逸史』三集(台湾商務印書館民国1965.10)

『蔡元培全集』第5卷（中華書局 1988.5）

戴緒恭『向警予伝』（人民出版社1981.5）

戴偉『中国婚姻性愛史稿』（東方出版社1992.11）

夏曉紅『晚清社会与文化』（湖北教育出版社 2001.3）

夏曉紅『晚清文人婦女觀』（作家出版社1995.8）

『王国維全集』＜書信＞（中華書局 1984）。

上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』（上海人民出版社 1965.12）

孫元「南洋中学最早的女生」2013.2.16 閲覧 <http://www.nygz.xhedu.sh.cn/Dangan/printpage.asp?ArticleID=697>

『中華民国名人伝』第1冊（近代中国出版社 民国73年11月）

『民国人物小伝』（伝記文学出版社 民国78年12月1日）、

汪詒年編『汪穰卿（康年）先生伝記・遺文』（文海出版社 民国27年7月）

方漢奇『中国近代報刊史』（山西人民出版社 1981年6月）

郭廷以編著『近代中国史事日誌』（中華書局 1987.5）

『胡適之日記』（中華書局 1985）

耿雲志『胡適年譜』（四川人民出版社 1989.12）

上海市工商行政管理局編『上海民族機器工業』（中華書局 1966.2）

週刊『婦女新聞』49号（明治34.4.15）

週刊『婦女新聞』53号（明治34.5.13）

週刊『婦女新聞』54号(明治34年5月20日)

週刊『婦女新聞』68号（明治34.8.26）『清議報』82（1901.6.16）（日）

樽本照雄編著『清末民初小説年表』（清末小説研究会 1999.10.10）

樽本照雄編著『清末民初小説目録』（清末小説研究会 中国文芸研究会1997.10.10）以後増補改訂を重ねる。

現時点の最新版は第6版(CD-ROM) 清末小説研究会2014.3.16

佐藤春夫訳 沈復『浮生六記』（岩波文庫 昭和13年）

山縣初男訳『野叟曝言』第一（立命館出版部 昭和9年）

立間祥介訳『兒女英雄伝』（中国古典文学大系 47 昭和46年）

太田辰夫訳『海上花列伝』（中国古典文学大系 49 昭和45年）

入矢義高訳『官場現形記』（中国古典文学大系 50 昭和43年）

松枝茂夫訳『中国現代文学選集 1 擘海花』(平凡社 昭和 38 年)

岡崎俊夫訳『老残遊記』(東洋文庫 51 昭和 40 年)

吉川幸次郎訳『胡適自傳』(養徳社昭和 21 年 12 月 20 日)

王独清著 田中謙二訳『長安城中の少年 清末封建家庭に生れて』(平凡社＜東洋文庫＞昭和 40 年 12 月 10 日)

中野美代子他訳『晚清小説史』(東洋文庫 349 1979 年)

『世紀末中国のかわら版 絵入新聞点石斎画報の世界』中野美代子/武田雅哉編訳 (1989.2.15.福武書店)、

『翔べ！大清帝国』武田雅哉 (1988.2 リプロボート)

『太田先生退休記念中国文学論集』(中国文芸研究会 1995.8.1)

『一海・太田退休記念中国学論集』(翠書房 2001.4.30)

創元 SF 文庫『海底二万里』荒川浩充訳 (1977.4.22 東京創元社)を使用した

白水紀子『中国女性の20世紀 近現代家父長制研究』(2008. 6. 30明石書店)

野村鮎子『歸有光文学の位相』(平成二十一年二月二十七日 汲古書院)

山内一恵「魯迅にあたえた朱安夫人の影響―「家」との関係をめぐって―」(『東洋大学大学院紀要』第 20 集 1984. 2)

松山久雄「魯迅の最初の妻朱安のこと」『吉田教授退官記念 中国文学論集』(東方書店 1985 年 7 月)

P. ラディン・K. ケレーニイ・C.G. ユング著『トリックスター』(皆川宗一・高橋英男・河合隼雄訳1974. 9. 25晶文社)

(晶文社1974. 9. 25)

山口昌男『道化の民俗学』(岩波書店 2007 年 4 月)、

J・P・B・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング「トリックスターの起源」

宮崎恒二他訳『オランダ構造人類学』(せりか書房 1987 年 12 月所収)

今堀誠二『中国の社会構造』(有斐閣 昭和 28 年)

仁井田陞 (『中国法制史研究』[奴隸農奴法・家族村落法 (東京大学出版会 1962.9)])

井波律子『トリックスター群像』(筑摩書房 2007 年 1 月)

前川和也編『家族・世帯・家門―工業化以前の世界から』(ミネルヴァ書房 1993.4.10)

村田静子『福田英子―婦人解放運動の先駆者』岩波新書 1959 年 4 月)

蕭楠『清朝末期の孔教運動』中国書店2004年11月)